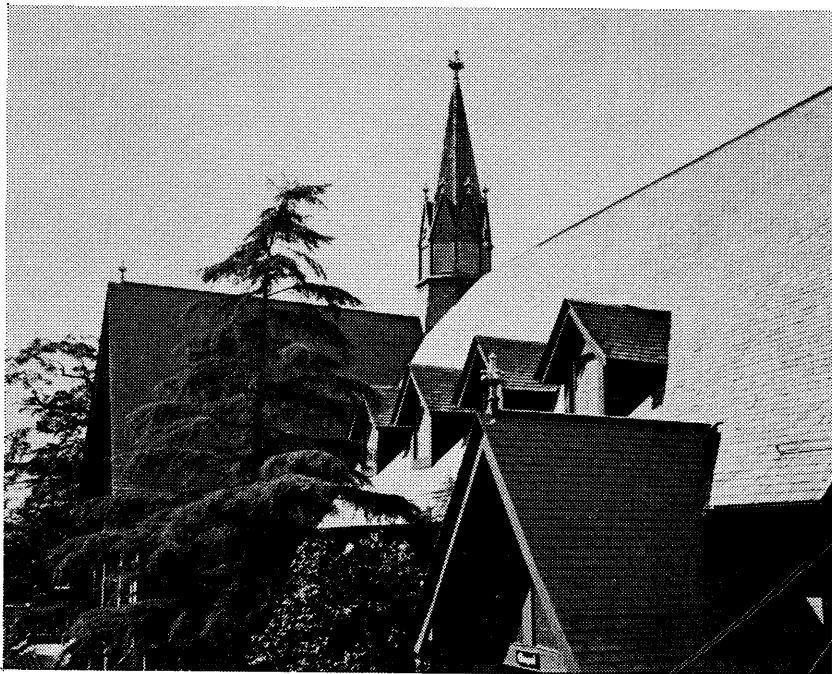


明治學院九十年史

題字 武藤 富男



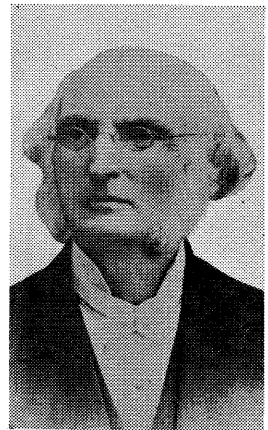
明治學院校歌

人し世し若き生余しあさほらけ
 學院し鐘を響きてこれひとし暁うつとが
 白金し丘は根深く記念樹しまをば尼よや
 緑葉を香ひあわれて青手し世代つとわ
 んせよまふひし友よ新しき時代を待てま
 ちるせよ遠く望みてふのふたゝ道伏聞かむ
 實あらずを實ひ窮めむ境ありを境も活きむ
 あし行けたしこつへ雄をよのかれ
 眼さめよ起てよ果るこふこつれ

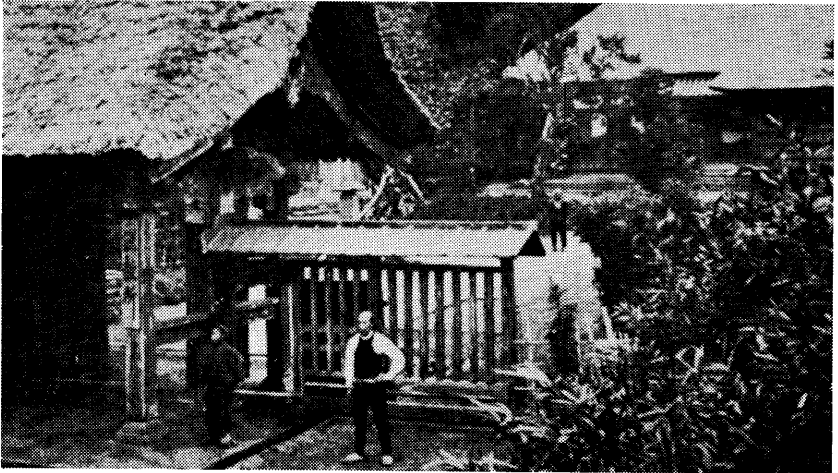
島崎亨村圖



G.F. フルベッキ



S.R. ブラウン
◀ J.C. ヘボン



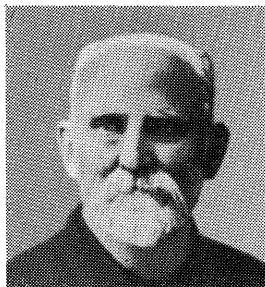
▲ 成仏寺

▼ ヘボンの家





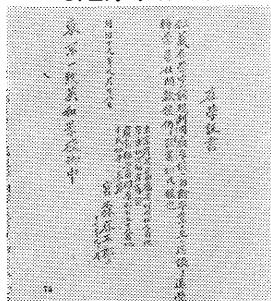
J. L. アメルマン



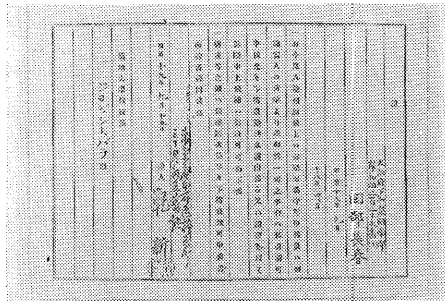
J. C. バラ



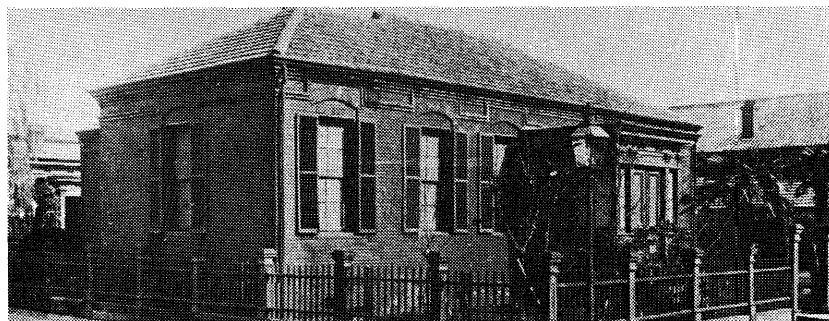
M. N. ワイコフ



東京一致英和学校在学証書

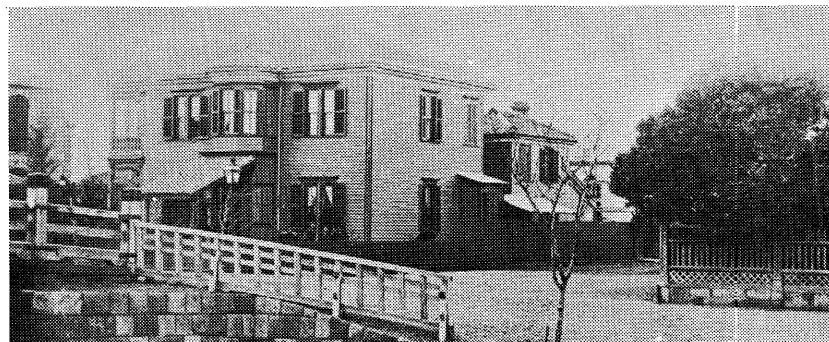


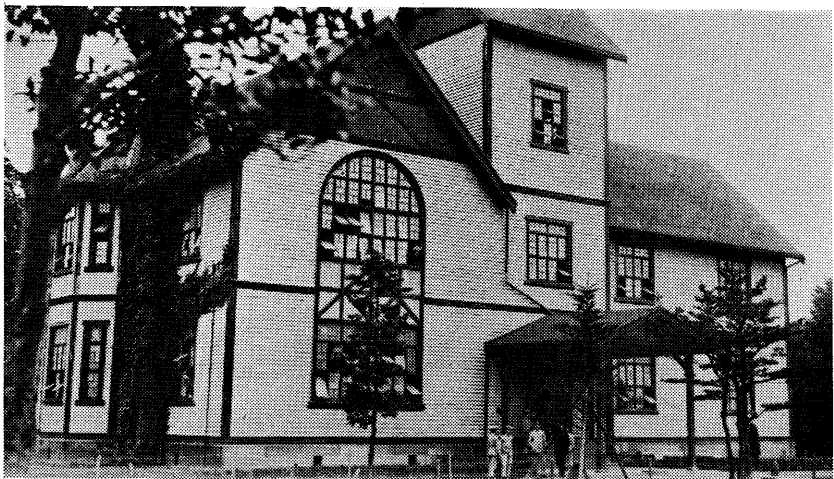
築地大学校入塾証書



▲ 築地校舎

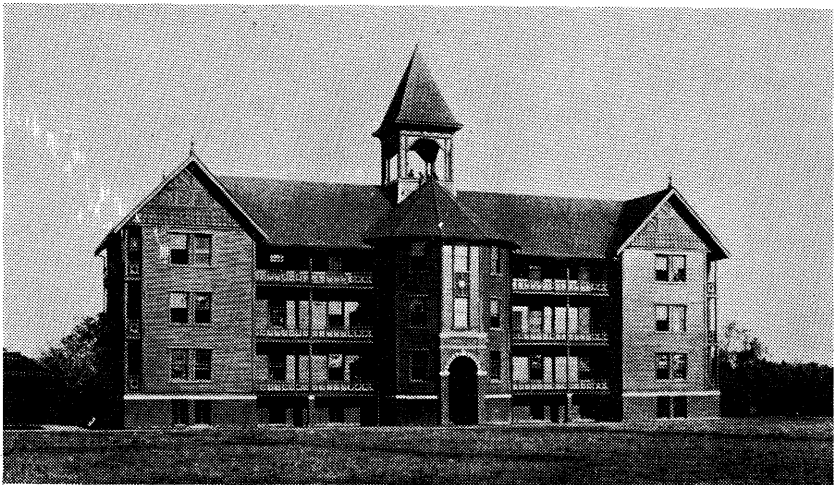
▼ 一致神学校





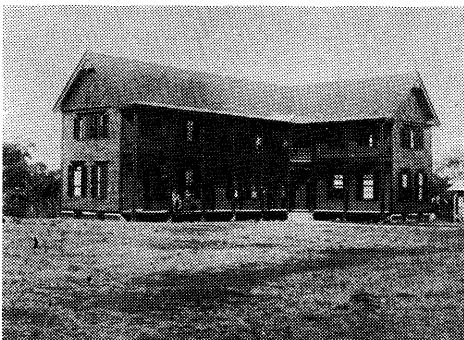
▲ サングラム館

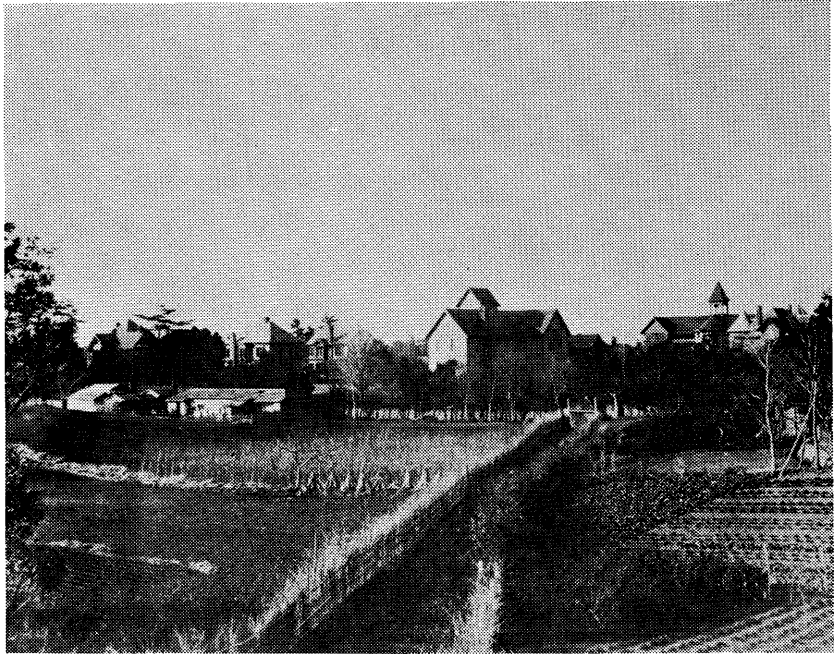
▼ ヘボン館



▼ ハリス館

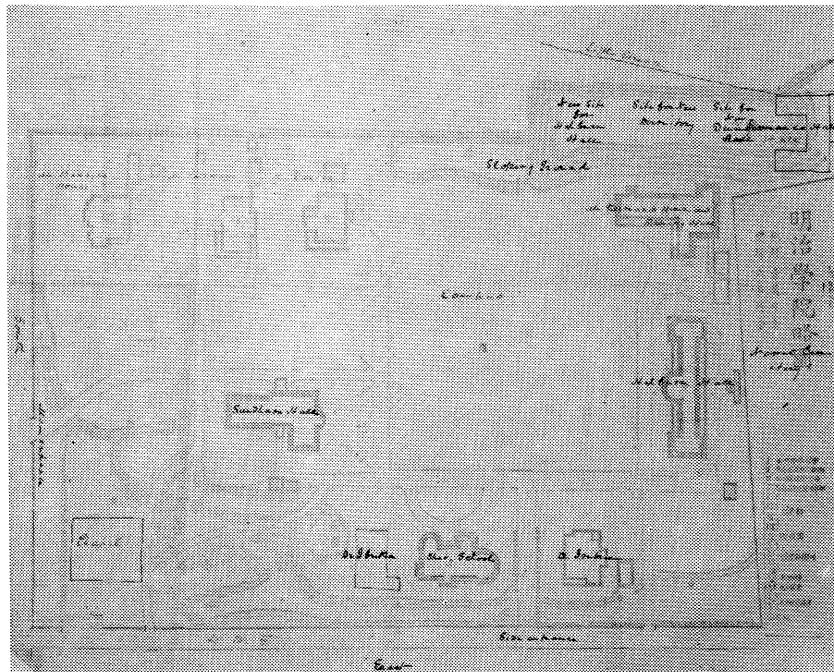
▼ 神学部校舎

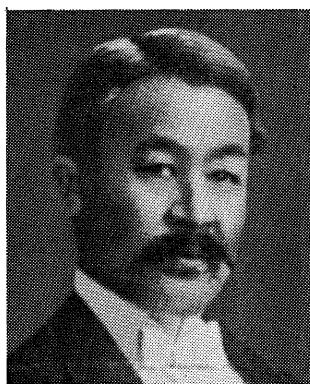




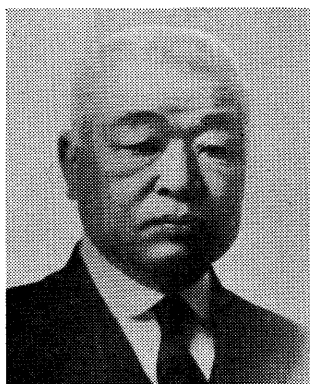
▲ 白金玉繩台遠景

▼ 学院地図

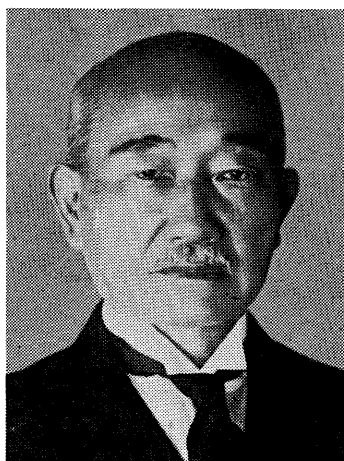




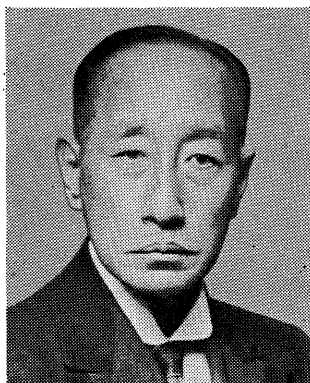
服部 綾雄



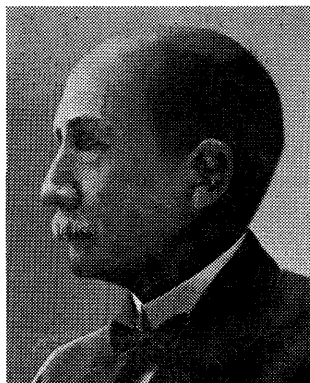
植村 正久



井深 梶之助

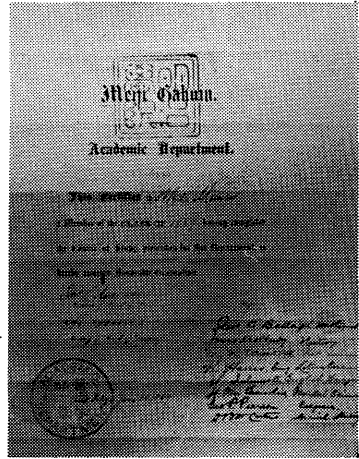
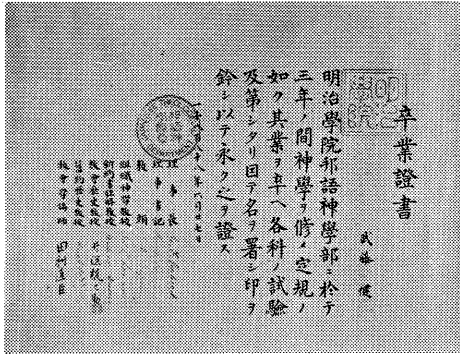


熊野 雄七



W.インブリー

神学部卒業証書



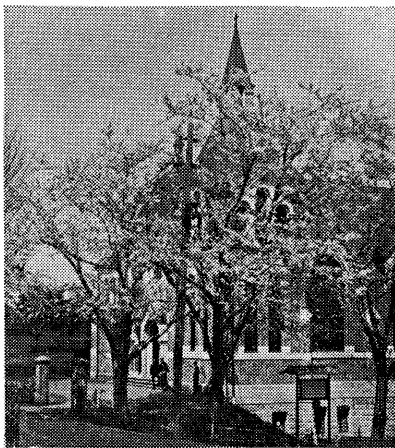
普通学部卒業証書

明治24年卒業生





◀ミラー記念講堂 ▲明治後期神学部校舎

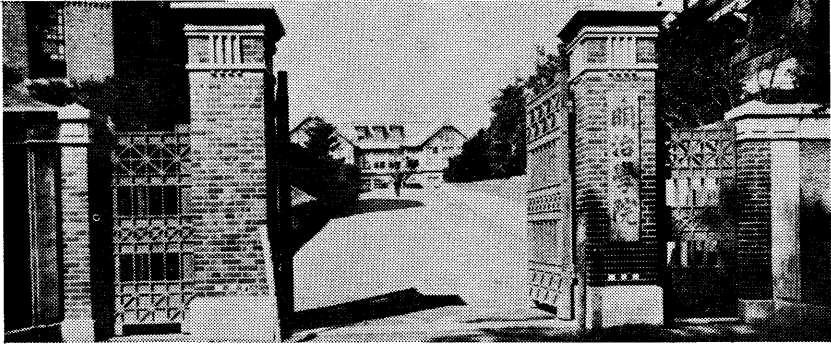


▼白金学報

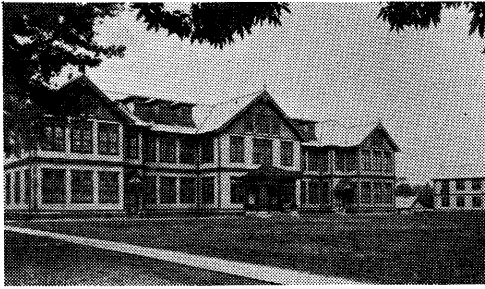


◀宮地謙吉 ▼幼年党





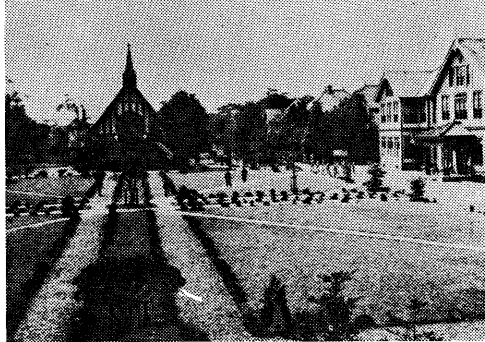
普通学部校舎▶



▲ 東側に
あった校門



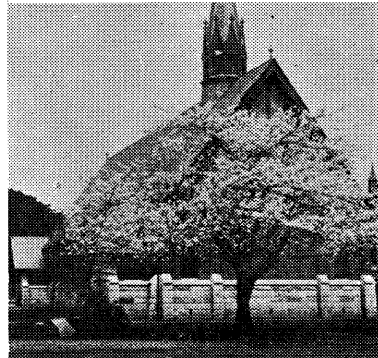
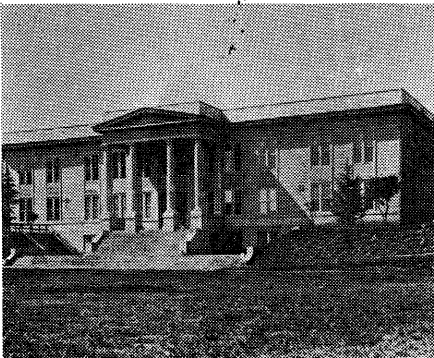
衛藤幹太郎

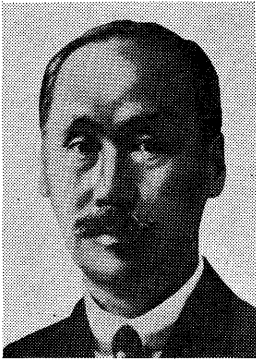


水芦幾次郎
◀ 大正時代の
校庭

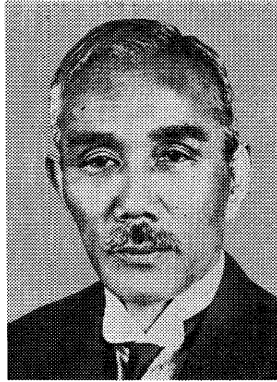
▼ 井深ホール

▼ 礼拝堂

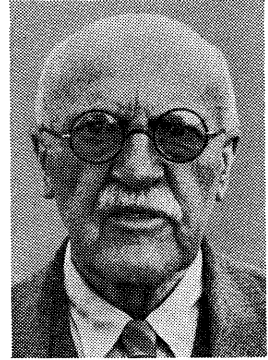




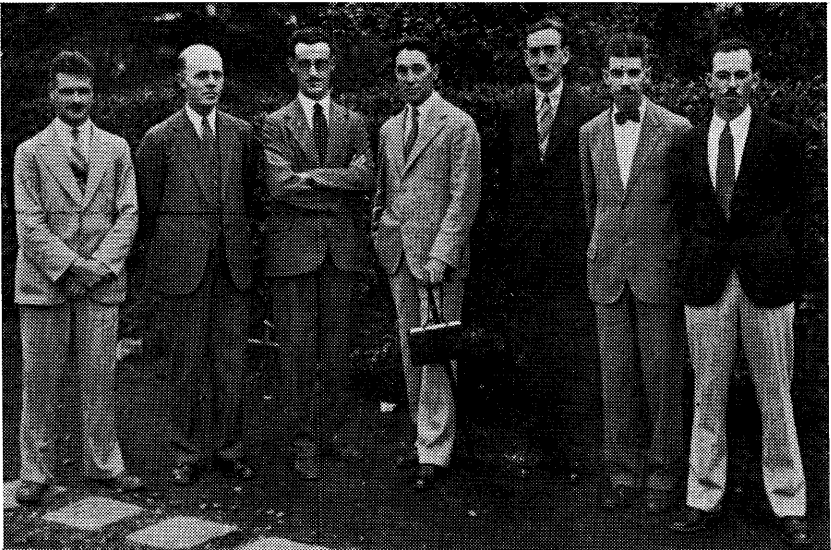
多田素



田川大吉郎



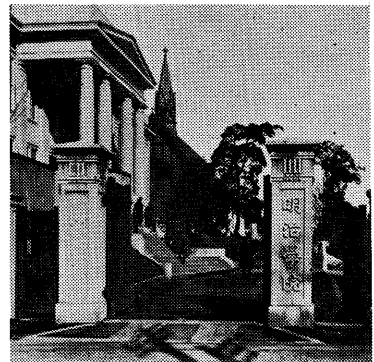
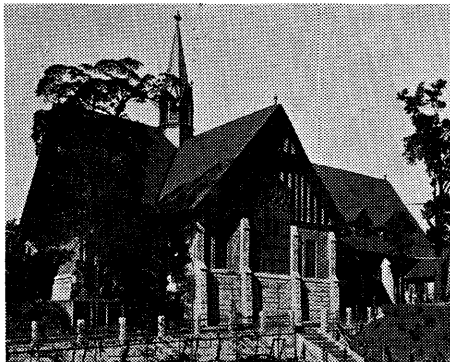
A. オルトマンズ



▼ 拡張後の礼拝堂

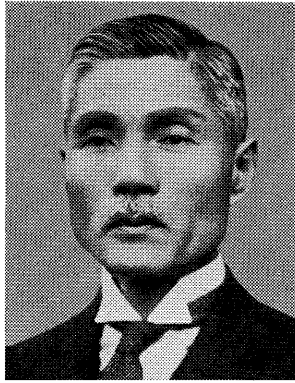
▲ 大正末期の宣教師団

▼ 大正末期の新校門





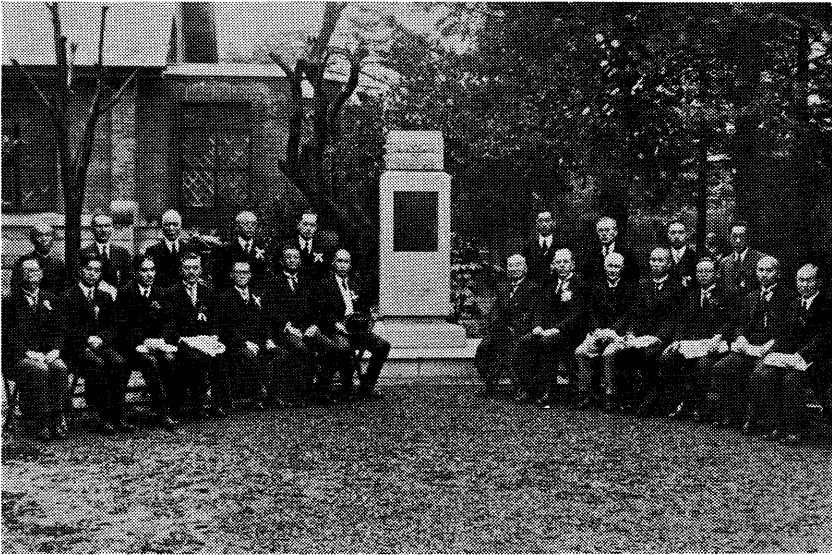
富田満



矢野貫城



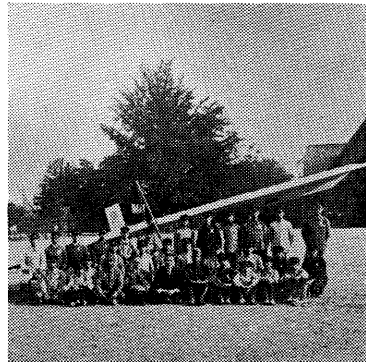
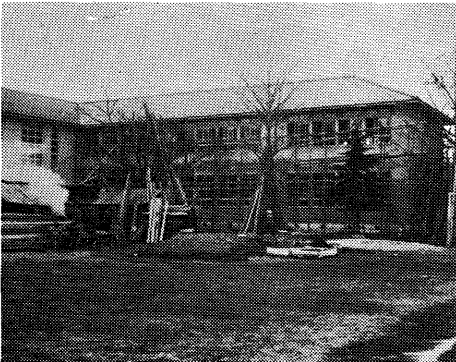
W. G. ホキエ

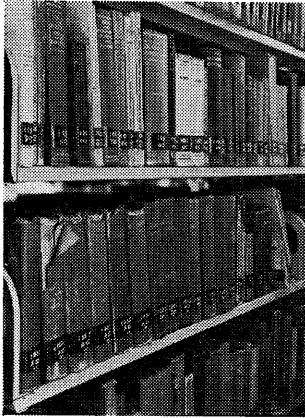


▼戦時中の中学部校舎建築

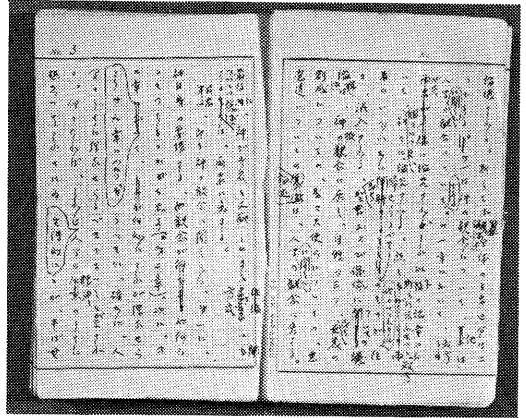
▲校歌碑と永年勤続者

▼中学部グライダー





▲ 中山文庫



▲「基督教綱要」翻訳原稿



▲ 窪地のセベレンス館と寮生



中山昌樹

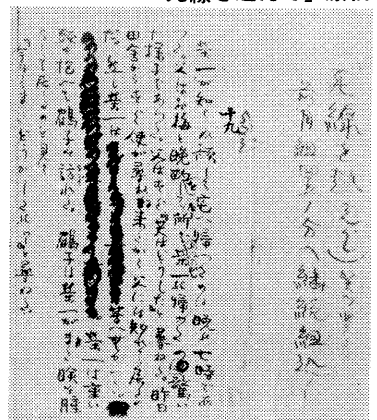


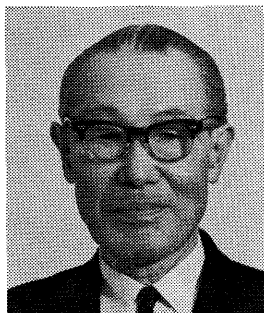
賀川豊彦

▼ 賀川文庫



▼「死線を越えて」原稿



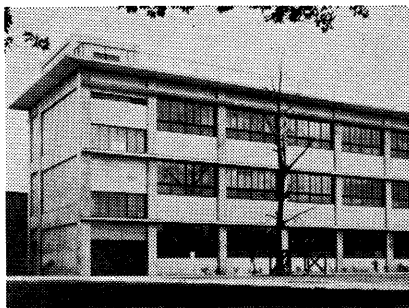


村田四郎

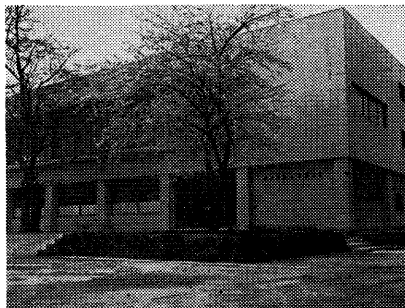


都留仙次

大学本館▶



▲ 中学校校舎

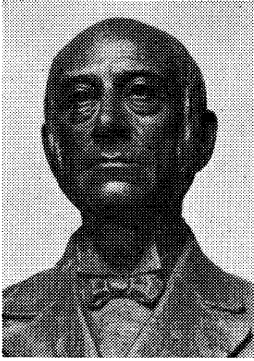


▲ 大学図書館

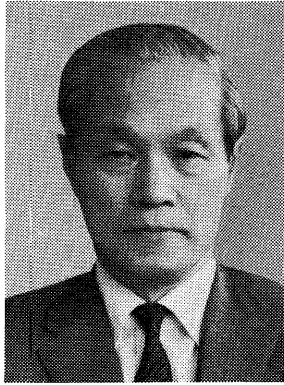
▼ 大学学生ホール

▼ 大学山中湖北寮





ヘボン博士像



学院長武藤富男



理事長北村徳太郎



大学学長若林龍夫

◀ 新ヘボン館

法学部長片山金章

社会学部長天達忠雄

経済学部長金井信一郎

文学部長平林武雄

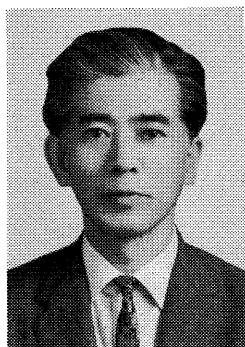
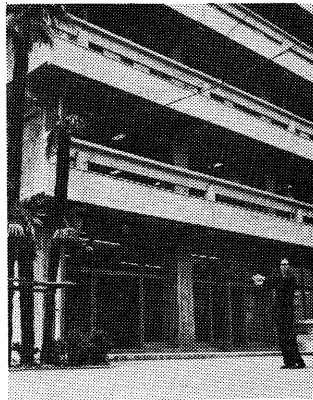
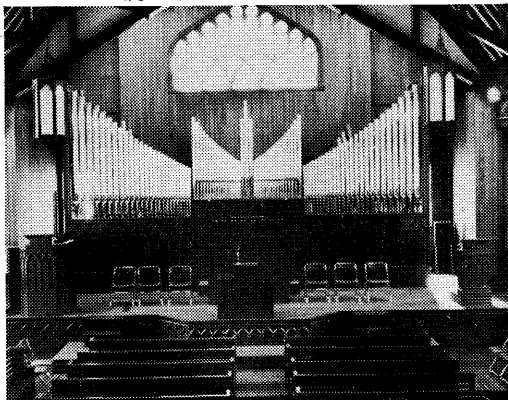




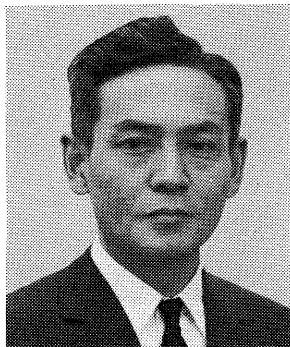
▲ 現在の学院全景

▼ 大パイプオルガン

▼ 白金高校新校舎



高等学校長事務取扱原田昂



東村山高等学校長佐藤泰生



前高等学校長針谷松太郎

刊行のことば

横浜にヘボン塾が開設されたときから数えると、今年は百五年であり、学院の前身たる一致神学校が設立されたときを起点とすれば、今年は九十周年である。

過去一世紀にわたり先人が建設し、蓄積したものは、私たちに与えられた相続財産である。しかもこの財産は、神の国の嗣業であるがゆえに尊い。

神の国の嗣業の中核は先人のいっていた信仰である。学院を導き給う生けるキリストへの献身である。私たちはまずこれを受けついで、深め、高め、広めて行かねばならない。

神の国の嗣業の内容は先人が百年にわたって築きあげた教育事業である。それは知育に限定された世の常の教育事業でなく、神なき国にあって、人々の若き日に造り主を知らしめ、その人生觀の変革をもたらそうとするものである。私たちはこうした教育を時代の変化と科学の発達とに対応しつつ進めて行く責務を、キリストと先人とに対し負っている。

学院九十年史は、役員、教職員、学生生徒、同窓会員、その他の関係者にこのことを明示するものである。それはさまざまな史実を一つの史観をもって貫いている。その史観とは、学院の今日あるは神の経綸による、ということである。学院の歴史は人間だけがなしたげた仕事の記録ではなく、実に神が計画し、神が遂行し給うた事業の記録であり、人間がこれに参加協力したことのレコードである。

この記録を読み、そして祈り、そして考えるとき、私たちは学院の現状はこれでよいのかという思いにかられる。学院創立の精神は、新しい時代に適応した姿において復興されねばならないからである。私たちは自分に問いかける——さまざまな難局を克服し、多くの犠牲を払いつつ、学院をここまで成長させてきた先人の労苦を、いま私たちは無にしているところはないか、日本宣教の使命を、私たちは教育を通して先人以上に、深く広く遂行しつつあるであろうかと。

一世紀にわたり学院のうちに立ち、これを導き給うた主は、私たちが建学の理想をめざし、その精神を保ちつつ努力するかぎり必ず私たちを助けてくださる。しかしながら、もしも私たちが俗流に墮しこの道からはずれるならば、学院がいかに見せかけの繁栄を誇ったとしても、それは神の審判をまぬがれることはできない、この史観こそは、学院九十年史が私たちに与えるところ

のものである。

私たちは神の恩寵と先人の労苦に感謝しつつ学院九十周年をことごとともに、肅然としてみずから省みるところがなければならぬ。そして先人以上に大いなる業をなすことによつて、将来に備えるところがなければならぬ。

これがこの書一万六千部を發行して広く頒布するゆえんである。

終りに、本書を執筆編集してくださつた高谷道男、杉本民三郎両氏に感謝するとともに、これに協力された編集委員各位に謝意を表す。

一九六七年十一月三日

明治学院長 武藤 富男

明治学院九十年史編集委員

委員長 武藤富男

執筆者 高谷道男（明治篇） 杉本民三郎（大正篇、昭和篇）

委員 齊藤茂夫、平林武雄、園部不二夫、工藤英一、矢作弥寿久（以上 実務委員）

桑田秀延、若林龍夫、皆川三郎、ヴァン・ワイク、原田 昂、佐藤泰生（順不同）

明治学院九十年史

目次

刊行のことば

明治編

- 第一章 日本プロテスタント宣教の背景……………二
- ▽東洋伝道の起源……………二 ▽モリソン号の来航……………一五 ▽ペリー艦隊と開国……………七 ▽日米通商条約の締結と日本宣教の開始……………一五
- 第二章 神奈川、横浜時代……………二五
- ▽神奈川成仏寺……………二五 ▽ヘボン塾の起源……………二九 ▽聖書の翻訳と「和英語林集成」……………三三 ▽S・R・ブラウンのおいたちと日本宣教……………三三 ▽ブラウン塾……………三三 ▽フルベツキのことども……………四一
- ▽長崎におけるフルベツキ……………四三 ▽フルベツキと日本政府……………四三
- 第三章 築地時代……………四九
- ▽文明開化とキリスト教教育の勃興……………四九 ▽三ミツシヨンの合同と東京一致神学校……………五三 ▽築地……………四九

大学校の起源……………	四	▽その当時の築地風景……………	五	▽築地大学校……………	三	▽先志学校……………	六	▽東京一致英和学校……………	六	▽英和予備校……………	七	▽明治学院創立案……………	七	▽東京一致神学校と東京一致英和学校の合同卒業式……………	七
第四章 白金時代……………															

▽明治学院の創立……………	八	▽ヘボン博士の初代総理就任……………	七	▽第二回基督教夏期学校……………	九	▽学院風景……………	六	▽井深総理の就任……………	九	▽明治学院憲法の制定……………	九	▽日本基督教会と明治学院……………	一〇	▽欧化主義に対する反動……………	一〇	▽文部省訓令第十二号……………	一〇	▽南長老派との合同と礼拝堂、講堂の建設……………	一〇	▽植村正久の辞任と東京神学社の設立……………	一〇	▽神学部の再編と専門学校の認可……………	一一	▽日露戦争時代の井深総理……………	一一	▽財団法人寄付行為……………	一一	▽南長老派の離脱……………	一一	▽井深総理の理想……………	一二	▽セベレンス館の建築……………	一二	▽山本秀煌の神学部教授就任……………	一二	▽井深総理の海外募金運動……………	一二	▽ワイコフ博士の死去……………	一二	▽ヘボン館の焼失とヘボン博士の死……………	一二
---------------	---	--------------------	---	------------------	---	------------	---	---------------	---	-----------------	---	-------------------	----	------------------	----	-----------------	----	--------------------------	----	------------------------	----	----------------------	----	-------------------	----	----------------	----	---------------	----	---------------	----	-----------------	----	--------------------	----	-------------------	----	-----------------	----	-----------------------	----

大正編

第一章 成長時代……………																							
▽中学部の復興と変動……………	一三	▽高等学部の合同運動……………	一四	▽サンダム館の焼失……………	一四	▽礼拝堂および新サンダム館の建築……………	一四	▽憲法の改正……………	一五	▽ライシャワー博士と高等学部の改革……………	一五	▽明治学院教会の沿革……………	一五	▽創立四十周年記念式……………	一五	▽服部綾雄の客死……………	一五	▽熊野雄七の隠退……………	一六	▽ランデイス教授の面影……………	一六	▽井深総理の辞任……………	一七

第二章 相剋時代……………一七

- ▽田川総理の就任……………一七
- ▽大銀杏を守って土地譲渡……………一七
- ▽関東大震災と学院……………一七
- ▽大正末期の社会情勢と学生運動……………一七
- ▽中学部の同盟休校……………一七
- ▽学院と軍事教練の実施……………一七

昭和編

第一章 離合時代……………一八

- ▽創立五十周年記念行事……………一八
- ▽高等教育の整備……………一八
- ▽最後の神学部……………一八
- ▽神学部の分離と日本神学校の設立……………一八
- ▽東山学院の合併……………一八
- ▽田川総理最後の報告演説……………一八
- ▽オルトマンズ博士の隠退……………一八

第二章 戦争時代……………二五

- ▽創立六十周年記念行事……………二五
- ▽苦難のホキエ院長事務取扱……………二五
- ▽総合改築計画……………二五
- ▽矢野院長の就任……………二五
- ▽東亜科の設立……………二五
- ▽ミッシヨンの援助辞退……………二五
- ▽井深名誉総理の死去……………二五
- ▽宣教師の帰国……………二五
- ▽大東亜戦争とキリスト教界……………二五
- ▽中学部長の更迭……………二五
- ▽勤労報国隊の活動……………二五
- ▽青山、関東両学院との統合……………二五
- ▽戦時下の学院……………二五
- ▽功労者の死去……………二五
- 石川林四郎……………二五
- 多田素……………二五
- 島崎藤村……………二五
- 中山昌樹……………二五

第三章 変革時代……………二五

- ▽教職適格審査……………二五
- ▽専門学校の改組……………二五
- ▽宣教師の帰来と救助物資の到着……………二五
- ▽矢野院長の辞任……………二五
- ▽創立七十周年記念行事……………二五
- ▽ヘボン博士記念会……………二五
- ▽村田院長の就

任……………二六二▽英語学校の開設……………二六三▽新制度と大学の発足……………二六四▽中学部の分離……………二七〇▽日本
商科大学の併合……………二七六▽財団法人から学校法人へ……………二七九▽田川大吉郎の永眠……………二八一

第四章 再建時代……………二八三

▽白金海軍墓地の買収……………二八三▽戦後の建築計画……………二八一▽村田院長の辞任……………二九三▽都留院長の就
任……………二九四▽創立八十周年記念行事……………二九四▽功労者の永眠……………二九六□里見純吉……………二九六□賀川豊彦……………
……………二九七□富田満……………二九八□都留仙次……………二九九

第五章 躍進時代……………三〇一

▽理事長に北村徳太郎……………三〇一▽学院長に武藤富男就任……………三〇二▽東村山高等学校の開設……………三〇三
▽大学その後の発展……………三〇七▽中学校の変遷と高校の膨張……………三〇〇▽武藤院長の拡張政策……………三〇三
▽武藤院長の教育および宗教方策……………三〇四▽年金制度の復活……………三〇六▽その後のセベレンス館……………三〇七
▽建設拡張計画の躍進……………三〇〇▽日米教授学生交流計画……………三〇三▽大パイプオルガンの設置……………三〇四
▽同窓会の移りかわり……………三〇七▽校歌について……………三〇〇

結 び……………三〇七

付録および年表

付 録……………三〇五 年 表……………三二二

あとがき……………三二九

凡例

- 一、記述の最終時点は一九六七年（昭和四十二年）六月一日とした。
- 二、文中の用字用語は原則として「当用漢字」「現代かなづかい」によった。ただし引用文は原文のままとした。
- 三、外国人名、地名は「外来語の表記」によることを原則とした。一部の人名については、日本において慣用の固定したものもあって、原則の適用をしていない。
- 四、人名は、歴史的記述の場合には原則として敬称をはぶいた。

明
治
編

第一章 日本プロテスタント宣教の背景

東洋伝道の起源

明治学院の歴史は明治十年十一月、東京築地十七番に創設された東京一致神学校をもって起点としている。しかし、それにいたるまでの歴史的背景は古く、わが国におけるプロテスタント宣教の歴史に深く根ざし、わが国の開国、横浜の開港、さらに宣教開始、その発展と密接な関連をもつのである。従って、わが国の宣教の歴史の起源をさぐり、これを明らかにしなければ、本学院の歴史を知ることができない。その意味において一応、日本プロテスタント宣教の歴史的背景を記述し、明治学院前史を述べてみたいと思う。

わが国のキリスト教宣教は遠くカトリック宣教、すなわち切支丹宣教とその禁教、迫害、殉教などの歴史にはじまるのであるが、プロテスタント宣教は大体十九世紀にはじまったといつてよい。直接、鎖国日本への宣教のよびかけというよりも、アジア地域における英米両ミッションの宣教にはじまったものである。

十六世紀の宗教改革はドイツ、スイス、スコットランド、オランダ、英国、北歐におよび、十七世紀になつて

ピューリタン運動が米大陸に波及しニュー・イングランドの建設となった。ところが十八世紀はプロテスタント教会がやや形式化し、その神学が硬化した。他方、啓蒙思想やデイズムなどの合理的精神の影響によってプロテスタント教会の福音的精神と革新的気運が失われようとした。そうしたときに新しくおこってきたのはドイツにおける敬虔派の運動で、その精神をうけついでのがモラビア派の外国宣教の活動であった。こうした外国宣教の精神はジョン・ウエスレーによる英国のメソジスト派の運動においていちじるしくあらわれたのである。ところが、十八世紀の末から十九世紀にかけてインドの宣教にふみ切ったバプテスト派のウイリアム・ケアレーはイザヤ書五四章二節「あなたの杭を強固にせよ」の一句に刺激されて大いなる幻をみ、同信の友と外国伝道協会をおこすようになり、目的地を印度ときめた。当時、英国は東印度会社の勢力をもってインドを支配していたから英国教会以外の宣教団体の活動を許さなかつたので、デンマーク船で航行し、デンマークの領地セランボーに宣教を開始したのが、ウイリアム・ケアレーとマーシマンとウオードの三人であった。最初、ケアレーが船中から書き送った書簡の一節を、ロンドンの各派合同の牧師会で発表したのが動機となつて、外国伝道を教派をこえて行なうという動きとなり、「倫敦会」(London Missionary Society)が創設せられた。その綱領は幕末、明治初期、横浜における宣教の運動とやや関係があるので、ここにかかげてみたい。その一節はこうである。

「この会の根本原理は長老教会、独立教会、監督教会、その他いづれの教会、教派の主張にもよらず、ただ神の光栄ある福音を異教徒に伝えるにある。」と。

従つて英国諸教派の名称や形式、教会政治の相違などは、より大きい、より崇高な、より有意義な「キリスト教徒」なる名のもとに包まれるべきものであつて、われわれがもつぱら努むべきことは、ある一つの特殊な教派の見解を伝えることではなく、キリストの人格の偉大さ、キリストの大いなるみわざ、キリストの恩寵の無限、その救いのめぐみを、まだ福音を知らない遠い異教の人々に伝えるため共同の努力を払うべきであるとした。

そのころ、英国は商業資本主義のオランダをおさえ、国内には産業革命がきざし、国外では七つの海を支配したといわれたほどに世界の国々にその商船を送つて、外国貿易の覇権を握つていた。また南洋方面の開発と貿易にも特別の関心をもつていたので「倫敦会」はまずアフリカ、南洋方面に宣教師派遣をこころみようとして一七九六年福音船を信徒の祈りの中でチームズ河を下り、タヒチに向かわせた。しかし「倫敦会」のアジア伝道はやはり偉大な宣教師ロバート・モリソンの中国宣教にはじまるといつてよい。モリソンが中国マカオに到着したのが一八〇七年九月。広東におもむき中国語の研究をすすめ、中国語の聖書翻訳をはじめた。さらにマラッカに英華学堂を設立し、教育を通じて宣教を計画した。生前数名の中国人の信徒の改信をみただけではあつたが、英華辞典「五車韻府」と中国語の新約聖書「新天聖書」と、華僑を中心としたマラッカにおける「英華学堂」とは中国におけるプロテスタント宣教事業の三つの方向を示したものとして重要な歴史的意義をもっている。

すなわち、わが国の開港後の横浜における宣教活動が、やはり上述の三つの宣教活動、語学教育、聖書翻訳、教会と神学教育の線にそつて進展したことをみてもわかる。モリソンについて中国に派遣せられた「倫敦会」の宣教師には、「日英語集」を著作したメドハーストがあり、英華学堂の校長となつたミルンやレッグなどがある。

とくにドイツ人でオランダ伝道協会から派遣され、のち「倫敦会」の一員となり、英国東印度会社の通訳となり、また英国政府の役人ともなり、モリソンやメドハーストと協力して中国人の宣教につくした、カール・ギユツラフのことも忘れてはならない。

英国における「倫敦会」の成立後まもなく、北米合衆国でも外国伝道の精神がおこった。これは十八世紀のカルヴィン神学のすぐれた学者ジョナサン・エドワーズの宗教思想に刺激されて米国の教会に大覚醒運動 (Great Awakening) がおこり、それはさらにニュー・イングランドその他の大学、神学校に波及し、マサチューセツ州のウイリアムス・カレッジでおこった学生伝道団による外国伝道の動きから発展して、ついに一八一〇年、アンドバー神学校におけるアメリカ伝道協会 (American Board of Commissioners for Foreign Missions) がか国では一般にアメリカン・ボードとして知られている米国のミッションで、同志社や組合教会の背景となった米国宣教師団である) の成立を見るにいたった。一八一二年に五人の青年宣教師が東洋に派遣された。これが創立されてまもなく、一八一〇年六月十六日わが国の伝道と、一致神学校の前身である横浜山手のブラウン塾の創立につくした S・R・ブラウンが生まれた。その母フィベはブラウンを抱いて「このサムエルを外国伝道に献げた」と祈ったといわれる。

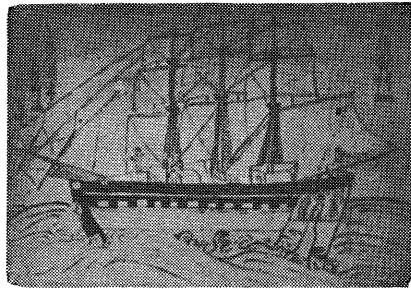
おかれて一八一五年三月十三日 J・C・ヘボン はペンシルバニア州ミルトンで、スコッチ・アイリッシュ系統のプレスピテリアン派の信徒の家でうぶ声をあげた。ヘボンの母は外国伝道のため募金運動に熱心な婦人であった。これら二人の幼児が長じて中国の宣教に、また開国後の日本の宣教と教育につくし、はじめは神奈川の成仏

寺で、やがて横浜の居留地で、のち山手で日本語の研究、英学の教育、聖書の翻訳に協力して、明治学院創立の基礎をすえるにいたったということは、不思議な神の導きであるといわねばならぬ。

さらにまた一八二八年ボストン近郊のブルックリンに住まった信仰あつい貿易商ウイリアム・ロープスの邸で祈禱会が開かれ、外国伝道のために席上献金した。そのとき用いた竹籠が日本製であったので、一同は、鎖国日本、切支丹迫害の歴史をもつ日本に宣教の門戸が開かれるためにその献金を用いたいと話しあった。当時はまだ異国人打払令などがあって鎖国の門戸を開くことができず、まして切支丹禁制の高札をとり除くことはむずかしい時代であったから、そうした志もむなしく、一八六九年(明治二年)、D・C・グリーン宣教師が日本に來航したとき、その金額をもってきたということである。

モリソン号の來航

このほか日本宣教の端緒となったものは一八三七年(天保八年)七月、中国マカオを出帆して日本に向かった米國商



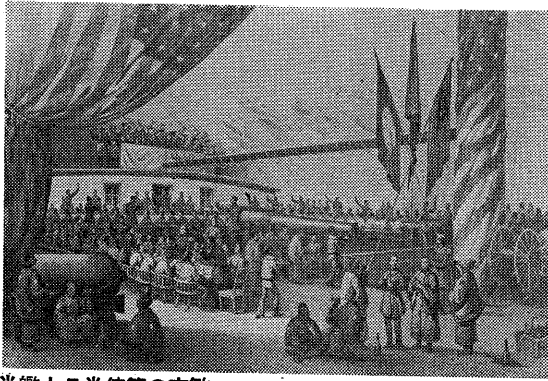
モリソン号

船モリソン号の江戸湾來航の事情である。モリソン号の來航は日本プロテスタント宣教のきっかけを作ったばかりでなく、日本開国についても、国内に波紋をおよぼしたのである。伊勢の漂流民音吉、久吉、岩吉の三人が遠州灘で難破、同乗の船員は漂流中に病没し、カナダ沖のクインス・シャーロット島に漂着し、アメリカ・インデアンに捕えられていたところをコロンビア河口のハドソン湾毛皮会

社の社員に救い込まれロンドンにつれて行かれた。そこから中国マカオに送還され、ドイツ人カール・ギュツフ博士の家で起居した。ギュツラフはこれから日本語を学び「約翰福音之伝」「約翰上中下書」の総片仮名の日本語版をシンガポールのアメリカン・ボードの印刷所に送り印刷し、一八三七年に完成した。その三人のほかにもまたフィリピンに漂流した天草方面の日本人四名、庄蔵、寿三郎、熊太郎、力松がマカオのギュツラフ博士のもとに送られてきたが、これら七名の日本漂流民を、一八三七年の夏、医師のピーター・パーカー、マカオのS・W・ウイリアムスおよびギュツラフが、モリソン号で米國貿易商のオリファント商会の支配人キング夫妻と同乗して日本に送還することとなった。この計画はきわめて私的な企てであった。モリソン号が江戸湾に入り、浦賀に近い野比湾に投錨したのは一八三七年七月下旬であったが、砲撃されてそこを去り、鹿兒島に立ち寄ったが、そこでもまた上陸を拒絶せられたので、ついにむなしくマカオに帰った。しかしキング氏は「モリソン号日本訪問」なる一書を米國で出版し、日本の開國の必要を訴えた。これはやがて一八五三年（嘉永六年）のペリー来航という歴史的遠征となって実現した。さらにわが国においてモリソン号事件は渡辺崋山の「慎機論」となり高野長英の「夢物語」となって蘭学者の間に開國論を刺激した。ついで米國海軍のビッドル提督は二隻の米艦を江戸湾に派遣し、ついでグリーン提督のひきいるプレブル号が長崎に入港し、日本海岸で難破したアメリカ水兵十六名の釈放について談判し、この解決を行なった。

しかし開國という重大な交渉は容易でなかった。米國がロシアと英國に先んじて日本の開國をせまり、武力に訴えても鎖國の夢をさまし、太平洋をはさんで日米兩國の友交的關係をとり結ぶのは今であると考へ、大統領フ

イルモアは、ペリー提督に命じ、軍艦数隻をひきいて江戸湾に入らせ、開国をせまるべきであり、これが日本の将来に大なる光栄をもたらすものであるとの国際外交の先手を打った。「ペリーの日本遠征記」を読んで当時のアメリカ外交の画期的な計画のほどが理解される。



米艦上日米使節の交歓

ペリー艦隊と開国

一八五三年（嘉永六年）七月八日（旧六月三日）早朝、ペリー提督は米艦四隻をひきい、浦賀沖に投錨し、七月十日安息日、堂々と軍楽隊による讚美歌を奏し、礼拝を行なった。黒船来航の報が伝わって国内は驚天動地の混乱となり、幕府はその対策に窮して、ついに明年回答する旨をもって会見を打ちきり、ペリー艦隊は日本を去り、那覇にもどった。ペリー提督は同地護国寺に居住伝道をしていたベッテルハイムとその家族の上海送還をはかり、翌一八五四年（安政元年）二月十三日、軍艦七隻をもって江戸湾に入り浦賀をすぎ金沢沖に投錨した。ついで横浜沖に進み三月三十一日（安政元年三月三日）横浜邸接所で首席林大学頭輝をはじめ、幕府側代表と合衆国全権マッシュ・カルブレス・ペリーは英文で署名調印し、ここに日本国アメリカ合衆国の修好条約「日米和親条約」十三か条が締結された。そして下田、函館の両港を

開港することとなり、五月十八日から二十二日にわたり下田の了仙寺で、ペリーと林大学頭との間に「日米条約附録附則」十三条が調印された。このペリー艦隊来航にあたり二つの事件があった。

一つは漂流民仙太郎の上陸に関することである。仙太郎は瀬戸内海瀬戸田の生れで大阪から江戸への船「栄力丸」の船員であった。同僚には後年、横浜で米国領事館の通訳となり、転じて新聞事業にもたずさわった浜田彦藏 (Joseph Hecco) がいた。栄力丸は暴風にあい、漂流中、船員一同が米国の捕鯨船に救われ、サンフランシスコに連行され、そこから香港に護送されたものである。ペリー艦隊がその一人仙太郎を乗船させて日本に送還を試みたのであったが、上陸後の幕府のさばきを恐れ、甲板で上陸をこぼんだため、水兵の一人ジョン・ゴープルというバプテスト派の熱心な信者が身許引受人となった。この仙太郎は万延元年（一八六〇年）ゴープルとともに神奈川成仏寺に住まい、ゴープルからジェームス・バラの家庭に引き渡され、コックや子供のもりなどをしていた。明治になってからエドワード・クラークにとまなわれ、静岡に居住、さらにクラークに従って上京し、明治七年没した。中村敬宇の祖先の墓地、大塚本伝寺に葬られ、ペリー艦中、そのよび名 *Sarah Patch* をとり「三八君」と記された。今もなおのこっている。

もう一つの事件、吉田松陰の黒船乗船の事実は松陰の自伝に記され、またペリーの日本遠征記もくわしくその間の消息を伝えている。吉田松陰と金子重輔とはひそかに下田柿崎村にやっできて、夜陰に乗じ、米艦に乗船して米国に連れて行くよう嘆願した。通訳 S・W・ウイリアムスはアメリカン・ボードの中国派遣宣教師でモリソン号来航のときにも同乗していたし、漂流日本人から日本語を学び「馬太伝」や「創世記」の一部を和訳した日

本通でもあった。ウイリアムスは二人の日本武士に会い、その志を聞き、驚き心打たれたが、日米外交交渉の大時期であったのでこれを拒絶した。二人は帰還して幕府の手に捕えられ、牢に入れられた。陸上散歩の一米国士官がこれを認め、吉田松陰の志を聞き吉田松陰が木片に漢詩を書いて渡したのを軍艦にもち帰り、これを英訳し朗読した。さすがのペリー提督も感銘に打たれ、東洋のストイックの哲人と吉田を称揚した。

日米通商条約の締結と日本宣教の開始

ペリーの艦隊が去ってから三年目にアメリカ総領事タウンゼンド・ハリスがヒュースケンをとめない、米艦サン・ジャシント号で、

上海を出発、一八五六年（安政三年）八月十一日、下田に到着、九月三日、柿崎村の玉泉寺に入り、ここを米国領事館として幕府と日米通商条約の交渉を開始した。まず、ペリー提督のとりきめた日米和親条約の不備を修正し、翌年江戸にのぼり將軍家定と会見、国書を奉呈し、一八五八年（安政五年）七月二十九日（旧六月十九日）早朝、神奈川沖に碇泊中のポーハタン号の艦上で、幕府の全権井上信濃守、岩瀬肥後守との間に日米通商条約を締結した。それは十四条からなり、下田、函館のほか神奈川、長崎、新潟、兵庫を開港場とし、一八五九年七月四日、神奈川開港より六か月後、下田港をとざすことに決定した。以上十四条のうち宗教上に関する規定は第八条であった。それは、

第八条、日本に在るアメリカ人自ら其国の宗法を念じ、礼拝堂を居留地の内に置くも障りなし、並に其建物を破壊し、又はアメリカ宗法を自ら念ずるを妨ぐることなし。アメリカ人、日本人の堂宮を毀傷することなく又決して日本神仏の礼拝を妨

げ、神体、仏像を毀つことあるべからず。双方の人民互に宗旨に付ての争論あるべからず。日本長崎役所に於て踏絵の仕業（しきたり）は既に廢せり。

この一条は一八五八年一月二十五日に江戸において、ハリスが通商条約を結ぶにあたり、ハリス自身も、それが承認せられるという希望をほとんどもたずに、条約文に挿入したものであったが、意外にも他の条約文に難色を示したにもかかわらず、第八条には何らの疑問もはさまれず、同意されたのである。ハリスもその日記に「アメリカ人が適当な礼拝堂をたてる権利と、アメリカ人がその宗教を自由に行使しうることを、ならびに、日本人が踏絵の風習を廢止することを規定したものだ。私が驚き、そして喜んだことには、この個条が承認されたことである」と記している。日本宣教の第一歩はこれで確保されたのである。さらにまた、これより少しまえ、一八五七年十二月六日の日曜日、江戸においてヒュースケンと二人で祈禱書をよんで礼拝をした。日記に次の一節がある。「それは疑いもなく、英語の聖書が、この市でよまれた最初のものであった。この事を思うと万感、胸にせまる」と。そしてさらに切支丹迫害の歴史をかえりみ、「今こそ日本人の残酷なキリスト教の迫害に対して最初の打棒が加えられるのだ。今度私が日本人との交渉に成功するならば、私はアメリカ人のために神の祝福によって、日本に教会を設立する権利と、キリスト教の勤行の自由を敢然として要求するつもりである。私はまた、踏絵の慣習の廢止をも要求するであろう。この踏絵については、オランダ人は卑劣にもこの二百三十年間、一言の抗議も行なわずに看過してきたのだ。……私はキリスト教の福音を再び日本に弘める謙讓な媒介者となることができるなら、光榮かつ幸福に思うだろう」と。最後にこう記している。「私の聖書と祈禱書とは、この事件の

貴重な記念物である。そしていつか日本が再びキリスト教の禁をとく時には、江戸における今日の出来事は意義深いものとなるであろう」とつけ加えている。S・R・ブラウンが万延元年の日曜礼拝を、麻布善福寺の米国公使館でハリスといっしょに礼拝を行ったとき、手にして読んだ聖書はここに記した英語の聖書であったと、ブラウンの書簡に記している(「S・R・ブラウン書簡集」三三三ページ)。

ハリスはさらに上海にいた聖公会の教職に書を送って、日本宣教の方策を説いた。その一節に「日本宣教の将来の成功は派遣せらるる初代宣教師の性情、態度、人物によるものである。宣教師が日本語を習得したならば、容易に日本人に近づくことができるし、どの程度まで印刷物を公布することが許されるか、今のところはつきり言うことはできないけれども、私見をもってすれば、学校を興し、英語を教え、貧民に施療するが如きことは最も伝道のために有益な働きとなるであろう」と。このように今や日米通商条約は単に貿易の開始ばかりでなく、キリスト教の開教の第一歩でもあった。

すでに中国にはカトリックはいうまでもなく、英米プロテスタント宣教事業が一八〇七年以来、急激な発展を示し、中国語のキリスト教文献や、欧米の地理、歴史、医学、文学、政治、社会、各般にわたる中国語の翻訳文献がプロテスタント宣教師の驚くべき努力によって出版、刊行され、それらの一部は長崎出島のオランダ東印度会社や、中国人の居留地「唐人屋敷」から、さらにまた外国船から、ひそかに長崎に送られてくるもの数知れぬほどで、明治維新の当時、多くの先覚者がそれらによって世界の知識を学び、新しい政治のあり方なども、ひそかに研究しつつあった。いよいよ日米通商条約によって、キリスト教宣教の門戸が間接的ではあるが、開かれた

のであった。従つて宣教師の来日がまずその第一歩であつた。たまたま一八五八年の秋、長崎港に停泊中の米艦上でペリーの通訳をしたS・W・ウイリアムス、米艦付牧師ヘンリー・ウッド、聖公会の教職E・W・サイルの三人が集つて日本宣教の問題を語りあい、米国の聖公会、長老教会、ダッチ・リフォームド教会の外国伝道局におのおの手紙を送り、日本宣教の急務を訴え、宣教師派遣の件を勧告することとなつた。

これより先、北米長老教会の本部では、ペリー提督の日本遠征の報が伝わつてから、中国派遣の宣教師に日本宣教の準備をするよう命じていた。それで寧波で働いていたマカルラー博士も来日の計画をたてていたが日米通商条約以前のことで、その実現をみる事ができなかった。ところが、ニューヨークで開業していたヘボン博士は、かつて一八四二年から四五年まで、中国アモイで医療伝道を行なつていたが、夫人の病氣のため一八四五年帰国しニューヨーク市で開業していたものの、ひまのあるたびに外国伝道局で働く親友とその父、ラウリー父子を訪れて、外国伝道の使命について語ることを忘れず、わずかにそれによつて憂さを散じていたのみならず、あまりに多忙のために生まれてくるわが子の世話もできず、ついに三児を病のために失つてしまつた。弟のステラー・ヘップバーン牧師に送つた手紙によると「ああものろわれよ、ニューヨーク」とまでいつている。そうしたときペリーの日米和親条約締結、ハリスの日米通商条約成功の情報を知り、外国伝道——以前は中国に、こんどは日本に——の精神は、もはや胸中におさめておくことができなくなつた。プリンストン大学を卒業、ペンシルバニア大学医学部で研究をおえ、M・D・の学位をうけ、クララ・リート嬢と結婚早々に海外宣教の旅に出発するとき博士の志に共鳴したのは、ひとりクララ夫人のみであつた。そして今や富と栄達の途にあつた博士は、二

ニューヨークのゆたかな生活を弊履のごとくすてて切支丹禁制、鎖国攘夷の日本に向かおうと決意した。中国宣教に旅立ったときは青年の壮途として送ってくれた親族友人も、多くの知人も極力反対した。人生の半ばをすぎ年令不惑の域に達し、富と名声とを得て、大都市に安住できる病院長が家をたたみ財産を整理し、老父母や一人息子までも故郷に残して、行きて再び帰らじとの悲壮な決心をもって開国まもない、まだ物情騒然たる日本に宣教の十字架を負って出て行くのである。

一八五七年末、ニューヨーク市の長老教会の会員で中国貿易に従事していたオリファント氏宛にS・W・ウイリアムスから手紙が届いた。それには「長老教会は日本に宣教をはじめよう。そしてその宣教師は医師であることが望ましい」とあった。すでにヘボン博士は日本宣教を志し、その旨を伝道協会に申し出たので委員会は前記ウイリアムスの書簡とヘボン博士の申し出とを検討した結果、満場一致、博士夫妻を日本に派遣することに決定した。それは一八五八年正月のことであった。博士が弟のスレーター・ヘップバーン牧師に書き送った書簡の中に次のような言葉がある。「一八五八年はまさにおわらんとしている。実に神のめぐみと愛とはわが生活のすべてである。これまでわたしはめぐみ深い神に仕えてきた。しかしもっと神を愛し、神に仕え、日々、神のみこころに従いうるよう働きたい。わたしはいま伝道協会の指示によって、宣教師として日本に派遣されることを申し出た。日本のどこに派遣されるか、まだわからない。けれども神のみこころならば、いずくなりとも喜んで行きたい。日本に行つて暗きに迷う人々の靈性に光を照らし、その帝国にキリストの聖国を建てる役割をはたしたい。そののみがわたしの唯一の望みである。もし神がわたしを派遣し、わたしとともにいまし給うならば、わた

しの喜びはこれにしくものはない。わたしは神の導くままにわが天の父の命ずるところに行き、そこで働くことがわたしの唯一の志である。神はこれまでいつもわたしを宣教のわざに導いて下さったと信ずるがゆえに、わたしは日本の宣教にふみ切ったのである。いまわたしは一切を神にゆだねて悔いない。クララはすべてこれらの点で、わたしと一つ心である。故郷の人々には、わたしの決心を知らせていないから、すべてがきまるまではそつとしていて下さい」と。もう一つ弟に送った手紙には「息子のサムエルと別れることは身を切られる思いである。こんな悲しいことが外にあるうか。いずれ日本に行つてから呼びよせたいが、しかし将来のことはわからない。あるいはこれが最後となるかもわからない」と、父としての人間的な苦悩を弟に訴えている。

たしかにヘボン博士が日本宣教の使命に旅立つまでには友人や知人の反対があり、ことに故郷にある老父の反対と息子のさびしさには、温容な心と豪毅な精神をもつた信仰の人でも堪え難いところであった。郷里の人々は博士の日本行きを聞いて、むしろ嘲笑の言葉さえ発したほどであった。しかしヘボン博士の決意は堅かった。開業医時代ユダヤ人からヘブル語を学んでいたほどの深謀遠慮であったから、今やとききたれりとニューヨークの病院を閉鎖し家財道具を売り払い、十分の伝道資金を用意した。一八五九年四月二十四日、サンチヨ・パンザ号で、ニューヨークを出帆、八月二十九日上海に到着、病気のためしばらく静養、さらに汽船で上海を出帆、途中長崎に寄港し、聖公会宣教師のリギンスとC・M・ウイリアムスとに会い、十月十七日神奈川沖に着いた。翌十八日に上陸し、米国領事館にドール氏をたずねた。領事の好意で神奈川の成仏寺に住まうこととなった。本堂を改造して住居とし、隣接の庫裡(住職の住居)をS・R・ブラウンのために指定しておいた。

第二章

神奈川、横浜時代

神奈川成仏寺

へボン博士夫妻が到着してから二週間後、十一月一日にダッチ・リフォーム派の宣教師S・R・ブラウンと、同宣教医シモンズとが神奈川に着いた。かれらは夫人や子供を上海にとどめ居住が安定してから家族をよびよせることとした。へボン博士とS・R・ブラウンとは、かつてシンガポールで会った旧知の間柄であつたばかりでなく、長く横浜にとどまって聖書翻訳の偉業を完成すべき協同の使命をもつていた。さて十一月七日にはフルベッキが長崎に着いた。ブラウンとシモンズとフルベッキとの三人はいずれもダッチ・リフォーム派の宣教師としてニューヨークから、サープライズ号で上海まで同船、そこで二人は神奈川に、一人は長崎へと宣教地を定めた。そして十二月二十九日にはブラウン夫人と子供たち、サンド・ビーチ教会の会員ミス・アドリアンスそれにシモンズ夫人たちが神奈川に、フルベッキ夫人は長崎に着いた。ついで一八六〇年(万延元年)四月一日にはフリー・バプテスト派の宣教師ジョナサン・ゴープルとその家族、家僕として漂流民仙太郎をともない神奈川成仏寺に來た。それから翌年一八六一年(文久元年)十一月十一日には若い宣教

師ジェームス・バラとその夫人がダッチ・リフォーム派の宣教師として来日、成仏寺の本堂に居住することとなった。

前述のドクトル・シモンズ夫妻は宗興寺を借りて住まっていたが、夫人が極端なユニテリアンの信仰に熱中し、ヘボンとブラウンの信仰的立場を批判した。それが原因でシモンズも宣教師として働くことができず、横浜市の医師として生活することとなり、宣教師の地位を退き、米国の伝道協会本部に旅費を返却し、宗興寺を去って横浜居留地に移転した。そこで長老派の宣教師ネビウス夫妻が中国寧波から来て、しばらくその寺に住まい、のちヘボン博士がそこで施療事業を試みたが、あまりに多勢の患者がおしかけて来たので、役人は外国宣教師と一般民衆との接触を恐れ、これを閉鎖した。

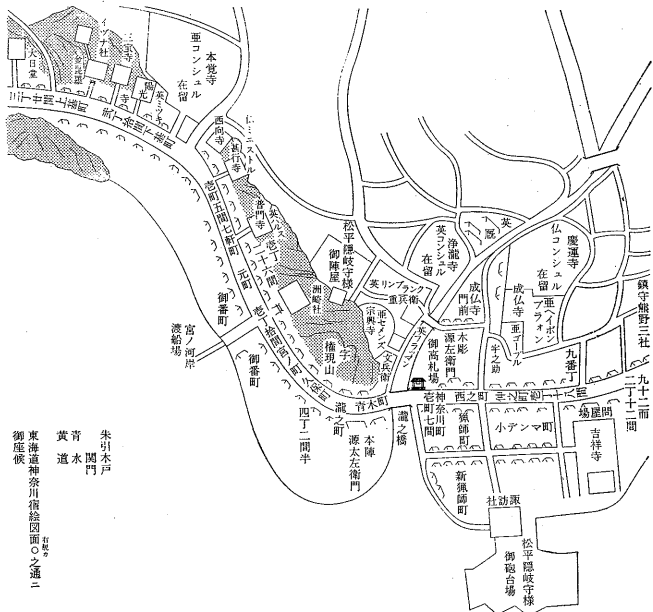
成仏寺は幕末、開港当時ただ一つの米国宣教師館として指定され“American Mission”と呼ばれていた。その周辺には各国の領事館が、いずれも寺院におかれていた。たとえば、今の青木橋のところの丘の上にある本覚寺が米国領事館、成仏寺の手前の慶運寺がフランス領事館、小川に向かい側の浄滝寺が英国領事館、少し離れたところにオランダ領事館などがあった。そのころ横浜はまだ漁村で野毛や伊勢佐木町などは入江になっていた。だんだん埋立地にして、やがて明治時代の横浜市はできたのである。幕府は埋立や整地をして、外国人の商館や居住に適するよう市街地の建設を急いだ。いわゆる関内と称する昔の居留地はそれであった。ヘボン博士も測量などに力をかしたとその書簡に記している。元来、横浜は日米通商条約には記されてなく、神奈川が正式の港であった。ところが幕府は神奈川が東海道すじにあたり、大名の参勤交代に何かと支障をきたすし、またいろいろ

外人との衝突などがおこりやすいところから、居留地を新しい横浜港の方に、もっていったわけである。

さて成仏寺のことはヘボンやブラウンの書簡にも述べられているが、二年おかれて来日したジェームス・バラの夫人の「旧日本の瞥見」には、美しい筆致でこの寺の情景が描写されている。

『わたしたちは寒さ身にしみる程の十一月やつと到着しました。わたしの二十一才の誕生日にブラウンさんの家族はわたしたちを迎えるために、横浜港の埠頭まで行かれたが、あまり早すぎたのでしばらくわたしたちの船の到着まで友人の家で待つておられた。そのため、わたしたちは皆に会うため、新しい居留地の道を歩かされ、それから神奈川まで小舟で行かねばならなかった。

どんな場所へ案内してくれるのかと尋ねてみたかったが、遠慮してしまった。するとやがてお寺について、大



神奈川の地図

きいどっしりした門が開いて、大きい立派な建物、門からそこへ石畳を歩いて舗道ができているのを見てびっくりした。ブラウン一家は本堂に接する庫裡に居られ、バプテスト宣教師ゴープルは、境内の小さい家に住まっていた。ヘボン博士と共に本堂に住まうこととなった。ブラウン夫人は「これが日本のこの地における唯一の宣教師住宅なのです、あなたを歓迎します」といわれました。』

成仏寺境内には大きい公孫樹（いちらよう）の老木があった。ヘボン、ブラウン、バラ夫妻などはみなこの樹蔭にいこい、日本宣教の志を語り祈ったことであろう。ヘボン博士はこの寺で親しくS・R・ブラウンとまじわり日本語の研究、聖書の翻訳に努力し、日曜礼拝や祈禱会、またイースターやクリスマスなども行なった。ヘボン博士は宗興寺での治療ができなくなっても、成仏寺を訪れる病人や、街頭の乞食や付近の貧しい人々の病氣治療も頼まれるままこれに応じた。ときには東海道、神奈川本陣に宿った大名たちの急病の往診をしたこともあり、浪人の傷の手当まで親切に治療にあたった。しかし診察から治療、薬代などまで無料であったから、ある点では医療社会事業の草分けであったといつてよい。

人々は「君子、平文先生」と呼んだ。文久二年十二月二十八日、居留地三十九番に移ってからは、正式に治療所を開いて医療伝道に従事した。待合室の壁面には漢字の聖書の一句や平仮名で書いた聖句をかかげたりした。また漢訳聖書、「真理易知」の上海版の日本語の小冊子、明治五年内地版の「三要文」などを患者に配布した。慶応三年、名優沢村田之助の脱疽の手術をして義足をはめてやったことなどが有名になり、「もしほ草」なる初期の新聞に記録されたので、いっそう世間に伝わった。

へボン塾の起源

英語教育については、へボン夫人の家塾は有名で、いわゆる「へボン塾」として知られているが、その起りは非常に古く、成仏寺時代すでに日本人に英語を教えていたことが、へボンの一八六一年六月二十二日、神奈川からの書簡の左の一節でうかがわれる。

「わたしどもは、学習者の小クラスを集めております。施療所に興味をもって、わたしの助手とする二人の学生が数日のうちにきます。日本語の教師とわたしどもの下僕の息子が、クラスを作って、妻が毎日、午後一時間または二時間、英語を教えるのです。二人とも辛抱よく勤勉な生徒です」と書いてある。ところがへボン夫人はたまたま、ある夕暮、成仏寺門前で日本人に背後から棒で肩さを打たれた。博士やブラウン一家は一時心配したが、まもなく苦痛は収まった。しかし夫人は米国に残していた息子のことも心にかかり、いったん帰国することとなったが、船便を待つ間も出帆まぎわまで英語を教えていたとへボン博士は語っている。なお夫人が米国に帰つてのち、ひとり本堂の一室で「和英語林集成」の編集に没頭していたとき、幕府の紹介で九名の武士が数学等の教授をこうた。九名の武士の中には長州藩の大村益次郎（当時村田蔵六と称していた）も加わっていた。成仏寺の周囲を竹やらいでかこみ、門前には厳重な警護の武士が見張りをした。へボンもはじめは気も転倒せんばかりであった。一八六二年十二月下旬、居留地三十九番地に家を建て、施療事業を行なうとともに、他方、英語を教えるように設備をした。ところが夫人が一八六三年（文久三年）五月に米国から横浜にもどつてから、幕府の侍医林洞海の子、林董をへボン夫人が教えることとなった。林董は明治時代に英国公使となり、日英同盟の外交交渉につくし、外務大臣逋信大臣を歴任した。さらにまた、高橋是清も夫人から英語の手ほどきをしてもら

ったりした。後年、三井物産会社の創業に功績のあった益田孝なども、ヘボン夫人に学び、その他、ヘボン施療所で医学を学んでいた人々も、ヘボン夫人から英語を学んだ。生徒数もだんだんにふえ、なかなかの盛況となった。明治初年には女子で「ヘボン夫人の学校」に英語を学ぶものもふえてきた。明治二年には一時帰米していたS・R・ブラウンが新潟英学校の教師となって来日したとき、むかしブラウンが牧会していたオワスコ・アウトレットのサンド・ビーチ教会の会員メリー・キダー女史をともなつて約一か年ばかり新潟にいたが、まもなく明治三年、横浜にもどつてから、ミス・キダーはヘボン夫人の学校の教師となり、とくに女子の英語教育に力をそそいだ。明治五年五月ごろからミス・キダーは権県令大江卓夫妻の好意で野毛の掃部山の神奈川県官舎に移つて女子教育をつづけ、同八年六月一日、現在地に移し、フェリス女学校としてキリスト教女子教育を樹立した。

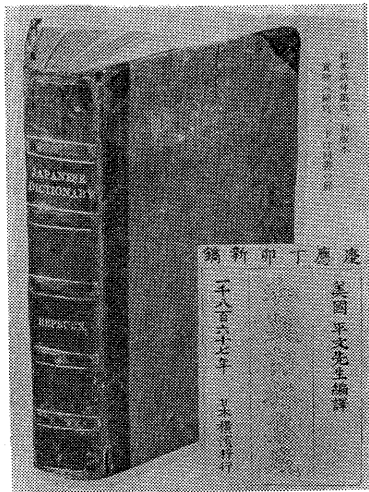
他方、ヘボン塾すなわち「ヘボン夫人の学校」(Mrs. Hepburn's School)では一八六三年十一月ごろには三人の立派な生徒が学んでおり、一八六四年十一月には小さな学校の形をとつた。一八六九年(明治二年)にヘボン博士は学校の盛況を報じ、同年六月十九日のヘボン夫人の通信には女子のクラスを作つたことを報じている。明治三年から五年まで前記ミス・キダーが手伝い、同六年には二十名、同七年(一八七四年)には生徒四十名をこえ同年九月十三日にはヘボン塾生十八名によって指路教会の前身、横浜第一長老公会が設立せられた。築地大学校、一致英和学校、明治学院時代において活躍した服部綾雄は明治五、六年ごろ、石本三十郎は明治八年ごろのヘボン塾生であつた。

ところが明治八年ヘボン夫妻は山手に移り、ヘボン塾をジョン・バラに託した。時代は文明開化の波にのつて

「バラ学校」も急激にその生徒数を増し、生徒数四十をはるかに上回るようになった。ジョン・バラは長兄のジェームス・バラの推薦で横浜の高島学校の教師として明治五年に來日した人で、長老教会の熱心な信徒で、宣教師でなく平信徒であった。しかし日本人の青少年の教育には最も適任の教育者であったからヘボン博士夫妻の信任あつく、ヘボン塾の経営をバラに一任し、横浜における立派な男子の学校として計画をたてていたが、後述するように明治十年に日本におけるダッチ・リフォーマム派と北米長老派とスコットランド一致長老派との合同により、一致教会の成立とともに東京築地に一致神学校を設立し、ついで横浜のバラ学校といわれたヘボン塾をも同十三年に築地に移し築地大学校として再編成するにいたり、ジョン・バラは築地大学校の校長として男子キリスト教教育に専念した。ヘボン博士はまた幕末、横浜における幕府の英学教育の創立について建議し、一八六二年（文久二年）に横浜英学所（Yokohama Academy）が居留地運上所で開設され、日本人の通訳養成機関となった。ヘボン博士みずからは施療事業にいそがしく、S・R・ブラウンを推薦し、ついでジェームス・バラやタムソンなどが応援して英語教育につくした。これはのち中絶したが、明治になって修文館の設立となり、S・R・ブラウンが明治三年から六年まで教師となり、高島学校ではジェームス・バラやジョン・バラが応援した。

聖書の翻訳と「和英語林集成」

ヘボン博士が苦心したのは日本語の研究であった。本来は聖書の和訳出版という大事業が博士の來日の目的であった。しかし聖書翻訳には、まず日本語の研究が第一であると考え、ブラウンとともに成仏寺時代から力を合わせて日本語の研究につくした。



「和英語林集成」

ブラウンは一八六二年に上海の北米長老ミツシヨンの印刷所美華書館から“Colloquial Japanese”という日英会話編を出版したが、これは英学教育のテキストとして明治初期まで用いられた。ヘボン博士が成仏寺時代から居留地三十九番の時代にわたり、前後八年の歳月をかけて苦心編集したものは、有名な和英・英和辞書「和英語林集成」である。これは日本英学史における不朽の作品であり、当時としては完べきに近い文献であった。

一八六七年（慶応三年）にこれほどの大著述が活版印刷されて、開港まもないころの日本に普及されたのは驚くべきことである。

ことに医者で、宣教師であったヘボン博士が日本語の研究の手引きとして、この大作を編集したのであるから驚嘆にあたいする。ヘボン博士とブラウン博士とは、かつて中国に行つて医療、宣教、教育に従事した人々である。ブラウンはマカオと香港でモリソン記念学校の校長として、中国人に英語教育を行なうこと八年、ヘボン博士はシンガポールとアモイとでほぼ五年間、中国語の研究と医療伝道とを行なつた。二人とも中国語に通じていたから、神奈川に来てからも漢文の書籍を白文で中国語のまま理解することができた。聖書と訳の場合もどの外国人よりも有利な立場にあつた。ヘボン博士はアモイ滞在中にアモイ語の事典をまとめたといつている。ヘボン

の編集した「和英語林集成」の原稿の一部が現在、明治学院大学図書館に保管されているが、それは不完全な原稿と思われる。多分、初期のものであろう。あるいは成仏寺時代の原稿であるかもわからない。もしそうだとすれば、この原稿はきわめて重要な歴史的文献であるといわねばならぬ。

印刷について当時、横浜でよい活版印刷ができなかったので、上海の美華書館にいたガンブルという北米長老派の人の、すぐれた印刷技術に託したものだ。岸田吟香も上海に行っている手伝ったようである。ヘボン博士みずからも「平文」と号したことはなかなか面白く、博士の人柄がしのばれる。和英の部分は神奈川、横浜時代の作であったが、英和の部分は上海に行ってから急に編集したものである。初版は一八六七年で、第二版は明治五年、奥野昌綱が手伝っており、第三版の印刷は丸善商社であったが、この辞書の売行きのよいところから、大阪の日盛館という本屋が初版の偽版を発行したりしたので、温容なヘボン博士も非常に困って版権を丸善商社に渡した。丸善では金二、〇〇〇ドルをヘボン博士に呈したので、博士はこれをそのまま創立当時の明治学院に呈し、理事員会ではこれを基金として学生寄宿舎へボン館を建築することとなったわけである。「和英語林集成」は七版あるいは九版まで出たらしい。明治学院大学図書館には一、二、三、四、五版および縮刷版一版、二版、偽版が保管されている。わが国に伝わったローマ字はヘボン式ローマ字であるが、それは実にこの「和英語林集成」に用いたローマ字から出たものである。博士はまたヨハネ伝や、詩篇をローマ字で印刷し、さらに新約聖書のローマ字版まで編集し、その出版にもたずさわった。ともかく平文先生の「和英語林集成」は、日本語を学ぶ外国人にも、日本人の英語教育のいづれにも重宝な辞書であったから、「ヤング・ジャパン」(Young Ja-

part) なる書を著して幕末開港当時の史実を記した著者、英人ブラックはヘボン博士の業績を高く評価し、「一八六七年の夏、ドクトル・ヘボン氏は日本人のために外国人のために、ヘボン辞書を著したり。これらは独り日本語を学ぶ外人に最大便利を与えしのみならず、英語を学ぶ日本人にも、これと同一の便利を与うるものなり。今日まで日本にありて、書を著せし者少なからざるも、未だ内外人を裨益すること此書の右にいつるものあるを見ず。いう勿れ、日米両国の交際を親密ならしめたるはペリーもしくはハリスなりと。余は思う、彼らは日本と条約を締結したるに相違なきも、此の条約たる日本官吏の恐怖に乗じて締結したるにすぎず。他人の恐怖に乗じて事をなすこと名誉の事業とは云い難し。もしそれ日本人民に智識の門戸を開き、彼等を知らず識らざるの間に文明の徳沢に浴せしめたる功勞に至りては、米人中ドクトル・ヘボンの右に出ざる者あるを見ず」と、書いてゐる。まさに至言であらう。

しかし、ヘボン博士の来日した窮極の目的は、日本人が日本語で聖書を読むようにすることであつた。聖書訳が初代宣教師ヘボン、ブラウン両博士の志すところであつた。それは個人訳ではなく在日宣教師たちの協同の事業としたいと念願した。ブラウン博士はすでに新約聖書の四福音書を翻訳し、ヘボン博士はマタイ伝を訳しマルコ伝、ヨハネ伝、ルカ伝と医療事業の間につきつぎと訳しつゝあつた。幕末、成仏寺にしばらくいたゴープルは山手に移つてマタイ伝を翻訳し、明治四年に「摩太福音書」を自費出版した。ブラウン博士は慶応三年、横浜自宅の火災で書物や原稿を焼失したが、マタイ伝とマルコ伝の原稿だけは友人に貸してあつたため焼失をまぬかれ一時帰国したので、ジェームス・バラとタムソンとヘボンとが、これらのブラウン訳原稿にもとづきマタイ伝

を改訂出版したのが明治四年であった。

明治五年、横浜居留地三九番、当時のヘボン施療所で第一回宣教師会議が開かれ、その席上、三つの点を決議した。一つは聖書翻訳を各派共同委員制とすること、第二は神学教育の創設、第三は教派によらざる日本基督公会の普及徹底であった。しかし第三の公会制については議論紛糾した。明治七年から山手二一一番、S・R・ブラウン邸で聖書翻訳委員会を開き五年間継続した。明治十二年にブラウン博士は老衰と病弱のため帰国したが、すでに翻訳は終わり、同十三年新約聖書が出版された。その記念会が築地新栄教会で開かれ、ブラウン博士はニューヨーク・イングリランドで出版完成の電報をうけ安心して永遠の眠についた。旧約聖書の翻訳完成は明治二十年で、



新約聖書和訳記念碑

委員長はヘボン博士であった。明治十五年から着手し、フルベッキ博士や英国聖公会のファイソンなどが、力を合わせて完成したもので、フルベッキの詩篇の翻訳の名訳は、有名である。聖書翻訳についてヘボン、ブラウン、フルベッキの三人は最も重要な役割を果した人々で、新約聖書はブラウンが委員長、旧約はヘボン博士が委員長であ

った。これら三人は明治学院創立者として永久に記憶さるべき人々である。

S・R・ブラウンのおいたちと日本宣教

S・R・ブラウンは一八一〇年六月十六日、米國コネチカッツ州イースト・ウインザーの町で生まれた。父はテモテ・ブラウ

ン、母はフィベ・ヒンステール・ブラウン、讚美歌の作者として知られている。とくに讚美歌三一九番「わづらわしき世をしぼしのがれ」は、日本人の間に歌われている。

ブラウンが生まれる十数日前アメリカ伝道協会が組織された。母フィベ・ブラウンは生まれたばかりの幼児を抱いて、「この子を外国伝道にささげたい」と祈ったことは前に述べた。この信仰あつい母にそだてられたブラウンは、長じて父母とともにマサチュセッツ州モンソンに移り、ニュー・イングランドのピューリタニズムと敬虔主義の精神とに養われ、アマスト大学に入学したが、十分な学資もなく中退して働いた。ふたたび志をたてエール大学に編入し、一八三二年卒業後、しばらく聾啞学校の教師となり、のち南カロライナ州の神学校に学び、音楽を教えながら学費を得た。一八三六年、ニューヨーク市に出てユニオン神学校に学んでいたとき、同市の長老教会に転会し、そこで中国の貿易とプロテスタント宣教につくしてオリファントに知られ、一八三八年、神学校を卒業とともに、中国におけるモリソン記念学校の校長に推挙された。同年十月十七日モリソン号に乗り、船主オリファント商会の好意で特別船客として待遇せられ、一八三九年二月十九日マカオに到着した。ギョツラフ博士や、S・W・ウイリアムスに迎えられ、モリソン記念学校の経営にあたり、中国青少年のキリスト教

教育につくした。一八四一年シンガポールでヘボン夫妻に会った。これがその後、四十年間の二人の友情のはじめであり、日本における二十年間にわたる宣教の協力となるべき第一歩なのであった。

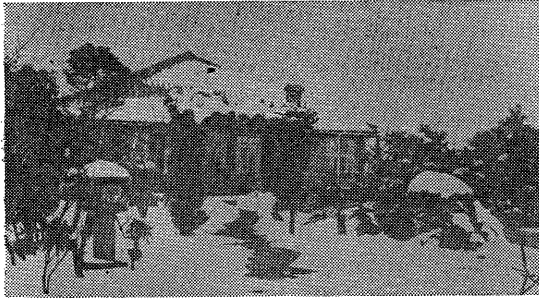
モリソン記念学校はその後マカオから香港に移動したが、その校長として中国青年を養成し、中国プロテスタント各派の宣教師たちとまじわり、とくに倫敦会の超教派的宣教精神に深く傾倒した。夫人が病を得たので一八四七年帰国し、ニューヨーク州のローマ・アカデミーの校長となり、エルマイラ女子大学の創立につくした。一八五一年から一八五九年までオーバーン市近郊の小さい湖水の多い、いわゆる Finger Lakes (指の湖水) といわれる湖水の一つオワスコ湖の水門 (Outlet) の砂丘にある、サンド・ビーチ教会の牧師となり、八年間教会につくした。その間新しく会堂を建て、近くのスプリングサイドに学校をおこした。林を切り開き、荒地を開墾し、教会の財政をたてなおし、オーバーン神学校を応援し、牧師として深い感化を同地区の人々におよぼした。前述のミス・メリー・キダーもその教会学校の教師であり、スプリングサイドの学校の教員でもあった。フルベッキ夫人となったマリイ・マンヨンも、ブラウン一家とともに来日したミス・アドリアンスも、みなブラウンの牧した教会員であった。

日米通商条約が締結されて日本の宣教の門戸が開かれたとき、前述の S・W・ウイリアムスや、ヘンリー・ウッド、ならびにサイル師三人の長崎からの書簡によって、ダッチ・リフォームド教会はブラウン牧師を日本の宣教に派遣することとなり、オーバーン神学校を卒業したギドー・フルベッキと医師のドクトル・シモンズを帯同して、ブラウンは一八五九年五月七日、ニューヨークの港を出発した。ヘボン博士夫妻は悲壮な決意をもってニュ

ーヨークを去ったが、ブラウン一家は敬虔な母フィベ・ブラウンの祈りに送られ、ニューヨーク市のリフオームド教会で出発する三人とその家族のための壮行会に出席した。そこで盛んな声援と祈禱と奨励をうけて、希望と歓喜にみちて宣教の旅に向かった。香港、上海をへて神奈川についてのが、同年十一月一日であった。ブラウンは成仏寺でヘボン夫妻に迎えられ、あらかじめ用意されていた寺の庫裡に住まい、安息日ごとに礼拝を司り、ヘボン夫妻とともに日本語を学んだ。シモンズの宣教師離脱の件によって、心をくじかれたが、あとから来たジェームス・バラ夫妻の熱心な伝道精神にはげまされた。タウンゼンド・ハリスと親しくまじわり、ハリスの眞の理解者でもあった。ブラウンはまた居留地の聖公会の創設時代、牧師代理をつとめ、またアメリカ人の居留民のためにユニオン・チャーチの創立につくし、万国福音同盟の精神をもって伝道した。とくにジェームス・バラの日本人の伝道を助けたが、一八六七年（慶応三年）五月、自宅の火災でいっさいを焼失し、一時帰国した。のち長女ジュリアの嫁した英人ラウダー氏の好意によって、新潟英学校の教師に推挙され、明治二年八月、ふたたび来日し新潟に居住することほぼ一か年、明治三年、横浜の修文館の英語教師となって横浜に移り、山手二一一番の邸に住まい、ヘボン博士、ジェームス・バラと協力して横浜の教化につくした。

ブラウン塾

修文館の契約期限が明治六年で終わったので、ブラウンは弟子たちの熱心な後援を得て、自宅で神学塾を開いた。松平定教、駒井重格、井深梶之助、植村正久をはじめ志ある多くの俊秀がここに集まり、その指導をうけた。井深、植村、山本秀焯はいずれまでもなく本多庸一、押川方義、熊野雄七、奥野昌



ブラウン塾の家

綱、島田三郎などすでに居留地一六七番のジェームス・バラのバイブル・クラスに出席していた青年たちが、主としてブラウン塾に参加した。ブラウン塾を語る場合ジェームス・バラの宣教活動に一言しなければならぬ。バラは一八三二年九月七日、米国ニューヨーク州デラウェア郡ハガーツ町に生まれ、青年時代は実業に従事していたが、信仰あつく、志をたて、ラトガース大学とその神学校に学び、ダッチ・リフォームド・ミッシヨンの宣教師となった。一八六一年（文久元年）十一月十一日に神奈川に到着、ヘボン博士の好意で成仏寺本堂の一室に住まい、日本語教師矢野隆山を導き、一八六五年（慶応元年）十一月五日、病床でヘボン博士立ちあいのもとにバプテスマを授け、わが国最初のプロテスタント信徒を導く宣教の光栄を担った。また成仏寺内で上記矢野のほかにもゴープルの連れ帰った仙太郎などともに聖書研究をはじめ、日本人礼拝を志し、横浜居留地に移ってからも、横浜英学所の生徒や夫人の英学家塾の生徒やバラのバイブル・クラスの青年たちをもって、日本人礼拝をはじめ、それが結実して明治五年三月十日、日本基督公会の創立となった。それは実にバラやブラウン、ヘボンの協力によって出来た日本最初のプロテスタント教会であった。一八七四年（明治七年）の総会で公会定則が改訂された。その第二条例公会基礎に次のような一文がある。

「我侪ノ公会ハ宗派ニ属セズ。唯主耶蘇基督ノ名ニ依リテ建ル所ナレバ、単

ニ聖書ヲ標準トシ是ヲ信ジ是ヲ勉ムル者ハ皆是基督ノ僕、我等ノ兄弟ナレバ会中ノ各員全世界ノ信徒ヲ同視シテ一家ノ親愛ヲ尽スベシ。是故ニ此会ヲ基督公会ト称ス」

これは外国の教派によらず、日本人の信徒によって組織された教会であつてブラウン博士の主張たる万国福音同盟の精神、あるいは、かつて中国時代に得た倫敦会の超教派的の福音主義の精神が日本基督公会の精神的基調をなすものであつたと、みるべきであらう。成仏寺時代の三人、ヘボン、ブラウン、バラの協同一致の宣教的精神が、世にいう「横浜バンド」として知られるものである。長老としてのヘボン、神学教育者としてのブラウン、伝道者としてのバラ、三つの異なつた人格がキリストにおいて、日本教化の目的において、一つ心となつたところに神の聖霊が日本人の靈性にふれ、大いなる信仰の覚醒となつたものとみるべきであらう。

ブラウン塾に集まつたものは、日本基督公会の信徒とバラの聖書研究会の人々と修文館の生徒たちであつた。ダッチ・リフォーム派のアメルマンは神学を講じ、ローゼ・ミラーはこれを助け、ブラウンの娘ハリエツトやミス・ウインは英語を教え、ブラウン自身も新約を講じた。そして集まつたものは信仰に燃える天下の俊秀であつたから、ブラウン塾はある意味においてわが国最初の神学塾、教派に偏せざる教職者養成機関であつた。まさにユニオン・セミナリーの理想型であつたといつてまちがひない。ヘボン塾が英学塾として発展し、ブラウン塾が神学塾としてきわめて短期間であつたが、不朽の感化を残したことは疑うべくもない。そしてこれら二つが東京に移り、東京にあつた諸神学塾と合流して築地の一致神学校となり、ヘボン塾から築地大学校になつたわけである。そうした見地に立つて明治学院の歴史的背景をみるならば、外国伝道の起源、わが国の開国、開港、開教

の歴史は横浜から築地、築地から白金に移り行くべき発展の背景となるものであることが理解される。S・R・ブラウンは明治七年から十二年まで老弱でありながらも、新約聖書翻訳委員長としての職責を果たしたが、その出版の喜びを待たず帰国、父母の墳墓の地、モンソンの友人宅で明治十三年七月二十日永眠した。しかし、同年築地の新栄教会で行なわれた新約出版記念会からの電報をうけとり、遠く日本の空をのぞみ、その労苦のむくいられたのを知り、神に感謝しつつ世を去ったであろう。「彼は死ぬれども今なお語る。」

フルベッキのごとくも

日本プロテスタント史において、また明治学院史において創立者の一人に数えられべき、いまひとりの人物はG・F・フルベッキである。フルベッキは前述したようにブラウンと同じ船でニューヨークを出発して日本に向かった、ダッチ・リフォーム派の宣教師であった。フルベッキは直接伝道というよりも教育者として、とくに明治政府の御雇外人として日本の近代化のために働いた。不朽の功績をのこした人物である。米国宣教師として来日したが、青年時代にオランダから米国に移住したとき米国市民権の手続きをしていなかったため、市民権をもたず来日した。後年、日本に帰化したいと念願したが、米国人としての正式の市民権がないためこれを果たし得なかった。多年の功労にむくいるため明治政府は、フルベッキ博士とその家族に日本に永住する権利を与えた。博士は「国籍なき人」(Man of No Country)とグリフィス博士はその著「フルベッキ伝」に書いている。オランダで生まれてオランダ国民ならず、米国に移住して米国民たり得ず、日本に永住して日本人たり得ず、かれの国籍は天にあるといつてよい。フルベッキはオランダに

生まれたので、オランダ語、ドイツ語を自由に話すことができるばかりでなく、フランス語、英語をも理解し、音楽にひいでていた。オランダで工学を修め、アメリカで神学を修め、ギリシャ語、ヘブル語に精通し、長崎に渡ってからは日本語を学び、自由に話すことができるようになった。日本文もたくみで、フルベッキの訳した詩篇はまさに珠玉の名文であるといつてよい。

フルベッキすなわちギドー・フリドリッヒ・バーベック(Guido Herman Fridolin Verbeek)は、一八三〇年一月二十三日、オランダのユトレヒトのザイストで生まれた。米国に移住して Verbeek と改めた。バーベック家は元来、アムステルダムで富裕な商人であったが、のちツァイストに移り、コッペルの丘に住まった。平和な家庭に生まれたかれは美しい環境に恵まれ、モラビア派の敬虔な信仰とオランダ的な寛容な精神と教養高い家庭にそだてられ、少年のとき中国伝道につくしたカール・ギュツラフ博士の講演を聞いて感奮したといわれている。小学校時代、すでにオランダ語、英語、フランス語、ドイツ語を修め、ユトレヒトの工学校で機械工学を学んだ。フルベッキが生まれたときは欧州に鉄道が敷設された時代であったから、かれが工学を修めるにいたつたのも当然である。鉄道事業に従事しようと親戚のバン・デュールをたより、一八五二年、二十二才で渡米した。最初ウイスクンシン州のグリーン・ペー付近にあるタンク・タウンの工場に勤務したが、その後、アーカンサス州のヘレナで架橋工事に従事した。そこで南部における黒人奴隷の悲惨な状態をみて、アメリカニズムの反面に失望し、同時に靈性の飢渴を切実に感じた。二十哩も離れた町の教会にヘンリー・ピーチャーの説教を聞きに行つたこともあつた。まもなく暑熱のために健康を害し病床に伏す身となつた。

かれは病床にあつて、少年時代、ザイストの町で聞いたギュツラフ博士の熱烈な外国伝道の話を思い出し、宣教師として献身しようとして深く決し、ふたたびグリーン・ペーの美しい湖畔に行き健康の回復をまつて、オーバーン神学校に入学し、伝道者としての準備をすることとなった。オーバーン市から二哩ばかり離れたオワスコ湖の水門、オワスコ・アウトレットの砂丘にはダッチ・リフォームド派、サンド・ビーチ教会があつて、後年フルベッキ夫人となつたマリア・マンヨンもその教会員であつた。フルベッキが神学校を卒業したのが一八五九年の春であつた。ダッチ・リフォームド派の外国伝道局ではS・R・ブラウンに日本宣教の使命を托した。医師シモンズのほかに、この青年伝道者フルベッキも行をともしるようになつたので、ニューヨークの伝道教会本部の総主事アイザック・フェリス博士にも会い、日本派遣の正式命令をうけた。カユガの長老教会で按手礼をうけ、四月十八日、前記のマリア・マンヨンと結婚し、米政府に米国民の証明をうけようとしたところ入国の際、オランダ人としての証明がなかつたという理由で、市民権を得られず、そのまま日本に行くこととなつた。

長崎におけるフルベッキ

ニューヨークを出帆したのが一八五九年五月七日、サープライズ号でブラウン、シモンズと行をともした。ジャワのアンジャ、香港に寄港して上海に着いたのが十月十七日、ブラウンとシモンズは神奈川に向かい、フルベッキは十一月七日長崎に着いた。出島蘭館にとまらず米国聖公会の宣教師リギンス、C・M・ウイリアムスの居住していた崇福寺内の広福庵に住まい、のち大徳

寺に移った。崇福寺時代に高杉晋作の来訪をうけ、連邦政治について論じたこともあった。長崎奉行はフルベッキを済美館なる語学校の教師として招くこととし、さらに佐賀藩が長崎で設立した致遠館でもフルベッキにその指導の任を托した。大隈重信、副島種臣などが中心となり多くの青年武士が集まり学んだ。これら二つの学校でフルベッキの指導をうけた人々の中には、後年、明治政府の要職についた人々が多くあった。また海外に留学したのもあった。長崎におけるフルベッキの働きのいま一つの業績は村田若狭の回心であった。一八五四年ごろのことであるが、村田若狭は長崎出島の警備にあたり、船で海上を見回っていたところが、海上に浮んでいた一冊の英語の書物を見つけ、これをひろいあげたが、書物の内容がわからず、出島の蘭館の通事などにたずねたところ、英語の新約聖書であることがわかった。

村田若狭は佐賀藩の家老級の武士であったが、その書物の内容を学ぼうとして、上海から漢訳聖書を取りよせて、ひそかに聖書の研究をはじめ熱心に読みふけた。フルベッキが長崎にきてからたびたび会い、ついに若狭と綾部、家来の本野がフルベッキのところに来て、バプテスマをうけたいと申しでた。一八六六年（慶応二年）五月二十日のペンテコステの聖日に、住居としていた大徳寺の一室でフルベッキからバプテスマをうけた。これは神奈川の矢野隆山に次いで第二番目の信者となった。

宣教の使命をおびて来日したフルベッキに対して、当時の日本人は外国の文物に対する知識欲が強く、かれからキリスト教を学ぶというより工学の知識、米国の憲法政治、築城、軍事にいたるまで学びとろうとした。ことに各藩主から招きをうけたが、伝道の使命を感じて、これを辞退した。

フルベッキと日本政府

しかしフルベッキに学んだ大隈重信、副島種臣はじめ岩倉具定、その他、多くの明治政府の要職についた人々は、かれを東京に迎えようとした。とくに岩倉具視のときは、フルベッキに托して米国のラトガース大学に子息二人の留学を依頼するほど信任があつく、明治二年、太政官三条実美は長崎県知事を通じ、フルベッキに対し、大学設立のため招聘状を出した。かれはこの懇請をいなむことができず、ことにまた切支丹禁制撤廃を何とか早く実現しなければならず、そのため、明治政府の顧問格に迎えられることによつて、その目的の実現が果せるかとも考え、ついにその招きをうけ、上京することとした。ダッチ・リフォーム下の伝道を長崎で継続するため、米国のミッション本部からヘンリー・スタウトが長崎に派遣されてきたので、フルベッキは宣教の件をスタウトに託し、明治二年四月から東京の大学校の語学、學術の教師となり、同校の教頭にあげられ、また政府の顧問となった。ことにフルベッキは明治二年、明治政府の代表者を欧米に派遣して、列国との交友、条約改正の件、その他、文武各般の制度、法制の調査を行なうべきプランをこと細かく書いて、かつての生徒であった大隈重信に提出してあった。しかしこれは当時、外国の勢力に対する反動的気分も見うけられていたので、大隈はこれをそのままにしてあったが、なにかの会議でその件が明らかとなり、岩倉具視は非常に驚き、フルベッキを私邸にまねいて、その点をただし、フルベッキもそれを岩倉具視自身のプランとして取り扱った。

これは政府として非常に重大な計画で、明治四年いよいよ欧米派遣の使節として岩倉具視が五十人におよぶ政府の役人を帯同して、まず米国に渡り、英、仏、独、露と各国の元首に会い、また各国の制度文物の調査研究も

十分行なつて新政府の樹立を計ることとなつた。フルベッキは大学南校の教頭として、また政府の顧問格として重要な施策に参画しながら、みずからはその地位を固執せず、明治六年二月、切支丹禁制の高札撤廢の布告が太政官から出され、もはや明治政府における自分の使命は終わつたと深く感じ決するところがあつた。かれは御雇外人中、最高の待遇をうけていたので、一方では同僚から、他方では宣教師側からやや白眼視されていたことを自身も察していた。明治六年、過勞のため静養をかねて、故郷オランダを旅行した。そのころ丁度欧米を旅行しつつあつた岩倉一行と出会い、岩倉全權と親しく語り、大学南校を辞任したい旨を申しでた。岩倉はフルベッキの立場に同情しつつ、慰留にとめた。ついに明治六年九月、かれは大学南校の教頭を辞したが政院および左院のまねきに応じ、翻訳顧問をかね同八年元老院に転じ、太政官御雇法律顧問として法律に関する書類の翻訳取調べに従事した。また華族女学校の講師をもかねた。明治十年七月二日、勲三等旭日章を賜わつた。

しかし、すでに一致教会は成立し、築地に一致神学校は創設され、基督教会と基督教学校はやや頭をもたげてきた。フルベッキは政府の役職をいっさい辞し、一度、米國に帰り、カリフォルニアに旅行して、疲勞した心身をやすめ明治十二年ふたたび日本に帰つて、一致神学校の講師となり理事をつとめた。各地の教会を応援して、流暢な日本語を試みた。また多くの翻訳、著作、講演を行ない、とくに明治十六年、大阪の宣教師會議における「日本におけるプロテスタント宣教の歴史」の講演は、外国宣教師が行なつた「日本プロテスタント史」の原典ともいふべき史的価値を有するものである。明治十九年六月二十二日、厚生館における東京一致神学校、東京一致英和学校合同の卒業式における講演は、堂々たる日本語の講演であつた。

フルベツキはヘボン、ファイソンとともに明治十五年から二十年まで五年間、旧約聖書翻訳事業にたずさわりの詩篇の翻訳は、むろん植村正久や松山高吉等の助力はあったにしても、博士自筆のローマ字による詩篇の一部の原稿を見れば、いかに立派な日本文であったかということがわかる。そしてこの詩篇のすぐれた名訳とともにフルベツキの生涯はいつまでも明治文化の中に輝いている。明治学院が設立せられるとともに、その神学部専任教授となり、旧約釈義、説教の講義を行なった。また理事となり、理事長としても学院の発展につくしたが、明治三十一年（一八九八年）三月十日正午、赤坂葵町の自邸において心臓麻痺のためにたおれた。享年六十八才であった。葬儀は三日後の三月十三日、芝日本基督教会で行なわれ、近衛儀仗兵の行列の中を青山墓地に埋葬され、宮中より五百円を下賜された。

オランダに生まれ、アメリカで学び、日本で働いて、いずれの国籍をもたず、ただわが国に永住することを許されて、明治二年から三十一年まで日本政府の保護をうけた。その間、日本宣教の自由のために苦心し、日本の教会と学校につくし、聖書の翻訳のために努力し、とくに明治学院の創業時代につくしたフルベツキ博士は、いつまでもヘボン、ブラウンとともに三人の創立者の一人として学院存立するかぎり忘れてはならない。

第三章 築地時代

文明開化とキリスト教教育の勃興

前述したように、明治四年から五年にかけて岩倉全権の一行が米國をはじめ英、独、仏、露と歐米各国の元首と会見し、条約改正の件を打診し、各国の文物制度、組織を調査研究して帰ったことは、わが國が近代國家としての新しい政治組織の出発点であったともいえる。ところが、一行が各國においてうけた一つの非難は、明治維新直後、長崎浦上における切支丹迫害の一件であった。

日米通商条約が締結せられ、わが國が貿易を開始し、海外留学を許可し、歐米各国の人々がわが國に来訪するようになったにもかかわらず、今なお切支丹禁制の高札をかがげ浦上の信徒をとらえ、これを各地に配送して、禁固、弾圧、迫害を加えるのは、文明國としてあるまじき態度であるとの非難ごうごうたるものがあつた。さすがの岩倉全権も驚きかつ窮したので、いそいで伊藤博文を途中から帰國せしめ、明治六年二月二十四日、太政官布告六十八号をもって「従来高札面ノ儀ハ一般熟知ノ事ニ付、向後取除キ可申事」と布告し、切支丹禁制の高札

撤去を命じた。これによって、一応キリスト教は公然と信仰の自由を得たこととなった。のみならず、文明開化の波は津々浦々に波及しつつあったから、英語を学ぶものが多くなった。維新当時までには蘭学を通じて世界の知識を吸収した学者も、いまや英学に転じ、横浜、東京においては片言の英語でも話すことが、すなわち、文明開化でもあるかのような印象をさえ与えた。従って、英学の普及は潮のおしよせるような勢いであった。そうした時代の流れに棹さしてきたものが宣教師の活動であった。

横浜において明治五年にすでに日本基督公会が創立され、同六年にはメソジスト派の宣教師マクレイ・コレル来朝、同カナダ・ミッションのカ克蘭も来日、バプテスタ派ではゴープルが老宣教師N・ブラウンを案内して横浜山手にやってきた。ここで横浜バプテスタ教会を設立、聖書翻訳と伝道とをはじめ、さらに東京では築地を中心として、長老派のカラゾルスは明治六年十二月に東京第一長老教会をおこし、築地大学なる名のもとに、英学、神学の塾を開始し、翌年九月にはD・タムソンが東京基督公会のちの新栄教会を設立して、S・R・ブラウンやジェームス・バラの塾にそって、公会主義の教会を主張した。そしてバイブル・クラスから、さらに神学塾をおこし伝道と教育をはじめた。婦人宣教師のミス・ガンブルやミス・ヤングメンは築地で女子教育をはじめ、のちの女子学院をおこし、メソジスト派の婦人宣教師スクーンメーカーは海岸女学校をおこし、C・M・ウイリアムスは立教学校をおこした。こうして築地を中心としてキリスト教は東京にも波及してきた。明治五年には東京横浜間に鉄道が敷設され、新橋駅から銀座、築地の一角は文明開化の中心となった。当時の銀座風景は浮世絵、錦絵によって新しい都市の情景を伝えた。横浜の開港について東京開市の問題はすでに早く維新前から日米両国

の間で論ぜられていたが、いよいよ明治三年江戸開市とともに、築地を居留地区とし、外国貿易を行なう外国商社の設置が問題となったが、横浜港における異国風景を宮城の近くで見ることがは風致上、はなはだこのまじからぬということとなり、外国商社はやはり横浜の居留地を中心とすることとなった。

従つて築地は公使館員や領事館員、政府の御雇外人、学校教師、宣教師、学者等の居住に限った。当時としては立派な築地ホテルを建て、陸上交通には鉄道で新橋駅より横浜へ、また船で築地より横浜への航行の便を計るなどをした。そうした事情のもとに築地は非常に静かな街、上品でしかも異国情緒のただよう地区となった。家にはピアノやオルガンの音、学校や教会の鐘の響き、行きかう人々の姿、馬車に乗った外人たち、ここに出入る日本人もおのずから洋装の人々が多くみうけられた。タムソンの創設した新栄教会はフルベッキが力を入れて応援した。明治七年に来朝したスコットランド一致長老派のヒュー・ワデル、ドクトル・フォールズ、マクラレン、デビソンも東京を中心に伝道を開始した。フォールズは医師として築地病院をおこし、指紋の研究で有名となった。ヒュー・ワデルは入舟町で神学塾をおこし、居留地外の場所でも伝道を開始した。

東京は政治の中心であるとともに教育の中心でもあった。東京帝国大学の創業時代大学南校の教頭はフルベッキで、医学は英米医学よりもドイツ医学の方がよいと医学者にも、政府にも進言していたので、東大はドイツ医学を中心とした。政治、法律、科学方面の学問に英語はもちろん、ドイツ語、フランス語を用い、御雇外人の中にも英国人、ドイツ人、フランス人が教授、講師となった。

石井孝博士の「明治維新の国際的環境」なる名著や、「明治維新の舞台裏」などの書を読むと、開国、開港当

時の国際情勢がよくわかるが、たしかに明治維新から明治初期にかけて英国とフランスの勢力が対立した。一方は英国公使ハリー・パークス卿が薩長と手をにぎり、フランス公使ロッシユが徳川幕府を支持して、これに対抗した。英国公使ラザフォード・オールコックやハリー・パークスは米国公使タウンゼンド・ハリスや、その後の公使プルインなども英学の普及を奨励し、ペリクールやロッシユはフランス語の教育をすすめた。横浜英学所に対立してフランス語学所を横浜に開設し、一方では米国宣教師が応援し、他方フランス語学所ではカトリック宣教師が応援したことなども、維新当時の情勢を反映したものとみてよい。維新から明治初期にかけ薩長の留学生はパークスがすすめ、幕府側はオランダ、フランスに留学を推進し、米国留学は長崎時代のフルベッキ、明治二年後は明治政府の顧問格のフルベッキや横浜のS・R・ブラウンが中心的な紹介者であった。

三ミッションの合同と東京一致神学校

東京と対比して横浜では女子校としてフェリス、共立、おくれて
捜真、英和（今日の成美）などを設立したが、大体において貿易
の中心地であつて文教の都市ではなかつた。そこで、キリスト教宣教師も東京を中心としてすぐれたキリスト教
大学を作りたいとの要望もあつた。ヘボンやS・R・ブラウンは、横浜で神学校や英学の専門学校を開きたいと
思っていたが、東京の大学と対抗すべきキリスト教の大学をおこして、進化的無神論を講ずる大学と競い、キ
リスト教文化の樹立を計ろうとした。そうした要望の中にキリスト教会の一致協力という、いわゆるS・R・ブ
ラウンの理想が在日宣教師間で論ぜられるようになった。そこでまず三つのミッション、すなわちダッチ・リフ

オームド派、米国長老派、スコットランド一致長老派が合同して日本の伝道にあたらうとの議が決定し、明治十年十月三日、横浜居留地一六七番の海岸教会において前記三ミッションの宣教師と日本長老公会の代表が会合して、第一回中会を開き、日本基督公会の精神、万国福音同盟の綱領にのっとり、日本基督一致教会として発足することとなった。

この会議に列席した日本人代表は海岸教会の熊野雄七、東京新栄教会の北原義道、横浜住吉町教会の南小柿洲吾、築地六番教会の安川享、下総法典教会の武藤某、信州上田教会の稲垣信、東京品川教会の鈴木某、下総大森教会の宮島某、長崎教会の長老は不参、そして外国宣教師はスコットランド一致長老ミッションのヒュー・ワデル、マクラレン、デビソン、フォールズの四人、リフオームド・ミッションのジェームス・バラ、ローゼ・ミラー、アメルマンの三人、米国長老ミッションのD・タムソン、インブリー、ヘボン、O・H・グリーン、ジョン・バラの五人、客員としてアメリカン・ボードのD・C・グリーンとギュリックの二人、およびメソジストのマクレーであった。この合同の結果として、協力した三ミッションが協力一致して、東京築地に一致神学校を設立し、教職者の養成を行なうことになった。したがって、横浜山手二一番のS・R・ブラウン邸で明治六年から開設していた日本基督公会を中心とする神学塾、いわゆるブラウン塾、東京築地六番館でカラゾルスがはじめていた日本長老教会の神学校、同じく築地十六番館のタムソン博士のもつとで聖書と神学を研究していた神学塾の人々、スコットランド長老派の宣教師のもつとで聖書と神学を研究していた家塾の人々をも加え、これらをすべて統一して、一致神学校に收容した。しかしこの会合より前明治十年九月、東京築地明石町七番館の小会堂で授業を

はじめることとなり、ついで、同年十一月に築地十七番に校舎を新築したので、そこに移転し、いよいよ東京一
致神学校となった。

専任教授は次の通りであった。教授 J・L・アメルマン博士は組織神学、教会史、教授ウイリアム・インブリ
ー博士は新約釈義、基督伝、教授 S・G・マクラレン師は旧約歴史、地理、講師ギドー・フルベッキ博士は旧約
釈義、同じく講師デビッド・タムソンも旧約釈義を、おのおの講述した。

神学生のうち横浜ブラウン塾より転校したものは井深樞之助、植村正久、雨森信成、山本秀煇、藤生金六、伊
藤藤吉、鈴木銃太郎、古沢久治等、カラゾルスの経営した長老教会の神学校より転入したものは、原猪作、石原
保太郎、篠原銀蔵、田村直臣、スコットランド長老派の神学塾からきたものは三浦徹、重富柳太郎、タムソン博
士の家塾からは青山昇三郎、北原義道、服部章蔵、長崎のスタウトの塾からは瀬川浅、留川一路がきた。総計二
十五名にのぼり、わが国最初の神学校が開設されることとなった。

築地大学校の起源

ついで横浜におけるヘボン塾は明治八年からジョン・バラが主任となっていたから「ヘボ
ン夫人の学校」は世間ではバラ学校ともいわれていたが、この学校も一致教会成立後、や
はり東京に移され、正規のカレッジ・コースをととのえ、一致神学校と併行して設置し、神学予科的な役割をも
兼ねることにした。それで協力ミッションの賛同を得て、明治十三年バラ学校を東京築地明石町七番に移し、神
学校と相接し築地大学校として新しく設立することになった。校長はジョン・バラであった。

田村直臣の「信仰五十年」によると、カラゾルスが「明治六年の春、築地入舟町に築地大学と命名した英語学校を創立した」とある。ここにいう学校は同名異質の学校である。田村直臣はこう書いている。「当時官設の大学には南校、東校、工部大学校あり、私塾には、中村敬宇の同人社あり、福沢の慶応義塾あり、近藤氏の攻玉社あり、しかし外人のみが経営していた学校は唯築地大学ばかりであった。教師はカラゾルス、ワデル、O・H・グリーン、デビソンであったが、外形ははなはだ貧弱で世人は豚小屋大学と云った」と。田村直臣、都築馨六、鈴木舍定、赤壁二郎、松本源太郎、長田時行、増田増蔵、原胤昭などがこの大学に学んだ。カラゾルスは「イエス」を「ヤソ」と訳し、そうでないものは自分の教会から追い出すといった態度であった。北米長老ミッシェンの宣教師として来日したがヘボン博士と協力せず、明治九年、宣教師の職を辞し、文部省の雇教師となって広島中学校の英語教師となり、カラゾルスの築地大学はわずか三年で廃校となった。

明治十三年、築地明石町七番に建設された築地大学校 (Tsukiji College) は前者のとは、全然別のもので、その成立も横浜のヘボン塾からの移動、発展したものである。しかしカラゾルスも北米長老ミッシェンから派遣された宣教師であり、築地での伝道、教会設立、築地大学なる英語学校も、すべて北米長老ミッシェンの援助と背景によってなされたものであることを忘れてはならぬ。カラゾルス独自の築地大学は短命であったが、ヘボン塾から発展したジョン・バラの築地大学校は四年おかれて明治十三年に建設され、その生命は発展して一致英和学校となり明治学院となり、今日の明治学院大学として栄えている。「堅くして動かず、いつも全力を注いで主のわざに励む」ものはその労苦が空しくなく、「そのなすところは皆栄える」。失敗にみえたカラゾルスの神学校

は一致神学校に合流し、短命であった築地大学は四年後、ふたたび長老ミッシェンによって築地明石町七番に築地大学校として再現されるにいたった。

一八八〇年（明治十三年）八月十七日、東京からジョン・バラが、北米長老ミッシェン本部あての書簡に築地大学校開校当時の模様を報告している。

『四月二十六日、生徒二十名をもって、ここで学校を始めた。生徒の大部分は横浜からきたものであった。入志願の生徒数は増加し、六月初旬に五十五名になったので入学を打ち切った。九月一日には、もっと多くの生徒をいれて開校する予定である。七十名以上を収容し得る寄宿舎の設備もある。生徒の三分の二は寄宿生である。教授はインブリー、O・H・グリーン、アレキサンダー、ノックスの諸師で、一週間十時間、インブリー夫人と日本人の助手一人も加わった。次の学年には多少の変更がある見込み。インブリー、アレキサンダー、マコーレーの諸師、マコーレー夫人、バラ夫人および日本人助手も教授陣に加わる予定。わたしは専任教授として働きたいと思っている。一、二の教師は時間講師でもあるが、教授陣はすばらしいので、今までに見なかつたほどの成果をあげている。「築地大学」と名づけた。関係の日本人の間でも、これに賛成した。築地大学は高遠な理想をめざして、あやまらないと考えている。東京大学よりわずか一年おくれで発足したにすぎぬ。われわれのところでは五年間もいたクラスがあるから、これはもう一年で卒業するわけである。英文の規則書ができ次第、いづれ近日中に、写真同封でお送りする。J・C・バラ』

明治十三年から十四年にかけて学生数は増加し百数十名になった。築地大学校はキリスト教の専門教育機関と

しての発展が約束されているものとみえた。一方は東京大学が自然科学むしろ無神論的な科学万能の傾向をもっていたのに対し、一致神学校、築地大学校は有神論的立場にたつてキリスト教教育の樹立を志した。

築地大学校と一致神学校について、ヘボン博士は一八八二年（明治十五年）四月六日付、米国の長老ミッシェン本部の総主事ラウリー博士宛の書簡に、次のように報告している。

「第一に東京の学校はわたくしどもの経営している最も必要な教育機関の一つであり、最高程度の実力あるものに引き上げてそれを維持していかなければなりません。主として、そこからわたくしどもの教会の福音の説教者、牧師教師が育成されなければなりません。それは教会の養成所ともいべきものであり、できるかぎりこれを維持し、教師として最上の人物をここに送らなければなりません。アレキサンダー氏は去りました。できるだけ早く氏の後任者を派遣して下さい。日本語を一語も知らなくとも、すぐ働くことができます。充分教育を受けた人で、強健で、よく気がつき、辛抱強く、その上教えることの好きな、謙遜なクリスチャンであること。バラ氏自身は頼めば何でもやってくれる人です。氏ほど学校の経営をやる人はありません。しっかりした辛抱強い親切な人で、学校についても、最も関心をもっています。バラ氏は生徒の父となり、友となつて、実によく彼らを統御します。もしあなたが日本の青少年のことがおわかりならば、バラ氏のやっていることは相当なものだといふこともおわかりになります。もののわからぬ人々は、日本の青少年のことを天使のようだといいながらも、むしろ無智で、なまいきで、我儘で、言うことをきかない連中なのです。ですから、バラ氏の働きは堪えがたく、うんざりするものです。バラ氏は生れつき立派な体格で、大きく頑健です。しかし、ここしばらく氏

は心臓を患っているので、わたくしどもは大変心配しています。

第二に、わたしどもはもつと福音の説教者が欲しいのです。この伝道地区に少くとも二人欲しいのです。この地区というのは東京と横浜の伝道地を指しております。わたし自身を除いて、説教する人は現在わずか二人、タムソンとノックス氏です。この仕事に練達した人々がもつと必要です。

インブリー氏はまだ教会で説教をしてはいませんが、神学校では教師としてなかなか重要な働をしています。神学校では教師としての資格が備わっており、学者で、正確で組織的で、その仕事にも心がこもっております。彼は神学校から手離せません。さらに彼の著作によって、他の学生たちのために、このむずかしい国語をごくやさしく習得できるようにやっています。彼はほとんど毎日、英語と日本語とで講義をしています。温厚な人物でわたしは、ほんとうに彼が好きです。神学校のこととはどんなにほめても、ほめ過ぎるということはありません。実にすばらしい学校です。三つの一致ミッションから派遣された教授陣を備えています。そして日本の教職者の養成と補充にはどうしても必要なものです。ですから、深い関心を寄せつつ資金も潤沢につき込んで支持していかねければなりません。」

へボン博士が、築地大学校と一致神学校に対し深い期待をよせ、ジョン・バラとインブリー博士についての推奨の言葉もうなずかれる。二人がいかにこれらの教育機関に必要な人物であったか、明治学院における二人の役割も後述するが、やはりへボン博士に人を見る明のあったことがわかる。築地大学校と一致神学校はこれら二人の長老派の宣教師によって経営と発展が約束せられたわけである。しかし遠大な教育理想は長老派だけでできる

ことでなく、リフォームド派やスコットランド一致長老派の有力な宣教師などとの協力によってなしうることであったのは、もちろんのことである。

その当時の築地風景

一致神学校や、築地大学校が設立せられたころの築地の居留地については内田魯庵の回顧談によって、その片鱗をうかがうことができる。もちろんかれの讚美した居留地風景は、かなり居留地が発展してからのことではあるが。

「築地の居留地は横浜の山手と比べては比較にならぬ程狭かったが、其頃外人は特別の事情あるものの外は市中に住むことを許されなかつたから、自然市内に外人の姿は見る事少く、築地の居留地に入ると別世界であつた。戸川君等が在籍した明治学院の前身の一致学校のあたりはドチラを見ても外国人の住宅ばかりで、ドコからとなくピアノの音や讚美歌のコーラスを聞く時は一種のエキゾチックの気分陶醉する。ここへ来ると外国人と握手の一つもして日本語よりは英語をしゃべりたくなり、基督教を奉じて讚美歌の一つも歌ひたくなる。(中略) 洋装の日本人は滅多に見掛けなかつたと言つても其頃は欧化熱の頂天に登り詰めた鹿鳴館時代であつたから、居留地の外国人と交際した日本婦人の中には時折洋装するものもあつた。当時名流婦人の五指に屈せられたK夫人の如きはイツでも洋装で居留地へ遊びに来られたが、背は高くはなかつたが洋装のよく釣合つたスラリとしたイイ恰好で、齢も然う若くはなかつたし、姿貌も左して勝れてはゐなかつたが、洋装がピッタリ身体にはまつて動作も応対も日本人離れがしてゐた。其頃の女学校の数は乏しかつたが、狭い築地の居留地内

に今の女子学院の前身の四十二番と青山女学院の十三番と立教女学校の前身の三十八番と三女学校が鼎足してゐた。其頃の女学生は校服も無く袴も穿かず、髪容はハッキリ覚えてゐないが、マダ束髪も少く稍や年長者は銀杏返しに結つてゐたやうだ。無論赤い切れや、花簪などを挿してゐるものはなく、脂粉の気は丸きり無かつた。其頃は世間一統が今とは比べられないほどジミであつて、今なら五十に近い女でもハデ好みなら尻込みしさうな黒っぽい細かいガラを十八、九の娘盛りが平気で着たもんだ。況してや教会学校の学生だから油気なしの引詰め白襟の鼠っぽい微塵や万筋で、尼僧のような服装をしてゐた。且つ宗教的に教育された余弊を受けて中には心持までがクスミ返つて全く若い女らしさを失つてゐるものもあつたが西洋人の言語動作をお手本にしてゐたから服装こそクスンであつても西洋人らしい快活さを持つてゐて、万事の取廻しが活き活きしてドコとなく新しい感じを与えた。また西洋人の生活に親しんでゐたから万事の趣味が西洋好みでミッション・スクールの生徒は耶蘇臭いと云つて嫌う向きもあつたが、何と云つても其頃の女としてはミッション出が一番ハイカラであつたし、一番高い教養をもつてゐた。

築地の居留地は横浜の山の手と違つて勤行の鐘の音の澄渡るミッション町だから、パン屋や乳屋の配達も讚美歌を口誦む淨地であつた……」

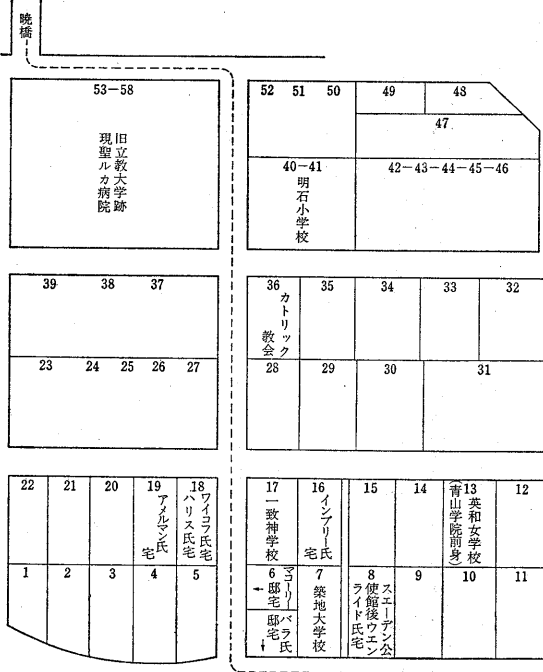
このように築地はきわめて西洋的な生活とふん困氣につつまれた環境で、おちついた清々した一帯の氣風につつまれてゐた。東京一致神学校に隣りあわせの築地大学校、同じく隣接した六番館はカラゾルスが活躍したところであつたが、そこが女子学院の発祥地、ミス・ヤングメンの住んでゐたところであつたので、付図で見ると

に宣教師住宅が、その周辺に集って
いた。

従ってこれら二つの学校に学ぶも
のも何となく、外国の学校で学んで
いるような気分と、また一般の学校
より少々優越感ももっていたよう
である。

全国から比較的好い家庭の子
弟が、築地大学校をえらんで学ぶよ
うになったのも無理ならぬところ
であった。ここに築地大学校の呼
び名を考えてみたい。カラゾルス
は自分の学校を「築地大学」と
呼んだ。

ジョン・バラのこの学校はバラ自身のローマ字が示すように「築地大学」で築地大学校ではなかった。しかし、
学校の看板には築地大学校と書いてあった。



岸 海

付 図

築地大学校 創立当時の教授陣は、正式には次の通りであった。

校長 ジョン・バラ氏 学監 トマス・アレキサンダー氏 教授 ウイリアム・インブリー氏

教授 ジェームス・マコーレー氏 教授 田村直臣氏 漢学教師 山田貢氏

翻訳教師 村田峯二郎氏

特別講師 ヘンリー・フォールズ氏

創立早々、森本介石（のちの松村介石）が幹事に就任した。明治十五年六月二十九日、築地大学校では、第一回の卒業式を挙行した。当日の様子が明治十五年七月一日発行の「東京自由新聞」に次のように報道された。

「築地大学校卒業式 二人の卒業生 英語で答辞

まず卒業生石本三十郎、服部綾雄の両氏が式場に入るの際、唱歌奏楽あり、次に米国書記官タムソン氏祈禱あり、夫れよりドクトル・ヘボン氏は免状を授与せられたる上に人生小成に安ず可からざるの主意を以て演説せられ、諸生徒も亦英語を以て之に答へ、此の間内外の紳士貴女は花球を投じて慶賀の意を祝し、唱歌奏楽暫くもやまざりし。当日列席の紳士貴女は三百有数にて、米国公使ビンナム氏も御出席の筈なりしが出席せず」と。

盛大な卒業式であつたらしいが、卒業生はわずかに二人、服部と石本とであつた。いずれもヘボン塾生であつた。服部綾雄は文久二年十二月沼津に生まれ、明治六年に年十才で横浜に出てヘボン夫人の学校に学び、博士夫妻に愛せられ、ルーミス師から受洗して横浜第一長老公会（指路教会の前身）の会員となり、明治八年ジョン・

バラがヘボン塾の経営にあたったときも変らず英学に専念し、明治十三年東京築地に出て築地大学校に学び、十五年卒業。石本三十郎は同じく文久二年長崎県大村に生まれ、熊野与その子、雄七につれられて明治八年横浜に来て、ジョン・バラについて英学を修め、終始一貫、英語をもって身をたてた。英語の演説をすぐ日本語に、日本語の演説をすぐ立派な英語で聴衆に訴える、卓越した英語の天才であった。ヘボン博士のたてた住吉町教会に属し、のち明治十三年築地大学校に学び、服部、石本の二人が築地大学校第一回卒業式で第一回卒業生の榮譽をうけた。服部綾雄は政治家として、石本三十郎は終始変らず英語の教師として短命ではあったが光輝ある教育者として、学院史にその名をのこしている。

築地大学校卒業とともに、服部は森本のあとを引きついで築地大学校の幹事となり、石本は同大学校の教師となった。明治十五年九月の築地大学校一覧によれば左の通りの教授陣となった。

校長 ジョン・バラ 学監 ジェームス・マコーレー 幹事 服部綾雄 英学教師 ジョン・シー・バラ

英学教師 ジョージ・ダブリュ・ノックス 英学教師 ジェームス・マコウレイ

英学教師 ヘンリー・フォールズ 英学教師 オーリー・エヌ・ベントン

英学教師 ジェネー・マコーレー 英学教師 石本三十郎 漢学教師 山内貞

築地大学校については卒業生の馬場銈作、青山彦太郎両氏の思い出が「明治学院五十年史」に記されている。

そこにはきわめてエキゾチックなふん囲気の中で外人教師が多く、ほとんど英語で授業をうけるといった情景、また生徒も多くなるとはいえ、年長者と年少者とが雑然と同クラスで入りまじり、新しい時代の精神を胸にふく

らませて学んでいた光景が、まのあたり見るように描かれている。

先志学校

築地大学校が発足してから一年をへた明治十四年九月二十五日、ダッチ・リフオームド・ミツシヨンは、すでに日本にきて福井英学校から新潟英学校に奉職し、さらに東京で開成学校に教えたことのあるマーチン・N・ワイコフ博士を横浜に派遣した。ワイコフ夫妻は横浜山手四八番に住まい、そこで十月三日から生徒十三人をもって英語学校をはじめ、先志学校となづけた。順次生徒数は増加した。十一月八日のワイコフ博士の手紙には「朝のクラスは二十八名、夕のバイブル・クラスは十名となり、寄宿生は十五名で、バイブル・クラスにも出席し、日曜日には海岸教会の礼拝に出席している」と報じている。また翌年には五十四名の志願者があり三十二名が入学した。聖書講義をはじめた。在学生の中に五名のキリスト信者がいた。また、漢文の教師熊野与と英訳の教師星野光多を任用した。生徒のうちに求道者や受洗者がつぎつぎと生まれてくるので、将来、有望と思われたが、京浜地区の協力ミッションの決議で東京築地に移動して、明治十六年九月、築地大学校と合併し、校名を新しく一致英和学校 (Union College) と改めた。そしてジョン・バラも、ワイコフも校長とならず、幹事制によって運営することとなった。

東京一致英和学校

一致神学校は築地明石町七番の会堂ではじめ、のち明石町十七番に移り、一致英和学校は築地大学校の明石町七番ではじめた。築地大学校から一致英和学校に変わります

学校は盛んになり、生徒数も急激に増加した。ワイコフ博士の書簡によれば「校舎は二棟を建築する予定で、長老派のものは築地大学校以来の建物でウェストミンスター・アカデミー（四年制）となづけ、リフォームド派はミセス・サンダムからの寄付金によって新しく建てられることとなり、サンダム・アカデミー（二年制予備科）となづける企画であつた。」と。学校は大学と予備科とにわかれ、前者は四年制後者は二年制で、大学はすべて英語を用いた。十月における生徒数は一一五名、うち五〇名が新入生であつた。

東京一致英和学校規則（抄）

○教員及職員

教 授

数学 ジョン・シー・バラ 米国（当時帰国中） 心理学史学 マスターオブアーツ・ジエームズ・マコウレイ 米国

物理学化学 マスターオブアーツ・エム・エヌ・ワイコフ 米国 英語学道徳学 欠員（本期米国ヨリ来ル）

助 教

英語学 オルリー・ベントン 米国 訳読 石本三十郎 長崎 漢学 小林信近 千葉 和学

幹事 服部綾雄 静岡

○編制及ビ教旨

第一条 本校ハ在日本米國プレスビテリアン及リホームド教会伝道会社ノ管轄ニ属シ周全ナル英學ノ諸學科ヲ教授シ之ニ加ルニ和漢學ヲ以テスル所トス

第二条 本校ハ生徒卒業ノ後更ニ高等ノ文學又ハ學術ヲ講究シ且國民タルノ義務ヲ尽スニ適応セル諸學科ヲ教授シ實際事ニ臨デ能ク之ヲ処スルノ才能ヲ養成スルヲ旨トス但唯生徒ノ知育ノミニ注意セズ大ニ德育ニ力ヲ尽シ知徳兼備ノ學士ヲ養成

セン事ヲ期ス而テ其修身道徳ノ基礎トスル所ハ固ヨリ基督教ノ真理ニ由ル者トス

○学科課程

第一条 本校ノ学科課程ヲ四ケ年トシ之ヲ前後ノ二科トス。前科ノ生徒ヲ第一年生及ビ第二年生トシ後科ノ生徒ヲ第三年生及ビ第四年生トス

第二条 英学科ハ生徒ヲシテ英文ヲ作り之ヲ訳スルノミナラズ自在ニ之ヲ語ルコトヲ得セシメンガ為メ教場ニ於テハ必ズ英語ヲ用キルモノトス

第三条 英学科ノ教授ハ可成的口授実験ヲ以テシ参考ノタメ傍ラ適當ノ教科書ヲ用ユ

第四条 學課中英語ヲ以テ諸学科ヲ修ムルノ方法完備セリト雖モ猶生徒ヲシテソノ學ヲ大成ナサシメンガタメ漢学科ヲ設クル者ナレバ生徒ハ怠ラズ勉勵スルヲ要ス

第五条 和学科ヲ設クル所以ノ者ハ生徒ヲシテ古今ノ和文ヲ了解シ且真正ノ日本文ヲ作ルコトヲ得セシメンガタメナリ、本科ニ於テハ和文文法和学史、和學書講語作文等ヲ教授スルモノトス

○別科

第一条 別科ハ左ノ課目中一課目又ハ數課目ヲ選ビテ專修セント欲スル者ノタメニ設ク 即チ別科課程左ノ如シ

音樂 簿記法 經濟學 万国公法

第二条 別科生ハ教員先ヅ学力実ニ所選ノ課目ヲ學修スルニ堪フルヤ否ヲ査定シタル上許否スルコトトス

第三条 簿記法ハ生徒十名以上經濟學万国公法ハ同六名以上ニアラザレバ教授セズ

第四条 別科專修ノ期限ハ各一ケ年トス

○入学及退學

第一条 入学ヲ望ム者ハ每期ノ始メニ施行スル入学試験ニ合格スルニ非レバ許サズ

第二条 入学試験後入学ヲ望ム者ハ教員ノ意見ニヨリ之ヲ許否スルコトアルベシ

第三条 本校第一年級ニ入ル者ハ齡十四年以上ニシテ予備校卒業ノ者若クハ卒業者ニ等シキ学力アル者タルベシ

第四条 第二年以上ノ級ニ入ルヲ望ム者ハ其入ラントスル級ニアル生徒ノ既ニ履踐セル諸課目ノ試業ニ合格スルヲ要ス

第五条 入学ヲ望ム者ハ第一号書式ノ入学願書ヲ差出スベシ。但シ予備校ヨリ進入スルモノハ入学願書ヲ要セズ

第六条 入学志願者ニシテ他ノ校ヨリ来ルモノハ其校ヨリ退学証書ヲ持參スルヲ要ス

第七条 入学ノ許可ヲ得タル者ハ第二号書式ニ準ジ保証人連署ノ上在学証書ヲ差出スベシ

第八条 保証人ハ二十年以上ノ男子ニシテ東京府内ニ住シ一家計ヲ立ル者ニ限ルベシ。保証人若シ宿所転移或ハ印章ヲ改ル

等ノ事アル時ハ速ニ届出ズベシ

第九条 外来生疾病或ハ止ヲ得ザル事故アリ欠課スルトキハ成ルベク速ニ保証人ヨリ其事由ヲ詳記シタル届書ヲ差出スベシ

尤モ疾病ナレバ医証ヲ添ヘ其旨届出ベシ、万一無斷欠課スルコト四週間以上ニ及ブトキハ其事故ノ如何ニ拘ラズ退学ノ者

ト見做スベシ。但シ塾生ニシテ臨時下宿通学スルモノモ亦本条ニ準ズルモノトス

第十条 生徒疾病ニ罹リ或ハ其他止ヲ得ザル事故ニ由リ退学セント欲スルモノハ必ズ其事由ヲ詳記シ保証人連署ヲ以テ願出

ベシ但シ疾病ナレバ医証ヲ添テ願出ベシ

第十一条 一旦退学セシモノ再ビ入学ヲ望ムトキハ新募生ト同一ノ手續ヲナスベシ

第十二条 生徒若シ怠惰不行状又ハ校則ヲ犯ス等許スベカラザルモノト認ムルトキハ直チニ退校ヲ命ズ

英和予備校

敷地や校舎の關係で明治十七年八月には予備科を神田淡路町二丁目四番地に移し、英和予備校として開設した。服部綾雄がその校長となった。東京都「都市紀要集」「東京の大学」の明治学院の項に「英和予備校の設置願」が記されてあるので、転載してみる。

私立学校設置願

一、設置之目的

本校ハ将来英語ヲ以テ高等普通及ヒ専門ノ学科ヲ修メント欲スル者ノ為メ予備之学科ヲ授クル所ニシテ専ラ英語学地理学生理学修身数学等ヲ教授シ兼テ和漢文学ヲ教授ス本校ハ唯生徒ノ智育ノミナラス大ニ德育ニ注意シ智徳兼備ノ学生ヲ養成セシムルヲ期ス

一、名称

本校ヲ名ヅケテ英和予備校ト称ス

一、位置

本校ハ当分ノ内神田区淡路町二丁目四番地ニ設ク

一、教授法ノ要旨

英語学 読法英語解釈英文法及作文會話書取及ヒ習字 数学 算術代數幾何 史学 地理学 生理学
修身学 「教員聖書ニ依リ」……とあるのを「教員用書ニ依リ」と改められてゐる 和漢文学

一、試験規則

毎年二月、七月ノ両度ニ定期ノ試業ヲ行ヒ生徒ノ進否ト優劣ヲ定ム可シ 以下略

以下數項目略

一、入学生徒学力

本校ニ入学ヲ許ス者ハ小学科卒業之者若シクハ該科卒業者ト等シキ学力アル者トス

一、入学生徒ノ年令

本校ニ入学ヲ許ス者ハ滿十四年以上トス

一、生徒ノ定員

生徒ノ定員ヲ二百名トス

一、教員々数

外国人 四名 日本人 二名 計六名

一、学校長ハ設立者ガ兼ネル

東京築地居留地十八番館住

米国ラツヂヨル大学マストルオファーツ

マーチン・エヌ・ワイコウフ

Martin N. Wyckoff 三十四年

明治五年ヨリ同十年迄文部省御雇ニテ福井新潟東京三英学教員奉職同十一年ヨリ米国ラツヂヨル大学予備校教頭同十六年九月ヨリ東京築地七番東京一致英和学校物理学及ヒ化学教授当時在職中

東京築地居留地六番館住

米国ウエストミニストル大学マストルアーツ

ジェムス・エム・マツコーレー

James M. McCauley

西暦千八百七十一年(明治四年)米国ゼームスタウン学校教頭奉職同千八百七十四年在サイアム国バンコック府米国プレスビテリアン伝道会附属大学校長ニ転ジ同千八百七十八年東京一致英和学校歴史及ヒ心理学教授ニ転ズ当時在職中

東京築地居留地六番館住

米国ニューゼルセイ州テナワリリ

ジョン・シ・バラ

John C. Ballagh 四十三年

西暦千八百六十六年ヨリ七十一年迄米国テナフリ学校教頭同七十二(明治五年)ヨリ七十五年迄横浜高島学校教員明治八

年在横浜米国プレスビテリアン伝道会社附属学校教頭同十三年九月東京ニ転ジ一致英和学校数学教授當時在職中

東京築地居留地六番館住

米国ニューヨーク州ビンハムトン

オルリー・エヌ・ベントン 二十二年

西曆千八百八十年ビンハムトン学校卒業同年ウイリアム大学一ヶ年ノ課程ヲ卒リ病氣保養ノ為メ日本ニ来リ同八十二年九月

東京一致英和学校助教タリ

長崎県肥前国東彼杵郡大村

東京築地居留地七番東京一致英和学校寄留

平民 石本 三十郎 二十二年

明治七年大村小学校卒業同十五年東京一致英和学校卒業同十五年九月ヨリ同校助教在職中。

右之外和漢文学教員一名雇入可申候得共未定故追而開申可申候

一、学校設立者履歴

原籍 静岡県駿河国、駿東郡沼津

寄留 東京神田区淡路町二丁目四番地

士族 服部 綾雄 二十一年

明治五年神奈川県立学校ニ入り同七年右廃止相成リ候ニ付キ同年在横浜米国プレスビテリアン伝道会付属学校ニ入り同十三年東京一致英和学校ニ転シ同十五年六月卒業同年九月ヨリ同校幹事在職担任及營業賞罰等無御座候

一、敷地

借家 表間口 六間 裏間口 七間二尺 奥行 十五間

坪数 九十三坪八合六勺八才 地坪建坪共

持主 本所区林町二丁目 清水茂助

一、授業料 一ヶ月金一円

英和予備校は十七年九月十七日開校し、授業を開始したことを知事あて報告している。十八年九月十八日には英和予備校校長服部綾雄から、校舎を麴町区富士見町一の二十一へ移したい旨の願い出があった。麴町区三番町六十九、坪内定益所有の借家で、建坪七十七坪七合五勺、地坪九十七坪七合七勺と報告されているが、転居の理由はわからない。同日付で米国人ハワード・ハリス、同ミス・バラ、同ミセス・マコーレー、福岡県土族杉森此馬、同じく村岡素一郎の雇入れ願い出があった。

履 歴 書

築地居留地十八番ワイコフ氏方住

米国ロットガル大学校マストル・オフ・アルツ

ハワルト・ハリス 三十六年

英文学教員 月給未定

西暦一千八百七十二年米国ロットガル大学校卒業当時東京一致英和学英文学教授タリ

築地居留地六番

米国人マッコウレイ妻

ジェニ・シー・マッコウレイ 三十四年

英文学教員 月給未定

西暦一千八百七十三年米国ベンセルベニア州女子師範学校卒業後三年間ウィルミントン学校ノ教員ヲ務メ一千八百六十七

年サイアム国バンコック府女学校ノ教員トナリ四年間其職ニアツテ明治十五年日本ニ来リ東京一致英和学校ノ助教タリ當時在職中

築地居留地六番

米国人ジョン・バラ妹

エー・ビー・バラ

英語学教員

月給未定

西曆一千八百七十一年米國ニューヨーク州女子師範学校卒業後十年間ニューヨーク州及ニウゼルシーニ於テ普通学校ノ教員タリ昨明治十七年日本ニ来ル

府下京橋区明石町七番

東京一致英和学校内

福岡県士族 杉森 此馬

二十八年

英文解釈教員

月給金貳拾円

明治五年熊本英学校ニ於テジェーンズ氏ニ就而英学ヲ修メ同年柳川師範学校ニ入り同十一年卒業同十三年東京一致英和学校ニ入り英語ヲ以テ高等普通ノ学科ヲ修メ同十七年七月卒業

府下浅草区向柳町二丁目十番地

福岡県士族 村岡 素一郎

和漢文学教員

月給金貳十円

明治十一年二月東京師範学校卒業同年四月函館師範学校在勤拜命同十三年五月函館県立付属拜命学務課出仕申付ラル同十七年六月依願職務免ル

明治学院沿革略によれば、この予備学校では「又体育を重んじて兵式教練を教授し、又早くベースボールをはじめたり、当時学生等はその要領を平岩愼保よりきき、インブリー氏、ナックス氏等より指南をうけたるものにして、之れ我国における最初のチームなりしならん」と記している。わが国で野球をはじめたのは本学院の前身一致英和予備校であったことは、特筆にあたいする。

また明治十七年（一八八四年）十二月のヘボン書簡によると、神戸で医療伝道をやっていたアメリカン・ボードの宣教師ドクトル・ペリーからの交渉があり、組合教会と一致教会との合同で、医科大学（Medical College）当時の用語でいうならば「医学専門学校」を設立してはどうかとの提案があった。むろん英文では Union Medical College の設立案であったから、一致教会関係の宣教師たちと相談したにちがいない。のみならず明治十六年には大阪で各派合同の合同宣教師会議が開かれ、東京ではキリスト信徒大親睦会がもよおされ、一致協力して伝道しようとする気運が動いた時代であったばかりでなく、一致、組合の両教会の合同問題が論ぜられていたから、そうした合同的な医科大設立案がもちあがったことも当然であった。しかし設立の場所をどこにするか、京都か東京かという問題で行きなやみとなり、ついに成立をみずにおわった。

こうした間に築地における東京一致神学校、東京一致英和学校、一致英和予備校の三校いずれも生徒数が増加してきたので、もっと広大な土地を選んで築地から移転し、これら三校を総合した基督教大学の設立計画を立てる気運が生じた。米国ニュージャージー州ニュー・ブランズウィック神学校図書館に保蔵されてある、リフオームド教会の日本ミッション記録に A Scheme for the Establishment of a Christian College in Japan と題し

た一文がのこっている。

それから北米長老ミッジョン側でもキリスト教大学を協力ミッジョンの手で設立したいと考えていた。ことに築地の東京一致神学校、東京一致英和学校、神田の英和予備校に関係していたインブリーやノックスはじめ、ヘボン塾以来、日本人の教育に専念していたジョン・バラのような長老派の宣教師たちも、リフォームド・ミッジョンと協同して、新しいカレッジを市街中心地をすこし離れた地域に建設したいと欲していた。そして米国のプリンストン大学にも比すべき大学の創立を希望していた。ついに前記ミッジョン、すなわち北米長老派、リフォームド派、スコットランド一致長老派の在日宣教師団から代員をえらび、日本人を加えて一つの理事員会を組織し、それによって前記三校を総合し、一つの大学として組織運営すべきであると相談がまとまった。最初の理事員の氏名は次の通りである。

北米長老教会側からジョージ・ウイリアム・ノックス、ジョン・シ・バラ、セオドル・エム・マクネアの三名、リフォームド教会側からはマルチン・エヌ・ワイコフ、ジェームス・エル・アメルマン、ギドー・エフ・フルベツキの三名、スコットランド一致長老教会側からはヒュー・ワデル一人であった。そして日本人の理事員は大儀見元一郎、井深梶之助、石本三十郎、熊野雄七、中島信行、服部綾雄、植村正久であった。理事員の任期については「理事員中外国人ハ日本基督一致教会ニ関係アル外国ミッジョンノ總會ニ於テ選舉シソノ任期ヲ二ケ年卜定メ本邦人ハ其ノ任期ヲ定メズ若シ本邦人ノ中欠員ヲ生ズルトキハ一致教会ノ大会ニ於テ其ノ補員ヲ指名シ本学院設置者ハ之ヲ選定ス」となっている。外人理事員は北米長老派三名、リフォームド一名、スコットランド一致長

老派一名となっており、邦人理事員は一致教会に所属するキリスト信徒たることはもちろんであるが、その数は外人と同数である。

明治学院創立案

明治十九年四月二十九日、築地十七番、一致神学校において最初の理事会が開かれ、明治学院創立案が制定された。本文は次ページ写真の通りである。

この明治学院組織計画にもとづき三校は合併され、東京一致神学校は明治学院邦語神学部、一致英和学校は明治学院普通学部本科、神田英和予備校は明治学院普通学部予科と改称されることとなった。

ただし「明治学院」の名はその後の理事会で決定されたものである。「明治学院第一回理事会は明治十九年（一八八六）五月二十四日、築地一致神学校図書室にて開かれ議長ジー・ダブリュー・ノックス氏、書記はエム・エヌ・ワイコフ氏にして、日本人の理事は井深梶之助、服部綾雄、石本三十郎、大儀見元一郎、植村正久、中島信行、熊野雄七の諸氏なり、本院の命名、校舎新築、新地選定などに就いて、各委員を挙ぐ」（明治学院沿革略九頁）「第二回理事会を築地一致神学校に開き、命名委員の報告に依る一致学院、共同学院、明治共立学院などを参考として明治学院と云う名を選ぶことに議決す」（同上）

なお大正時代の記録は「理事会」となっているが、明治二十年代は「理事員会」と称していたようである。また明治学院なる名称も植村正久の提案によるものと「植村正久とその時代」第三編四七四ページにある。「明治の政治の学問の学校」と理事会にて語ったらしいが、明治の時代における学問の殿堂の意で「明治学院」はまさ

英文による明治学院 創立案

PLAN OF ORGANIZATION OF THE MEIJI GAKU IN.

The Missions of the American Presbyterian and Reformed Churches, after consultation with the Mission of the United Presbyterian Church of Scotland, submitted to the Council of the United Missions the following paper, which was adopted April 23, 1886.

It appears to be generally agreed that the present College and Theological School should be united under a single governing body, and also that the removal of the College to some part of the city without the Foreign Concession is necessary to its highest success. For the accomplishment of these measures the following suggestions are offered:

I.—The present College and Theological School shall hereafter form one institution, to be known as the *Meiji Gaku In*. It shall be the aim of the institution to furnish a thorough Christian education, and especially to train young men for the ministry of the church. The institution shall be under the control of a Board of Directors (provided for in Section VI), representing the Dai-kuai of the Meiji Kirisuto Kyokwai, and the Missions of the Reformed and Presbyterian Churches.

II.—The institution shall be divided into three departments, to be known respectively as the Japanese Theological Department, the Academic Department, and the Special Department.

III.—It shall be the aim of the Japanese Theological Department to provide a thorough theological training in the Japanese language, and especially to prepare students for examination before Chikwai. The course of study shall cover three years. The Professors shall be appointed by the Board of Directors, and, subject to the Board, shall have entire control of the department.

IV.—The Academic Department shall provide a thorough training in the English language, and prepare students for the Special Department or the Senior year of the Koto Chū Gakko as well as for commercial life. The course of study shall cover six years. The Professors shall be appointed by the Board of Directors, and, subject to the Board, shall have entire control of the department.

(2)

V.—The Special Department shall provide a general course, and in connection therewith, elective courses in theology and other special studies.

1. All regular students shall be required to attend the general course, which shall include History, Psychology, Logic, Ethics, History of Philosophy, English Literature and Essays, and Apologetics, or such other studies as the Faculty shall deem of greater importance.
2. The course in theological studies shall include Theology, Old and New Testament History, Introduction and Exegesis, Church History and Polity, Pastoral Theology and Homiletics. On vote of the Faculty certain of these studies may be pursued in the Japanese language with the students of the Japanese Theological Department.
3. The other special courses shall include Political Economy, Higher Mathematics, Astronomy, Physics, Latin, Greek, Hebrew and the Art of Teaching. When, in the judgment of the Faculty, the number qualifications or requirements of applicants shall justify such a course, instruction in any of the above studies may be suspended or other studies may be substituted.
4. Students shall be admitted to the Special Department on graduation from the Academic Department, on examination, or on presenting a satisfactory certificate. The course of study shall cover three years. Certificates of graduation shall be given to students of the general course, together with the theological or such other special courses as shall be declared by the Faculty to be sufficient.
5. The Professors of the Academic Department, together with those of the Japanese Theological Department, shall be the Faculty of the Special Department; and, subject to the Board of Directors, shall have entire control of the department.

VI.—THE BOARD OF DIRECTORS.

1. The general care and supervision of the institution shall be in the hands of a Board of Directors composed of seven members of the cooperating Missions, and the Board of Trustees (provided for in Section VII). The foreign members of the Board shall be chosen in any manner that may seem best to the Council of the United Missions.
2. Besides the regular members of the Board there shall be corresponding members, entitled to speak and introduce motions, but not entitled to vote. All male members of the cooperating Missions and all members of the Faculty (not already regular members of the Board) shall be corresponding members.
3. In addition to the powers and duties connected with the general care and supervision of the institution, the Board of Directors shall be entrusted with the following:

に明治文化の中に輝くキリスト教教育の代表的学園といふべきものであった。

幕末、神奈川に上陸したヘボン、ブラウン、長崎に行ったフルベッキや、その後に来た宣教師たちの労苦が結実して、前に述べた米国の二教派、英国の一教派のカルヴィン神学を基礎とする三つの教派の在日宣教師団による一致協力で築きあげてきた、神学校と英語英文学を中心とする専門教育とが総合発展したキリスト教専門学校が都市の中心をややはなれた、静かな美しい丘の一角に建設されようとしていた。教派の一致合同は前途なお遠かったが、明治文化の中にキリスト教の精神を樹立すべき教育機関が設立せられるにいたったことは、新しい時代のきたことを示すものであった。

(3)

- (e) The appointment (or removal) of the Professors, and the designation of their several departments of instruction.
- (f) The appointment of all officers of the institution.
- (g) The determination of the salaries of all teachers and employes not members of one of the Missions.
- (h) The care of the finances.
- (i) The preparation of an annual report, including a financial statement, copies of which shall be furnished to Daikwai and to each of the cooperating Missions.
- (j) The powers and duties of the Board of Directors may be increased or limited upon a two-thirds vote of the Board with the approval of the cooperating Missions, or upon a two-thirds vote of the cooperating Missions with the approval of the Board.

VII.—THE BOARD OF TRUSTEES.

A Japanese company (limited) shall be formed in accordance with the requirements of Japanese law. This company shall be known as the Board of Trustees of the Meiji Gaku In. The Board shall be composed of the following persons: Kajinzaoku Iwaka, Ayno Hattori, Sanjuro Ishimoto, Motochiro Ogino, Masahisa Uemura, Toru Miura, and Yushichi Kumano. (In place of Toru Miura, who declined to serve, Natsuyuki Nakajima has been chosen.) Upon the death or resignation of any member of the Board, a successor shall be chosen on the nomination of the Daikwai by a majority of the remaining members.

VIII.—The cooperating Missions (with the concurrence of the Home Boards) shall furnish the Board of Trustees with funds for the following purposes:

1. To purchase, rent, or erect (as the case may be) such land and buildings in the City of Tokyo as the Missions may regard necessary for the requirement of the institution.
2. To pay salaries and current expenses in excess of the income of the institution.

IX.—In case a member of the Board of Trustees shall cease to be a member in good and regular standing in the Church or Chūkwaï to which he belongs, he shall without delay present his resignation to the Board.

X.—The purpose of the Reformed and Presbyterian Churches of America and Scotland in founding the Meiji Gaku In is the establishment of an institution of Christian learning and education in connection with the Hebi Kirisuto Kyōkwaï. It is their hope also that the day may speedily come when foreign aid shall no longer be required, and when the Hebi Kirisuto Kyōkwaï shall be able to assume the entire educational and financial responsibility of the institution.

(4)

For the furtherance of this purpose and hope, it seems right and desirable that literally-minded men among the Japanese should be encouraged to contribute of their means towards the support and advancement of the institution.

XI.—An agreement shall be drawn up between the cooperating Missions and the Board of Trustees, which shall embrace the following particulars:

1. All funds furnished through the Missions or otherwise shall be regarded by the Board of Trustees as a sacred trust, accepted by them in the interest of Christian education, and in no case to be diverted from that end.
2. The Board of Trustees, together with the committee of seven members of the cooperating Missions, shall constitute the Board of Directors described in the preceding sections.
3. Any action of the Board of Directors requiring ratification by the Board of Trustees in order to its becoming effective, shall receive such ratification without delay.
4. In case any revision of the treaties shall render such action legal, the Board of Trustees shall transfer all property of the institution to the Board of Directors or its successors.

東京一致神学校と東京一致英和学校の合同卒業式

明治十九年六月二十二日木曜日、午後二時から東京木挽町の明治会堂において、東京一致神学校と東京

一致英和学校の合同の卒業式が挙行された。当時の新聞はこの盛大な卒業式状況を次のように掲載した。

『立派な吹奏楽器の一隊——日本海軍楽隊——が演奏する音楽は旧卒業生として往時を追懐せしめるものがある。講堂に入れば上流人士満場で、帝都の名士多数をみうけられた。盛装せる外国婦人は演壇の前面に、紳士は両学校の卒業生十五名の座席の後列に着席した。壇上には両学校の教職員列席し、邦人並に外人教授その中にあり、特に横浜のJ・C・ヘボン博士の温容を其中に見るはうれしかった。アメルマン博士司会し、式はジョージ・ウィリアム・ノックス教師の聖書朗読と祈禱とを以て開かれ、司会者の歓迎の辞が之につづいた。軍楽隊の陽気な奏樂によつて導かれて、三番の演説があつた。一は英和学校卒業者の一名の英語演説、他は神学校卒業者の二名の邦語演説である。英語演説は「愛国心」と題し音調其節を失はず、中々美事に演述された。邦語の演説は「内国伝道事業の重要性と責任」とを論じたもので、流暢で喝采を博した。此に又楽隊の演奏があり。之に次いで卒業者二氏の演説あり、演説は之で終結となつた。其一は英語で「我國民の希望」と題して、一致学校の鈴木(後の松井)安三郎氏(注・のち学習院教授)之を演じ論旨および演述共に佳、他は「教会歴史を読みたる印象」と題し神学校卒業者岩永義太郎氏之を演じ、弁舌快暢、論旨堅実、アタナシウス、アムブロース、アウガスチヌスを引いてキリストを信ずる信仰と聖靈に依る信頼が道徳的勇氣を鼓舞せる次第を例証したものであつた。岩永氏の服装は品位高い日本服で、他の神学生は洋服の正装で白ネクタイ、而して英和学校の卒業者は鼠色の制服白ボタンで

あつた。又一番の盛んな音楽の演奏があつて式を引締めた。ここに神学校卒業者に対するフルベッキ博士の演説があつて、四十五分間に亘つたが聴衆緊張して最後まで静聴した。氏は日本の青年宣教師の前途に横はる多難を論じ、特に科学の反対を挙げて、此の反対に対する正しい方法と正しからざるものとを指摘した。氏の論旨は科学を無視するのではなく又之を合同しやうというのでもなく又之を恐怖するのでもなく、かかることを試みるは殆ど何等の益なきもので、双方の論者の最高著述を讀破し、科学とその挙ぐる多くの事実を例証として使用し、之に冠するに積極的なる基督者生活の実生活の宣揚を以てすべしと云ふにあつた。次に井深梶之助教師、卒業証書を神学校卒業者十一名に授与し、之に次いで簡単な演説を以て此の佳節に於ける諸氏の喜びを語り、小事を以て満足することなく、更に大事の達成に邁進すべく、職分上遭遇するであらう所の多難に屈することなかるべしと激励した。次に英和学校の教師マコレイ氏は、全科卒業者なる四名の青年に卒業証書を授与し、英語演説を以て学生生活の過去と将来を論じ、人格と勤勞と力即ち体力、智力、及び徳力の重大性を示す所があつた。

卒業生十名の英語唱歌「グッドバイ」は非常に元氣よく歌はれた。次に邦語の讚美歌が全会衆によりて歌はれ英和学校のエーチ・ハリス教師の英語での祝禱を以て、式は精確に五時を以て閉ぢられた。

この夕は両校の合同卒業式の始めての挙行であつて両校の維持者並に教職員として、多年忍耐強く勤勞せる諸氏に取り、特に満悦の次第であつたと察せられる。此の両校は横浜と東京で多年苦心の結果としての産物であつて、近頃その合同が達成された。そして近く新しい名称を冠せられることである。この名称は両校が誕生した時代を永久に伝えるもので極めて適切であると仄聞する。そしてそれが日本文化の上に両校が及ぼさんとする影響

を予言するものだらうと余輩は信ずる、その名称は即ち「明治学院」で換言すれば明けき政治の時代の学問の学校すなはち明けき政治の学校を意味する」云々、(「ジャパン・ガゼット紙」、植村正久と其の時代「第三卷より」)

第四章 白金時代

明治学院の創立

東京一致神学校と東京一致英和学校の合同式場において、前日の理事員会で決定した「明治学院」の校名が正式に発表された。

なお九月二十八日理事員会で選挙された教授職員は次の通りであった。神学部教授にはアメルマン、インブリ、ノックス、ワデル、井深の諸氏、同部講師には大儀見、ミラーの二氏、普通学部の教授にはマコーレー、バラ、ワイコフ、ハリス、マクネア、石本、服部の諸氏、同部講師教授には杉森、マコーレー夫人、バラ夫人、バラ嬢、橋本の諸氏、その他の職員には教授会議長にアメルマン博士、書記にワイコフ、神学部会計にインブリ博士、普通学部会計にハリス、幹事兼予科長に服部綾雄、塾監に杉森此馬、学生監兼塾監に内田、図書館係に石本三十郎が挙げられた。ついでノックス理事員会議長を辞任し、井深梶之助が理事員会議長にえらばれた。校名が決定し教授陣容が発表され、理事員会議長がえらばれたのでいよいよ校地の選定をいそいだ。

さきに五月二十四日築地の一致神学校で開かれた理事員会で、居留地外の地域を選定して明治学院を移転する



当時の地図

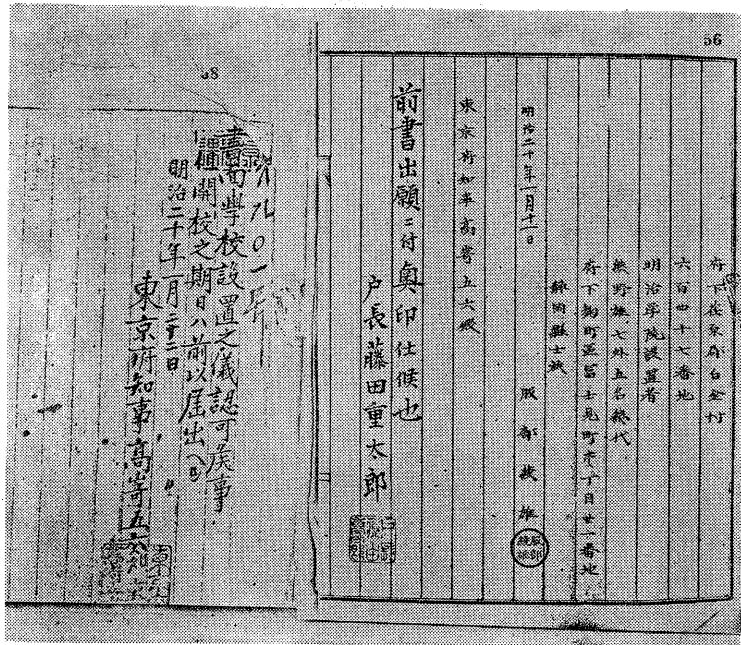
り、まずサンダム館の建設設計を協議し、ついで同年十二月十二日の理事員会でサンダム館の建設工事を藤田組に請負わせ井深、アメルマン、石本、ワイコフの諸氏がその監督委員となった。

当時、白金玉縄台の一角とその周辺には静かなうっそうとした森や、浅茅が生え茂った沼地があって、裏手に

件も討議され、特別委員として大儀見元一郎とアメルマンとがえらばれ候補地の踏査にあたることとなった。ところが同年十月二日に開かれた理事員会ですでに新地選定員が候補地として牛込区河田町、同区矢来町芝区品川などの地所をあげていたが、種々の事情で相談がまとまらず、その日に荏原郡白金村字玉縄（現在の東京都芝区白金今里町四十二）に九二五四坪の売地があることを安川亨より通告をうけ、理事員会議長井深梶之助は安川と同道して現地に行き、その所有者と交渉することとなった。その土地は昔、摂州三田藩主九鬼氏の下屋敷であった（地図参照）が明治維新後、石井省一郎の手に渡り、さらに薩摩屋という林なる商人の手に転売されていた。井深理事員会議長は学院を代表して所有者と契約をとりかわし、この土地を九千五百円で購入し、同年十月十日の理事員会に発表し正式に決定をみた。なお右地所のうち二千坪を区画して教授住宅の敷地にあてることを決定してお

細い小川が清正公の方へ流れていた。台地つづきには海軍墓地(現在の大学敷地)があり、周囲の密林には狐狸がすんでいたとのことである。また西側少しはなれたところには瑞聖寺があつて、夕やみせまるころ梵鐘の音が響き渡り、南方、五反田方面は一面の麦田で、大久保公爵の所有地であつた。こうした風光につつまれた閑寂な高台に、やがて新しい洋風の校舎や、外人宣教師の住宅がたてられて、宣教師家族の姿も見られるようになってきたので、外国の大学でも見るような情景が展開してきた。

校名と教授陣は決定し、校地は選定され、サンダム館の建築計画もたったが、それよりも大切なことは私立学校明治学院の設置願を東京府を通じて、文部省に提出することである。



明治学院最初の設置願の一部と認可書

った。

建築については、明治十九年十月二十一日の理事員会で次の三項が決定された。

一、リフォームド・ミッシヨンより資金の提供さるる暁、明治学院理事員は速かに新たに購入の土地に校舎を建設すること

二、アメリカプレスビテリアン・ミッシヨンより資金の提供さるる暁、明治学院理事員は速かに同地に寄宿舎を建設すること

三、三百弗を超過せざる範囲の資金を用いて敷地を整理すること

築地時代すでに米国のリフォームド教会員でニューヨーク市のサンダム夫人 (Mrs. S. A. Sandham) の三〇〇〇ドルの寄付があつたが、同居留地に校舎建築の場所がなくその金を保留してあつたので、新しい組織ができ、広大な敷地も得られたので、いよいよ校舎としてサンダム館をたてることになり、また明治十九年へボン博士からの二、〇〇〇ドルの寄付金をもととして、構内に寄宿舎をたてることになり、理事員会はそれをへボン館とした。サンダム館は建坪階下一〇四坪七合九才、二階九〇坪九合六勺九才、計二四七坪六勺八才、二階の北側には四〇〇人をいれるに足る講堂を建てた。建築費七、〇〇〇円、前記サンダム未亡人からの寄付金をもつてこれにあてた。これと対応して寄宿舎へボン館も当時の大倉組 (現在の大成建設株式会社) が建築した三階建の木造大建築であつた。へボン博士が著した「和英語林集成」第三版が丸善から刊行された際、その版權を丸善商社に譲渡したところ、丸善はへボン博士に二、〇〇〇ドルを贈った。へボン博士はその金を全額明治学院の学生寄

宿舍の建築費にあてた。その建坪数は次の通りであった。階下一二九坪五合五才、一階は一〇四坪五合四勺、二階一〇四坪五合四勺、三階一〇四坪五合四勺、屋上櫓四坪、合計四四七坪一合七勺五才であった。屋内地下室は全部コンクリートで、雨天体操場にあてられ、柔道や剣道の道場に用いられた。一階から三階まですべて寄宿舎として用いられ、宿室二八、寝台一一二あった。建築資金は約一〇、〇〇〇円、そのほとんどがヘボン博士の寄付金によった。ヘボン館については、ここに学んだ多くの卒業生の心に深い印象と思い出を刻みつけた。「明治学院五十年史」に鷺山弟三郎氏はこう書いている。

「ヘボン館はその五階の櫓が非常によい眺望を占めて居た事、西には武蔵野から秩父の山々の彼方に富士を見渡し、東には品川湾の海水の彼方に房総の山々を望んで広やかな眺望を占めて居たこと、及び有志の人々がそこで朝な朝な早天祈禱会をした事、またたくさんの窓から静かな夜の校庭に懐しい燈の光を放って居たことなど、やはり在舎生の脳裡に深く刻まれて居た」と。たしかに白金の明治学院初期の時代に、当時としては高い建物が丘の上にそびえていたし、周囲の景色と調和してまことに偉観であった。同年九月には上述の校舎サンダム館と寄宿舎のヘボン館とが完成したので、築地明石町の一致英和学校と神田淡路町から一時麴町区富士見町一丁目二十一番地に移されていた英和予備校とが白金の校舎に移され、神学部だけがしばらく築地で授業をつづけることになった。移転当時の学生数は二八四名、うち一致英和学校七六名、一致英和予備校一七八名、神学校三〇名であった。明治学院最初の学部は普通学部、邦語神学部、専門学部の三学部で、当初は総理をおかず、理事員会が学院の経営にあたり、幹事をしてその運営にあたらせた。若い服部綾雄がその幹事の職についた。しかし院長た

るべき地位にあつた人はヘボン博士で、教頭という名目であつた。普通学部の手頭教授はヘボン博士、邦語神学部の手頭教授はアメルマン、専門学部の手頭教授はインブリーであつた。

普通学部の手頭教授はヘボン、ジョン・バラ、ワイコフ、マコーレー、ハリス、マクネア、石本三十郎、服部綾雄、助教授としては杉森此馬、エー・ビー・バラ女史、アール・エフ・バラ、内田秋蔵、邦語神学部はアメルマン、ノックス、ヒュー・ワデル、インブリー、井深梶之助、ローゼ・ミラー、大儀見元一郎、フルベッキ、植村正久、石本三十郎、専門学部はインブリー、マクネア、ワイコフなどであつた。創立以来、学院は宗教教育に重点をおき、礼拝と聖書研究に力をそそぎ、寄宿舎では日曜日ごとに安息日学校を開き宗教的指導をし、学生相互の間では共励会を組織し「会員互ニ奨励シ、以テ其智性ヲ高尚ナラシメ有為活達ノ元氣ヲ養成シ兼テ真正ノ宗教ヲ拡張シ文明ノ基礎ヲ強固ナラシムルノ目的ヲ以テ毎月第二土曜日ニ奨励会ヲ開キ感話、質問、演説等ヲナシ、毎週水曜日ニ祈禱会ヲ開ク」、今日いうところの学内YMCAのようなものであつた。

そのころは横浜、東京はいうまでもなく全国にわたりキリスト教の運動が盛んにのびつつあつた時代であるから、宗教的な雰囲気は学内をおおつていた。それとともに文学会が盛んであつた。「生徒相謀り、英和文学会ヲ設立シ其規則ヲ定メ、英文朗読、英語演説、邦語演説、邦語討論ノ諸科ヲ設ケ毎週一回講堂ニ集会シテ之ヲ行フ」の記録によつて知られるように文学的ふん囲気が学院創立以来の伝統でもあつた。カルヴィン主義の神学と教会觀に堅くたち宗教教育を行なうとともに、他面、英文学による文学的精神と思潮とが涵養された。これら二つの流れ、キリスト教と英文学とは長く明治学院の教育の基本的な精神的伝統であつた。プレスビテリアン教会

リフォームド教会、スコットランド一致長老教会の一致協力による日本宣教とキリスト教教育が一致教会と一致神学校、一致英和学校となったものであるし、明治二十三年以後は日本基督教会なる一教派としてプロテスタントの正統神学を堅持して、わが国の教会形成に重きをなした。その一つの牙城はすなわち明治学院であった。しかも単にミッション・スクールとしてでなく、その校風の中に英文学を通じてながれるロマンチズムの香り高いものがあつたことは、本学の歴史をひもとくものがみな感ずるところである。美しい環境、洋風の建築、宣教師の家庭からもれるピアノのひびき、宣教師の子女の行きかう異国情緒、それらが、ここに学ぶ青年たちの胸に西歐的なキリスト教文化の光りとひびきとを感じしめ、そのエキゾチックなアトモスフィアに、しらずしらず包まれて行ったものようである。そして、それが明治学院の精神的伝統の一つを形成したのである。

さて明治学院沿革略史を見ると、明治二十一年二月二十四日フルベッキ博士が理事員会議長に選ばれ、ついで同年三月二十二日、服部綾雄は幹事を辞し米國留学を決した。杉森此馬がその後任となり、マクネア主簿となつた。また四月二十日には北米フィラデルフィア長老教会の信者ハリス氏父子より明治学院のために三、〇〇〇ドルの寄付があつた。それで学院では新しくハリス館をへボン館に接して建築することとなり、明治二十二年四月から建築を開始した。

へボン博士の初代総理就任

前述の明治学院設置願の職務心得の項を見ると、「本院ニ於テハ院長ヲ欠キ理事員十四名ヲ置キ該員會議ニ於テ本院ノ事務ヲ総轄ス。幹事ハ庶務主任トナリ本

院ノ事務ヲ調理シ及其定規ヲ維持シ生徒ノ勤惰及容儀品行ヲ監視ス」とあり、創立当時院長を欠き、理事員会が幹事に学院行政を行なわせたのであるが、これには種々学院創立当時の事情があつたことと思われる。すなわち神学校 (Seminary) と大学 (College) と予備学校 (普通部に該当すべきもの) が一体となつた明治学院において、ヘボン博士はその教頭格とされたのであつたから当然院長たるべきではなからうかと思われるが、明治二十年は旧約聖書翻訳完成のところで、ヘボン博士はその委員長として全力をその完成出版に傾けていたし、博士老齡にたえずと自らを知っていた。また将来学院教育の主導権は日本人の手によつて掌握すべしという考えもあつたものと思われるが、大勢は学院院长をおくべきであることに決した。やがて「総理」を推戴することとなり、明治二十二年十月二十一日米国旅行中のヘボン博士の了解を得て、理事員会は博士を総理に、井深梶之助を副総理に任命した。

しかしヘボン博士は新旧約聖書の日本訳が完成し、その刊行の実現をみるにいたつて日本における博士の使命は終つたと考えた。それで横浜指路教会会堂の建築をいそぎ、その資金募集のため渡米中であつたほどであるから、ヘボン博士は初代総理となつても横浜から通ひ、総理住宅のためみずから二、〇〇〇円を学院に寄付して校内に住宅をたててもそこに住まず、他の宣教師を住まわせた。副総理井深梶之助は二十三年渡米してユニオン神学校に学び、同二十四年九月帰朝するにおよんで、ヘボン博士は十月十三日、学院理事員会へ総理辞任の書面を送り老令、その職責を完うし得ずとして辞したので、理事員会では博士の辞意を了承し、ノックス氏と田村直臣とが学院を代表して感謝状を老博士に呈した。

ヘボン博士総理在任中、二十二年十二月九日、予科を麴町区有楽町に移転して明治英学校と称し、さらにそれを二十三年九月に同区中六番町に移転し、二十四年三月、これを再び芝白金の明治学院内に移し、予科と名づけられた。また井深氏渡米中は杉森此馬氏が副総理を代行し、アメルマン博士、神学部長に選ばれ、また神学部校舍兼図書館（現在明治学院記念館）が二十三年三月二十四日、竣工し棟献式が執行された。

第二回基督教夏期学校

また明治二十三年の夏、本学院において七月五日より十五日まで、第二回基督教夏期学校が開催された。校長は東北学院長押川方義で、講師とその演題は次のプログ

ラムの通りであった。

第二回夏季学校

一、期 間 自明治二十三年七月 十五日
至 同 十五日

二、場 所 東京明治学院

三、校 長 押川方義氏

四、人 数 百八十名

五、講師及題目 耶蘇基督之本旨 海老名弾正氏

名声非于立志之標準 島田三郎氏

聖徒之交 植村正久氏

耶蘇基督之意識 海老名弾正氏

贖罪論 ノックス博士

科学と有神論

靈能及其成長

現今之神学

希臘道德移于基督道德之顛末

欧米漫遊之話

伴直之助氏

デビス氏

ノックス氏

大西 祝氏

押川方義氏

基督教夏期学校はキリスト教各派合同の青年運動として明治二十二年に発足したもので、第一回の夏期学校は二十二年六月二十九日より七月十日まで京都同志社において行なわれ、校長は新島襄であった。大正四年七月、御殿場東山荘において第二十五回が開かれるまで、同志社、明治学院、箱根、須磨、興津、明石、関西学院、東北学院、沼津、唐津、青山学院、岡山孤児院、鎌倉、浦賀大津などで行なわれた。箱根で行なわれた第六回の講師の一人、内村鑑三の講演「後世への最大遺物」などひろく深い感銘を与えたものもある。

学院風景

当時の生徒、島崎藤村の「桜の実の熟する時」の中に、当時の学院風景や夏期学校の情景が美しい筆致で描かれてある。

「学校へ入った当座一年半か二年ばかりの間、捨吉は実に浮々と楽しい月日を送った。血氣壯かな人達の中へ来て見ると、誰も左様注意深く彼の行動を監督するものは無かった。まるで籠から飛出した小鳥のやうに好き勝手に振舞ふことが出来た。……学窓には、東京ばかりでなく地方からの良家の子弟も多勢集って来て居て、互に学生らしい流行を競ひあつた。柔い黒羅紗の外套の色沢、聞き惚れるやうな軟やかな編上げの靴の音などは奈何に彼の好奇心をそそつたらう。何時の間にか彼も良家の子弟の風俗を学んだ。彼は自分の好みによつて造つた軽い帽子を冠り、半ズボンを穿き、長い毛絲の靴下を見せ、輝いた顔付の青年等と連立つて多勢娘達の集る文学会に招かれて行き、……若い女学生達の口唇から英語の諳誦や唱歌をきいた時には、殆ど何もかも忘れて居た」。

そのころは明治学院は男女共学ではなかつたが、構内で文学会がしばしば開かれたし、高輪の教会には若い男女が集っていたから、藤村たちもあわい宗教的気分とロマンチズムのふん囲気につつまれて教会生活にもした

しんだ。夕暮の学院情景もまた学生の胸にある種のさびしさを与えた。

「界限の寺院では勤行の鐘が鳴り始めた。それを聞くと夕飯の時刻が近づいたことを思はせる。捨吉は学校の広い敷地について、亜米利加風の講堂の裏手のところへ出た。樹木の多い小高い崖に臨んで百日紅の枝などが垂下つて居る。その暗い葉蔭に立つて独りで手真似をしながら、しきりに英語演説の語誦を試みて居る青年がある……捨吉は寄宿舎（注へボン館）の方へ帰つた……英語の讚美歌の節を歌いながら庭を歩くものがある。張り裂けるような大きな声を出して暗い樹蔭の方で叫ぶものがある。向うの講堂の前から敷地つづきの庭へかけて三棟並んだ西洋館はいづれも捨吉が教を受ける亜米利加人の教授達の住居だ。白いスカートを涼しい風に吹かせながら庭を歩いて居る先生方の奥さんも見える……

誰が歌って通るのか聞き慣れた英語の唱歌は直ぐ窓の下で起つた。捨吉はその歌を聞くと、同じように調子を合せて口吟んで見て、やがて自分の机の方へ行つた」……

また学院の周辺の情景を次のように書いている。

「捨吉は講堂の前から緩漫な岡に添うて学校の表門の方へ出、門番の家の側を曲り、桜の樹のかげから学校の敷地について裏手の谷間の方へ坂道を下りて行つた。一面の藪で、樹木の間から朽ちかかった家の屋根などが見える。勝手を知つた捨吉は更に深い竹藪について分れた細道を下りて行つた。竹藪の尽きたところで坂も尽きて居る。彼はよくその辺を歩き廻り、林の間に轉る小鳥を聞き、奥底の知れない方へ流れ落ちて行く谷川の幽かなささやきに耳を澄ましたりして、時には御殿山の裏手の方へ、ずっと遠く目黒の方まで独りで歩きに出掛けたことがある」

「夏期学校の催しは構内のさまを何となく変へて見せた。寄宿舎の方へ通ふ道の一角で、捨吉は見知らぬ顔の青年が連立つて歩いて来るのに逢つた。聴講者として諸方から参集する外来の客は寄宿舎の廊下をめづらしさうに歩き廻つたり、塔の上までも登つて見たりして居た。……運動場の向うには、他の学校の生徒らしい青年や、見慣れぬ紳士らしい服装の人も通る。講堂の横手にある草地に集つて足を投出して居る連中もある。仙台からも京都からも神戸からも学校の違ひ教会の違つた人達が

夏期学校をさして集つて来て居た。外から流れ込んだ刺戟は同じ学校の内部を別の場所のやうにした。

講演の始まる日には、捨吉は昔と同じように短い袴をはいて、すこし早めに寄宿舎の出入口の階段を下りた。互に肩を並べて平坦な運動場の内を歩いて行つた。講堂の方で学校の小使が振り鳴らすベルの音は朝の八時頃の空氣に響き渡りつつあつた。運動場の区劃は基盤の目を盛つたやうな真直な道で他の草地なぞと仕切つてあつて、向うの一角に第一期生の卒業生の記念樹があれば是方の一角にも第二期の卒業生の記念樹が植ゑてあるといふ風に、ある組織的な意匠から割出されてある。三棟並んだ亜米利加人の教師の住宅、植民地風の西洋館、それと相對した位置に講堂の建物と周囲の草地とがある。入口の石段について、捨吉が友達と一緒に講堂へ上らうとすると、ポツ／＼界限からもやつて来る人があつた。そこで捨吉達はエリス教授にも逢つた。教授はズボンの隠袖へ手を差入れて鍵の音をさせながら、囚らず亭主側に廻つたやうな晴々とした顔付で居た。

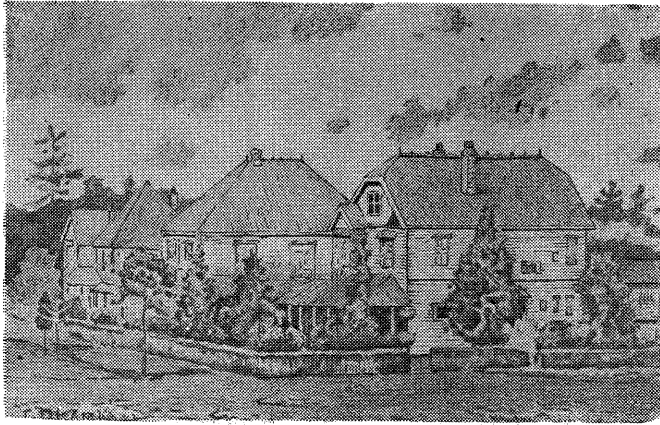
多数の聴講者を容れるチャペルは階上にあつて(注・サンダム館)壁に添うた階段は入口の近くから登られる。三年ばかりの間、毎朝の礼拝だ、エロキユウシヨンの稽古だ、あるひは土曜の晩の文学会だ、と云つて、捨吉達が昇降したのもその階段だ。……チャペルの扉の間からその広間の内部の方に幾つも並んだ長い腰掛が見えた。緩い螺旋状をなした階段を登つて来る信徒等はいづれも改まつた顔付で捨吉等の前をチャペルの方へと通り過ぎた。

日本にある基督教界の最高の知識を殆んど網羅した夏期学校の講演も佳境に入つて来た。午前と午後とに幾人かの講師に接し、幾回かの講演を聴いた人達はチャペルを出て休憩する時であつた……

やがて復たベルの音が講堂の階下の入口の方で鳴つた。屋外へ出て休んで居た聴講者等まで階段を登つて来た。チャペルの方へ行く講師の一人が捨吉達を見て居る前を通つた。文科大学の方で心理学の講座を担当する教授だ。昔とは縁つづきに当る人だ。

「Mだ」と昔は低声で捨吉に言つた。基督教界には彼様いふ人もあるかと、捨吉も眼をかがやかして、沈着な学者らしい博士の姿を見送つた。(注・元良勇次郎のことか、ただし博士の講演は第三回の夏期学校で行なわれた)

続いて、旧約聖書の翻訳にたずさはつたと言はれる亜米利加人で日本語に精通した白髪の神学博士(注・フルベッキか)が通



宣教師住宅図（岡見富雄画・明治37年）

った。同じく詩篇や雅歌の完成に貢献したと言はれ、宗教家で文学の評論の主筆を兼ねた一致教会の牧師が通った（注・植村正久）今度の夏期学校の校長で、東北の方にその人ありと言はれ、見るからに慷慨激越な気象を示したある学院の院長（注・東北学院長押川方義）が通った。破鐘のやうな大きな声と悲しい沈んだ声とで互に夏期学校の講壇に立って、一方を旧約のイザヤに擬するものがあれば、一方をエレミヤに擬するものがある、声望から経歴から相對立した関西の組合教会の二人の伝道者が通った（注・宮川経輝と海老名弾正のことであろう）。捨吉達の同級生の一人のお父さんにあたる人で、新撰讀美歌集の編纂委員たる長い白い髯を生じた老牧師が通った（注・奥野昌綱）。青山と麻布にある基督教主義の学院の院長（注・本多庸一）が通った。日本に福音を伝えるため、亜米利加の伝道会社から派遣され、捨吉達が子供の時分からあるひは未だ生れない前から斯の国に渡米した古参な、髪の色が違った宣教師達が相續いて通った（注・明治学院初代総理ヘボン、ジェームス・バラやその他初代宣教師たち）京都にある基督教主義の学校を出て、政治経済教育文学の評論を興し、若い時代の青年の友として知られた平民主義者が通った（注・徳富蘇峰か）。まだその日の講演を受け持つS学士（注・当時の基督教倫理と哲学の少壮学者として期待された大西祝）が通らなかつた。初めて批評といふものの意味を高めたとも言ひ得るあの少壮な哲学者の講演こそ、捨吉達の待ちつけて居たものである。そのうちに、すぐれて広い額にやはらかな髪を撫でつけセンチヴな眼付をした学士が人を分けて通った。

「ああ、Sさんだ」と捨吉は云つて見て、昔と顔を見合せた。学士に続い

て、若い女学生が列をつくって通った。……

天井の高いチャペルの内部には、黄ばんだ色に塗った長い腰掛に並んで溢れるほどの人が集った。一致派、組合派の教会の信徒ばかりでなく、監督教会、美以美教会に属するものまでも聴きに来た。捨吉等の歴史科の先生で、重いチャペルの扉を音のしないやうに閉め、靴音を忍ばせながら前へ来て着席する亜米利加人の教授もある。その後捨吉は友達と腰掛けた……

「希臘道徳より基督道徳に入るの変遷——好い題目ぢやないか」と管は捨吉にささやいた。恍惚、感嘆、微笑、それらのものが人々の間に伝はって行つた。……

夏期学校は三週間ばかり続いた。……いよいよ最終の日が来た。講師等の慰勞を兼ねて、一同の懇親会が御殿山である筈であつた。幹事(注・木村駿吉)の告別の言葉があり、一同の讚美歌の合唱があり、ある宣教師の声で別れの祝禱があつて、管も捨吉も物かげに跪座づいた。……捨吉は御殿山のはづれまで行つて、独りで胸の塞がった日にはよく其辺から目黒の方まで歩き廻つたことを思出した。……ふと思ひもかけぬ美しいものが捨吉の眼前に展げた。もう空の色が変りつつあつた。夕陽の美は生れて初めて彼の眼に映じた。……天は焰の海のやうに紅かつた。驚くべく広々とした其日まで知らずに居た世界がそんなところに閃いて居た。そして、その存在を語つて居た。寂しい夕方の道を友達と一緒に寄宿舎へ引返して行つた時は、言ひあはし難い歎喜が捨吉の胸に満ちて来た」

以上が明治学院で開かれた第二回夏期学校の記録であり、当時出席していた学生島崎春樹(ここでは捨吉となつてゐる)の思い出でもあつた。学院風景の叙述のつながりに結末をつける意味で、もう一節だけ「桜の実の熟する時」(新潮文庫版)から引用したい、それは藤村たちの卒業のことである。

「残る二学期の終りには、いよいよ四年生一同で卒業の論文を作つた。捨吉もそれを英文で書いた。学校の先生方は一同をチャペルに集めて、これから社会の方へ出て行かうとする青年等のために前途の祝福を祈つて呉れた。聖書の朗誦があり、讚美歌の合唱があり、別離の祈禱があつた。受持々々の学科の下に先生方が各自署名して、花のやうな大きな学校の判を押ししたの

が卒業の証書であった。やがて一同は校堂を出て、その横手にある草地の一角に集った。皆で寄って集ってそこに新しい記念樹を植えた。樹の下には一つの石を建てた。最後に、捨吉は菅や足立と一緒にその石に刻んだ文字の前へ行って立った。明治二十四年——卒業生

これらの叙述によってわかるように明治学院では戦前まで毎年、卒業生が記念樹を校庭の一隅にうえ、その下に石をおいた。しかし戦争で石は散乱し、記念樹も切られたりした。現在の講堂の前にあるいぬぐすが明治二十四年、藤村たちが卒業記念のために植えた木で、八十六年の歳月を経ているが、大気汚染や校舎の建築などで樹がいためられ、枝葉が枯れ、応急措置をとったが、だんだん幹や根が枯れかかってきた。明治三十八年にこられた長老派の宣教師A・K・ライシャワの次男で米国大使をしていたハーバード大学教授エドウィン・ライシャワ博士が少年時代にこの樹にのぼり、E・Rとナイフで彫りつけた字が、樹の成長ともに大きくなっている。しかしそうした思出の多い記念樹もだんだん校庭から消えてゆく。歴史的建築物としてのこっているのは宣教師館で、その一つは東村山の高等学校の入口にライシャワ館として移されてある。もう一つはインブリー館で現在構内にあり同窓会館となっている。最後に記念館、明治二十三年にできた神学部校舎兼図書館であった赤煉瓦のこの建築物は移動し、学院記念館として講堂前に原型のままのこされている。

卒業記念写真のうち、明治二十四年の普通学部の卒業写真が大学図書館に保存されている。それを見ると島崎藤村、馬場孤蝶、戸川秋骨、奥野武之助など、それから学生たちにまじってランデイス、石本三十郎、マクネア、ワイコフ、ジョン・バラなど、そして前面中央に白髪の老総理ヘボン博士が腰かけている。当時も博士の人

格の高風が校庭にただよっていたように思われる。

井深総理の就任

明治二十四年十一月六日、第二代総理井深梶之助の任職式が執行された。その案内状が日本文と英文とで記されている。

拝啓 陳者十一月六日（金曜日）午後二時より芝区白金今里町明治学院「サンダム」館礼拝堂に於て総理井深梶之助の就任式執行仕候間御來臨被下度、此段御案内申上候也

明治二十四年十一月二日

The INAUGURATION
of
Rev. KAJINOSUKE IBUKA, A.
M., as the PRESIDENT of the
MEIJIGAKUIN will take place on
Friday November Sixth at two
o'clock P. M. in the Chapel of
SANDHAM HALL, MEIJI GAKU-
IN, Shirokane, Shiba, TOKYO.
You are cordially invited to attend.

ちょうど日本基督教会大会が開催中であつたので、その三日目の午後はこの井深総理任職式に同大会出席者一同も他の参会者とともに出席したのでサンダム館礼拝堂のふん囲気は肅然として、莊嚴の感をもよおした。壇上には菊花が香り、講壇には日本語の大形聖書がおかれ、壇上にはヘボン博士、井深博士、カクラン博士、フルベッキ博士、ワイコフ教授、小川（義綏）師、瀬川（浅）師、稲垣（信）牧師、植村正久牧師がずらりと座していた。出席者は外国人の紳士淑女の外、牧師、教授、学生、キリスト教学校の校長等であつた。とくに本多庸一、平岩愼保、巖本善治、フェリス女学校長ブリス師なども、おのこの学校を代表して出席してい

た。ジョン・バラ夫人の奏楽にはじまり、小川義桜師が詩篇四八篇を朗読、そのあと、ヘボン博士が次のような挨拶をされた。

「明治学院は私より、もっと若く、もっと積極的で、学生たちと親しく接触しうる人物を必要としているので、最近開かれた理事員会で私の辞表を手交しました。理事員会では、心よく、これを承認し、井深梶之助師を私の後継者として、明治学院総理に選びました。本日私共がここに集ったのも、井深氏の総理任職式を行うためであります。

こうした処置をとるに至ったのは、すなわち明治学院の歴史において、旧い状態からの革新的な脱皮であると共に、特殊な重大性をもつものであることに、一同は気づいているのです。横浜において、ただ英学を教えるという初等教育として始めた、極めてささやかな端緒から、もっと拡大された教育事業の必要性にかんがみ、幾多の変遷をへて、今日みる如き立派に整備された高等専門教育、すなわち大学 (College) の程度にまで成長してきたのであります。この学校は、もちろん創立の時から最近に至るまで、大部分外国人の経営と指導のもとにあったのです。しかしながら、学院は大体において、教育ある有能な日本人の経営と指導とにまつべき時期に達したかと考えられます。

この事は、たしかに、正しい方向へ一歩前進したものであり、日本国民の間に学院の教育の感化を及ぼし、その有用性を促進しうる第一歩であると信じられます。

これまで外国の牧師たちが志し、またその目標に向って労苦してきたことは、次のような点であります。すなわち、わたしたち外国宣教師がこの国にきて、日本国民に福音を伝え、日本人の基督信徒を教育し、もはや何ら外国の援助をも必要としないような時期に到達することでありました。この国の基督教事業の状況からみて、またその成功した過去の歴史から判断して、また日本国民の性質からみて、そうした時期の到来は遠い将来のことではないと期待しうる十分な理由があります。ここに、井深梶之助をわたくしの後継者として迎え、この式場の皆様御一同に同氏を御紹介することは、私の喜びとするところであります。」

ヘボン老博士は壇上で、鍵を手ずから井深に渡し、会衆に向かって「井深氏はその名の示す通り、梶でありま

す。私は明治学院という船にこの新しい舵をつけました。この船はこれからどのような方向に乗り出しましたが、この舵は決して針路を誤りません」と挨拶して退かれた。

ついで井深新総理がたつて、きわめて謙譲な態度で挨拶をし、まず前総理へボン博士の日本における業績をたえ「和英語林集成」の編集刊行、医療事業の働き、聖書の翻訳などについて述べ、最後にキリスト教教育に関する新総理の理想と抱負とを述べた。ついでワイコフ博士が明治学院教授として、ミッションがややもすれば直接伝道に重きをおいてキリスト教教育の事業を軽んじようとする誤りを正し、大いに明治学院のキリスト教教育の重要性を述べ、最後に友人として植村正久は井深梶之助の明治学院総理就任を心から歓迎し敬意を表した。こうして井深は明治学院総理としてはたらくこととなり、明治、大正を通じ、明治学院のみならず、日本のキリスト教教育、日本基督教会のみならずキリスト教界を代表して国際的会合に出席し、その円満な人格と風貌、その流暢な英語と外交的手腕によって、井深総理はひろく国の内外に知られるようになった。

明治学院憲法の制定

井深総理の最初の仕事は明治学院憲法の制定と神学部確立であった。前述したようにこのころになってわが国のプロテスタント諸教派は、明治初期の日本基督公会創立時代とことなり一致協同の線に向かわず、分立の傾向をたどった。その最も大きい分裂と対立とは日本基督一致教会と、組合教会との合同運動とその決裂であった。明治初期、S・R・ブラウンは明治五年横浜のへボン施療所で開かれた宣教師会議において、その主張たる聖書の翻訳、神学教育、教派の一致の三つの問題を提起し、日

本においては欧米にみるような教派の分立をさげ、日本基督公会の樹立を主張した。そして聖書翻訳を共同にすること、神学教育も超教派的とすることは一応承認されたが、「日本基督公会」一本にすることについては論議があった。監督教派、メソジスト教派、バプテスタ教派はこれに賛成せず、長老派、リフォームド派、組合派が公会主義に賛成した。これでまずわが国における北米長老派、リフォームド派、スコットランド一致長老派は明治十年以来合同して一致教会となつたから、自然、この一致教会と組合教会との合同が問題となり、両教派の指導者は極力このために折衝協議した。すでに明治十六年にはキリスト信徒大親睦会が東京で、大阪では全国宣教師会議が開かれ、わが国の伝道戦線を一致協力して画策する気連に向かつていた。従つて東京側の一致教会と関西側の組合教会とは互に協議を重ねたが、明治二十三年、教会制度、すなわち長老主義と、組合教会主義との明確な相違を理由として決裂の憂目をみるにいたつた。そこで日本基督一致教会派は「一致」をすて、日本基督教会としてわが国の伝道を志すことに決意した。その指導者は植村正久、井深梶之助、山本秀煌など、横浜ブラウン塾に学び日本基督公会会員、一致神学校出身の教職であり、さらに明治学院神学部に関係の教職と長老派、リフォームド派の宣教師および信徒等の一致団結によつて強固な教派の確立を計つた。

こうした日本基督教会の情勢にあつて明治学院は新たな組織と陣容とをもつてキリスト教教育の発展を志すこととなつた。それにはまず、井深梶之助総理によつて制定された明治学院憲法と、神学部の確立であつた。それらは新しく発足した日本基督教会を基盤とするものであることはいうまでもない。明治二十四年十二月十七日、理事委員会において憲法と職制とが制定され、発表をみるにいたつた。その大要を記したい。

憲 法

- 一、明治学院ハ北米合衆国プレスビテリアン教会及ビ、アメリカ・リフオームド教会ノ両ミッシヨングスコットランド一致プレスビテリアン教会ノミッシヨント合議ノ結果建設シタル一学府ナリ
- 二、本学院ノ目的ハ完全ナル基督教教育ヲ授ケ特ニ青年ヲシテ基督教教師トシテ訓育スルニアリ。協力ミッシヨン並ビニ他ノ財源ヨリ得ル一切ノ資金ハ神聖受託金トシテ此ノ目的ノタメニノミ用キラル
- 三、本学院総攬並ビニ経営ハ理事員会ニ図ツテ定メラル
- 四、理事員会ハ七名ノ外人、七名ノ日本人ヨリ成ル。外人理事員ハ協力ミッシヨンヨリ選挙サレ、日本人理事員ハ日本基督教會ノ健全ナル信徒タルヲ要シ、(注・傍点筆者)理事員会ニテ選挙サル。任期ハ二年ト定ム
- 五、協力ミッシヨンニ属スル男子並ビニ本学院教授ハ凡テ陪席員タルヲ得、陪席員ハ發言權ハ有スルモ決議權ハ無キモノトス
- 六、本学院ノ総攬並ビニ経営ニ関スル權限ハ左ノ如シ
 - イ、本学院内ノ凡テノ役員ノ任免移動、但シ幹事ハ除外シテ総理ガ理事員会ノ協賛ヲ經テ任免移動セシムルモノトス
 - ロ、教授及ビ教員ノ任免移動並ビニ諸種ノ教導法ニ関スル指定
 - ハ、協力ミッシヨン所屬員以外ノ役員教師雇員ノ俸給ノ決定
- 二、学院財政ノ監査
 - ホ、年報及ビ精算書ノ調製、写本ハ各協力ミッシヨンニ送達スルモノトス
 - 七、本学院ノ役員トハ、総理、會計、幹事ノ三名トシ、其ノ職分ハ理事員会ニヨリテ決定サル
 - 八、本学院ハ普通学部、神学部ノ二学部ヲ含ム。各学部ノ教授会ハ理事員会ノ指揮ヲ待チテ当該学部ヲ管理ス
 - 九、学院ノ資産ハ理事員会ニテ選バレタル四人ノ法定財産管理人ガ理事員会ヲ代表シテ所有スルモノトス
 - 一〇、理事員会ノ合法的決議ヲ有効ナラシムルタメ法定財産管理人ノ批准ヲ要スル場合ハ猶余ナク其レヲ受ケウベキモノトス
 - 一一、規約ノ改正ニヨリテ以上ノ決議ガ法規上認メラルル場合ハ法定財産管理人ハ本学院ノ凡ユル財産ヲ理事員会或ハ其ノ後

継者ニ譲ルベキモノトス

一二、此ノ憲法ハ協力ミッションノ協賛アリテ理事員三分ノ一以上ノ賛成若シクハ理事員会ノ協議アリテ協力ミッションノ三分ノ二以上ノ賛成アル場合修正サレウルモノトス

明治学院憲法には日本人の理事員は「日本基督教会ノ健全ナル信徒タルヲ要シ」と規定してある。従つて神学部教授は長老派の宣教師またはリフォームド派、スコットランド一致長老派の宣教師、日本人の教授は日本基督教会の教職と信徒であつたことはいうまでもない。明治三十六年十二月二十二日にはさらに日本基督教会の信仰簡条をもつて、明治学院の教職の標準としたので、明治学院が日本基督教会の教育機関たることを明かにした。神学部は日本基督教会の唯一の教職者養成機関となつたわけである。

明治学院神学部は、明治二十三年までは築地一致神学校校舎で授業を行なつていた。また、邦語神学部と専門学部の一選科の形態で、英語神学部の二つがあつた。これは統一して明治学院神学部とした。しかし、その内容はやはり英語神学部と邦語神学部とにわかれていた。教室は前述の赤煉瓦の図書館兼神学部校舎であつた。

日本基督教会と明治学院

従来、協力ミッションとして、三つのミッションが築地の一致神学校および一致英和学校を経営してきたが、明治学院成立後は北米長老派とリフォームド派の協力をよつてなり、スコットランド一致長老派はこの関係をはなれ、ヒュー・ワデルのみが神学部に参加することとなつた。当時の神学部教授とその担任科目は次の通りであつた。

教会歴史、旧約聖書注解 ジェームス・アメルマン

新約聖書注解、教会政治 ウイルアム・イムブリー

組織神学、哲学史 ジョージ・ウィリアム・ノックス 教会歴史、説教

井深 梶之助

教会神学、倫理学

植村 正久

英語

石本 三十郎

福音史

(講師) ヒュー・ワデル

二十三年の卒業生は一致神学校時代の学生で十九名の多数であったが、二十四年の卒業生は多田素ひとりであった。しかしこの人は高知教会牧師となり、教勢大いに拡張し、多くのすぐれた人士を養成して各界におくり出し、日本基督教会内において植村正久につぐ有力な教職者であったし、明治学院理事長としても功績のあった人である。

さて学院は明治二十四年六月神学部課程を整理し、邦語、英語神学部を統一して、修業年限を四か年の神学部とし、校舎を築地から白金の本校に移し、別科を修業年限一か年の東京伝道学校とし、築地十七番の旧一致神学校々舎に設置することとなった。田村直臣、井深梶之助がその指導にあたったが二か年後、これを閉鎖した。そして明治二十六年六月、神学部の制度が改正され、

神学部 予科 一か年 同 本科 三か年 同 別科 二か年

予科一年は明治学院普通部第四学年をもってこれにあて、本科入学生は学院普通学部卒業、もしくはこれと同以上の学力あるものとした。別科は適當の推薦のあるものを入学させ、主として邦語をもって教授することと

した。教授陣に変更はなかったが、土佐女学校の教員であった柏井園を、植村正久の特別推薦によって講師とした。柏井が「開拓者」「文明評論」「福音新報」に健筆をふるい、その後、植村正久の創設した東京神学社の教授となり、教会史の学者として名をなすにいたったことは衆知のところである。

前述した明治学院職制によって総理、幹事、主簿、図書係、教授会書記をおくことになった。幹事については創立当時は「総理をおかず幹事をして理事員会の決定事項を遂行せしめた」が、総理をおくにいたって幹事の職務は総理を補佐し、教室外の学生の監督と教授会の命令を移行すべき職務とをもつこととなった。それで本学院職制の決定以後、幹事に杉森此馬が任命された。明治二十六年二月十八日杉森は幹事を辞し、熊野雄七がその後任にえらばれ、日本史、支那史の教授に任ぜられた。熊野雄七は大村藩士、維新のころ、討幕隊に加わり、会津の城を攻撃する隊列に加わっていた。明治三年上京、慶応義塾で英語を学んだ。明治五年横浜に行き、ジェームス・バラから受洗し同六年ブラウン塾に入った。井深梶之助、山本秀焯などとともに神学を修めた。明治八年東京府の学事課に勤め、のち横浜の共立女学校で幹事となっていた。明治二十六年、井深総理にすすめられて明治学院の教師となり、幹事として井深総理を補佐し、寄宿舎の舎監、中学部長、学院副総理格で終始、井深総理を助けて苦業を共にし、深く学生を愛し、学院の発展につくし、学生、卒業生にしたわれた。本来豪毅一徹の人であったが学院幹事となつてからは実に温厚篤実なキリスト教紳士の範をたれた。大正十年五月十日、葉山堀内の自邸で永眠、青山墓地に葬られた。

明治二十七年一月、従来の普通部本科、予科の制度を改めて高等学部二か年、普通学部五か年とした。ここに

いう普通学部とは当時の一般の中学校に該当するものであった。同年六月二十日、地震のため神学部校舍が破損したため、二階を木造に改築した。前にも述べたようにこの神学部兼図書館の建物は全体が赤煉瓦で、学院の建物のうち最も異色あるものであった。高輪から学院を見ると、樹木の茂りあうキャンパスにへボン館やこの赤煉瓦の建物などがつらなり、まったく外国の大学を思わせるものがあつた。そうして赤煉瓦の建物の一部すなわち二階を木造にしたことははなはだ惜しいことであつた。今日「東京の文学散歩」やその他に転載されている明治学院の歴史的建築の写真は、いずれも二階木造、一階赤煉瓦の記念館である。

星うつり物かわり、制度組織、校舎、いずれも急速に近代化しつつある現在、こうした創立時代の記念建築物が原型のまま補強されて近代建築を背景として建っているのは、いかにも奥ゆかしい。

明治学院が白金の丘に創設された前後は、キリスト教も欧化主義の影響で急角度に発展し、従つてキリスト教学校の設立も多くあつた。東北学院、明治女学校、福岡女学校、北陸女学校、東山学院、弘前女学校、宮城女学校、香蘭女学校、静岡英和女学校、普連土女学校、共愛女学校、関西学院、金城女学校、女子学院、松蔭女学校、桃山学院、プール女学校、共立女子神学校、尚綱女学校、日ノ本女学校、広島女学院など、とくにキリスト教女子教育の発展をみるに至つた。さらに伝道では共励会、YMCA、キリスト信徒親睦会、福音同盟、婦人矯風会、禁酒会、岡山孤児院等である。それから、明治二十年には旧約聖書の翻訳が完成し、同二十一年には新旧約完成の会を築地新栄教会で開き、へボン博士が聖書と訳の歴史を語られた。かえりみると明治十三年には新約聖書完成、委員長S・R・ブラウン博士はニュー・イングランドのモンソンにて永眠、旧約聖書の翻訳については

委員長にヘボン博士が選ばれ、フルベッキ博士は詩篇の翻訳をした。「箴言」「ヨブ記」など訳出したヘボン博士は新旧約聖書のみならず、その他、多くの書を訳したことも忘れてはならない。

欧化主義に対する反動

このようにキリスト教は発展し、教会はおこり、キリスト教学校は各地に設立されるようになった。そしていよいよ明治二十二年、憲法は發布され、同二十三年には帝国議会が開かれ、立憲政治の基礎は確立するかにみえた。しかし国内の情勢は、必ずしも平穩無事ではなかった。文部大臣森有礼はその革新的思想、キリスト教的傾向のために表面は伊勢神宮に対する不敬の理由で西野文太郎に刺され、教育勅語とともに政府は国家主義を推進し、第一高等学校においては内村鑑三の不敬事件がおこった。井上哲次郎は「教育と宗教との衝突」を刊行して正面からキリスト教の攻撃を開始した。内村鑑三は自からこれに反論したばかりでなく、キリスト教界も、この問題に対してたちあがった。条約改正問題の失敗から欧化主義はかげをひそめ国家主義の急激な台頭となった。文部省は国民教育の確立を計り、中学校、専門学校の国家的制度化を計るにいたった。こうした情勢に直面して、創立以来、自由なふん囲気とキリスト教的精神を基調とした、わが明治学院は神学教育は別として普通学部、高等学部の改正をせまられるにいたった。両学部の学生は築地時代の高潮時代とは相反して衰潮に向かい、学生の退学につづいて公立中学への転学等によって、学生数は急激に減少した。これを移転当時の在学生数と明治二十八年以後の学生数とを比較してみると、その衰潮の事実が明かになる。すなわち移転当時の学生、生徒の数は二八四名であつて二十四年島崎藤村などの卒業したとき

の卒業の数は二八名であつた。

明治二十八年には高等科の卒業生は七名、普通科四名。二十九年には高等科は一名もなく普通科五名。三十年には高等科七名、普通科四名。三十一年には高等科二名、普通科五名。三十二年には高等科卒業生はなく、普通科五名。三十三年には高等科卒業生がなく、普通科八名。三十四年には高等科二名、普通科一二名であつた。このように徴兵猶予の特典のない明治学院学生は他校に転じた。国民的感情も欧化主義の風潮と全く相反し、キリスト教に対して一般大衆もきわめて反対の態度を示すようになり、明治二十八年の日清戦争時代には「衰潮その極に達した」と「明治学院五十年史」は記している。それで井深総理、熊野幹事は理事員会に計り、明治三十一年六月十六日、普通学部を尋常中学校と改め、同年七月徴兵猶予の特典を受けることとなつた。

文部省訓令第十二号

ところが文部省は明治三十二年八月三日、「官立公立学校及学科課程ニ関シ法令ノ規定アル学校ニ於テハ課程外タリトモ宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ許サザルベシ」という文部省訓令第十二号がときの文部大臣樺山資紀により出された。従つて官公私立の別なく学校において宗教行事を行なうことができなくなつた。この訓令によつて全国のキリスト教主義の学校はその存立の精神を危くするにいたつた。明治学院においては尋常中学校として、徴兵猶予の特典を得たばかりであつたが、キリスト教教育を学内において行なうことができなるとなれば、学院創立の精神とその本領を失つてまで文部省の命令に服従することは、とても忍び得なかつたので井深総理、熊野幹事ははじめ理事員一同は、八月四

日夏期休暇中にもかかわらず緊急理事員会に集まり、この問題を討議し、ついに次の決議をした。

一、明治学院尋常中学位はその尋常中学校たる特権を即時返納すること。

二、普通学部の名称のもとに学生の訓育を続け従来の聖書教授礼拝は之を執行すること。

三、我国の将来に設立せらるべきキリスト教学校のため、且つ現存の同種の学校のため友校と協力して文部当局の反省を促し、特権の回収に努むること。

なお翌八月五日、熊野幹事は東京府に出頭して尋常中学校の資格を返納する手続きをとり、井深総理とともに本院の創立の精神と主張を守るため、学生が一名になっても聖書の教授と礼拝とを続行する決心を表明した。当時の理事員は次の通りであった。

議長井深梶之助、書記山本秀煌、同じくワイコフ、ジョン・シ・バラ、稲垣信、石原保太郎、アール・ワイ・デビソン、加藤勝弥、ギドー・エフ・フルベツキ、巖本善治、デビッド・タムソン、ジェームス・H・バラ、ワード・ハリス

それとともにキリスト教学校と提携して対抗策を講じた。そしてキリスト教学校代表者麻布中学校江原素六、明治学院井深梶之助、青山学院本多庸一、同志社西原清東が麻布の江原素六邸に参集して、次の二点をもって政当局に反省をうながした。

一、この訓令は政府が官公立と私立の差別を無視せること。

二、私立学校においては信教の自由を有す。

しかし、ときの総理大臣山県有朋と会つて井深総理は国際關係上、本訓令はなほだ妥當を欠くものがあると述べた。また文部大臣樺山大将、文部次官奥田義人にキリスト教代表者が会つたが、もつとも強硬だったのは本訓令の立案者たる勅任参事官岡田良平であつた。岡田は私立学校に対して本訓令の實行をせまつて、その主張をかえなかつた。立教学院では立教中学校として本訓令を順奉する態度をとり、キリスト教主義学校の足なみは乱れた。そこで同志社、青山学院、東北学院では明治学院と歩調をとみにして、資格返上を決意した。こうした情勢にあつた学院の理事員、総理、幹事、教職員一同は悲壯な決心をもつて学院の主張を貫き、難局に対し隱忍して当局の反省をうながした。当時の普通部生徒の一人であつた鈴木春は、学生たちはそれほど深刻に考へなかつたといつてゐるが、そのころ退学、転出が多く、入学してくる生徒数が非常に少なかつたことは事實である。そうした中に学院にとどまつて卒業した当時の人々の名をあげれば英学者の石川林四郎、富士見町教会牧師南廉平、大阪女学院長の森田金之助、神学者の横田貞治、大丸の社長となつた里見純吉、実業家の鈴木春、牛込教会牧師田島進、チリー公使となつた鮎延信道、軍医となつた石原義雄があり、その他、富尾留雄、尾嶋喜久恵、原順次郎、今野茂、匹田順などがいた。

しかし、まもなく明治学院は文部省と交渉して明治三十三年七月十七日、普通学部の名称で学生の徴兵猶予の特典を回収することができた。そこで、官公立高等専門学校に入学する受験資格を得るため、まず学内において高等学部の組織を改め、高等科を三か年とし、普通部の卒業生を收容しうるようにし、同三十五年四月より高等学部も徴兵猶予の特典をうけた。

南長老派との合同と礼拝堂、講堂の建設

明治三十四年七月三日、南長老ミッションを迎えて、明治学院理事會に加え、神学部教授として同ミッションの宣教師フル

トンがえらばれた。明治三十五年二月六日ローゼ・ミラー夫妻の寄付金をもって講堂を建設することとなった。それは築地二十九番の邸宅と敷地とを学院に寄付されてあったものが、一五、〇〇〇円に売れたためである。工事は明治三十六年二月に開始された。場所は現在の正門を入れて右手の低地をえらんだ。ここは学院構内のもっとも地盤薄弱の土地であったが、すでに設計者ドイツ人のゼール氏が着々とその建築計画をすすめていたので、やむなく木材や石材を埋めて地盤をかためる策をとり、さらに九尺ほどの高さに石材で階下をつくった。赤煉瓦造りで、窓にはステインド・グラスをはめたりして立派な礼拝堂ができた。ところが、同年十二月十二日ラシネイス教授は工事現場で四十尺の高さから足をふみはずして落ち、一時人事不省におちいるほどの負傷をし、その後、帰米して一年半ばかり静養につとめる不祥事が起こった。講堂そのものも出来ばえは思わしくなく、明治三十八年三月の強震で亀裂を生じ、つづいて四十二年三月の地震で壊れて使用にたえず、風雨にさらされていたのを取りこわして、新たに大正四年現在地、すなわち以前サンダム館の建っていたところに新礼拝堂を建設して現在にいたっている。

学院は着々として学内組織の整備、資金募集の推進、校舎の建築をもって将来の発展と充実に備えた。こうして、ようやく学院の危機はさり、発展の気運がきざしてきた。明治三十六年五月十八日には普通学部卒業生は各官立高等学校および専門学校の入学試験を受ける資格を得た。同年十一月二十七日には、高等学部および神学部

は専門学校令による専門学校の認定をうけるにいたった。

植村正久の辞任と東京神学社の設立

こうした發展途上において、神学部は植村正久、柏井園の両氏の退職という事件にぶつかった。表面の理由は植村教授がW・N・クラーク著「基督教神学概論」をテキストに使用していたことに対して、もともと保守的神学を主張するフルトン教授などが、該神学書が自由主義にすぎると批難したためという。教会の独立、神学教育の独立を日ごろ抱懐していた植村は神学部を退職し、東京神学社を創設するにいたった。柏井園も退職して、東京神学社の教頭となり、神学生日高善一、井口弥寿男等が退校して植村の陣営に走った。植村正久が神学部を辞した真意は、やはりミッションによらない日本人による独立の神学教育機関を樹立しようとするにであった。この間の消息を伝えるものとして「福音新報」の二、三の文章がある。

植村は「日本人の伝道は日本人の教職、そして日本人の神学教育機関で養われたる独立の精神をもった教職でなければならぬ」と、毅然たる態度をもって東京神学社を創設した。その烈々たる決意と確固たる精神、山をうつすほどの信仰とが、たまたま宣教師を中心として明治学院神学部にあきたらずここを去り、独立の東京神学社をおこすにいたったものである。もちろん明治学院総理の井深梶之助と植村正久とは横浜ブラウン塾以来の信仰の友人であり、日本基督教会の二大支柱でもあった。井深総理は円満温厚の紳士長者の風あるキリスト教教育者であった。会津若松の武士で維新の変にその落城まで少年井深は藩主について見とどけた人だけあって、ひろく日

本キリスト教界に政治的手腕・行政的才幹を揮ったとはいえ、明治学院を最後まで離れなかった。それに反して、植村正久は明治五年日本基督公会設立の趣旨にあるごとく、外国の宗派に偏せず日本人のたてる基督公会をもって理想としたから、どこまでも外国宣教師的な教会によらず、日本人の教職と信徒をもってたてる教会と伝道と教職養成機関の設立を、主張してやまなかった。植村と井深とは同じく日本基督公会の草創期の信徒であり、ともにブラウン塾の塾生であり期を同じうして築地一致神学校を卒業し、日本基督教会成立後は、最後まで協力一致してその使命に邁進したキリスト教指導者ではあったが、その性行、その主張、その行動、その働きにおいて、二人はやはりわかれて協力すべき運命にあったと見るべきだろう。ただ植村正久が明治学院神学部を去ってからの明治学院はキリスト教教育の場として、カルヴィン神学と英文学のかもしれない。しかし日本基督教会の第一線に立って神の織りなすところとして、すてがたい伝統と歴史とを樹立していった。しかし日本基督教会の第一線に立って伝道に終始した多くの人々は、やはり植村門下、東京神学社の人々の中に多くあったようである。のみならず明治学院神学部に学んだ人々でも、やはり植村正久とそのひきいる日本基督教会の力づよい感化と精神の流れの中に行動したようである。

結局は明治学院神学部は昭和五年、東京神学社と合併し、日本神学校となり、明治学院はついにブラウン塾と一致神学校以来の伝統を日本神学校に移し、明治学院はヘボン塾、築地大学、一致英和学校の伝統であるクリスチャン・カレッジとして発展すべき一步をふみ出したものと見られるようである。大勢は争うべくもない。今日の東京神学大学がブラウン塾以来の合同的な神学教育機関となり、現在の明治学院がヘボン塾以来のキリスト教

主義の大学として、その伝統を持続発展して今日の重きをなすにいたったのである。この意味において、明治学院大学は結局へボン塾にさかのぼらなければ、その精神的源流をくみ出すことはむづかしい。

神学部の再編と専門学校の認可

植村正久、柏井園退職後の神学部教授にはリフォームド・ミッシヨンのアルバート・オルトマンズが旧約神学、旧約歴史の教授となり、松永文

雄が明治三十七年九月から教会歴史、基督伝を講じ、泰庄吉が植村正久の担当科目であった系統神学、聖書神学を講じた。リフォームド派のアメルマンはブラウン塾以来の神学者、長老派の宣教師、ウイリアム・インブリーはその日米外交上のすぐれた達識の士であり、宣教師ノックス博士、ランデイス教授、リフォームド派のワイコフ博士など博学、有識の宣教師たちであり、明治学院の教育を深め、高め、博めた人々だったといわなければならぬ。讚美歌の編集に貢献したマクネア、明治三十八年若くして来日した長老派のA・K・ライシャワーは後年仏教学者として名をなし、校内宣教師館でうぶ声をあげ少年時代をキャンパスですごしたエドウィン・ライシャワーは昭和四十一年まで米国大使として日米の外交と文化の交流に大きな働きをした。また仙台東北学院から笹尾余太郎を教授として迎えた。とくに明治学院のキリスト教主義の方針について、理事の稲垣信（横浜海岸教会牧師）よりの提案で、日本基督教会の信条に基くべきことを明治三十六年十二月二十二日の理事会で決議した。これによって明治学院が日本基督教会所属の教育機関であるという色彩が濃くなってきた。かつてその創立当時、やや一致超教派的な精神をもっていた学院が、いまや明確な日本基督教会という教派的な立場のキリスト

教学校として浮き彫りされた感を強くした。

ついで本学院神学部は明治三十六年十二月二十八日付の官報により、専門学校令による認可が文部大臣より公示せられた。すなわち次の通りである。

文部告示 第二百九号

東京府東京市ニ設置セル私立明治学院神学部ヲ専門学校令ニ依ルノ件認可セリ。

明治三十六年十二月二十八日

文部大臣 久保田 謙

なお同様の認可は高等学部にも与えられた。このように明治学院神学部は高等学部を含めて専門学校の資格を得、学院の立場はやや好転した。神学部から植村正久と柏井園とを失ったとはいえ、新たに松永文雄、秦庄吉、笹尾余太郎の三教授を迎え、さらに築地一致神学校以来の有能達識の宣教師が控え、さらにアルバート・オルト・マンス博士を旧約学者として迎えた。高等学部、普通学部の組織もとのい、校舎その他の設備も形成せられ、学生生徒数も増加の一途をたどり、まさに一陽来復の感があった。数年前、文部省訓令第十二号の施行に対して学院当局はキリスト教教育の主張を貫き、難局にたえて、よくこの白金の学園を守り抜いた総理の井深梶之助と幹事熊野雄七の苦節と忍耐と、これを助けて、その素志を貫徹するために協力一致した宣教師と教師たち、また退学転校のためほとんど数えるにたらぬほどの少人数となっても、望みを失わず学園にとどまって学びとおした生徒たちの信頼はむなしくはなかった。「堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあつてはあなたがたの労苦がむだになることはないことをあなた方は知っているからである」とのコリント

前書十五章の一句は、まさにそのとおりであった。これはヘボン博士が初代のヘボン塾生に教えた聖書の一句である。雪におおわれた草木も春の光をおびて、芽を出し花を開くように学院もまさに苦難の冬をすぎて、復活の朝を迎えるような喜びと希望に胸ふくらむときに際会した。この当時普通部の生徒でいわゆる幼年党の一人であった落合太郎博士は次のように「余慶」として書いておられる。

一九〇五年の夏、本郷の一高へゆくまで、わたしは明治学院中学部（当時の普通部）で育てられた。言葉の十分な意味で育てられたのである。そのころ、帝国大学および大学予科の高等学校は九月から六月までの学年であった。学院卒業は三月。

ひとしく生徒というものの、当時の学院生徒とその概念がすこしちがっていた。舍生、通学生の別なく、わたしたち少年にとって、学院での一日が自分のすべてであった。規則はあってもないも同然だったから、はたち以上の風来坊も自由にはいつてきたりしたが、はじめから明治学院でなければならぬとして、それも東京に家庭のあるわたしなぞはむしろ例外で、たいてい全国から、学院に絶対の信頼をもって送られてくる少年たちばかりだった。人数もすくなく、わたしの記憶では、中学部五年の各級がせいぜい二十人そこそこ。高等部神学部の学生は合わせて十人前後だったでなかるうか。そういうおとなたちもわたしたちも、遊ぶときは友だちであった。ヘボン館（寄宿舎）は東の奥、ずっと西寄りのサンダム館（チャペルと中学教室）、そのあいだのグラウンドでベースボール、ハリス館（ヘボン館の北）よこのコートではテニス。このハリス館の隣に熊野先生の、それから西へ、東むきに並んでランデイス、ワイコフ両先生の、お住まいがづづいていた。（ワイコフ夫人が飼犬に、おいでとよんでいるのを、下級生の友だちが聞いて、クマって名だネと言ったのを思い出す。）

そのころの東京はにぎやかなところと閑静なところと半半くらいで、わたしの生まれた駿河台などはほとんど住宅ばかり。それがみな木立ちの中にあつた。丸の内などは閑静を通りこして、見わたすかぎりの草っ原。タンポポやゲンノショウコの花が咲いていた。わたしたちの白金へんはそのわりに早く開けて、明るのおっとりとした町になっていた。現在の学院の所在地は昔どおりにちがいないが、内も外もなんとという変りかたか。すべて当然といえばそれまでであらうけれど、せせこましい別

天地になり果てたものである。

学院には校門もなかった。ごく低いカラタチの垣根がときれときれにあっただけである。学院を円心に、半径一キロくらいはわたしたち少年の領地だったといえる。そこには、森あり、小川あり、田あり、畑あり、丘もあれば谷もあった。空気は澄み、天は高かった。

教室の思い出を少しばかり。井深先生のイングリッシュ・バイブルは説明もすべて英語。三年生のときである。時間中、先生はニコリともなさらなかった。が、じつに明快だった。(なにかの集りで日本語の講話をなさっても、なさすぎるほどむだはなく、ご出身地会津なまりなどまるで聞かれなかった。)二年生のころ、熊野先生は修身。お宅での座談と、すこしもかわらぬ笑顔で、新・旧約の文言を引用しながら、多くは時評的な、しかしまったくの「おはなし」であった。いまもってわたしは修身という言葉が好きである。それが先生のお話ぶりと結びついている。国語と国史は岡見先生。数学は五年間を通じて河西(カサイ)先生。物理・化学はアダチ先生(申しわけないことにはお苗字の正しい書き方を失念。)

英文法は、ずっと宮地先生。上級ではネスフィールドのような、かなりくわしいものもまなんだ。西洋史のランデイス先生と博物のワイコフ先生は、かたわら英語も教えられた。(これを書きながら、ふとかんがえた。英作文とか英会話というようなものは特別に習わなかったらしい。その記憶がない。)ランデイス先生の西洋史では、五年生のときだが、著者はわすれたけれど、四五百ページの英文の書物を持たされた。それを参考用にして講義をきいた。すくなくともこんにちの新制大学でいどだったことはたしかである。先生は建築学を専攻されたと聞くが、学院のチャペルを設計し、現場監督中に大屋根からお



白金学報 16号

落ちになった。かなりの重傷で、わたしの在学中には授業もそれきりになった。しばらくのちに平癒と聞いてよろこび、安心した。

さて、課目の名はべつでも、毎週大半の時間は英語に明けくればおかげで、上の学校ではだいぶ楽もし、得もした。一高ではクラーク教授の講義筆記を同級生のためにガリ版にして配り、鶏卵一袋をもらったこともある。お前のノートを大いに活用しろといわれたのであった。学院で一級下に三谷隆正君がいた。三谷君は、もちろんわたしなどの比ではなく、ほんとうの優秀であった。やはり一高へ入学し、のち東大へすすんだ。明治末年、東大法科にテリーという教師がいて、その英語による講義は難解をもつてきこえていた。テリーの話の完全にわかるのは三谷のほかにあるまいといわれた。まったく稀有の学者で、人物も高邁であった。いくらすすめられても大学にのこらず、高等学校教授に終始した。その早世は惜みきれない。わたしにときものが同日に論じられてはならぬが、ここでは学院の余慶について述べたにすぎない。

わたしのまったく個人的な思い出を最後にしるすことをゆるしたまえ。たしか三年生時分のことである。わたしは神学部の一階に上がりこみ、放射状の書架から好きな本を勝手にぬきだして見ることをおぼえてしまった。なるだけ製本のきれいなものをさがした。わかってもわからなくても、気にいれば読みおわるまで放さなかった。いかくれ場所にして、ずいぶんいろいろあると知ったのはよほどあとである。わたしたちは、早くから日向ぼっこ同志で親しかったのである。書庫には二つ三つの小さなテーブルと数脚の椅子もあったけれど、いつもひっそりとして人の出入りはすくなかった。今にして思えば、山の小だぬきが民家のいろりばたにすわりこんでいたようなものであろうが、だれひとりこれをあやしみもしなかった。

この神学部教室は修理してのこされると聞いた。わたしまで、まことにうれしい。(一九六六年九月八日、伊豆大室山麓で)

日露戦争時代の井深総理

井深総理は明治学院の発展を志し、渡米して米国の長老派、リフオーム下派の両ミッション本部に行き、拡張資金の調達を訴えることとなった。ちようど万国キリ

スト教青年会創立五十年記念大会が、明治三十八年四月パリに開かれるので、日本代表として井深樞之助と本多庸一とが参加することとなった。井深総理はこれを機会に米国を訪問し、前記両ミッションの本部に訴え、米国において明治学院拡張基金募集につくすこととなった。留守中は熊野幹事が総理を代理し、神学部はオルトマン、高等学部はワイコフが代行した。明治三十七、八年は日露戦争のときであった。かつて横浜のヘボン夫人の学校で学んだ林董は英国公使として日英同盟につくし、同じく高橋是清は当時日本銀行副総裁として日本政府を代表して外債募集のために英米に派遣され、帰途ニューヨークの客舎からヘボン博士の隠棲の地ニュージャージー州イースト・オレンジに行き、親しく老博士に会って少年時代の英学指導に対し感謝の意を表し、心温まる会見の場面を見せた。井深総理はパリの大会席上ロシアのYMCAを代表した出席者と互に握手を交し、平和の出現を希望する演説をして、一同に深い感銘を与えた。井深総理はさらにパリからオランダ・ザイストで開催の万国基督教学生青年同盟会にも出席し、大西洋を渡りニューヨークの長老ミッション本部に行き有名な説教者で当時の長老教会外国伝道局総主事ロバート・スピーア博士に会い、明治学院拡張基金について懇談した。スピーア博士も大に井深総理を歓迎し、各方面に紹介の労をとり、駐米公使高平小五郎も井深総理を米国要路の人々に紹介した。日露戦争は日本海々戦の大勝で米国人の井深に対する好感は非常なものであったとみえて、一挙に二万五千ドルの募金に成功した。なお、ニュージャージー州イースト・オレンジに住まっておられたヘボン博士を訪ね、老博士と親しく歓談した。ヘボン博士の九十歳の誕生日、明治天皇より叙勲があったことを祝い、老齢の平安を祈った。井深総理は翌三十九年二月十五日無事使命を果して、学院に帰った。

財団法人寄付行為

井深総理が歐洲に向かつて出發した直前の明治三十八年三月九日、かねて申請中の明治学院財団法人の認可があつた。

明治学院財団法人寄付行為

第一条 本法人は明治学院財団法人と称す

第二条 本法人の目的は基督教主義に基き普通及高等の教育を施し殊に其神学部に於ては基督教教師たる可き者を養成する爲め次条に規定する条件により明治学院を設立維持するにあり

第三条 本法人に依つて設立維持せらるる明治学院は永遠に基督教主義の學校たるべし而して其教義の標準は明治二十三年十月日本基督教會大会が採用したる信仰の告白たるべし

第四条 本法人の事務所は東京市芝区白金今里町四十二番地に之を設く

第五条 本法人の資産は左の三種とす

一、本寄付行為に添付せる目録に記載の不動産

二、北米合衆國プレズビテリアン教會及アメリカ、リフオームド教會より年々各金三千五百円宛寄付の予約金

三、本寄付行為を承認して本法人に寄付せらるる土地建物其他の財産

第六条 本法人に十二名以上十八名以下の理事を置く

第七条 総理は職権により理事たるべしその他の理事は次の如く選挙せらるべし理事の半数は在日本プレズビテリアン宣教師社団及在日本アメリカ、リフオームド宣教師社団の二団体に於て各適當の方法に依り其各団体の社員中より同教の割合を以て之を選出し他の半数の中二名は明治学院同窓會より選出し其他は理事自ら一の団体と成りて之を選出すべし而して其被選挙権を有する者は本寄付行為第三条に掲げたる信仰の告白を承認する所の日本人たる基督教徒に限る、明治学院より俸給を受くる教授は理事会の理事たらざるを可とす

本寄付行為認可を得たる後の最初の理事は左の十八名とす

井深 梶之助 石原 保太郎 稲垣 信 磯部 弥一郎 毛利 官治 イー・エス・ブリス

ビー・シー・ハワルス エチ・ビー・プライス エフ・エス・スカツダ

松井 安三郎 松永 文雄 有馬 純清 渡辺 暢 ゼームス・エチ・バラ

ウキルリアム・シー・ブカナン チー・エム・マクネヤ ジョン・シー・バラ シー・ケー・カンミンダ

第八条 理事の任期は二ケ年とし一年毎に其半数を改選す

但最初の理事十八名中松井安三郎以下九名は在任一ケ年とす

第九条 死亡辞任其他の事故に由り理事に欠員を生じたる時は第七条に依り補員を選任すべし但其任期は前任者の任期中とす

第十条 本人の所有する不動産を売却又は譲与し若くは抵当と為し其他所有権の全部又は一部を喪失すべき処分を為さんとする時は理事全体の三分の二の同意を要す

第十一条 本人の収受したる寄付金は之を確実なる銀行に預け又は確実なる有価証券として保管すべし但寄付金の収受と使用との期間一ヶ月に満たざるものに付ては此限にあらず

前項の保管方法より生ずる利子は銀行の規則又は証券の性質に従ひ遅滞なく之を元本に繰入る可き方法を取るべし

第十二条 理事会に議長、書記及会計を置く但書記及会計は理事たるを要せず

議長は議事を整理し理事会を代表す

書記は庶務に従事し理事会議の記録及其他の記録を整頓保管し又理事会に提出す可き報告書を作る

会計は一切の出納を掌り又理事会に提出すべき会計報告書を作る

第十三条 定期理事会は少くも毎年一回開くべし理事会自ら會議の時と所とを定めざる時は議長は書記と協議の上之を定むべし

定期會の時と所とは開會の五日前に書面を以て通知すべし

定期會の時と所とは開會の五日前に書面を以て通知すべし

定期理事会に於ては理事過半数の出席を以て定数とし其過半数を以て議決す

第十四条 臨時理事会は理事三名以上の請求に由て開くものとす

臨時理事会を開くときは必ず開会の五日前に会議の時と所との外議事の事項を各理事に通知すべし

臨時理事会に於ては理事三分の二の出席を以て定数とし其過半数を以て議決す

第十五条 理事会は明治学院を管理する義務及び権利を有す

第十六条 理事会が明治学院を管理する権利及び義務中には左の事項を包含す

第一 総理及他の職員を任免する事但幹事及舎監は理事会の賛同を経て総理自ら任免するものとす総理を任免する場合には理事全体の三分の二の同意を要し其他の教授以外の職員を免ずる場合には理事会出席員の三分の二の同意を要す

第二 教員を任免する事及其受持科目を指定する事神学部教授の選任及凡て教授の免職の場合に於ては理事全体の三分の二の同意を要す

第三 凡て職員教員及其他学院より俸給を受くるものの俸給額を定むる事

第四 予算及決算を議決する事又凡て出納を監督し毎年会計年報を作りて記録に留むる事

第五 各学部の教授会を監督する事

第十七条 本法人は特に開かれたる理事会に於て理事総数の四分の三以上の同意を得て之を解散することを得

第十八条 本法人の解散したる場合に於ては最終の理事は第十三条の規定を準用し左の標準に由り財産の帰属権利者を指定すべし

一、本寄付行為第三条に記載する如き基督主義の学校にして青年男女に基督主義の教育を施す為め其財産を維持使用す可き一個若くは数個の法人に譲与し得ること

二、右の条件に相当するもの無きときは財産を売却又は評価し其売却代金又は其現物を最初本法人に寄付したる団体若くは個人又は其各継続者に寄付の割合に応じ配分し得ること

第十九条 本寄付行為は第二条第三条及第十七条を除くの外特に開かれたる理事会に於て理事総体の三分の二の同意に依り主務官庁の許可を得て之を変更することを得

明治学院財産目録

芝区白金今里町四十番地

一市街宅地 三百〇六坪

時価金一千五百四十円也

芝区白金今里町四十一番地

一市街宅地 七千五百五十一坪

時価金三万七千七百五十円也

芝区白金今里町四十三番地

一市街宅地 一千二百九十七坪

時価金六千四百九十円也

芝区白金今里町四十二番地

一林 三畝十歩

時価金二百二十円也

芝区白金今里町四十一番地

一木造亜鉛葺三階(旧サンダム館) 一棟

建坪 百〇四坪七合九勺九才

二階 九十坪九合六坪九才

三階 九坪

同町同番地

一木造ブリキ葺五階(旧ヘボン館) 一棟

建坪 百二十九坪五合五勺五才

二階 百〇四坪五合四勺

三階 百〇四坪五合四勺

四階 百〇四坪五合四勺

五階 四坪

時価金六千円也

同町同番地

一木造ブリキ葺二階(旧ハリス館) 一棟

建坪 九十五坪四勺五才

二階 七十四坪四勺五才

平家 二十一坪

時価金二千円也

同町同番地

一煉瓦葺二階(現記念館) 一棟

建坪 七十一坪余

二階 同

時価金三千五百円也

建坪

二階

五十坪
十五坪

同町同番地

時価金一千五百円也

一木造瓦葺二階（旧総理邸） 一棟

明治学院設立代表者 井深 梶之助

本年二月十八日附申請財団法人明治学院の件民法施行法第十九条に依り認可す

明治三十八年三月九日

文部大臣 久保田 謙

井深総理渡欧中、寄宿舎管理の都合上、協議の結果、普通学部生徒はへボン館に、高等学部学生はハリス館に、神学部学生には芝白金天神坂下に家屋を設けて寄宿させることとした。

井深総理は基金募集の使命をおえて帰朝し、明治三十九年三月二十二日財団法人成立後最初の理事会を開き、渡欧渡米の報告を次のように要約している。（理事会記録より）

「一、井深氏曰ク予ハ昨年三月本国ヲ出発シ仏国及蘭国ノ青年大会ニ臨ミ帰路米國ニ過ギリ学院ノ為メ基本金及ビ拡張費ノ募集ニ付運動尽力シタルニ大約二万五千弗ハ先ヅ正確ニ得ラルベシ而シテ尚他ニ数多出金ノ約束ヲナシタル者アリ云々ト」 「一、イムブリー氏動議、米國ニテ明治学院へ寄付金ヲナシタル人々へ井深氏ヲ經テ謝状ヲ送り且尚今後ノ尽力ヲ依頼スル事、可決」

なお、この理事会で二、三重要な協議を行なった。すなわち築地十七番地の旧神学校の建物および地面についてダッチ・リフォームド、北米プレスビテリアンおよびスコットランド・プレスビテリアンの三ミッションの伝道局に交渉して、その譲渡を受けることとした。問題は前二ミッションは現在、直接に明治学院に關係を有する

が、スコットランド・プレスビテリアンは協力からはなれていたので、適当な代償を同ミッションに支払う手続きをとらねばならぬかと思われた。

南長老派の離脱

次に明治三十四年から明治学院神学部が協力した南長老派は、わが国における伝道地区が尾張、美濃、近畿、四国を中心としていたので、いよいよ神戸に南長老派の神学校を設立

して伝道者の養成を行なうこととなり、明治学院神学部との関係からはなれることとなった。明治学院としては、なるべく関係をたもちたい旨を先方に伝えた。理事会でも次のごとく議定した。

「南プレスビテリアン・ミッションが明治学院神学部と提携シテ其協力ヲ始メシヨリ以来学院ノ方針及性質ニ於テ何等ノ変革ナシ又該当ミッション我理事会へ提出セル通知書中其自派ノ神学校ヲ設立スベシト述ベタルノミニシテ他ニ其協力ヲ絶ツノ理由ヲ指示セズ又理事会及ビ「プレスビテリアン」「リフオームド」ノ両ミッションニ於テハ其協力ヲ絶ツノ充分ナル理由ヲ判定シ得ズ特ニ我学院ト其関係ヲ断絶スル事ハ重大ナル事件ナルガ故ニ理事会ハ「南プレスビテリアン・ミッション」ニ尚再考スベキコトヲ勧告ス」

一、イムブリー氏動議ニテ右ノ如ク「南プレスビテリアン・ミッション」ニ交渉シテモ、該ミッションニ於テ其協力ヲ廃絶スルノ前議ヲ固執スル場合ニハ、インブリー、熊野、ミラルノ三氏ヲシテ委員トシテ左ノ事ヲ取扱ハシムル事

一、熊野氏動議ニテ「南プレスビテリアン・ミッション」愈々我学院ト提携協力ヲ絶ツニ至ラバ学院財団法人ノ條款ヲ変更スル必要生ズベシ、然ル場合ニハ井深、渡辺(暢)、イムブリーノ三氏ヲ委員トシ其ノ改正ヲナサシムル事ニ決ス」

以上のように南長老派の本学神学部離脱問題について慎重協議、交渉を重ねたが、ついに明治四十年六月十日

明治学院との協力を断ち本学院理事会に出席していた在日本南プレスビテリアン社団代表者、シー・エム・ローガン、アール・エー・マカルピン、ウイリアム・シー・ブカナンの三氏は学院理事を辞任した。ただし明治学院神学部教授として長くその職責を全うしたフルトン博士が、新設の神戸神学校長となるため、本学院神学部教授を辞任するにあたり、学院理事会は感謝状を井深総理から同博士に送ることとした。フルトン教授が明治学院神学部を辞し、同年九月神戸葺合の山手に神戸神学校が開設その校長となるにおよんで、明治三十八年四月以来、明治学院神学部予科に学んでいた賀川豊彦は予科終了とともに、神戸神学校に転校することとなり、富田満、八太舟三、飯島誠太なども同校に転じた。

井深総理の理想

これより少し前、明治四十年三月二日、井深梶之助、インブリー、ジョン・バラ、ワイコフの四教授在職二十五年祝賀会を東京神田青年会館にもよおした。教職員、学生をはじめ京浜在任の同窓、教会関係者、教育界知名の諸氏を招いて祝賀会が開かれた。司会は熊野幹事、デビス教授の夫人がピアノを奏し稲垣牧師が祈禱し、卒業生を代表して宮地謙吉、理事会代表渡辺暢、そして野矢丈夫はワイコフ博士に祝辞を、松村介石はジョン・バラに対し、服部章三はインブリー博士に祝辞を、最後に青山学院長本多庸一は井深総理のために祝辞を呈した。これに対し総理井深梶之助は次のような答辞をのべた。

「本多君の述べられたところは殆ど私の意中を穿って遺憾はない。かつ私は自分の過去を誇るを潔しとしない。些か将来に対する希望を述べよう。海外の同信の友より明治学院の受けた従来の恩顧は広大である。之を思えば思ひ程、学院の基本を速か

に確立して、独力の経営にし度いと思う。これが私の且夕の願望である。同時に今一つの宿願は明治学院大学部を設置することであるが、その実現には多大の資金と努力を要する。願わくば卒業生及関係諸君は熱心なる私の冀望の実現のために援助せられん事を」

総理井深樞之助博士の言葉の中で学院の将来について二つの重要な点を述べられている。一つは学院の独立であり、もう一つは大学の設立である。学院はまだ専門学校 (College) の域を脱していなかった。大学 (University) となるには前途ほど遠かった。これらの希望はようやく昭和二十四年はじめて達成せられたからである。諺に「石橋をたたいて渡る」ということがあるが、友人植村正久は「井深先生は、石橋をたたいてなかなか渡らぬ」といった、と日高善一氏は学院本部で冗談のように井深総理の人物評をされたが、井深総理の学院における役割を評したものであろう。すなわち明治学院は最近にいたるまでミッションから財政上の援助をうけ、また終戦直後まで大学としての態勢をととのえることができなかった。志を胸に抱きつつも思い切って一歩ふみ出す冒險心、企業心、フロンティアの精神がややたらなかったように思われる。会津藩の家老職の名門に生まれ、年少であったため白虎隊に参加し得ず、藩主の小姓として籠城した井深樞之助は明治学院総理となって守勢に強く、敵を攻めるのに烈しくなかった。それに反して植村正久は没落武士の苦勞と貧困のなかでうつつぼつたる精神をもち敵を攻めるにはげしく、己が陣營を守るとともに拡大するにもあらゆる智略をしぼって日本基督教会をわが国プロテスタント教派の最高の水準におし進めた教会政治家であった。まさに両々相對する人物、一方は国際外交の精神をもって学院の城を守り抜き、他は日本全国、いな朝鮮、台湾、満州をわが教区——「世界はわが教区」と

はいわなかつたが——とし、これを実現した人であつた。このコントラストは「日本基督教会」なる教派の中でも最も深い友情を交した二人であつたことも忘れ難い。ミッシヨンからの独立、プリンストン大学に似た日本のキリスト教大学の理想は井深総理の胸におさめていたろうが、これを実現することなく総理としての任を終えた。そして井深先生が夢みていた二つの理想は、戦後の混乱の中からはじめて生まれてきたものであつたことも不思議な摂理である。

セベレンス館の建築

井深総理は米国で学院拡張資金募集の成功により、学院校舎の改築、建築にとりかかつた。すなわちへボン館の修理、新講堂、震災破損の修理、神学校寄宿舎の新築など、なかなか多忙な日々を送つた。とくに神学校寄宿舎セベレンス館に関して、明治四十年十一月の理事会記録に左の一節がある。

一、イムブリー理事、今回、新築ノ神学校寄宿舎落成ノ報告ヲナシ、且ツセベレンス氏、神学校寄宿舎新築ノ為メ最初ハ金八千円ヲ寄附スベキヲ約セルモ、委員等ハ大倉土木組ニ命ジテ其設計ヲナサシメシニ八千円ニテハ到底堅牢便宜ノ工事ヲ成ス能ハザルヲ以テ尚セベレンス氏ニ種々交渉ノ結果、總計金壹万三千円ヲ寄附スル事トナリ、家屋及下水等ニ至ルマデ工事ノ費用額ハ金壹万式千九百六拾九円六拾壹銭ト計上スルニ至レリト

一、普通学部入学者大ニ増加シ従来ノ校舎頗ル狹隘ヲ告ゲ且ツ寄宿舎ナルへボン館も最早経久ノ結果漸ク頽破ニ傾キツツアリ故ニ可成速ニ此等ヲ改築若シクハ新築スルノ必要アリ、殊ニセベレンス氏ハ我等ノ手ニテ若干金ヲ醸集セバ校舎及ビ寄宿舎建築ノ為メ尚金約壹万八千円ヲ寄贈スベシトノ予約条件モアリ是非学院出身者及ビ直接間接ニ縁故アル人々ヨリ約壹万円ノ

資金ヲ募集スル事ニ決ス、但シ学院従来ノ科程ヲ高メ、神科、文科、及ビ商科ノ三大学ヲ設置スルヲ目的トスル事

一、学院拡張ノ件ニ対シ、方案ヲ立テシメンガ為メニ選定セシ委員ランデイス熊野二氏、外、井深氏ヲ加フル事ニ決定ス

一、前条ノ如ク資金募集ヲナシ四万円ノ予算ヲ以テ新ニ普通学部校舍ヲ建築スル事

一、寄宿舎ヲ新築シヘボン館ヲ西方ノ低地ニ移転改築シ又幹事宅ヲ他ヘ移シ改築スル事ニ決ス

一、新築ノ神学校寄宿舎ノ名ヲセベレンス館ト称スル事ニ決ス

右のように理事会ではセベレンス氏の寄付金をもって神学部寄宿舎を建て、これをセベレンス館と名づけ、これまで臨時に神学生の宿舎にあててあった民家から学生を移し、セベレンス館に住まわせることとなった。明治末期から大正末期まで、明治学院神学部に学んだ多くの教職、同窓生たちにとってはセベレンス館は思い出多い寮であった。

セベレンス館については「明治学院五十年史」に次のように建築、転地などについて書いてある。

「明治四十年の春、米国ニューヨークの基督教紳士で著名の実業家セベレンス氏が日本に観光に来られた。氏は従来プレスビテリアン教会に属して莫大な金を外国伝道のため慈善事業のために投じた篤志家である。そこでイムブリー氏と井深氏とは帝國ホテルに同氏をたずねて神学生の寄宿舎建築のために相当の支出をして貰うように懇ろに頼んだ。所が事は比較的易く運んで、セベレンス氏は金八千円を先づ提出する約束をされた。学院当局は非常に喜んで建築設計を初めた。

敷地は学院北隅のハリス館の傍をずつと下に降りた現今の久原邸の池の傍で恐らく学院内で此地ほど幽邃なところはない。またそれだけ通風や乾燥の点で欠けたところがあった。大倉土木組に命じて可成り完備した設備をなし、水道瓦斯万端の工事をすませ、木造瓦葺二階建百二十三坪の立派な建築が出来上った。経費は一万二千九百六十九円六十一銭セベレンス氏の予約を超過する事約五千円であった。この超過の事をセベレンス氏に報告し、その補填を願ったところ、同氏は逆に一

万三千円を提供して呉れる事となった。落成したのは同年十月二十九日で其の日献堂式を行うと共に天神坂下の臨時寄宿舎から神学部学生は移転する事となった。

とある。

久原邸とは故久原房之助の邸のことで、すなわち現在の国際観光八芳園のことである。セベレンス館はその後、十一年間、学院敷地内から白金三光町三四五番地へ移すまで神学部の寄宿舎であった。

明治四十年十月神学部寄宿舎「セベレンス館」落成棟献式を行なった。あけて明治四十一年服部綾雄を理事に迎え、講師野々村戒三の転任のため石原謙を迎えた。当時まだ東大大学院に在学した文学士石原謙は高等学部で英語、歴史を担当したほか普通学部をも教え、またのち大正三年から四年にかけて神学部で教会歴史を講じて、ひろく学院学生生徒を啓発した。その学殖は当時の人々の深く敬慕し記憶しているところである。

山本秀煌の神学部教授就任

なお一人神学部教授として山本秀煌が学院に迎えられた。山本は横浜ブラウン塾に学び、一致神学校を卒業しヘボン博士に迎えられて横浜住吉町教会の牧師となり、明治二十五年同教会が移転して、指路教会となつてからもつづいて牧師となり、のちオーバーン神学校に学んだ。山本は後、山口の日本基督教会の牧師となり、さらに転じて大阪教会の牧師となり、日本基督教会史家として知られていた。ヘボン博士と共著の「聖書辞典」「日本基督教会史」「日本基督教会史」「ヘボン博士」とかずかずの著書がある。

井深総理の海外募金運動

明治四十二年かねて懸案中の築地十七番地の土地家屋はその譲受けを終わり、これを登記した。また初代宣教師ジェームス・バラ夫人永眠の記念奨学金として金

二千円の寄付をうけた。ついで翌四十三年井深総理は、スコットランドのエジンバラで開催の万国宣教会に日本側を代表して出席することとなり、帰途、米国をまわり、ニューヨーク市の長老ミッシオン本部、リフオームド・ミッシオン本部を訪ね、学院拡張基金募集につくすこととなった。他方、学院は国内における学院拡張費について六月初旬、熊野幹事、宮地謙吉両氏を大阪に派遣してその募金に当らせることとなった。このように発展途上にある明治学院は、総理、幹事、宣教師、教職員一団となってその充実と拡張につくした。井深総理は五月五日、横浜を出帆、同年九月二日、帰国した。国内における募金は男爵中島久万吉、葛西重雄、北村重昌の諸氏より各一千円、成毛金次郎、西村庄太郎、渡辺荘の諸氏より各金五百円、その他数十名よりの寄付により計金一万円余を得た。そこで翌四十四年一月十九日、内外の寄付金を合わせて運動場の一角にハリス館とランデイス教授館との間に新校舎を建てる計画が理事会で決定された。工事は竹田組竹田源次郎に請負わせた。この金額は四万円以上であった。

なお米国での大口の寄付金は

一金 一万弗	ウイルズ・デー・ゼームス	一金 九千弗	エス・エイチ・セベレンス
一金 三千弗	デー・ビー・ガンブル	一金 一千弗	ジョン・エス・ケネデイ
一金 一千弗	ジョン・エイチ・コンバルス	一金 五百弗	グレース・ドッジ

合 計 二万四千五百弗

このほかニューヨーク、ワシントン、フィラデルフィア、バファローなどの諸教会よりの寄付金を合わせて大略三万弗、内地の募金額一万三百余円を加えると、約七万円強の学院拡張費が用意されたわけである。当時の理事會記録をみると、諸官省および諸学校教員の給料増額が行なわれたので、学院でもこの情勢に無関心であり得なかつたようである。事実、そのころの学院の教員や講師の待遇はあまりよくはなかつたらしく、当局もこれを多少考へるべきことを理事會で議している。ただし果して改善されたかどうかは明確でない。四十四年より普通学部校舎の建築にとりかかることになった。

ワイコフ博士の死去

ところが四十四年一月二十七日、突然、ワイコフ博士が自宅で心臓麻痺で永眠した。

同日、午前七時、心臓に故障を覚え、二時間後、午前九時五分永遠の眠についた。学生たちは授業中にその報に接して非常に驚いたと渡辺勇助氏（当時の学生の一人）は語っている。一月三十一日講堂で博士の葬儀が行なわれ、教授、職員、学生一同涙にむせんだ。井深総理は追悼演説においてワイコフ博士の略伝を述べた。

それを要約すると次の通りである。

「マルティン・エヌ・ワイコフ先生は一八五〇年四月十日合衆国、ニュー・ジャーシー州ミドルブシ町に生れ、父は農家で、祖先は十七世紀に和蘭から米国に移住した。一八七二年ラトガース大学を卒業、一八七二年（明治五年）グリフィス博士の推

薦にて福井の英学校の教師として来朝、明治政府の懇情により、明治七年—八年の二か年、新潟英語学校教師となり、その後東京英語学校に教鞭をとり、明治十年帰国、ラトガース大学の講師となり物理学を教え、サンマービルにあった大学予備校を創立、その校長として三年間育英に従事し、明治十四年リフオームド・ミッシオンから日本に派遣され、横浜山手四八番に先志学校なる男子の英学塾を創設したが、先志学校が明治十六年に、東京築地大学校と合同して、東京一致英和学校となつて、先生はその家族を連れて、東京築地に移り、同校の物理学と化学の教授となり、明治十九年、明治学院設立とともに、物理化学、英文学、英語学を教授して二十五年におよび、忠実に、熱心に学生を指導し、多くの俊秀を育成し、その大きい体軀と、温かい精神と、忠実なる教師としての義務感とは、博士に学んだ青年学徒に深い感化を与えた。

先生に二男二女、長女ハリエットはヘール宣教師に嫁し伊勢、津市に伝道を助け、長男ゼコブ・ワイコフは米国ニューヨーク州立銀行の役員となり、二男ウイル・ワイコフ氏は病死し、二女ヘレナ嬢は南支の宣教師バドク氏に嫁した。享年六十一才、その半ば以上三十有余年を日本の基督教教育についやした。

遺体は大勢の学生教師にまもられつつ瑞聖寺の墓地に運ばれ、ミッシオン共同墓地に葬られた。

こうした悲しいワイコフ博士の葬儀のあと、まもなく二月六日懸案の普通部校舎の建築設計工事がすすめられた。校舎、雨天体操場、使丁室をふくめて金三三、七五〇円、室内瓦斯暖房費金一、五〇〇円、備品費金二、三〇〇円、道路改造費金一、〇〇〇円、合計金三八、五五〇円、この外幹事住宅の建築には、住宅新築費金二、〇五〇円、右垣根道路修理費金五〇〇円、右合計金二、二〇〇円、総合計金四〇、七五〇円であつた。建築工事中にへボン館の火災がおこり建築は一時中止されたが、その後急ピッチで工事をいそぎ十一月三日（旧天長節）新築落成式を行なつた。

へボン館の焼失とへボン博士の死

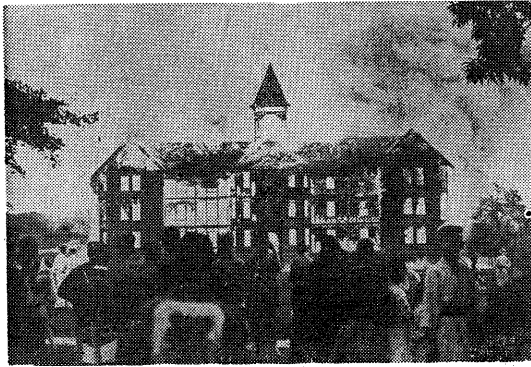
これより少し前同年九月二十一日朝、突如へボン館から火を發した。

火は一階から二階、三階へともえうつた。火は折からの初秋の朝風にあおられて、みるみるうちに全館にひろがり、さらに隣接のハリス館に飛火した。そしてハリス館も全焼してやっつ消火することができた。寮生はすばやく避難し一人も怪我はなかった。工事中の普通部教室も風の方向が変わったので無事であったことは不幸中の幸であった。鎮火したのは午前七時ごろであった。そして、赤煉瓦の土台の余熱がまだ去らないうちに米國駐劄大使内田康哉から、わが外務省に電報がとどき、それを外務省から明治学院に伝えてきたが電文には「へボン博士、九月二十一日朝死去せり」とあった。白金の丘に立ったへボン館の焼失と米國に隠棲したへボン博士の死とそれは同時であった。火災の原因は何かの失火であったであらうが、ときを同じうしてへボン博士がこの世を去ったというこの不思議な関連は、偶然の一致かも知れないが、明治学院にとって永久に忘れることのできない歴史的事件であった。当日、明治学院の通学生や先生は、朝登校してあの高くそびえていた堂々たるへボン館が煙氣楼のように消えてしまっているのを見て、自失せんばかりであった。その朝授業のために出講して来た大嶋広氏（理学博士）は当時をしのんで次のように書いている。

「大学を卒業したばかりの私が、井深先生に招かれて、はじめて教壇に立ち、学院の中学生たちに博物の授業を受け持つことになったのが卒業の年、すなわち一九〇九年の九月のことであった。そのころの大きな事件として思い起すのはへボン館の火災です。それは一九一二年九月二十一日のこと、朝、平常通り、門をはいって何気なく前を見ると、すぐ目の前に立っているはずの校舎がなくなっているのではないですか。早朝失火、へボン館とハリス館とが烏有に帰し、三十人あまりの寄宿生が焼け出されたのです。しかし校舎の復旧工事はすみやかに進められ、十一月には新築校舎の開館式が挙行された。ところが、あ

の火事のあったその同じ日の朝、九十六才の高令のヘボン博士がアメリカで昇天された由を後で知らされたのです。単なる偶然の符合とは言いい切れない、恐ろしいような、不思議な事実でした。」

また「白金学報」第二十五号、ヘボン博士及びヘボン館記念号をよむと井深総理、宮地謙吉、服部綾雄、山本秀煥、その他多くの同窓会員や学生たちのヘボン館の思い出とヘボン博士のことが記されてある。



ヘボン館火災

明治学院のシンボルはヘボン館であった。島崎藤村や馬場孤蝶、鈴木春生方敏郎、佐々木邦、都留仙次、村田四郎、中山昌樹、賀川豊彦など、みなヘボン館かハリス館に住んだことのある人々であった。のち神学生がセベレンス館に移ってからはヘボン館は普通学部すなわち中学の生徒たちの寄宿舎となり、三谷隆正や落合太郎博士など普通部生徒が在舎していた。ともあれ、ヘボン館は夢のごとく、まぼろしのごとく、多くの同窓生の胸に今もなお、アルマ・マターとともに生きている。(その後新ヘボン館と称する小規模の二階建ての寄宿舎が出来たが、昭和十五年中学部校舎新築のため取壊はされ、さらにこの校舎も戦後取壊はされて昭和四十一年の秋、十二階の鉄骨コンクリートの壮大な高層建築「ヘボン館」がかつてのヘボン館敷地に新しく建てられた。)

同じようにヘボン博士の精神は、ひとり学院の同窓、教職員、学生のみ

ならず、全日本のキリスト教会と信徒の胸に生きている。昭和二十四年宣教九十年はヘボン来日九十年とされ、また、その年の十月十八日、横浜山下町（旧居留地）三十九番地、ヘボン旧邸にヘボン記念碑が除幕された。さらに昭和三十四年十一月には日本プロテスタント宣教百年記念大会が行なわれ、ヘボン、ブラウン、フルベッキなど初代宣教師の精神が新しく一般信徒の胸によみがえる感があつた。ヘボン博士はヘボン館の焼失と時を同じうして永眠した。けれどもヘボン博士の精神は脈々として日本のキリスト教会に、日本語の聖書に、明治学院と同窓の中に生きている。

ヘボン館とハリス館の火災によつて、学院はその対策にいそがしく、その間、多くの準備ができなかったが、九月二十八日午後二時、学院講堂でヘボン博士追悼会が行なわれた。井深総理はヘボン博士の業績について、山本秀煌教授はヘボン博士の略歴を、卒業生代表として服部綾雄の弔辞があつた。当日来会の子定であつた逓信大臣伯爵林董、日本銀行総裁男爵高橋是清は、公務のため臨席できなかった。高橋是清は記念として金百円を送られ、岸田吟香よりきれいな花環が贈られた。これらの人々はかつてヘボン塾あるいは施療所でヘボン夫妻に恩顧をうけた人々であつた。ヘボン博士についてはそのたびごとに述べてきたので、ここに博士の晩年について記してみた。

滯日三十三年ヘボン博士は一切を捧げつくし、七十六才、ついに、明治学院を副総理井深梶之助にまかせ、最後に横浜指路教会を献堂し、「日本の宣教と日本のキリスト教教育とは日本人の手によつてなされるべき」を信じ望みつつ、故郷なき旅人のように住みなれた横浜と美しい日本の風光をあとに日本のキリスト者と教会に対する無

限の愛着を胸にいだきつつ、明治二十五年十月二十二日ゲーリック号でさびしく横浜埠頭を去っていった。しかし博士はその後、二十年間、ニュージャージー州イースト・オレンジの家で平和な晩年を送られた。その間渡米した、多くの日本人や日本のキリスト教指導者の訪問をよるこんで迎え、また、日露戦争当時、外債募集の使命をおびて英米に派遣された高橋是清が、ニューヨーク滞在中、ヘボン博士をイースト・オレンジに訪ねたとき、夫人病みて病院に療養中であつた。孤独な老博士が応対したので、さすがの豪放な高橋も肅然として次のように書いてゐる。これはグリフィス博士に送つた高橋の手紙の一節である。

「この様に私はヘボン夫人に教つた関係があるので、最近イースト・オレンジを訪れたとき、夫人に会う事が出来なく、非常に遺憾であつたけれどもヘボン博士は私を見て、また、林子爵やシャンド夫妻など倫敦に在る博士の友人の事などを私から聞いて、大変喜ばれた。私はこの老紳士に深い同情を禁ぜずにはおれなかつた。我々にかかる老境にある、且つ、かかる耐えがたき事情にある我国の恩人を慰めるために、最善をつくさねばならぬと思ふ」

一九〇五年（明治三十八年）三月十三日、ヘボン博士九十才の誕生日に、多くの友人たちがイースト・オレンジの家を集つたとき、米国駐在公使高平氏から「我天皇陛下は貴君が日本に在住せる間、日本人英語教育の発達と、我帝国の進歩に貢献する処ありしを嘉し、旭日三等の勲章を交付せらる。本官は本日貴君の第九十回誕辰に当り之を贈呈するの光榮を有す謹んで祝意を表す」と伝えた。博士はこれを入院中の夫人に伝えた。八十八才のクララ夫人は病室から夫に祝辞を送つた。プリンストン大学はヘボン博士に、法学博士（LL・D）の学位を贈

った。一九〇六年三月四日、クララ夫人は永眠。一九〇八年、博士九十三才の誕生日に、後の米国大統領、当時プリンストン大学の総長ウッドロー・ウイルソンは祝辞を送った（原本は明治学院大学図書館に保管）。一九一〇年（明治四十三年）井深総理は、エジンバラの世界宣教大会に出席し、米国を経て帰国のみぎり、イースト・オレンジのヘボン博士を訪れた。しかしまもなく一九一一年七月、博士の健康は急変し、同年九月二十一日永眠し、イースト・オレンジの長老教会で葬儀が行なわれた。遺体は近くにあるローズデールの墓地、美しい緑の芝生にバラの花咲く墓地に、葬られた。墓石は大きく日本の墓石に似ている。墓石のうしろに小さい三つの墓がある。日本宣教に旅立つまえに葬った三人の幼児の墓である。すぐ側に黒い自然石の墓がある。それは明治二十四年卒業の奥野武之助の墓である。米国留学中に没したので、博士がその父奥野昌綱の友情を忘れず、みずからこれをたてた。

ヘボンの住んだ家も礼拝したブリック長老教会もそのままイースト・オレンジの町にある。遺族には一人息子があつた。長く横浜に住み、ヘボン博士永眠の際はスタンダード石油会社長崎支店長であつた。後年ペンシルバニア州のロック・ヘボンに住まった。子供はなかつた。弟のステラー・ヘップバーンはニュージャージー州のオレンジ・カウンターの一長老教会牧師として終始し、一人の孫娘、ミス・ヘップバーンはコロンビア大学の図書館司書として四十年間勤務し現在、ニューヨーク州ニュー・パルツに平安な生活をしている。昭和三十八年学院を訪ね、また現ヘボン館下にたつているヘボン胸像のために百ドルを寄付された。

大
正
編

第一章 成長時代

中学部の復興と変動

普通学部が明治三十二年の文部省訓令によって中学校の資格をはく奪され、生徒は減少して衰微をきわめたことは、明治篇の「文部省訓令第十二号」に詳述した通りである。明治三十六年になって各官立高等学校、専門学校への受験資格が与えられ、ようやく復興のしるしが見えはじめたが、大正四年に、それまで再三申請していた普通学部を中学部と改称する件が認可された。

「学院普通学部ヲ中学部ト改称セン事ヲ再三出願セシニ終ニ文部大臣法学博士一木喜徳郎ヨリ大正四年二月十三日明治学院普通学部ヲ明治学院中学部ト改称ノ認可ヲ得タリ」（大正四年二月十一日臨時理事会記録）。そのころから年々志願者数がふえはじめ、ようやく募集定員を上回るようになり、年によっては二、三倍の競争率となった。これは大正三年にはじまった欧州大戦の影響によるわが国経済の好転とともに中産階級が子弟の教育に投資するようになり、全国的に進学人口が増加したためとみられる。当時の学籍簿を見ると後に名をなした人や、その子弟たちが在学していて面白い。

中学部となつて第一回に入学したものの中には、三井銀行の重役になつた宮地通彦や評論家の堀秀彦の名がある。宮地は学院の宮地謙吉の子息であり、堀は同じく水戸幾次郎の子息であるから別に不思議はないが、意外なのは東条英機の弟東条貞雄である。東条はその二年前の大正二年にも次弟の規矩郎を学院に入学させている。当時東条は白金台町にいて、この二人の弟を自宅から学院に通わせていた。大正六年には有田八郎の子息辰郎が入学しており、その他、父親や保証人には後に有名になつた人々の名が見える。明治の末期には右翼の頭目であつた頭山満の長男も在学している。東条も頭山も必ずしもキリスト教ぎらいではなかつたようだ。

大正末期の十年間の生徒の増加率は次の通りである。(なお、授業料は大正五年に一元五十銭を二元に増額しているが、これは第一次世界大戦後の物価騰貴によるものと思われる。)

年 度	在 学 生 数	志 願 者 数	入 学 者 数	年 度	在 学 生 数	志 願 者 数	入 学 者 数
大正 六年	四七一	一五七	一二二	十一年	七二三	五五〇	一七九
七 年	五四一	二〇五	一四九	十二年	七九五	三六一	一七五
八 年	五六六	二六二	一七二	十三年	七八九	四三五	二〇五
九 年	六六五	三六五	一八一	十四年	八一〇	三四二	二〇二
十 年	六六五	四二一	一八〇	十五年	八三一	三〇八	二一八

(明治学院五十年史)

教師としては次の記録がある。

「和田英作氏自ら進んで中学部一年生ヨリ三年生マデ無報酬ニテ其独得ノ理想的教授ヲ試ミタシトノ希望ヲ申出タリ故ニ其希望ヲ容レ囑託スルコトトセリ」(大正四年二月十一日臨時理事会)

「和田英作氏去四月以来無報酬ニテ図画ヲ教授シ居リ謝儀トシテ金五十円ヲ呈スルコト」(大正四年十二月十七日常務理事会)

翌大正五年には学院の生んだ英語の鬼才石本三十郎の子息で東大英文科を出た石本音彦が、翌六年には自然科学の平瀬信太郎、国文学の島津久基らが就任しており教師の陣容もますます充実して行つた。生徒の増加に備えて屋内体操場の一部を教室に改造し、新たにジェームス基金二万円をもって大正八年に体育館を建設した。木造一階建コンクリート張百十二坪、中学部校舎と久原邸(八芳園)とのあいだに建てられ、雨天体操場となり、あるときは柔剣道の道場ともなった。

関東大震災のあと米国の配給木材で高等学部(井深ホール)が新設され、それまで高等学部校舎であった新サングラム館を水声部長は中学部の理化教室として完備するなど、収容態勢をととのえたが、生徒は増加の一途をたどり大正末期には千名に近くなった。

大正八年、熊野部長が老齢のため辞任し、学院教会(後述)の牧師兼中学部の聖書教師であった村田四郎が三十六才でその後任となった。村田は校紀の肅正と宗教教育の徹底を期するため、陣頭に立って画策につとめた。

「村田氏がガ中学部長トシテ就職シテ以来中学部ノ規律ノ面目ヲ一新シタル事ハ蓋シ什目ノ観ル所ナルベシ同氏ノ

如キハ実ニ適所ニ適材ヲ得タルモノト謂フベシ」(大正八年十一月五日理事会記録)。ところが、その直後に部長排斥のストライキがおこった。当時の在学生数は五六七名で、教員数は二十九名であった。「高師出身の三教師が妨げとなっていたので、この三人を辞職させ、赤井米吉氏を教頭に迎えて中学部を再興しようとしたが、事前にもれた。結局、前記の三教師は辞表を出したが、運動部に関係があったので運動部の学生から騒ぎ出し、全般的な同盟休校にまで発展した」(村田四郎氏談)

結局、村田は三か月の休暇をとって山口に帰り、部長を辞任して朝鮮の大邱教会へ赴任した。

高等学部 of 合同運動

キリスト教大学設立の第一段階として、各ミッション・スクールの高等学部を合同しようとする運動が、明治の末年、すなわち大正元年より明治学院が主導者となつてはじめられた。これは日本基督一致教会の伝統的精神によるものではあったが、一九一〇年(明治四十三年)総理井深樞之助が出席したスコットランドのエジンバラで開かれた万国宣教大会の決議にそつたものであった。

明治四十四年普通部(旧中学部)校舎が同窓生と米国の有志の寄付によつて建てられ、それまでの普通部校舎であつたサンダム館が、ほとんどあき家同然となつたため、学院は高等学部の拡張と充実を計ることになった。まず大正元年、部長制を採用し、神学部長に井深総理が、普通部兼高等学部長に熊野幹事あたり、翌二年ライクが専任高等学部長となつてそれぞれ各部の充実を計つた。

各派キリスト教主義学校の高等学部合同問題と大学設立に最も積極的であつたのはインブリー教授で、立教学

院、青山学院、聖学院、東京学院に対して高等学部を強力に働きかけた。そして同時にインブリーは本国ミッシヨンボードへも井深、ライクと連名でこの計画に対する理解と援助を懇請した。大正二年四月二十六日付ミッシヨンボードあての書翰の一節には次のように記されている。「過去両三年間日本に一つの基督教大学を建設せんと欲して、明治学院は東京市内に於ける諸基督教学校に対し、其の高等学部の経営事業を合同せしめたまき旨を提唱し来り候。(中略)基督教大学の実現に関しては在日本各派のミッシヨンは区々の意見を有し候て、一挙に第一流の大学を設立すべしと云うものと、先づ高等専門学校の完備せるものを造りて漸次之を大学に昇格すべしと主張する者と有之候、小生共の目下の合同計画は、その両説の折衷に基くかと存じ候」(明治学院五十年史)会記録によつてわかる。明治学院のユニオン・ムーブメントとして記録されるべき運動であつた。

この合同問題に対する青山学院の態度は、次に記す「青山学院九十年史」の記事によつて知ることができる。

「青山学院の兄弟校ともいふべき明治学院は高等科合同に熱心であり、大正三年一月、同学院総理井深梶之助が青山学院に対し、高等科合同の協議を申し込んで来た。青山学院理事会は、数十年の歴史を有し数千の出身者を出しその名を世間に知られている青山学院高等科を離すことには賛成できなかったが、問題はきわめて重要なことなので、このことを、米国メソジスト監督教会伝道局およびガウチャー博士に伝え、合同に関する意見を求めたところ、同伝道局より本年の秋に伝道および教育視察委員を派遣するから、その時まで決定を延期するようにとの返事があつた。このため青山学院の拡張案の実施は、この合同問題が決着するまで延期するのやむなきに至つたが(この間校友会委員会では高等科合同案および拡張案について討議し、青山学院は単独にて拡張案の遂行に努むべき旨を決議している)、同年九月、米国メソジスト監督教会伝道局書記ノース、同局

員ヘーヴンが来日し、十月にはガウチャー博士が東洋における伝道および教育視察委員として来日したので、青山学院は十月十五日および十九日に臨時理事会を開き、右三委員出席の上、明治学院提出の高等科合同案について協議した結果、これを受理しないこととし、前記の青山学院拡張案をさらに拡大し、具体的な拡張計画をととのえたのである。」

せっかく米国協力ミッションの希望であり、エジンバラ会議の決定を持つて、世界YMCA同盟会長たるジョン・アール・モット博士が来朝したにもかかわらず、右のような理由で青山学院はこの合同提案を拒絶した。青山、立教との合同に失敗した明治学院はバプテストの東京学院と合同し、大正三年四月よりサンダム館で開講したが、東京学院から一年級に七名の学生が加わった。東京学院よりは千葉、曾根、佐々木、山口、グレセット、テンニ一の諸教授が来講し、明治学院よりはホフソンマー、マクネヤ、石原謙、大島広、山谷省吾、水芦幾次郎が教壇に立ち、授業は非常な活気を呈した。しかし不幸にも同年十一月二十四日サンダム館が焼失して教室を失った。やむなく普通部や新ヘボン館の間に間借り授業をして再興を計ったが、ミッション本部からのこの件に対する回答は悲観的なものであった。また日本基督教会に訴える余地もなかった。それかといって同窓生には最近普通部校舎の建築のため少からぬ寄付金を訴えたばかりであったので資金難におちいり、東京学院との合同は継続不可能となった。

サンダム館の焼失

大正三年十一月二十四日、サンダム館は、授業中に出火して全焼した。サンダム館は明治二十年一月明治学院設立認可が下りると同時に、白金の丘に最初に建てられた三階建

の校舎で建築費は七千円、その資金はリフオームド・ミツシヨンに關係のあつた米國の富豪サンダム(Sandham)の未亡人が、亡夫の記念に提供したものであつた。

「明治学院五十年史」によれば、天井附近より発火したため手の下しようもなく、学生たちの奮闘によつてわずかにヘボン、ブラウン、マコウレイ、ワイコフなどの肖像を持ち出したのと、ライシャワー教授のあつせんで米國から到着したばかりの巨大なペダルオルガンをかろうじて運び出しただけで、歴史的に重要な書類や、あづかつていたミラー博士の家財道具など、すべて燃えつくした。

炎はさらに神学部（現在の記念館、ただし位置変更）の塔に燃え移り、屋根から煙をふき出した。その下には図書館があり、一万巻の貴重な図書が蔵されていたので、学生たちは書庫に押しよせ窓から蔵書を泥水の中に投げ出した。現在、東京神学大学に所蔵するこれらの図書に汚点や破損のあるのは、そのためであるという。さいわい神学部建物はそれ以上延焼せず、またサンダム館に最も近かつた井深総理邸は必死の防火につとめたため類焼をまぬがれた。しかし、火勢は方向を変えて宣教師館インブリー邸（現在同窓会館、ただし位置変更）へも延びたが屋根の一部分をこがしたのみで大事にいたらず、くいとめることができた。

この大火で活動した学生の中、神学部学生一人が総理邸の窓から投げ出されたトランクに打たれて、こん倒する重傷を負つたほかには死傷者はなかつた。ただ三本の記念樹の大木が、大火傷を負つたのが痛々しかった。その一つは今校庭に枝を張る大いちようで、黒く焼けたのを枝を切つて移植し、ようやくそ生したものである。島崎藤村らのクラスが植えた記念樹の桶の木も半身が焼け、その回復があやぶまれたが数年後には生氣を取りもど

し、緑したたる木かげを作るほどに繁茂した。今一つの一八八九年の記念樹であるまきの大木は、手当をつくしたが、ついによみがえらなかつた。

島崎藤村は自分たちの記念樹の焼け残ったことを喜んで「古い学窓のこと」と題する文の中に、次のように書いてゐる。

「記念樹も変らずあるだろうか。古い記念樹のなかで、学校の火災の折に辛くも生き残ったのは、私達よりも以前の卒業生が植えた銀杏と、私達の植えたものとの二株だけと覚えて居る。おそらく他の級の記念樹が割合に耐火力の少なかつたもので、偶然に選ばれたあの二株だけにその力があつたのかも知れない。それにしても、あの学校の庭の芝生の一隅を択んで、記念の石までその根元に残して置いて来た樹の名の何であつたということすら、はつきり思ひ出せない。

風のたよりに聞けば、今の学校の生徒が休み時間毎に、夏の樹陰でも楽しみに行く場所は、私達の植えて置いた記念樹の周囲であるとか。あの樹の古くなつたことは、そんな話を伝え聞いたばかりでも想像せられる。どうかするとあの樹の枝には、生徒が鈴なりに生ることもあるという。生れ、生れ、学生諸君から見ればあの樹は旧い卒業生の形見で、私達から見ればあの樹は年とつた自分等も同じことだ。私はその話を聞いた時に、若い人達が来て自分の腕にぶらさがりでもしたように思った。」

礼拝堂および新サンダム館の建築

ミラー記念礼拝堂が二回の地震により破損して以来、全校生徒の唯一の集会場であつたサンダム館が焼失したため礼拝堂と高等学部校舎の

建築が急務となつた。この資金をプレスビテリアン、リフオームド両ミッションボードに訴えたが、臨時の支出はボードの経済事情より不可能であるが、学院の損失を償うためだけの努力は惜しまないとの返事であつ

た。しかし、学院理事会は他に方法がなかったため重ねて事情を詳述して再度援助を申請した。インブリー博士の執筆した一九一五年（大正四年）二月十六日付上申書の一部分を「明治学院五十年史」より引用して当時の苦境をしのぶこととする。

「貴局が本学院最近の火災に於る損失を認められ出来る限りの善後策を講ぜらるる御好意を感謝仕候。今左に理事会の要求に基き左の事実を御報申上候。

前便を以てミロール（ミラー）氏夫妻の寄贈にかかる礼拝堂の状態につき日本建築士の精細なる試験表を添えて申述候。其後ヴォーリス及びヴォーゲル合名会社に再度の調査を願ひ候。同社は御承知の通り、近江ミッシェンと知られし伝道事業をなすと同時に、専門的技術を以て建築事業に中るものに有之候。彼等の調査の結果は日本建築家の意見と符合致し候。彼等は何れも、現在の建物は之を先づ取壊し、その材料は出来る限り他の地域に建つべき新建築の用材となすべしとの適確なる結論に至り申候。

サンダム館に関しては従前通りの規模は必要無之候へども、高等学部としての施設を要する外に、従来の通り神学部のために二教室、会計課の為に一室を要し候。尤も後者の一室は高等学部の事務室として兼用のものと相成るべく候。此の建築に就いてはバプテストミッションは借料として幾分の費用を分担致すかと存じ候、また恐らくは「基督教会」も之に加担致すべく候。この三者は高等学部に於て協力致し居り候。

以上の事情より二建築物を要するは焦眉の問題に御座候。云々」

以下は設計や資金に関し詳細に述べられているが、概要は次のようなものであった。

- 一、礼拝堂は旧ミラー記念礼拝堂の材料を用いて一万五千元。
- 二、新サンダム館は一万八千元、但し一万円は火災保険により、残り八千元はサンダム女史が令兄の記念のため

に寄附する心組みありとのこと故リフオームド教会へ訴えること。

三、セベレンス氏の令息が亡父の遺志として一万五千元を土地購入費として寄附する旨井深氏へ約束があったが隣接海軍墓地の払下げの見込みがないので、この金を礼拝堂建築費に当てさせてもらうようセベレンス氏へ依頼すること。

四、ジェームス夫人が井深氏へ土地購入か又は改善費のため一万ドルを寄附する申出があり、これは高等学部（新サングラム館）の改善費として保管致し度きも、サングラム女史の申出による八千円がリフオームド教会より到着するまでこの資金を流用すること。

以上のインブリーの手紙の内容は、大正二年十二月二十日の理事会での井深総理の報告によって裏付けられる。

「井深氏曰ク、予ハスピヤ氏ヨリ書信ヲ落手セリ、其書ニ曰ク、セベレンス氏ノ子息セベレンス氏其父ノ遺旨に基キ七千五百弗（金貨ニテ）ヲ必ズ寄附スルコトヲ約セリ、但シ地所購入ノタメナリ云々

又曰ク、故ゼームス氏夫人ヨリ其亡夫ノ遺旨ニ從ヒ金壹万弗ヲ寄附シ来レリ、但シ地所購入ノ為ナリ。仍テ総理及ビ書記ハ英文及ビ日本文ヲ以テ謝状ヲ送ル事トセリ」

大正四年の春から夏にかけて井深とインブリーの奔走により、建築資金の調達にとめたが、おりから第一次欧州大戦で建築用材の騰貴をきたし、ヴォーリス会社は一部設計を変更し九月中旬より基礎工事がはじめられ、十一月三十日に定礎式を行なった。「一、去ル十一月三十日講堂及新サングラム館ノ定礎式ヲ執行セリ当時來朝ノドクトル・スピヤ、ドクトル・チャンプラン参加シテ其ノ式ヲ助ケタリ」（大正四年十二月三日第廿六回理事会



高等学部

記録) たまたま来朝中であつたプレスビテリアン外国伝道局主事スピーア博士が礼拝堂の、そしてリフォームド教会外国伝道局のチェンバレン主事が新サンダム館(高等学部)のすみの首石をすえた。礼拝堂は現在の位置であり、新サンダム館の高等学部は現在ヘボン・ホールのある場所であつた。礼拝堂の首石をすえたスピーア博士は、その時一場の演説をしたが、次の言葉でそれを結んでゐる。「私はこの石を単にこのチャペルの建設のために据えるのではない。神の国建設という永遠の事業のために据えるのである。」

礼拝堂は翌大正五年三月落成し、二十七日卒業式をかねて献堂式が行なわれた。建坪一一三坪六合。新サンダム館は五月に完成し普通学部や寄宿舎に間借授業をしてゐた高等学部生を収容した。建坪七五坪。「講堂及高等学部ノ建築其他ノ費用総額二万四千四十九円二十錢及び五千七十九円九十錢二口合せて二万九千三百三十九円十錢ヲ費セリ。」(大正五年六月二日常務理事會記録)その後、関東大震災で新サンダム館は破損したためコンクリートで造りなおし当時の赤レンガは見えなくなった。この建物は学院唯一のコンクリート造りであつたので、その後図書館となつたり、中学部の理化教室に用いられたりしてゐたが、新ヘボン・ホール建設に當つてむざんにも破壊され今は跡かたもなくなった。サンダム兄妹の篤志は永久に記念されねばならない。またチャペルは、その後せまくなったので、大正末期に設計者ヴォーリスによつて、両袖を拡張し十字架形とした。最近は講壇の一部を改造してパイプオル

ガンもすえられるにいたったが、この礼拝堂建設資金を出したセベレンス父子の好意を忘れてはならない。

大正五年の春、米国篤志家の寄付によって新礼拝堂と新高等学部校舎を与えられたが、翌大正六年の三月、学院はミッシェンボードより無代価で寄付されていた築地の土地、建物を処分して金四万円の多大の基金を得た。築地明石町十七番地にあった東京一致神学校の土地建物は米国プレス、ピテリアン、リフォームド両教会およびスコットランドの一致プレス、ピテリアン教会の外国伝道局の共同財産であったが、明治三十九年からインブリー博士がこれを明治学院に寄付するよう三教会の本部に交渉を開始し、満三か年を費して明治四十二年の春学院の所有となった。大正六年聖路加病院に金四万円で譲渡し、以来築地基金となった。この財産はそれまでの賃貸料、その後の基金の利息は主として神学部維持費、神学生の奨学金にあてられて学院の財政を維持したことも、記憶されねばならない。

憲法の改正

明治学院憲法は明治二十四年に制定せられ、明治三十八年には財団法人となって寄付行為が認可されたことはすでに明治篇に記されているが、大正六年にいたってこの憲法を改正するの議がおこった。「学院憲法ヲ改正スベキ必要アリ委員三人ヲ選挙シ次会ヘ其案ヲ提出セシムルコトトシ井深、インブリー、長尾三氏拳ゲラル」(大正六年二月八日臨時理事会)「インブリー氏明治学院憲法ノ改正委員トシテ報告スル所アリ審議ノ上数ヶ条修正可決ス」(大正六年三月廿一日理事会)改正された憲法は次のように明治の憲法といちじるしく異っている。それは、ミッシェンの字句が全然抹消されて日本人による日本の学校としての形式をと

っていることである。その間、日本も日清、日露の両戦役さらに第一次世界大戦を経て国力も増大したが、同時に明治学院の成長独立を認めようとする意図がうかがわれる。これは日本側の要求というよりは、むしろプレスビテリアン、リフォームド両ミッションボードの学院創立いらいの希望にそうものである、と同時に寄付行為との關係を明示したことに於いて意義ある改正であつた。

明治学院憲法

第一条 目的

明治学院設立及び維持ノ目的ハ基督教主義ニ基キ普通並ニ高等専門ノ教育ヲ施シ殊ニ神学部ニ於テハ基督教教師タル者ヲ養成スルニアリ

第二条 理事

- 一 理事会ハ明治学院ヲ総轄ス理事ノ選舉組織及職務ハ明治学院財団法人寄附行為ニ明記セラル
- 二 理事会ニ議長書記二名(邦文及英文)會計一名ヲ置ク此等ノ職員ハ通常年会ニ於テ投票ヲ以テ選舉ス
- 三 理事会ハ年会ニ於テ投票ヲ以テ常務委員五名ヲ選舉スベシ常務委員ハ理事会ノ中間ニ起ル必要ノ事ヲ処理ス但シ其決議ハ理事会ノ承認ヲ要ス

第三条 学部

明治学院ニ中学部、高等学部、神学部ノ三学部ヲ設ク

第四条 教授会(又ハ教員会)

- 一 明治学院総理(其職權ニ由リ)及各学部長並ニ諸教員ハ其学部ノ教授会(又ハ教員会)ヲ構成ス
- 二 教員ヲ區別シテ専任兼任ノ二種トナス此區別ハ理事会又ハ常務委員会之ヲ決定ス
- 三 各学部ノ教授会(又ハ教員会)ハ其学部ニ關スル教育上ノ事ヲ直接ニ掌理ス

第五條 評議會

- 一 総理及び各学部長並ニ各学部教授会（又ハ教員会）ヨリ互選セラレタル代表者一名宛ヲ以テ評議會ヲ構成ス
- 二 評議會ハ諸学部共通ノ問題ヲ審議シ而シテ其意見ヲ教授会又ハ教員会又ハ理事会ニ提出ス

第六條 改 正

本憲法ハ寄附行為ニ於テ与ヘラレタル権能ニ依リ理事会ハ隨時之ヲ改正スルコトヲ得

ライシャワー博士と高等学部の改革

一九一七年（大正六年）三月二十一日に開かれた第三十二回理事会において、次の諸件が決議されている。

「来年度ヨリ高等学部ニ於テ商業科ヲ設置スルノ件ハライシャワール、石川、里見ノ三氏ニ考案ヲ立テシムルコト」

これより先、大正五年の暮、高等学部校舎としての新サンダム館が落成し、大正六年ライシャワー教授が高等学部長に就任して、石川林四郎、里見純吉両理事を相談相手として高等学部の整備充実を計った。

従来ノ三カ年英語専門学校を予科一年、本科三年の四年制とし、文芸科、商業科、英語師範科の三科にわけ、大正七年より生徒募集をはじめたが、学生数が意外に少なく、多くの教授陣をかかえて経営は次第に困難になり大正十一年英語師範科を廃止し、文芸、商業とも修業年限を三カ年とし、商業科の学生の増加とミッションや同窓生の援助によつて、かろうじて経営を維持することができた。この間、ライシャワーは大正八年十一月部長を辞任し、水声幾次郎が高等学部長となったが、大正十年水声が中学部長に転じたため神学部教授都留仙次が高等

学部長に就任した。

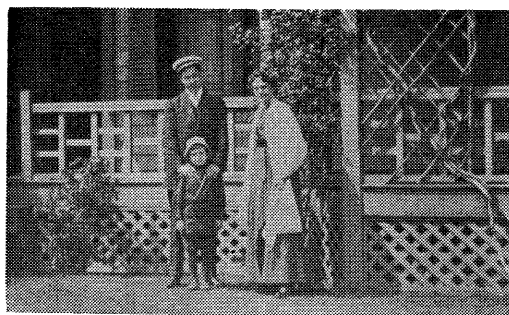
都留は商業科主任の石橋近三と文芸科主任の中山昌樹と協力して、教授陣容の充実を計った。その方針は堅実なキリスト教信者の教授、講師をそろえることを主眼とした。大正十三年都留は井深のあとをうけて神学部々長事務取扱に転出したが、なお高等学部長を兼務した。「明治学院五十年史」は「明治学院高等学部の基礎は大正十四年都留氏が部長となられてから氏が同十四年三月に辞任されるまでに置かれたと言つてよからう」と記している。ライシャワー高等学部長時代に高等学部の主簿を兼務していた都留教授は、エー・ケー・ライシャワー博士伝「準繩は樂しき地に落ちたり」の中に次のように記している。

ライシャワー博士は、学者であると同時に企画経営の才幹をも具有し、実行推進力の持ち主でもあった。彼は明治学院在職中、一九一七年（大正六年）高等学部長に就任し、その学制を大巾に改正した。すなわち、従来高等部は普通部の一翼として存在していたのであった。明治学院は従来、神学部と普通部の二部であつて、高等部と呼ばれたものは中等教育の上層に一般の高等普通学を授ける教養学科であつて、多分に神学予科の性格を帯び、その学生も大部分は神学予科生であつた。（中略）

ライシャワー博士が高等学部長に就任するに當つて、高等学部の教科内容も性格も大巾に変革されるに立ち至つたことは先に述べた通りである。すなわち、この変革によつて明治学院は神学部と、高等学部と、中学部の三個の組織となり、その高等学部は専門学校令に拠り、これに英文科、英語師範科、商科および社会科を置くことにした。ライシャワー博士はこうして高等学部において英学者、英語教員、実業人、社会奉仕者を基督教的精神と雰囲気のもとに養成することを念願し、その縁に沿つて拡充、邁進したのである。（注・英文科、社会科とあるは誤り）

当時ライシャワー博士から教えを受けた桑田秀延博士は同書に次のように記している。（抜萃）

ライシャワー先生ご夫妻が日本にお出でになつたのは一九〇五年のことで、これは日露戦争の直後であつた……



着任当時のライシャワー夫妻

先生たちとはかく芝白金の明治学院構内におちつかれた。当時先生はまだ二十六才でシカゴのマコーミック神学校を出、結婚せられたばかりの文字通り年少の宣教師であられた。先生は米国長老教会派遣の宣教師であったが、直接伝道に当たるというのでなく、明治学院の教授として来られた。これは先生の向きが、学問的なことであつたためである……当時の院長は院長と言わず総理とよんで井深梶之助先生であつた。そこへ若いライシャワー先生が高等学部として赴任して来られたわけである。私は一九一三年から一九一八年まで明治学院の高等学部と神学部にて在学し、最初は高等学部で後には僅かではあつたが神学部でライシャワー先生から教えをうけた。当時の明治学院は今日からは想像もできない程に全く自由な雰囲気の学校で、不備な点は多々あつたが、私たちは実に楽しい学生生活を享受した……

ライシャワー先生は主として高等学部で教え、私は哲学史の一部、ドイツ語、ギリシヤ語、ロマ書の講義をうけ、後には神学部で神学の手ほどきを受けた。明治学院では、外国人教師はすべて英語で教授したので、十分ききとれないような点も勿論あつたが、これは田舎出の私にはどれ程ためになつたか判らない程で、今日に至るまでこの事を有難く思っている……

当時先生のご一家は、今日の明治学院でいうと、チャペルの横に位し本部として使用されている建物（現在東村山高校にあるライシャワー館）に住んでおられた。三つの外人住宅の中央の建物で、水色のペンキで塗られた瀟洒なほなほ感じのよい家で、その横にテニス・コートがあつた。当時ライシャワー家にはご夫妻の間にすでにロバート、エドウィン（前駐日米国大使）、フェリシヤの三人のお子さんがあつた。ロバートさんは五、六才位の可愛らしい坊ちゃん、エドウィンさんは四才位で若干むつりしたところのあるお子さんであつた……先生のお家へは時々お茶に招かれて行つたことがあるが、夫人は品のよい方で、なかなかインテリだという印象を、学生ながらに得た。

学生として私が接したライシャワー先生は、先生の三十四才から三十九才までの間であるが、当時の私は先生がすでになかなか優れた学者であられることを講義その他を通して知らされた。

先生はすでに「人格不滅論」を書き、また最初の休暇帰米中の一九一三年にはニューヨーク大学から招かれて「日本仏教」に関する連続の講演をせられ、これは当時諸方面から高く評価され、同大学から神学博士の名譽学位を贈られ、その講演はマクミラン書店から出版された。日本仏教に関して英語で書かれたこれだけの研究書は、当時はまだ他には全くなく、この書はその後もながくこの主題の権威書と認められ、日本の仏教関係の諸大学ではこれを教科書として用いたときいている……

明治学院教授としてのライシャワー博士は、その後神学部に移り、近代基督教思想史と宗教史を担当された。このとき私は同僚の一人としてお交りをいただいたのだが、先生ご一家は間もなく、白金から井荻の東京女子大学構内に居を移されたと記憶する。

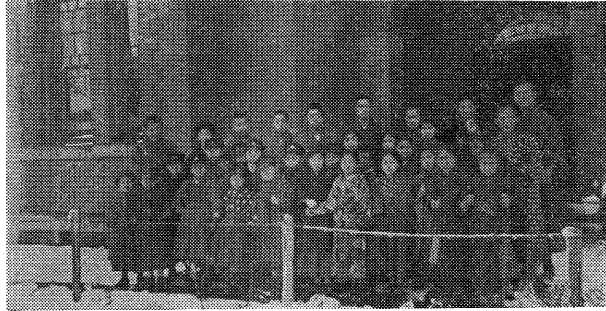
教師としての先生は、思うに、日本神学校となつてからよりも、明治学院時代二十五年の間がより楽しく愉快であられたのではないかと想像する……明治学院時代先生からうけた学恩に対しては、今日もなお深い感謝をおぼえているしだいである。

明治学院教会の沿革

大正六年十一月、理事会に学院教会設立の議が提案され、賛成を得た。こえて翌七年二月の理事会では次のように具体案がきまつた。

- (一) 牧師招聘のこと
- (二) 牧師は中学部聖書教授を担当すること
- (三) 牧師候補者は大阪同土館神学校教授村田四郎氏たること。

設立の目的は、学院の教師は全員キリスト者たる理想実現のためと、宗教教育を徹底せしめ学生生徒に洗礼を授け、教会につらならしめる機関とするためであつた。



学院教会日曜学校 (1919)

しかし、このような議がおこつたのには以前から理事会および米国ミッシェンの切なる希望があつた。明治四十五年一月二十三日の理事会記録には「普通学部教員ニハ爾来基督教信徒ニ限り任用スベキ方針ヲ以テ之レガ実行策ヲ講究スルタメニ井深、熊野、ライシャル、ライク四氏ヲ委員ニ挙グ」とあり、同年五月二十八日の理事会記録には、「理事会書記ヨリ遣ハシタル書面ニ対シ在米国プレスビテリアン伝道会社ヨリ返翰ニ、ヘボン館、ハリス館焼失ニ付寄宿舎、食堂等ノ建築ノタメ請求サレタル寄附金ハ学院教員尽ク基督教信徒トナラザル限リハ之ニ応ズルコト能ハズ云々ト書記ミロル氏ニ代リイムブリー氏之ヲ読ム、之ニ対シイムブリー、ミロル、井深三氏ヲ委員トシテ尚返翰ヲ送ルコト」とあることよつてわかる。いま一つの理由は高輪教会には学院関係者が多かつたが、牧師逢坂元吉郎氏（東大出身）が学院関係者を敬遠したことである。（村田四郎氏談）

学院教会設立は東京中会でも問題となつたが、翌三月には村田四郎は牧師として大阪から赴任してきた。礼拝には最初チャペルを使った。のちには旧神学部図書館（現在記念館）で行なつた。高輪教会より転会したものの学院の学生、教職員およびその家族で、毎日曜礼拝の出席は八十名から百名あつた。教職員には井深、熊野、水声、宮地らがあり、学生には後に牧師となつた日下一、山下操六などがいた。し

かし、翌年三月熊野雄七が中学部長を辞任したため、村田は牧師をやめて中学部長となり、後任の牧師として中山昌樹が京都吉田教会より赴任してきた。その後、井深、熊野両氏が学院構内より移転し、宣教師たちもそれぞれ地方に赴任するなどのことがあり、中山の熱心をもってしても教勢は次第に衰え、大正十二年二月、学院教会は滿五年の歴史をとじることとなった。衰微した原因について「明治学院五十年史」の著者は「會員に社会的、人間的多様性の欠如と学院との関係の不明りよう」をあげているが、教会は環境的に同種類の人間の集団では弱いことを証する結果となった。しかし学院教会は解散しても跡かたもなくなったのではなく、学生たち有志の希望によって昭和十年ころまで中山教授は日曜ごとに聖書講義をつづけていた。現在ワシントン在住の黒田牧師、聖書学院の岡村教授、群馬大学の名越教授、東京学芸大の加藤教授などはこのグループの出身である。また昭和初期から中期にかけて都留仙次が、中学部長の時代には伝道講演も盛んに行なわれ、決心者をつのり、クリスマスやイースターには多数の生徒が洗礼をうけ、それぞれ旧日基系の教会に転入せしめたものであった。

創立四十年記念式

大正六年十一月三日午前九時から、セベレンス記念の礼拝堂において、井深総理の司式により学院創立四十年記念式典が次の順序によって挙行された。

奏 楽 アンドリウス夫人

一 開会の祈禱 高等学部教授 ヘンリー・エム・ランデイス氏

二 聖書朗読 神学部教授 山本秀煌氏

三 独唱
オルチン嬢

四 教育勅語奉読

五 君が代二唱
会衆一同

六 記念式辞
総理神学博士 井深梶之助氏

七 感謝祈禱
中学部長 熊野雄七氏

八 校歌
会衆一同

九 祝辞

文部大臣 岡田良平閣下

東京府知事・法学博士 井上友一閣下

日本基督教会総務局代表・牧師 植村正久氏

諸高等基督教学校代表・哲学博士 元田作之進氏

十 独唱
オルチン嬢

十一 祝辞

九州帝国大学総長 真野文二氏

京都同志社々長 原田助氏

在日本北米プレスビテリアン宣教師団代表・哲学博士 デー・エー・モリー氏

在日本米国リフオームド教会宣教師団代表・神学博士 ゼイ・エッチ・バラ氏

神学部卒業生代表・牧師 石原保太郎氏

高等学部並中学部卒業生代表・学習院主事 松井安三郎氏

十二 四部合唱
学生有志

十三 十五年以上勤続教職員表彰

十四 頌栄

十五 祝禱 高等学部長・神学博士

エー・ケー・ライシャワー氏

奏楽 アンドリウス夫人

当日表彰された勤続十五年以上の教職員は次の通りであった。

ウイリアム・インブリー（四十年）ジョン・シー・バラ（三十七年）井深梶之助（三十五年）熊野雄七（二十四年）ヘンリー・エム・ランデイス（二十一年）河西銀之助（十六年）岡見正（十六年）宮地謙吉（十五年）

当日は晴天に恵まれ、京浜在任のキリスト教界、教育界の名士、同窓生が多数つどい、式後は運動会や展覧会がもよおされ白金の丘は祝賀気分にあふれた。当日、代読ではあったが文部大臣として祝辞を述べた岡田良平の祝辞がどんな内容のものであったろうか。

というのは、明治三十二年文部省訓令第十二号によってキリスト教主義学校から中学校の資格をはく奪した立役者は、ときの勅任参事官岡田良平であったからである。

服部綾雄の客死

米国カリフォルニア洲における排日運動は明治の末期からおこっていたが、大正二年排日土地法案が州議会に上程されるにおよび日本朝野の与論は高まり、法案阻止、在留民慰問

（「白金学報」第四十三号より）



英字新聞より

激励のため政友会は江原素六、国民党は服部綾雄を派遣することになった。

大正二年五月コレア丸で出帆したが、その船には井深梶之助、津田梅子も同船した。

井深は基督教青年会同盟会長として、同年ニューヨーク州レーキモンに開かれた万国学生基督教青年会

同盟大会に出席のためであったが、ハワイ、カリフォルニアにおいては服部江原と行動をともしして在留邦人を慰問激励した。なお井深はワシントンに行き、大統領ウイルソンに会い、また國務長官ブライアンには二回面会して、カリフォルニアにおける排日移民法の不当を力説して、その撤去に尽力するよう要請した。

これら三特使の訪米はサンフランシスコ・エギザミナーやワシントン・ガゼットなど米国の新聞に大々的に報道された。

服部、江原は太平洋沿岸の在留邦人慰問激励のため東奔西走したが、服部はさらに東方諸州を回りメキシコにまで入り、翌年四月帰国の途につこうとしてサンフランシスコのインペリアル・ホテルにおいて客死した。五十

二才であった。

服部は沼津の人、明治五年横浜に出てへボン家塾に入りへボン夫人のくんとうけ、へボン家塾が築地に移って築地大学校となり明治十五年石本三十郎とともに第一回の卒業生となった。母校にのこって幹事となり、学院の前身校の一つである英和予備校の校長をもつとめた。明治十九年、明治学院が設立され初代の幹事となり、理事員として学院創業期に尽力した。プリンストン神学校卒業後、牧会、実業界、教育界、政界において活躍しその生涯は波らん富むものがあつたが、明治学院理事員としても終生学院のためにつくした。カリフォルニア州の邦人たちは服部の死をいたみ、サン・マテオの墓地に巨大なオベリスクを立て犬養木堂の揮毫になる「服部綾雄君之墓」として記念している。

熊野雄七の隠退

熊野雄七は明治十九年明治学院が設立されたとき最初の理事員にえらばれ、明治二十六年服部綾雄、杉森此馬について第三代の学院幹事として招かれ、高等学部、普通学部（後中学部）の部長をも兼務して井深総理を助けて学院万端の事務および教育に従事すること二十六年、井深を学院の父とすれば熊野は母の役割をつとめた。まことに井深と熊野の二人は夫婦のごとく形影相添って四半世紀にわたる学院経営の苦楽をともにした。しかもこの二人は少年のころ、敵味方にわかれて戦った仲であることを思えば神の摂理のわざの不思議さを思わざるを得ない。

慶応四年（明治元年）熊野（旧姓福田）は弱冠十六才で大村藩の武士として奥州征討軍に加わり、土佐、長州

軍と合して会津若松の鶴ヶ城を攻めた。井深はそのとき十四才でいわゆる白虎隊に加盟できず、小姓として主君松平容保の側近にはべって城にたてこもっていた。熊野の属した官軍は勝ち、井深の主君松平は降伏した。その後二人の少年はそれぞれ異った道を歩んだが、明治六年に横浜のブラウン塾で机を並べることとなった。

これより先、熊野は大村藩の留学生として東京に遊学し、安井息軒の門に入って漢学を修めたが修学一年で慶応義塾に移り英学を修めた。明治五年横浜に出て外国人について英学を修めるべく、ジェームス・バラの門に入った。これが、かれがキリストの福音に接する機縁となり、ついに死を決してバラから洗礼をうけた。バラ塾の学生はその後、山手二百十一番のブラウン塾に移されたので、ここで、はしなくも井深とめぐり会ったのであった。

熊野は遊学をおえていったん帰国していたが、明治九年家族が横浜に移住することとなってふたたび横浜の地を踏んだ。最初東京府学事課に勤めたが、明治十一年共立女学校の幹事に迎えられ、ここにかれの終生のキリスト教教育事業がはじまったのであった。

彼が井深の懇請で明治学院に奉職した明治二十六年頃は、ちょうどその以前の極端だった欧化主義の反動がはじまった時期で、外人の設立にかかるキリスト教主義の学校は国家に害あるものとして、攻撃的とされ、社会の注意もその方向に向くようになって入学志願者は減じ、退学者も続出して、ついに全校生徒が四十三名となり、月謝の収入が五十円にも足らず、一人の教師の俸給にも足りないほどであった。その上、公立の中学校がぞくぞく設立されたので青少年は競ってその方に吸収せられ学院はますます窮境に立たされる状況であった。そこ

へ明治三十二年には文部省訓令第十二号によって中学校の資格は剝奪され学院は正に危急存亡の秋に遭遇した。
(大正七年七月発行「白金学報」第四十五号に載せられた熊野雄七談「二十五年の回顧」より)

熊野はこの間にあって井深を助けて明治学院の生命である、キリスト教主義の教育をよく堅持し通した。その
労苦はついに報いられて普通部はすべての特権を回復して、明治の末期には本校舎を必要とするほどに生徒は増
加し、米国有志の寄付と同窓生の募金によって新校舎を建築した。そのとき井深は海外の募金に、熊野と宮地は
国内の募金に当たった。大正時代に入って普通部は中学部と改められ、志望者は年々増加して活気を呈し、一流
の官公立学校へ進学するものも多くなるようになった。

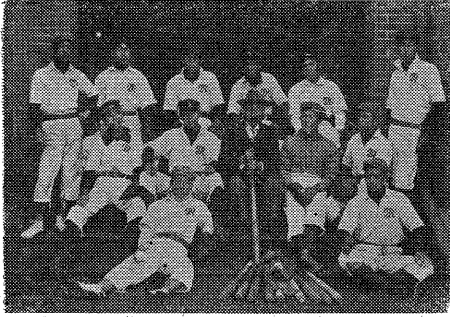
大正七年五月十八日、熊野雄七の勤続二十五年の祝賀会が学院で行なわれたが、「定刻前、会衆堂に満つる」
の盛況であった。(「白金学報」第四十五号大正七年七月発行)

その後、かれの健康は衰えはじめ、翌大正八年二月「老頹職に耐えず」と辞表を提出した。理事会はかれの二
十六年にわたる忠実、献身的な労に報ゆるに、「学院の恩給のほかに毎月金五十円を生涯贈与する」との決議を
もってし、その年の三月末をもって中学部長の職を解かれた。

熊野の辞任を伝え聞いた同窓生は熊野が隠退後住む家がなかったので、全国的に募金して神奈川県葉山に住宅
を建てて贈った。しかし、その家に住むことわずか二年、大正十年五月十日召天した。ときに七十才であった。

かれは牧師でもなく神学者でもなかった。終生、平信徒であったが、実に愛の人であり愛の実行者であった。

「氏の人格は実に大人の面影があつて、其の家庭に、或は財政的に、様々な悲惨事や困難が襲来しても、決して其れに屈託



熊野雄七と野球選手

している様は見えなかった。薄給の身ながら寄宿舎の学生を屢々招いて馳走したり、同僚を饗応したり、苦学生には学資を与えたり、実に寡慾恬淡、おしげなく他の幸福の爲めに与えた。又仲々厳格に生徒を叱正したが、何処か氏の心根には情が籠って居た爲めか、不思議に叱られた者共こそ今日まで氏の徳を慕っている。」(明治学院五十年史)

実際かれによって月謝を払ってもらったり、かれによって退学処分をまぬがれたり、かれによって救われた生徒の話は枚挙にいとまないほどある。厳格ななかにも実に生徒を心から愛した。その愛は生徒のだれにも通ぜずにはいかなかった。明治、大正時代の卒業生が最も親しみの念をもって想起する人物は、外国人ではヘンリー・ランドイスであり、日本人では熊野雄七である。

次に記す生方敏郎氏の談話などは、こうした熊野の面目を如実に伝えている。

『熊野先生はおもなで鼻すじがスーツと通っていてね。鼻が長いように見えるから、あだ名をゾウ(象)というんだよ。ところが本人はフォールというんだ。『ぼくは、君たちのフォールじゃないか』というんだ。フォールというのは慶応義塾の発音でね、父親(フアーザー)のことなんだ。ぼくらがまかない征伐なんぞやって、いたずらすると、先生のところへ呼びつけられて、そのときそういうんだ。それでぼくら先生に返し打ちができなくなっちゃうんだ。』

本当にそんなつもりでいたようだ、熊野さんの気持ちがね。自習時間の終わるのを見計らって女中さんが寄宿舎へ夜使いにきて「お茶あげるから、うちへいらっしやいよ」といつてくるよ。

先生の家というのはハリス館だよ。その一番はしの地階にいるんだ。紅茶や西洋菓子はまだ東京になかった時分だ。先生はちゃんと横浜から買ってきてあるんだ。五、六人ずつ呼んでぼくらに食べさせてくれた。小遣錢も制限されているから、それはやっぱりそこを察して先生の方でやってくれるのだ。

あるとき、こういうことがあった。

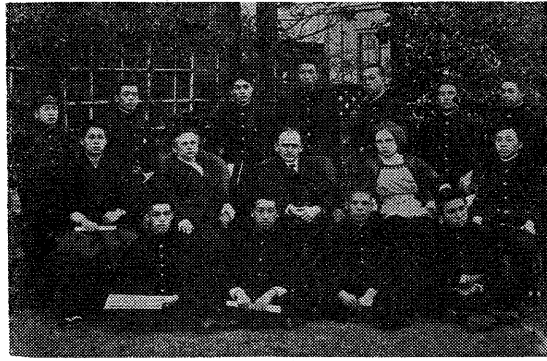
熊野先生の家の裏に、ぼくなんか知らなかったが広い畑があったんだよ。その畑一面にいちごがあるんだ。それを一年生が見つけた。そうすると、それを食いたくって、もぎに行くらしい。すると、ある日、朝礼拝の後で先生が「ちよつとみんな残れ」といわれるので、みんなが帰えらずにいると「ぼくの家の裏のいちご畑にいちごがなつたんで、みんながときどきあれをもぎに入るようだけど、あれはまだ熟していない。あれはだれのためかという、みんなにごちそうしてやろうと思つてぼくが作つたんだ。結局はみんなが食べられるんだから、荒してしまふと食べられなくなる。あれを夜なんか入ってきて、もがないうように」といわれたので、ぼくはそのときはじめて、いちご畑があることを知つた、その点ぼくは聞抜けだつた。はたして先生はみんなを呼んで、牛乳や砂糖なども用意してみんなにごちそうしてくれた。熊野さんはそういう人だつたなあ。親切だつた。実に親切だつたよ。』

ランデイス教授の面影

ヘンリー・エム・ランデイス (Lundin) は、一八五七年ペンシルバニア州で生まれ、幼時から数学の天分があつたがプリンストン大学では哲学をやつた。しかしか

れは心理学、数学、物理学、天文学、地質学、経済学の講座にも出ていたというほど多才が豊かであつた。

一八八六年同大学から数学の奨学金を得てベルリン大学に送られた。ドイツ留学から帰つて、プリンストン大学の神学校に入り、海外伝道の準備をした。明治十八年明治学院が白金に設立直前に来日し、哲学、心理学、論



ランデイス夫妻（中央）

理学、天文学、地質学等を教授した。かれは博覧強記、さながらエンサイクロペディアのような頭脳であったが、明治三十六年、ミラー記念礼拝堂建築の監督をした際、屋根のむねから堂内に転落して負傷し、この後はそのすばらしい頭脳は組織を欠くようになり、興奮しやすくなったが学生に対する愛情は変らなかつたという。かれは服装にも作法にも無頓着な野人であったが、かれら夫妻が学生を愛したことは、かれらに教えをうけた人々の永久に忘れることのできない記憶である。島崎藤村は「学院時代の戸川秋骨君」と題する文のなかに次のように記している。「故ランデイス教授が米国からの赴任も、わたしたちが二年生の頃のことであったやうに記憶するが、同教授の精緻な学風と熱意とはいつの間にかクラスのものの敬慕的となり、夫人もまた学生を愛して有志のものに独逸語の初歩を授けて呉れた。戸川君が独逸語の素養も先づ教授夫人から受けたものがその土台となつたくらいである」

「明治学院五十年史」の著者も次のように記している。「ランデイス教授は一切の才幹と心情と所有と家庭と健康までも傾倒して学院の青年を愛せられた：：他の家では兎もすれば感ぜられる遠慮と退け目とが、あの家庭でだけは夢にも感ぜられなかつた。それのみではない、ラテン語でもギリシャ語でも、フランス語でもドイツ語

でも凡ゆる難問題の解決所はランデイス教授の家庭であった。教授館の多いうちに学院好学の青年達がただあの家庭へのみ、さうした質問を持ちこんで行ったのはどういふ理由であったか。「マコーレーとともにかれの銅像を建設しようとの議が、同窓生の間からおこったのも無理からぬことである。

かれには日本に対する三つの忠言があつた。その第一は「徴兵制度を止めよ、それは日本を軍国主義に導き国を破滅させるから」、第二は「漢字をやめよ、それは世界の進運に遅れるから」、第三は「米飯をやめよ、それは主婦を愚鈍ならしめるから」というのであつた（都留仙次氏談）。この予言はかれの死後二十年にいたつて的中したことを、日本国民は知らされた。大正十年九月軽井沢において没し、学院チャペルにおいて葬儀が行なわれた。遺骸は学院に近い瑞聖寺に葬られ、夫妻ともども日本の土と化した。

かれの次男ジェームス・ランデイスはハーバード大学のロー・スクール校長（法学部長）となつた米國屈指の法学者で、フランクリン・ルーズベルト大統領のブレイン・トラストの一員であつた。前の駐日米國大使エドウィン・ライシャワーを駐日大使におしたのも、このジェームスであつたといわれている。ともに明治学院で生まれ、そこで育つた幼なじみであつたから。

井深総理の辞任

大正九年二月末、中学部においておこつたストライキは村田部長の請暇願により、高等学部長である水戸幾次郎が中学部長心得となつて一応平穩にかへつたが、その年の五月五日

井深総理は突如として理事會議長オルトマンズあてに、次のような辞表を提出した。この辞表は一面ストライキ

の責任をとったようにも見えるが、その前年の三月に女房役の熊野雄七が隠退し、十一月には創業以来ミッションの代表として井深の相談役であったインブリー博士が辞めて帰国していることを思えば、井深の心境はおのずから察せられる。辞表は相当長いもので、ここにはその一部を抄録する。

「私は多日熟考の結果明治学院総理の職を辞すべき時期の到来した事を自覚致しまして、茲に謹で貴下を経由して理事会に辞表を提出致します：：明治二十四年の秋、遂に博士（ヘボン）は老令の故を以て辞職致され不肖私がその後任に挙げられて今日に及んだ次第でございます。夫れ故に私が総理の職に在ります事茲に殆んど全三十年でございます：：そして此三十年間幸に大過なきを得たるは偏へに神の優渥なる恩寵の下に理事諸君の終始渝らざる御援助と同僚諸氏の誠実なる協力に依る事と深く感謝いたします。翻つて前途を望みますれば明治学院の将来は頗る有望であると考へます。乍然現在及び将来に於て此好機を逸せずして既に理事会に於て採用せられた所の拡張案を実施して能くその功を奏するには私よりも壮年気鋭にして而も敏腕堪能の人物がその重任に当る必要があると確信致します。」

理事会は、長尾半平、笹倉弥吉、松井安三郎、オルトマンズ、モーレーの五理事を委員としてこの辞表の処理を協議し、同年十一月四日の理事会においてその結果を報告し、次の通り決定した。

「井深博士ノ総理及神学部々長ノ辞表ヲ請容レ之ヲ来ル大正十年三月三十一日ヨリ効力ヲ生ゼシメ（但シ神学部ノ教授タル事ハ依然タリ）右指定日後ハ総理えめりたすト成ス事」

井深はこのとき六十八才であつた。理事会は起草委員による次の感謝状を記録にとどめることとした。

「井深博士の切なる希望に係る此の辞表を請容るるに方り、同氏が学院の為め致されたる永年の勤労及び功績に対する吾等の深き感佩並に学院関係者一同の胸裡にある同氏に対する情誼の深厚なる事とを銘記せずんば措く能はず。

井深博士は学院創立の当初五年間副総理たり而して引続き明治二十四年以降は総理として殆んど学院史を通じ之が首脳たり

き。左れば学院の成績及び今日ある所以のもの一つとして同氏の密接なる指導監督に係はらざるはなし。

今や同氏現職を去り主として広く教会の事業に奉仕せむとせらる。是今日迄日本基督教會牧師の大多數を教養せられたる氏自らの事業の継続に外ならじ。蓋し同教会の建設並に経営に貢献したる者恐らく氏に及ぶ者なかるべし。仮令井深博士近く総理職の激務を退くとは云へ、必ずや学院の福祉に対し同氏の篤き同情と援助とは断えざるべく、又氏の心は尚ほ永く学院に付きながら将来の成功に与りて多大の必要なる貢献あるべきを信す。」

井深総理の辞任は明治学院にとつて一大事であつたのみならず、日本基督教會にとつても大事件であつた。大正十年四月七日付の「福音新報」(第一三四五号)は第一面全部と第二面の半分以上の紙面をさいて 井深の日本のキリスト教界に対する功績をたたえている。

「井深氏は如何なる理事会にも、何の委員会にも、甚だ安全なる同労者として、礼儀正しき紳士として常に敬重せられたのである。日本の基督者の間に於ける多くの事業は、此のちも井深氏を手離すことを好まぬであらう。基督教の施設や機関にして、井深氏と關係を有するもの頗る多いのは此の故である。日曜学校、青年會、基督教教育會、継続委員會等の如きと關聯せる井深氏の役目は既に余程重く且つ大なるものであつた。世界的會議の副議長として實際其の任務に当られたこと二回、日本基督教會大會の議長に挙げられたこと前後十回の多きに達し、遠く欧米に赴むかれたること五たび、其の間所々に講演せられた回数も頗る多く、日本内地に於ても其の足跡殆んど至らざるところなく之によりて氏が伝道や教育や、其他社会事業のために大いに貢献せられたことは世に知れわたりたる事実である。云々」

第二章 相剋時代

田川総理の就任

大正九年五月に提出された井深総理の辞表は大正十年三月末をもって発効するので、大正九年十一月四日開会の理事会において後任総理詮衡委員に次の七氏がえらばれた。

長尾半平、松井安三郎、田川大吉郎、井深梶之助、笹倉弥吉、ムーレー、オルトマンズ委員は詮衡の結果、高知教会の牧師多田素を第一候補にあげたが多田はうけなかつた。多田は交渉をうけたとき「俺がそんな俗物にれるか」といったと伝えられている。植村正久の第一の子分として牧会第一主義であつたかれは牧師以外の仕事は俗務と考えていたから、この話は真ならずとも遠からずであろう。後任のきまらぬまま井深の任期が満了したのでオルトマンズが一年間総理事務取扱となつた。

そのうちに一か年が過ぎオルトマンズが総理事務取扱を辞したので、学院管理の責任は当然理事長たる田川大吉郎にかかつてきた。大正十一年三月から大正十三年十月まで田川は理事長として総理の職を行なつてきた。その間には関東大震災をはさんで、中学部同盟休校、高等学部軍事教練など多事多端であつたが田川はこの間にあ

って、それらの難問題を処理した。学院には「長」がないままに三か年を経たが、大正十三年十一月五日の理事会で次の報告がなされた。

「総理選衡委員（オルトマンズ氏）報告」

同委員会ハ田川大吉郎氏ヲ総理ニ推選スル事ニ一致セル旨報告セリ

之ニ対シ田川理事長ヨリ恩赦ノ願末（本年八月七日復権）ヨリ総理引受後ニ於ケル政治上ノ進退ニ干シ意見ヲ開陳セリ之ニ対シ多田理事ハ最早復権シタル以上ハ田川氏ノ総理タル事ニ対シ問題ノ余地ナキ旨述ベタル所ビーク理事動議ニヨリ田川氏退席」

多田が議長となつて審議の結果満場一致をもつて田川を総理に決定した。田川は次のあいさつをもつてこれを受諾した。

「不肖能ク此大任ニ耐エ得ルヤヲ疑フ サリ乍ラ祈ニヨリテ此重責ヲ果サン事ヲ希ヒテ止マズ 理事諸氏モ前途ニ横ハル諸難関ニ想到シ不肖ノ為ニ願ハクバ祈ヲ以テ終始御援助アラン事ヲ望ム」

前述の「恩赦ノ願末」とは、大正五年田川は皇室に対する不敬罪で起訴され有罪となり服役中であつたが、恩赦で出獄したことを意味する。「政治上ノ進退」とは総理になつても政界との縁を切らない意味である。かれはその後、東京三区より衆議院議員に選出されたからだ。

総理就任式は延期されて四月十八日に、新高等学部の校舎井深ホールの献堂式と同時に行なわれた。

明治学院総理就任式順序

（大正十四年四月十八日午後二時於学院講堂）

司式者 理 事 オルトマンズ

- | | | | |
|--------------|----------|-------|-------------|
| 一 奏 樂 | 理 事 | ハナホード | 一 讚美歌 (二五六) |
| 一 聖書朗読 | 中学部長 | 水戸幾次郎 | 一 就任演説 |
| 一 祈 禱 | 神学部長事務取扱 | 都留仙次 | 一 来賓祝辞 |
| 一 音 楽 (四部合唱) | | | 青山学院院长 |
| 一 任職之告辞 | 理 事 | 毛利官治 | 立教学院総理 |
| 一 任職之祈禱 | 名誉総理 | 井深梶之助 | 一 頌 栄 (四六二) |
| | | | 一 祝 禱 |
| | | | 理 事 |
| | | | オルトマンズ |

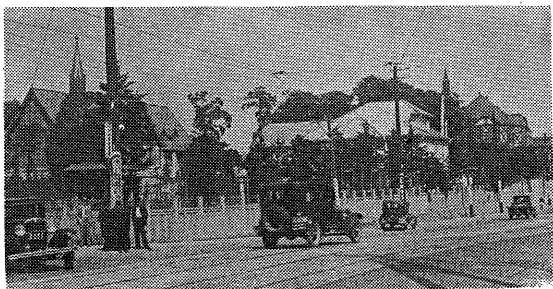
以上

大銀杏いちじょうを守って土地譲渡

学院の正門に近く天を摩する大銀杏があるが、この巨木は大正九年までは学院の構内にあつたものである。大正十年一月から東京市は京浜国道の都電高輪北町停留所(当時は庚申堂前)のあたりから、現在の高輪警察と消防署の間を通り二本榎通りを横切つて白金小学校前を通り日吉坂に出る道路を造ることになり、そのため学院南側の土地は約三米幅けずり取られることとなつた。市に譲渡した面積および代償金は次の通りであつた。

番地	芝区白金今里町四十二番地	坪数	宅地百九十二坪一合八勺
代償金	金一万三千四百八十五円七十二銭	移転並びに工事費	金四千三百三十六円七十五銭
合 計	一万七千八百二十二円四十七銭		

この土地譲渡には一つの条件があつた。それはこの大銀杏をきらないといふことであつた。山本弥一郎氏は回想記で次のように証言している。



昭和初期の二本榎停留所

『筆者がかつて総理井深先生の部屋——現在の記念館の入って直ぐ右手の入室——で先生の講義を聴いていた時、先生は「……あの公孫樹、町の風致の為に伐らないと言う約束で東京市に無償で寄付したのです」と言われたのを現在でも憶えている』

土地分譲はこれだけではすまなかった。つづいて大正十三年、市電線路敷設のため、当時学院の正門のあった東側も約六百八十五坪の譲渡を求めてきた。これは学院の正門前を削り取るものであり、多くの樹木を伐り倒し風致もひどくそこなわれるものであったが、当時の東京市電気局長長尾半平は学院の理事であった関係もあってやむなく譲渡を承諾したと思われる。その時の条件は次の通りであった。

番地 今里町四十二番地ノ一、四十一番地ノ一、四十番地

坪数 合計六百八十五坪一合二勺

代金 金八万三千二百四円二十一銭 移転及び工事費 金一万六千三百七円六銭

その後電車軌道敷設工事はすすめられ、昭和二年八月十日には白金猿町を終点とする市電の開通式が行なわれ学院東南角に停留所ができ、「二本榎明治学院前」と呼ばれることになった。

関東大震災と学院

大正十二年（一九二三）九月一日正午二分前、関東地方南部をばげしい大地震がおそった。震源地は東京から約八十キロ離れた相模湾の北西部で、震度は七・九であった。

「当日、明治学院では、やがて始まるべき第二学期の準備のために、神学部都留仙次氏、高等学部の中山昌樹氏、中学部の河西銀之助氏が出動して各々の事務をすまして、やがてかえらうとする時、震天動地の大変動が到来したのであった。……第一震及び第二震によって神学部二階の煉瓦の大煙突が屋内に倒れて、凄まじい音響と共に大卓子と多くの書架と天井と床板との一部は粉碎された。また新築間もない高等学部校舎の煉瓦の壁は方々に大亀裂を生じて或る部分は上部の煉瓦壁が切れ目から外へ揺ぎ出してゐる所もあった。そのうちに中学部校舎裏の化学室から出火した。黄燐の棒数本が瓶から転げ出たので、忽ち燃焼しはじめたのであった。しかし、前記三氏はじめ居合せた人々の決死的かつ臨機の措置によって小使大久保が負傷しただけで大事に至らなかった。震災四日目には都留、中山、桑田、鷲山、石橋諸教授と高等学部の学生四、五名で高輪警察と協力して救護班を組織し、日比谷公園、芝公園に出かけて避難民の救助にあたり、また一部は学院につれ来たって雨天体操場に收容して救助につとめた。」（明治学院五十年史）

当時の状況を総理室日誌によってひろつてみよう。ただし、この日誌は十月一日から記録されている。

十月一日 大正十二年九月一日午前十一時五十八分四十五秒七、 関東地方大地震。

学院も神学部、高等学部校舎大破、応急修理するも予定の十月八日の開講は不可能なるべし。

中学部は無事、九月二十五日全生徒を集合せしめたるに約五百名を越したれば、開講日を本日とせり。本日集まりしものは六百三十名以上にて、第一学期現在の七百七十九名に殆んど近く、生徒減少の憂慮なきもの如し。

十月二日 今回の震災並に火災により卒業生中罹災者は東京並に横浜にて大約百四十にして死者は現在まで二名。在学生の死者は現在迄同じく二名なり。

十月三日 在米植原大使よりハナフォード氏安否を照会し来る。直ちに外務省欧米局第三課へ帰米中の趣回答せり。

十月八日 今回の災害にて今日迄判明せる死者は卒業生にて四名、重傷一名、在学生死者二名
尚死傷者は漸次判明し来る故或は死者拾名以上あるものと推察せらる。

十月十日（水）田川理事長登壇 水曜講演。

午前十時半部長会議 各部長出席

議題ハ九月分月謝ヲ免除スルヤ否ヤニ対シテハ免除ス 但シ石炭代ハ徴取シ旅行費ハ徴取セズ 罹災者ノ月謝ハ免除ス可シ
免除ノ期間ハ今学期中、募集金若シクハ土地売却金ヨリ支弁。

午後一時半 常務委員会 各委員全部出席 今回震災ニヨル修繕費見積約五千六百三十二円二十五銭也 可決（但シ実際完
成ノ際ハ多少超過スル見込ナレバ約一万円見当）、修繕費トシテ広く父兄卒業生等ヨリ寄附金ヲ募集ス 其金額ハ一万五千元
乃至三万円トス 今学期ノ授業料ヲ左記ノ割合ヲ以テ徴取ス

中学部 二十二円ノ所ヲ 十八円也 高等学部 商科二十五円ノ所ヲ 二十円也

文科二十円ノ所ヲ 十六円也

罹災者ニシテ同情ニ値ス可キモノハ当該部長ノ考慮ニヨリ今学期若シクハ適宜ノ方法ヲ以テ授業料ヲ免ズベシ。

当時高等学部に在学した田畑太郎氏の回想録には、次のように記されている。

「大正十二年九月の大震災には明治学院のキャンパスにはアメリカからの救援物資が山と積まれ、都留仙次先生以下随分活
動せられたものである。私どもも西田天香氏の一燈園から松下さんがわざわざ見えて随分協力してもらい、東京市と協力して
浅草田中町や深川猿江裏町の災害後の貧民窟の生計調査や救援物資の配布に努めたものである。」

また、当時事務職員として在職した松田彦寿氏は、次のような手記をよせられた。

「学院生活の中で第一に思い出されることは、大正十二年九月の関東大震災のときのことである。幸い学院は類焼をまぬが
れたが、チャペルおよび現在の記念館は数か所にき裂を生じ、使用にたえなくなつたので、ライシャワー博士はただちに補強

工作を竹田組に命じ、講堂兩外側に現在あるコンクリートの補強と現在の記念館二階の大修理を行なった。

焼土と化した東京は大東亞戦争以上の惨状で、デマは飛び物資は極度に欠乏し、暗黒の日々がつづいたが、温かい援助の手は、米国より救じゅつ品として東京へ、そして学院に贈られ(木材、衣料、食品)校庭に山積した。ときの高等学部部長都留仙次先生の指揮により、高等学部学生および自由学園女子学生の献身的な奉仕により、避難した下町の被災者に都留部長みずから荷車を引き、救じゅつ品を日比谷公園、芝公園方面に配給し、神の恵みを分つた当時の尊い使命をいまさら思い出される。木材は現在の高校校舎建築用材となり、大正十四年三月より使用して高等学部、高等商業部校舎となった。当時の総理は田川大吉郎先生で、建築費九万円は当時としては驚くべき金額であった。」

大震災とともに通信、報道の機能がまひしたため市内は流言飛語が乱れ飛んだ。そしていちばんその被害をこうむつたのは朝鮮人であった。「朝鮮人が暴動を起こそうとして集っている」とか、「井戸に毒物を入れた」とか根も葉もない流言に民心は動揺していた。

「この間の騒ぎで殺害された朝鮮人の数は明らかではない。内務省警保局の調べた刑事事件関係つまり犯人のわかっている被害者は、朝鮮人二三人、中国人三人、日本人五九人であるが、実際に殺害されたのは、これに十数倍するであろう。吉野作造が、朝鮮罹災同盟慰問班が十月末までに調査した数だとして伝えているところは、殺された朝鮮人は二六一三人にのぼる。」(中央公論社・「日本の歴史」第二十三巻)

学院には当時神学部、高等学部、中学部とも朝鮮、台湾からの留学生が多かった。学院の教師や学生生徒のなかにもこのような流言を信ずるものもあつたので、朝鮮の学生たちは危険を感じていた。

『都留仙次氏は危険に曝された二人の朝鮮人学生を某所にかくまったが、之を嗅ぎつけた学院関係の一軍人が都留氏を訪れ、軍刀を抜きかけて氏を嚇やかし、二学生の所在を追及した。都留氏は決死の覚悟を面に表わして「自分は神の心に適うと

信ずる所に従って行動している。君の行動は神のみ心に反するものである。」と頑として突っぱね、遂に二人の学生を守り通したのであった。』(『明治学院八十年史』)

この話は都留部長の口からもれたものではなかったが、当時の目撃者たちによって語り草となっている。また中山教授も学院構内の住宅に朝鮮の学生をかくまっていた。このような信仰と勇氣ある当事者の措置によって学院にいた朝鮮学生はことなきを得たのであった。

大正末期の社会情勢と学生運動

大正末期の社会情勢と学生運動については、当時明治学院の学生運動の中心人物であった元読売新聞論説委員田畑太郎氏は「明治学院九十年史

に寄せて」と題する回想記のなかに次のように記している。

「私が明治学院高等学部商科に入学したのは、大正十二年であった。この年は実に日本にとって容易ならぬ年でもあった。不況で地方銀行が取付け騒ぎを各地で起こしており、早大で初めて軍事研究団が右派学生によって組織され、早大の建設者同盟あるいは社会科学研究会の学生が、反対運動を大山郁夫教授を中心にして軍事教育反対が全国大学、専門学校の間にはうはいと起こっている。

他方、中国では長沙の排日運動が激化し、国内では労働争議が続発していった。堺利彦等を中心とする第一次共産党事件で左翼の総検挙があった。

九月一日には東京、横浜、横須賀、鎌倉、小田原、箱根、千葉県舟形町とか、関東地方に大地震、火災、つなみが襲来して本所被服廠跡では五万人からの震災死者を出した。朴烈事件が起こるかと思うと、福田雅太郎陸軍大將を関東戒嚴司令官に任命、東京、神奈川、埼玉、千葉の府県に戒嚴令をしいた。大杉栄その他の殺害事件、亀戸における平沢計七等、労働運動者の

多数を旨憲が殺害し、朝鮮人多数も流言蜚語の犠牲となって殺された。

ドイツではレンテンマルクが発行され、ミュンヘンにヒットラーの反革命の旗挙げが始まるといった、国内的にも国際的にも流動的で多事多端な年であった。

この前後に私を中心として「社会問題研究会」が発足した。中山先生にはイギリスのマルクス主義者のエデン・シーダー・ポール夫妻の「プロレット・カルト」の原書の読書会をやり、斎藤先生に選んでもらった英国労働党の後の大蔵大臣になったフィリップ・スノーデンの「イフ・レバー・ルールズ」をテキストに、研究会を開いたりした。会員は専門部から中学上級者まで相当多数の参加者を見た。

田川大吉郎さんが院長となられてからは、学生議会が開かれて学内討論、今でいうティーチ・インが盛んに行なわれたのはいい思い出である。それまでは明治赤煉瓦の代表建築であった今の記念館で、研究会が行なわれており、賀川豊彦先生にはずいぶんお世話になったものである。大正十二年の三学期であったが、この研究会で賀川先生が「ウエルフェア・エコノミックス」の提唱をされて経済学も厚生経済学に変わっていかねばならぬことを説かれたことは、恐らく学問研究上では日本で最初であったろうと思う。また大正十三年には早大の猪俣津南雄氏がヒルファードイングの「金融資本論」の研究会を連続して講義され、われわれも初めて金融資本主義の精髓にふれたのであった。

このセベレンス館寄宿生活を通して社会科学の研究を組織的に行なうつもりであったが、理論と行動の弁証法的統一ということで学生たちは各種の労働組合の研究会の指導員として印刷、出版、金属労組などの会合や運動にも直接参加し、後にはこれらの運動に参加して学業を全く疎外するものも現われた。

大正十四年には若槻礼次郎内閣の手で治安維持法が制定され、これが三月貴族院で可決されている。この年七月十六日、東京大学において全国学生社会科学連合大会が開催され、後に治安維持法違反事件としてわが国最初の弾圧を受けた。出席したおもだった代表者たちは起訴された。明治学院からは清水平九郎君がせひ明治学院を代表させてくれたと、私とかわつたし、慶応義塾でも、衣谷賀真君が野呂栄太郎君に替って慶応大学の代表者となった。かれらの出身が京都、大阪であって

故郷に錦を飾る気分があったためであつたらうと想像する。われわれも京都大学の大会に参加したが、学校代表者がすべて役員形式をとつたので清水君は初の本学院の治安維持法の犠牲者となつたわけである。当時の日本は経済的不況、無産政党的組織化が始まり、労働組合、農民組合が各地で組織化され、東芝の二千五百名のゼネストなど、労働界にも失業者数の増大とともに社会不安が、顕在化する様相を呈していた。

明治学院の中山昌樹先生をたずねて「大杉栄追悼記念号」の発売禁止雑誌を大杉栄の子分の川口啓助君というアナキストが、私に渡して学院内で金を調達してくれと依頼されたよと中山先生にいわれたときには恐縮したが、学内販売などいじりませんとお約束をした。しかし、もうそのころはアナの勢力は衰えていて、これを売る対象は労組しかなかった。一部には同情者もあつて結局は消化され、川口君は助かつたといつていた。中山先生は七、八十くらいの方かと思つたら英国型紳士で驚いたねとの印象を語っていたが、その温容春風の姿に接すると流石に人をうつものがあつたのは、先生の偉大さ、敬けんにあつたと思われる。寄宿舎と学院との往復にはむらさきの袴に靴をはいた香蘭や聖心の女生徒によく出会つたものである。なかにはその時間を毎日記録して、その時間に合わせて通学する学生もいたというが、あのいなか道のような細道で出会う女学生姿は、まさに大正の風物詩であつた。だがわれわれはあまりそうしたことには心遊ばせる時間がすくなかつた。つまり学校の勉強よりは社会科学の勉強に力を集中していた。この研究会からはだいぶ異色のある人物を出している。共産党三・一五事件に関係した連中は三、四名、この中に商科で一年下の田口右源太君は三・一五で十年の刑を受けたが、転向により出獄したが後にゾルゲ事件に引つかかつて無期になつた。終戦で網走番外地から出て、いまでは横浜でレディース・ランドリーの社長として大いに活躍している。

文科にいた黒岩貞雄君は六年の刑を受けて高知監獄を出所後、私をたずねて来てどこかの新聞社を紹介してくれとのことであつた。当時三・一五の転向派の巨頭の門屋博君が『帝都日々新聞』の編集局長をやつていたのでたのみ込んだ。これが成功のキツカケとなり、経済記者となり兜町に出入りして、株屋の主人公を指導して大いに儲けさせた。その後は渡独してナチス研究の第一人者となり、東独五年で商工省の嘱託とか、陸軍の嘱託、大東亜省の嘱託となり帰朝した。日本ではナチス関係の

著書を教冊発行するなどして、ファッシュヨに移行したが、最初は敬けんな基督者であった。

他には矢島榊子女史の孫の矢島直一君がいた。徳富蘇峰の甥あたりになるのか、そのへんはよく知らないが、左翼のためにずいぶん蘇峰に迷惑をかけたようだ。最後は新京図書館長となった。終戦でソ連のカラカンドの獄に収容され、その地で死んだ。賀川さんを驚かせた一人の学生があった。大逆事件の大石誠之助の一人息子で研究会員であったが、母堂が非常に心痛されて社会主義だけはやめてくれとのことと、大石君もその後、姿を見せなくなった。

中学部の同盟休校

大正八年の中学部の同盟休校で、中学部長村田四郎が去ったあと、すなわち大正九年から井深総理が中学部長を兼任したが、間もなく水芦幾次郎が高等学部長から中学部長に転じた。水芦は河西銀之助を教務主任に任用して、ストライキのち、乱れていた校規の肅正に努力した。しかし生徒監に軍人上りの体操教師を用い、これがしばしば体刑を加えるようなやり方であったから、一時は規律が正されたかのように見えたが、そのうちに、このようなやり方がキリスト教的であるかという疑問が、生徒からも父兄からもおこってきて、大正十三年十月になって爆発し、第二回の同盟休校騒ぎとなった。

生徒の側から出された中学部改革条項は、次の通りであった。

一、明治学院創立の主旨に基きキリスト教的教育を充分に施行されたき事

(中略)

一、キリスト教に理解なき教師を更迭されたき事

一、明治学院教会の復活を望む

- 一、明治学院日曜学校を復活されたき事
- 一、聖書並に宗教的の學術講演を望む
- 一、全校生徒にキリスト教を理解せしむ可き方法を講ぜられたき事
- 一、礼拝堂に於ける生徒の司会を加入されたき事
- 一、学院創立記念日及びクリスマス復活祭等の記念日を守られたき事
- 一、学芸会及び運動会を開催せられたき事
- 一、學術研究の至便を計られたき事
- 一、一般科学に対する実習機関を設けられたき事
- 一、生徒監と体操教師との区別を明にせられたき事

(明治学院総務部特別記録簿より)

当時の総理、井深はすでに隠退して田川大吉郎が理事長で総理職を代行していた。この同盟休校は大正八年の場合とちがって教員、父兄の学院の教育方針に対する不満があつて、きわめて複雑なものであつたが、田川はさすがに老練な政治家である。教員よりも生徒よりも「総理一任」の一札を取りつけて十日間の授業放棄の犠牲を払つただけで解決した。

しかし、その後、大正十五年になつて水芦、河西は引責辭職して学院を去つた。当座、田川総理が中学部長を兼務したが、昭和二年、関西学院出身の衛藤幹太郎を部長に、教務主任に牧師村上治を迎えた。衛藤は米國留學六年、日本大学の講師であつた。村上は東京神学社、米國オーバン神学校、エジンバラ大学ニューカレッジの出身で学院出身者ではなかつた。この間にあつてきつすいの明治学院児であつた庶務主任宮地謙吉の地味な苦勞は

記憶されねばならない。

宮地は学院の前身、神田英和予備校、一致英和学校に学び、卒業後は各地の公私立の中学校に勤務し、明治三十五年、服部綾雄に招かれて学院に奉職したのであるが、とくに事務的才能にすぐれていたもので、授業のかたわら熊野、村田、水声各部長を助けて書類の整理や事務機構を整備した功績は多大なものがある。着任の翌年、明治三十六年からかれが中心となって発行した「白金学報」は大正七年まで四十九号を出し、同窓生と母校をつなぐきずなの役割をつとめた。大正七年、同窓会と中学部雑誌部が別の組織となったため廃刊となったが、和田英作の描いた表紙絵とともに内容も立派なものであった。宮地の苦心した「白金学報」は今日では明治学院史の資料として貴重なものとなっている。宮地は大正十四年病気のため退職したが、同窓生は二千元を募金してかれに贈ったという事実でも「白金学報」がいかに同窓生の慰めであったかがわかる。昭和四年六十四歳で没した。

学院と軍事教練の実施

明治学院でもいわゆる兵式教練なるものは前身の神田英和予備校時代から行なわれていたのであるが、大正十四年になって政府は軍縮の欠陥をおぎなう目的をもつて、陸軍の現役将校を各学校に派遣して軍事教育の普及徹底を期することとなった。学院では、この軍事教練を実施するかいなかについて、理事会も学生会も議論がわかれ、かなりはげしい波乱があった。以下記録によってこれをみることにしよう。

「大正十四年九月から、第一師団第一聯隊から軍事教官として現役陸軍大尉台田伍一氏が派遣された。この軍事教官の派遣

問題に就いては、単に明治学院のみならず、一般教育界に於て、その是非に關して可成に問題になつていた。ことに基督教学校に於ては博愛人道主義と軍国主義と衝突するの憂いなきかを惧れた。基督教学校の当事者は寄り寄りその採否について考えたものである。然し軍事教育を実施すれば、卒業生が徴兵に応じた場合現役服務の期間が四ヶ月短縮されるという大いなる特典は何れの学校に於ても多大に考慮すべき事であつた。耳ならず既に実施している公立学校に於ける其の結果は良好なるもののある事を知つた。そこで学院中学部に於ても大正十四年第一学期中に教官派遣を申請し、九月から台田大尉が赴任することとなつた……高等学部にはける軍事教育の採否は文部、陸軍兩当局から自由を許されていたため中学部では前述の通り採用したが、高等学部では当時の田川高等学部長の方寸から、その採否を学生会議の決議に委せることとした。可成に激しい賛否両論の応酬があつたが結極反対派が多数で、軍事教育は当分採用しないこととした。」(明治学院五十年史)

大正十四年三月四日の理事会で、田川総理は次の通り報告している。

「軍事教育ノ件ハ未決定 明白ナ報告ノ出来ヌヲ遺憾トスル 但シ茲ニ文部省ニテ承知シタル点ヲ示セバ次ノ通り

(a) 中学校ハ若シ否認スレバ特權ヲモ取上ゲラルベシ 宗教学校モ他ノ学校ト同様ニ取扱ヒ居ル 学校デノ軍事成績ハ不良デモ上級学校ヘノ進級ニ差支エナシ

(b) 高等学部、神学部ハ自由選択 但シ軍人トシテノヨキ位地ヲ博シ得ザルハ勿論 目下一年四ヶ月ノ所 中学部ハ一年専門学校ハ十ヶ月ニ短縮サル

(c) 時間ハ三時間ノ予定ナルモ最長六時間ニ達スル望ミナク四五時間ナラン 従来ノ兵式教練ヲ更ニ有効ニシタイ方針ナリ

(d) (e) 略

(f) 德育トハ兵式教練ノ間ニ秩序ヲ重シ勇氣ヲ尚ビ団体的精神ヲ訓練スル等ノコトヲ謂フ 従来モヤリ居ルコトヲヤルダケノ趣意 軍国主義ヲ鼓吹セントノ趣意ニ非ズ 但シ軍事知識ヲ普及セシムルコトハ固ヨリ其目的ナリ」

また大正十五年三月十日の理事会で、田川総理は次のように報告している。

「次に高等学部に関して述べますが、昨年十一月の理事会は

一、高等学部にも軍事教練を受くることは多数を以て可決せられ

二、私が実際につき更に考慮して決定する事をも承認して下さいました。私はその後引つづき之を考慮するに当り、学生之を希望するや否や諮問する必要を感じ、本年二月九日十日の両日その協議会を開き賛成反対両論者を各十五名宛、合せて三十名入れ違ひに討論せしめました。結果は

出席者総数

二百名(学生総数二百七十九名)

軍事教育を受くべしとする者

八十二名

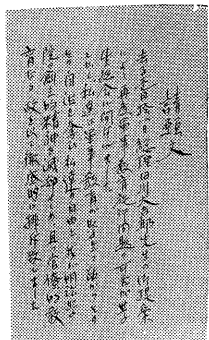
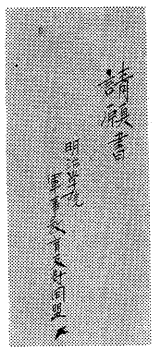
軍事教育を受く可からずとする者

百十七名

白票

一名

即ち三十五名の差を以て反対論者の勝利に帰しました。私はこの両日の討論を開いたことを至極満足であったとは申しません。各討論者の用いた言葉はもつと注意すべきであると思ひ且その論旨はもつと深く實際に就いて考慮すべきであると思ひいろいろ遺憾に感じた点もあります。けれども各自の時間は僅に五分と七分とに限られていましたし学生のみを咎むべきでないと思ひ且つその態度は終始熱心誠実であると認めました。依つて私はその多数の意向のある所を重んじ次の学年に於ては軍事教育を受けない事に方針を定めました」



軍事教育反対の
請願書

こうして田川は、理事会の決定をひっくり返してしまつた。しかし、その後、ついに軍事教練は実施されるにいたつたが、当時高等商業部教授であつた齊藤茂夫氏は当時の事情を次のように記している。

昭和三年一月十八日、井深梶之助先生の「地塩世光」の額がまだものめずらしく感じた合併教室で、軍事教練実施の可否に関する第二回目の学生議会在満二年をへて招集された。神学部は既に淀橋角筈の東京女子大跡に移転し、神学部予科生を委託学生として含む英文科生など文科生はだいたい教練に批判的で、その数は相対的に減少してゐた。これに対し卒業後の実際的 necessity から軍教に賛成者が比較的多いと思われる商科生の数は相対的に増加してゐた。軍教は強制でないというもの、実際問題として、教練を受けた専門学校卒業者は幹部候補生の資格があり、在営期間も短縮されるのに、教練をうけない卒業生は幹部候補生の資格はなくいつまでも下士官で在営期間も長い。これは高商部卒業生が卒業後就職して、社会で他校卒業生と競争するうえに、決定的に不利である。こんな事情が反映したのか、このたびは投票総数三〇五、うち白票二、可とするもの一八七、否とするもの一一六票、七一票の差をもつて軍事教練はついに実施と決定した。ただしこの際、なお一一六の否とする票のあつたことは、深く銘記すべきである。

昭
和
編

第一章 離合時代

創立五十周年記念行事

大正十五年は、明治十年に一致神学校が組織されてから、四十九年にあたっていたので、翌年の創立五十年を記念する諸行事が計画された。その計画遂行の中央委員を次のごとく選定した。(大正十五年三月理事会)

委員長田川大吉郎、委員井深樞之助、オルトマンズ、ライシャワー、都留仙次、ハナフォード、ラマート、山本秀焯。記念計画は田川委員長の提案によって二つにわけ、一つは記念事業として英邦両文で「明治学院五十年史」を編集刊行すること、今一つは学院拡張に関する調査をすることであった。

歴史編集は井深、山本両氏を委員として英文はオルトマンズ、邦文は鷺山第(弟)三郎が執筆に当ることになった。拡張に関する調査委員会は理事塚田福三を委員長とし、村田四郎、鷺山第三郎、高橋幸太、小泉嘉章、河西銀之助、渡辺勇助の六氏を委員として次のような応急案と理想案が建てられた。

◇中学部応急拡張案

一、生徒数を漸次に一千名とする。 一、ヘボン館を改築して四教室を設ける。 一、礼拝堂を改修して約二百席を増設する。
◇高等学部応急拡張案

一、文、商両科は之を二学部とする。 一、文芸科は英文学部とし、修業年限を四ヶ年と改む。
一、井深ホールを商業科専用校舎とし、英文学科は総務部の建物に移転す。
〔注・ヘボン館は旧ヘボン館跡に建てられた木造二階建の中学部寄宿舎、井深ホールは現在高等学校木造校舎、総務部は現在の記念館〕

◇神学部応急拡張案

一、実践神学の講座に専任教授一名を招聘する。 一、角管の土地を神学部専属の財産としてミッションより譲り受ける。
一、図書購入を年額一千五百円に増額する。 一、七ヶ年勤続教授は海外に一ヶ年派遣研究せしめる。

◇各学部共通応急拡張案

一、各学部教員養成のため優秀なる学生を内外の大学、専門学校にて研究せしめる資金を設ける。
一、学院の宗教教育には調査委員を挙げてその徹底を期する。

応急拡張のための資金としては金十五万円が計上された。

なお、この拡張案の外に理想案として大学設立の計画が建てられた。その概要は次のようなものであった。

◇明治学院大学案

一、本学院に大学法文学部を置く。 法学部（法律科、経済科、商業科） 文学部（神学科、英文学科、社会学科、史学科）

専門学部（三ヶ年乃至四ヶ年、英文学科、商業科） 予科（三ヶ年）

一、大学設立費概算 金百五十万円

内訳 一、金参拾万円 校舎建築費 一、金六拾万円 政府供託金 一、金五拾万円 図書館費 一、金四拾万円 基本金

一、金五万円 設備費

右の拡張案をもって田川、村田、塚田の三氏はたまたま来朝中のプレスビテリアン外国伝道局幹事スピーア博士を帝国ホテルにたずねてミッシェンの援助を訴えた。その後、田川総理はさらに詳細な案をもって重ねてスピーア博士と会談するところがあった。

昭和二年四月、創立五十年を記念して校内伝道委員会が組織された。委員は笹尾高等学部長を議長として衛藤幹太郎、村上治、中山昌樹、石橋近三、村田四郎、鷲山第三郎、渡辺勇助、斉藤茂夫の諸氏で、五月二十四日賀川豊彦を迎えて、学生生徒に対し全校をあげて伝道集会をもよおした。

「当日賀川氏は非常な緊張と熱誠とで、午前は高等学部及中学部の四五年の生徒のため、午後は中学部一三三年生のために大に福音を訴えて志道を迫ったが、氏の熱誠に動かされた学生四百四十七名の多数が記名して志道決心の意を表した。この第一回校内伝道会の催しは予想外の成功を納めた。(明治学院五十年史)

第二回はその年の十月四、五の両日川俣義一牧師を講師として伝道講演をなし、高等、中学両学部を通じて百二十名の志道決心者があつた。

この二回にわたる校内伝道は創立五十年記念事業のうちでも最も尊い収穫であつたといえよう。

創立記念の諸行事は次の日程により行なわれた。(記念会プログラムによる)

十一月二日(水) 午後六時より文芸会(演説、演劇、英語劇等)

十一月三日(木) より五日迄毎日午前八時より展覧会(学院歴史資料、美術製作品)

十一月三日(木) 午前八時より陸上運動会(但し雨天の時は五日に延期)

午後六時より記念講演会(講演者、井深梶之助、多田素、オルトマンズ、石川林四郎、沖野岩三郎、遊佐敏彦の諸氏)

十一月四日(金) 午前八時より教職員生徒の記念式
午後二時より創立五十年記念式

午後七時より記念音楽会

十一月五日(土) 午前八時より運動競技会(撃剣、柔道、テニス、蹴球、野球、排球、ピンポン……等)

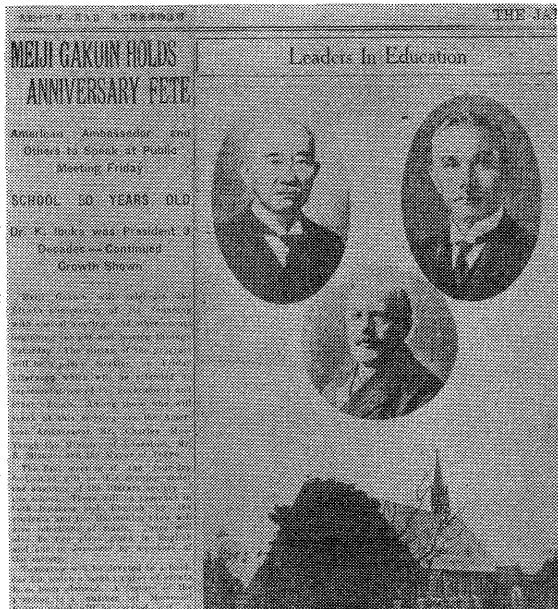
午後四時半より映画と音楽の夕

十一月十二日(土) 十三日(日) 午後二時より東京市外角管神学部にて神学講演会(講演者、ライシヤワー、郷司健爾、栗原久雄、都留仙次の諸氏)

十一月十九日(土) 二十日(日) 午後七時より芝日本基督教教会にて神学講演会

(講演者、川添万寿得、中山昌樹、村田四郎、桑田秀延の諸氏)

十一月三日(木) 及び五日(土) には模擬店を開く



栗 ジャパン・アドバタイザー紙

創立記念式は前記日程の通り十一月四日（金）午前八時と午後二時の二回にわけて挙行され、午後の記念式では文部大臣水野錬太郎、東京府知事平塚広義、東京市長西久保弘道、米国大使マックビー諸氏、その他キリスト教関係、ミッシェン関係、同窓会代表等の祝辞があったが、この創立五十年記念式典について当時のジャパン・アドバタイザー紙は十一月二日付をもって井深、田川、オルトマンズ三氏の写真とチャペルの写真をかかげて大的に報じた。十一月五日付の紙上では、ジャパン・アドバタイザー紙およびジャパン・タイムズ紙は、ともに筆をそろえてこの記念行事を詳細に報じ、マックビー大使の演説全文をのせている。そして大使は次の言葉をもつて長い演説を終っている。

「私たちが今日その五十年記念式を祝賀しているこの学院の素晴らしい成功は、たとえ他の面からの学院を知らなくても、学院がその教師たちの立派な能力と人格とに恵まれて来たことは大変に幸運であったことが分ります。私たち大多数のものは、これはひとえに学院の歴史において大きな役割を果たしてきた宗教の影響と、二つの大宗教団体たる米国長老教会とリフトームド教会がその寛容の裡に育成教化に努めた援助と指導との賜物であると感ぜずにはおられません。ともかく、本学院は過去五十年間この日本社会に於て精神的にも、道徳的にも、善に対する偉大な力となってきました。そして学院は私たちが与え得るあらゆる記念に十分値いするのです。私はこの偉大な事業に対して総理、理事諸君、並びに教師の皆様は祝意を表明し長久の成功を祈ります。」

高等教育の整備

従来高等学部の校舎には新サンダム館をあてていたが、高等学部拡張のためと中学部の教室不足のため、震災後これを修理して中学部理化学教室および図書館とすることとして、

高等学部校舎を新たに建築することとなつた。資材は震災復興のため米國より寄付された木材の配給を東京府より譲りうけ、資金はミッシヨンより送られた震災修繕費および道路拡張による東京市への土地譲渡による代金と移転補償費をもつてこれにあてた。当時の事情を記録によつてひろうと次の通りである。

「東京府ヨリ配給セラレシ一千石ノ木材ハ当所迄ノ運賃金二千五百六十円七十七錢也右ハ土地売却基金ヨリ支出セリ木材ハ現ニ校庭内ニ保藏シ新校舎建築材料ニ用フ

現在資金ハ十万二千四百三十六円十七錢ヲ予備ス

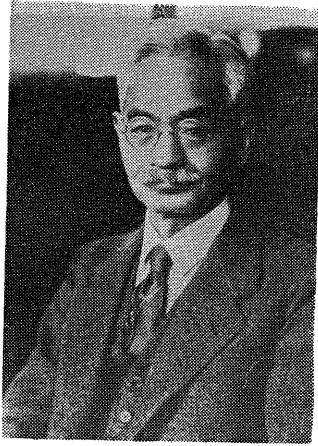
内金八万二千四百三十六円也以内ニテ既定計画ノ全部ヲ建築シ得レバ直ニ之ガ実行ニ着手スルコト

補償基金三万七百三十六円〇三錢也

右ハ全部高等学部新校舎建築費中ニ投入スル予定也」(大正十三年十一月五日理事会ビーク氏報告)

この新校舎は震災の翌年大正十三年の秋起工し、翌十四年四月に完成、田川総理の就任式と同時に献堂式が行なわれ「井深ホール」と命名された。この建物は昭和三年商業科が高等学部から独立してから、高等商業部専用の校舎となり、戦時中は専門学校校舎として、また戦後大学設立当初は大学校舎として、その後、大学が海軍墓地に本建築をしてからは高等学校校舎となつて正門脇にそびえる四本の大コラムとともに、卒業生の印象に深くのこるものとなつた。大正十四年四月から田川総理が高等学部長を兼務し、つぎつぎと資格特典を得たが、これは都留、中山、石橋らの努力がみのつたもので、以下理事会記録によつてそのあとをたどつて見よう。

「(a)従来高等学部ノ学年ハ三学期ニ分タル居リタル処ニ学期制ニ変更シ文部省ノ認可ヲ得ル件」



笹尾桑太郎

〔b〕高等学部文芸科授業料ヲ年金七十円（従来五十五円）ニ増額スルコト

〔田川理事長ノ口頭報告演説〕

〔c〕高等学部卒業生ニ左記中等教員免許状ヲ附与セラルルヤウ文部省ニ申請ス可ク準備中ナルコト
商科卒業生ハ簿記及商業、文芸科卒業生ハ英語（大正十三年五月二十一日理事會議事録）

〔九〕高等学部授業料増額ノ件、来年四月ヨリ八拾五円ニスルコト（従来七十円）（大正十三年十一月五日理事會議事録）

〔総理口頭報告演説（大正十四年十月七日理事會議事録）〕

〔i〕高等学部商科卒業生ニ対シ英語及商業ニ關シ中等教員無試験檢定ノ特典ヲ得タルコト（四月十七日付）

〔ii〕高等学部商科卒業生ニ対シ高等文官予備試験免除ノ特典ヲ得（八月十九日付）

〔高等学部文芸科ヲ英文科ト改正シ四年制トスル件、並ニ之ニ附随セル神学予科ニ關スル學則變更（三ヶ年履修ト明示ス）ノ件不日認可アル筈〕

〔学院憲法ニテハ三学部ト明定シアレド爾今高等学部ヲ高等商業学部、英文学部ノ二部三分チ四学部トスル件ヲ常務委員會ニ

託セルコト（総理提出）可決〕

〔大正十六年四月ヨリ高等学部商業科ニ夜学校ヲ開始スル許可ヲ受クル為

文部省ニ申請スル件〕（大正十五年十一月三日理事會議事録）

〔笹尾桑太郎ヲ高等学部長ニ招聘ノ件

通信決議ノ結果、十二票ヲ以テ、可決〕

〔高等学部ニ特待生制度ヲ設ケル事並ニ之ニ關スル學則變更ヲ承認スル件

註・八十五点以上一ヶ年間承認〕（昭和二年三月二日理事會議事録）

商業科が新たに高等商業部として高等学部から独立し、

笹尾桑

太郎が東北学院から高等学部長に迎えられた。

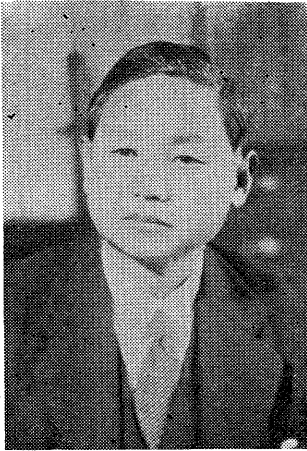
笹尾は明治二十五年に明治学院高等学部を卒業、米国で神学を独逸で哲学を学び、哲学博士の学位を得て帰朝東北学院院长シュネーダー博士の懇望で東北学院に迎えられ、かたわら旧二高のドイツ語講師を兼ねていた。笹尾はまず英文科の充実を計った。英語師範科廃止以来三年制の文芸科となつて失っていた中等教員英語科免許状を獲得すべく、理事石川林四郎と相談して修業年限四年の英文科とし、石川のあつせんで東京高等師範学校の英語科教授陣をほとんど総動員して講師に招き、昭和四年文部省の検定に合格した。これにより昭和五年の卒業生から中等教員の資格が得られることとなつた。その後不況による就職難、英語軽視の戦争時代をかううじて切り抜け、今日の大学英文学科の土台となつた。

大正十五年三月三日の理事会で、田川総理は次のように社会科創設の構想を口頭報告演説の中で述べている。

「之（神学部における社会問題講座開講）と相関連して私は高等学部にも社会学講座及経済学講座の拡張の必要を感じます。これに外国人教師のもう一層の援助を得たく希望します。有体に私の希望する所を述べれば私は経済学及社会学の担任者として有力なる外人教授の派遣を希望するのであります。その外人教授が吾学院の講壇に立ち成し得れば帝大や私立大学の教授等と対抗してそれ譲らないだけの学殖があり一世の注意を喚起せんことを期待するのであります。私はどうかして此程度の学者を外人教授の中に得たい、若し異存がなければこれを米国に在る我同情者にも訴えたいと思ひ我外人理事諸君が此為に充分の援助を与へて下さることを信ずる者であります。」

翌昭和二年、学院創立五十年記念式典があり、そのときの講演者の一人に学院同窓で内務省社会局にいた遊佐敏彦があつた。遊佐は「この時に、来年は高等学部に社会科を置く経綸を田川総理がもつておられ、私にも参画

するよう要請があった。」と述べている。また最初の社会科主任教授となった三好豊太郎は、「当時の学院総理田川大吉郎氏は原泰一氏や遊佐敏彦氏と計って、昭和三年四月ついに社会科の創立を見るに至った」(社会学科三十周年記念特集「記念樹とともに」)と書いている。当時神学部はまだ分離してはいなかったが、東京神学社との合併問題もあり、すでに淀橋に移転していたので、田川は遊佐、原などの協力を得て翌昭和三年には社会科を開設し、生徒を募集して二十八名の入学者を得た。翌四年熊本県の社会課に勤務していた東大社会学科出身の三好豊太郎を迎えて主任とし、笹尾部長の下に英文科は中山昌樹が主任となり、高等学部の陣容はととのった。しかしまもなくおそってきた世界経済恐慌の波と国内における国家主義、軍国主義の嵐にもまれて英文科も社会科も廃止問題がおこるほど、窮地におちいることとなる。



石橋近三

昭和三年、高等学部商業科が高等商業部として独立し、石橋近三を部長事務取扱に任じた。石橋は山口高商から京都大学に学んだ經理の専門家であるのみならず、経営の手腕に富み、優秀な教授陣を構成し、学生募集に、就職に、同窓会の組織に若い情熱を傾けて、一意専心高等商業部の育成につとめたので、不況の時代にもかかわらず高等商業部が独立採算がとれるようになった。のみならず、高等学部の不振をおぎなうほどに成長した。昭和四年正式に部長となっていらい、昭和十四年矢野院長が高等商業部長を兼務するまでの十年間、部の責任者としての

かれの努力は今日大学経済学部の基礎を築いたといっても過言ではなからう。昭和十年の夜間部の開設も、かれの努力に負うている。もちろんかれを助けた小泉嘉章、斉藤茂夫その他、諸教授および事務職員の献身的な努力が、その陰にあったことも忘れてはならない。

以上述べた英文、社会、高商三科の学則、学科課程は付録(一)を参照されたい。

最後の神学部

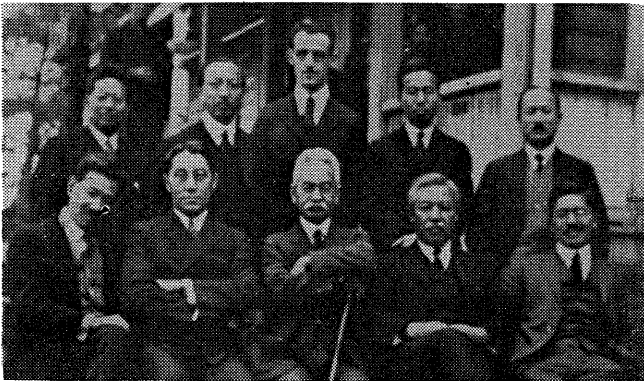
大正十年井深樞之助が老令のゆえをもって総理を辞したことは前述した。神学部長および教授としてはなお在任したが同十三年部長および教授をも辞した。学院理事会は井深の辞任につき左の決議を行なった。「博士ノ特殊ノ奉仕ニ対シ名誉教授トシ毎年恩給基金ヨリ受クル金壹千円以外ニ学院ヨリ金千五百円ヲ送ルコト」のほか感謝決議文を贈って多年の労を謝した。ついで山本秀煌も同じ理由で教授を辞し、講師となった。井深の後には都留教授が部長事務取扱となり、桑田秀延が教授に就任した。この年神学部予科を高等学部文芸科と区別し、予科修了者は文芸科卒業生とせず、神学部は予科本科合せて六年制たることを明文化することが定められた(大正十三年十一月五日理事会)。これは卒業すると徴兵猶予の恩典を失うための措置であった。この学年から社会講座が開設せられ、原泰一、益富政助、田川大吉郎、賀川豊彦などが講壇に立った。大正十五年オルトマンズが辞任し、ステゲマンがその後をついで教授に就任した。翌昭和二年都留教授が部長事務取扱を辞し、後任部長に川添万寿得を選出したが、辞退したため部長事務は村田、ライシャワー、桑田三教授を常務委員としてとることとなり、委員長に村田教授が選ばれた。昭和四年になって川添が正式に部長となっ

た。予科は高等学部へ委託生として三年まで白金の校舎で英文科と同じ授業をうけた。当時の学生数は本科三年級一一名、二年級一〇名、一年級六名、予科三年級一三名、二年級一一名、一年級八名で合計五九名であった。なお、これらの学生には正科生、別科生、聴講生の三種類がふくまれている。

大正十三年神学部は白金から市外淀橋町角筈百番地へ移転した。理由は白金の丘が他の学部の拡張のためせまくなったのと、当時、問題となっていた東京神学社との合併を容易にするための含みもあったようである。角筈の土地はプレスビテリアン・ミッションの所有で、建物の一部も同ミッションのものであったが、これを借りうけ、校舎とジムネージムと寄宿舎は前住の東京女子大学から買い取った。角筈へ移ったものの、どうしたわけかふたたび白金へもどろうとしたが、常務委員会に拒否された。

当時の学生津田正則牧師は往時を回想して次のように書いている。

「神学部予科に入学したのは、神学部が白金から角筈の東京女子大学の旧校舎跡に移転したその年のことであった。その頃の予科は三年であって、高等学部文芸科の三年間がそれにあてられていた。そんなわけで、私どもは三年間を角筈か



最後の神学部教授

ら白金まで通ったわけである。角管には神学部の校舎のほかは学生寮があつて、私どもはレバノン館とよんでいたが三千坪たらずの、学校としては狭い敷地であつて、その片隅に赤い屋根の瀟灑な角管教会があつた。……僅か三千坪たらずの敷地内に櫛の大木の数本がそびえ、松、杉、栗、柿などいろいろの樹木があり、春ともなれば桜、木蓮、泰山木、こぶしなどの花が咲き、ことに白や紫のつじが美しかった。……神学部が角管に進出したことは学院の拡張と進展のためやむを得なかつたといふことはよくわかる。しかし、やがて明治学院神学部と東京神学社神学校とが合併して、日本神学校を設立したといふことは何故であつたかよくわからない。これは精神的には一歩後退、信仰的には消極政策ではなかつたかと思われる。当時の私どもは何もわからない学生であつて、卒業間ぎわになつて、神学部が発展的に解消するときかされた。これで私どもが神学部の最後の卒業生になるとは寝耳に水で、驚いただけでなく全く淋しかった。……明治学院神学部は当時たしかに誇るにたるすぐれた神学校であつた。ラインシャワー、ステゲマン氏をはじめ、川添万寿得、都留仙次、村田四郎、郷司慥爾、松尾造酒蔵、桑田秀延など英米から帰国された新進気鋭の教授陣を揃えて意気盛んなものがあつた。それが明治学院から消えたことは何としても淋しくてならない。」（「明治学院同窓会報」第十八号）

神学部の分離と日本神学校の設立

このように明治学院神学部を分離して、植村正久の設立にかかる東京神学社と合同し、新たに日本基督教会の経営のもとに日本神学校を設

立することに於いて明治学院側の決議はどうなつてゐるか、当時の理事会記録は学院史にとつて最も重要な歴史的記録となつた。

「昭和五年四月十日（水）午前拾時ヨリ図書館ニ於テ学院理事繪会ヲ開ク

出席者氏名左ノ如シ 阿竹宗太郎氏 イー・エム・クラーク氏 ジェー・ダンロップ氏 原田友太氏 石川林四郎氏

賀川豊彦氏 エッチ・カイパー氏 ウキリス・ラマート氏 毛利官治氏 エル・ゼー・シエーフアー氏

エッチ・ヴィ・キー・ステゲマン氏 多田素氏 田川大吉郎氏 以上十三名

列席者氏名左ノ如シ 井深梶之助氏 石橋近三氏 小泉嘉章氏 村上治氏 中山昌樹氏 エー・オルトマンズ氏

都留仙次氏 テー・デー・ウオルサー氏 小林盛政(邦文書記)

多田理事議長席ニツキ開会ヲ宣ス

(前略)

(d) 明治学院神学部ヲ日本基督教大会ニ提供スルコトヲ承認ス 新神学校ヘノ毎年ノ寄附金ハ第一目ハ金六千円ニ

シテ其後ハ毎年寄附金額ノ一割ヲ減額シ行クモノトス

七、常務委員会報告(ステゲマン氏)

(イ) 前回理事会後本委員会ヲ開会スルコト八回

(ロ) 此間委員等ハ日本神学校ノ創立ニ関シ其責任ヲ遂行セリ

(ハ) 井深梶之助氏 田川大吉郎氏 原田友太氏ハ日本神学校ノ最初ノ理事トシテ選挙セラレタリ

八、総理口頭報告

(イ) 例年三月ノ会デスガ今年ハ日本神学校ノタメニ特ニオクラシマシタ 自然ニ同神学校ノコトガ主ナル出来事デアリマ

ス

寄附行為ハ二月二十日ニ文部省ノ認可ヲ受ケ同廿六日裁判所ノ登記ヲ済マシマシタ

斯クシテ予定ノ如ク四月ヨリ開校ノ運びニ至ツタ訳デアリマス 神学校ノ設立ヲ祝シテ両ミツションヨリ寄附セラル

ル約六万六千円ハ直接ニ大会ニ送り 大会ヨリ神学校ニ送ラルルコトニシタイトノ改メテノ申出アリ 小委員会ハ異

議ナクソレヲ諒セラレタノデ明治学院ノ今年ノ予算ハ両ミツションヨリノ寄附ガ二万円トナツテ居リマス

(ロ) 神学部ノ閉鎖ノタメ本学院ノ宗教々育ヲ如何ニスルカト云フ事ヲ考ヘテ居リマス

(イ) 音楽教育ヲ整備スルコト

(ロ) 宗教々育主任者ヲ置クコト

(ハ) 生徒監、学生主事ヲ置キタイコト

(ロ) (ハ) 両方トモ經費ノ不足ノタメ見合セマシタ

九、今後両ミッションハ日本神学校ノ發展ノ為ニ直接同校ノ財政上ノ補助ヲナスコトニ対シ全分ノ努力ヲ致ス事ヲ各々ノミッ
ションボードニ推薦セシムルコトヲ決議ス

一九三一年三月発行の「日本神学校一覽」には、その起源と組織について次のように記している。

日本神学校が開始せられたのは、一九三〇年(昭和五年)四月十一日であるが、先是一九二九年十月、東京に於て開かれた日本基督教會第四十三回大会の議場に、明治学院神学部(明治二十三年創立)と東京神学社神学校(明治三十七年創立)とが其の学校を無条件で日本基督教會に提供するとの議案が現れた。此の兩個の学校は過去に於て各々光輝ある歴史を有し、既に多数の有力な人材を養成して日本に於ける神の国建設の事業に貢献するところ多大なるものがあつたのであるが、兩校の当局者は時勢の推移と教界の実状とに鑑み、今後有力なる伝道者を養成する為に更に適切な教育機關を設立するの必要を感じ、斯る機關の出現を可能ならしめ、且速ならしむる目的を以て各自の学校を日本基督教會の大会に提供するに至つたのである。

言ふ迄もなく、大会は異常なる感謝と喜悅とに満され、満場一致その提供を受容れた。同時に今後我が日本基督教會大会の經營すべき新神学校を設立する動議が可決せられ、其の設立の爲に一切の権能を与へられたる十五名の建設委員が挙げられた。それは議長と副議長とを加へて十七名であつた。其の氏名は左の如くである。

井深梶之助 市村与市 原田友太 日高善一 金井為一郎 川添万寿得 小平国雄 溝口悦次 三好務 毛利官治

小野村林藏 佐波亘 笹尾象太郎 多田素(長) 田川大吉郎 高倉徳太郎 山本忠興(ABC順)

右の委員は数回にわたつて会合を開いたのであるが、其の年十二月四日委員全部の名を連ねて左の如き声明書を發表した。

「第四十三回日本基督教大会は、日本基督教會經營の神学校建設の事を挙げて我等に一任したり。我等は責任の極めて重大なるを感じ、爾來委員會を開くこと數回、祈を以て専心その計画を進め本月、三四兩日鶴沼に開きたる委員會に於て、神の祝福の下に、全員一致新神学校建設計画の概要を完了したり。即ち本校を日本神学校と命名し、その憲法を制定すると共に校長に川添万寿得君、教頭に高倉徳太郎君を選挙し、來年四月を以て開校することに決したり。我等は之を以て日本基督教會の歴史上画時代的事実なりと認む。日本基督教會は是に由つて新にその生面を開くと共に、一層重大なる責任を負へるものといふべし。

思ふに、本校の健全なる發達を遂げしむる責任は一に懸りて日本基督教會會員の双肩にあり。我等は爰に委員會經過の概要を發表して諸君に告げ、同時に諸君が我が神学校に対し精神的にも物質的にも深厚なる同情と援助を与へられんことを切望す」

翌昭和五年四月一日多田建設委員長司式の下に開校式が行なわれた。新神学校の最初の理事は次の諸氏であつた。井深梶之助(常、長) 原田友太 日高善一 金井為一郎(常) 三好務 毛利官治 小野村林蔵 佐波亘

多田素 田川大吉郎(常、会) 山本五郎 山本忠興(常、書)

(注・「常」は常務理事、「長」は理事長、「会」は會計、「書」は書記)

以上のほかに校長川添万寿得、教頭高倉徳太郎が職権によつて理事に加わつた。この兩校の合同は日本キリスト教史上画期的な事件であつた。

「開教七十年、めぐみは豊かに、今や日本の基督者が日本の神学校を創立するに至つたのである。これは独り日本基督教會と言はず、実に我が國に於ける基督教史上永遠に記念せらるべき劃時代的の重大なる事件と言はねばならぬ」(植村正久と其の時代)第三卷)

東山学院の合併

明治二十年米國リフオームド教会によつてステイール・アカデミー(ステイール記念学校)として設立、経営されてきた長崎市の東山学院が、昭和六年明治学院に合併することになった。その事情については当時同学院の理事長であつたカイパー博士から、日本基督教教会教育局宛の陳情書は次のように述べている。なおスタウトによつてははじめられた神学部は明治三十五年、明治学院に合併された。

拜啓 米國リフオームド・ミツシヨンの経営しつつある長崎市に於ける中学東山学院は同ミツシヨンの決議に基き昨年六月四日同院理事會の名に於て現在の在校生を全部卒業せしむると共に之を閉鎖し同ミツシヨン關係の他の学校と合併する事に決し申候其後一部熱心なる学校關係者の間に是が存続運動起り候為理事會は其意志を尊重し閉鎖進捗を一時中止し同院引譲りに關し最後の提案を昨年十月八日に交附致候 併し其後何等の回答無かりし為同学院は本年度新入生を募集せず現在の所第二学年より第五学年迄の生徒を收容致し居り候

今年五月十二日理事會は右存続運動者より直接其後の経過を聴取致し候処今日の所是が實現に對し何等具體的方案無之旨報告有之自然理事會は再び同学院閉鎖の手續を進捗する事に決し申し候

扱て同学院を閉鎖するに至りたる直接原因は昨年四月米國リフオームド教会外國伝道局より送られたる特別派遣委員が世界各地の同ミツシヨン活動状態を調査したる結果其必要を認めて与へられたる勧告に基つくものに御座候 其勧告の要旨は

一、米國經濟界の状況より見て日本に於けるリフオームド・ミツシヨンの事業を集中する必要がある事

二、長崎地方に於ては過去數ケ年に亘り中等学校の擴張及び増設ありたるに反し入学志願者は最近著しく減退しつつあり尚他の教育事情より觀察して東山学院は既に其使命を終り是を取去るも事実上同地方に於ける教育の消長にさしたる影響なき事
三、九州に於ける他の地方に新規模の学校を設立し是に東山学院を移管すべしとの議ありしがミツシヨン事業は集中の方針に鑑み且又リフオームド・ミツシヨンとしては尚他に現在擴張又は充實を要する教育機關を有する故如何なる種類の学校も新設し得ざる事

大体如上の事由により長崎市に於ける中学東山学院は現在生徒を適当に卒業せしめたる暁是を閉鎖し同ミッション関係の他の学校と合併する事に決し申し候

就ては貴局と関係ある一枚として御参考迄に此段御通知申上ぐる次第に御座候

昭和六年六月廿日

東山学院理事会

理事長

書記

日本基督教會教會教育局 御中

H. Kupper
北澤 儀松

これにつき学院側は、同年十一月三日定期理事会を開いて次のように決した。

議事

東山学院を明治学院に合併する件に関する協議に於ては、田川総理より改めて説明あり、これに対し東山学院理事会よりその代表者として、明治学院理事会と交渉の任を受けたるホキエ、都留兩氏より更に詳細に亘る説明ありたり。(此時井深博士議長を退き、毛利理事議長代理として着席)協議の結果左記条件の下に合併するに決したり。

アメリカ・リフオームド教會ミッションは其経営に拘わる長崎東山学院を、その密接なる関係にある明治学院に合併せんと欲し、左の条件の下に之れが実行を明治学院理事会に提案す。

前記ミッションは、その経営に拘わる男子教育事業を集中するの必要を感じ、長崎に於ける東山学院を東京明治学院に合併し、その資産を明治学院發達の為に用ふ。

一、明治学院財団法人は東山学院の設立者となる事。

二、東山学院憲法第一条を左の如く訂正す。「東山学院設立者を明治学院財団法人とす。ミッションは当分の間設立者の承認の下に学院長、外国人教師及理事員を任命す」

三、明治学院財団法人が、東山学院設立者となると同時に後者の資産の所有権を前者に譲渡す。但し法律上の譲渡手続完了に至るまで、アメリカ・リフオームド教会伝道局は財団に代り永代借地権を継続す。茲に言ふ財産とは、長崎市東山手町八、九、十番地の参千五百十八坪、同十一番地の四〇四坪並にその校舎及設備品一切を含む。

四、此財産譲渡に当りては左記の条件を附す。

(A)長崎に東山学院の生徒存続する間（本年度より新入生を入学せしめず、従って現在の二年生が卒業に至るまで同ふ四ヶ年）此財産をその為を使用す。

(B)ミッション並に本国伝道局は、東山学院の全売上金を日本男子教育事業に捧げ、それ自身利益をとらず、又此目的以外に使用せざるものなり。

(C)前記東山手町十一番地四〇四坪の売上金は、東山学院教職員扶助基金に充て、追って明治学院恩給基金に繰入るものなり。

(D)前項十一番地の財産を除く財産を約七万五千円と見積り、之れをアメリカ・リフオームド教会伝道局が明治学院拡張費に寄与すべき金額に該当す。然して明治学院財団法人は、合併の暁、此東山学院よりの寄与せられたるものに対し適當なる表示法を講ずる事。

以上の措置が決定してから一年四か月を経た昭和八年三月九日、いよいよ東山学院閉校に関する理事会が明治学院において開かれた。決議の要項は次の通りであつた。



東山学院

「七、本学院第二中学部東山学院に関する報告（ホキエ理事）」

八、カトリック教団に七万五千円を以て東山学院の財産を売却する件 可決

一、ホキエ、都留両氏を東山学院残務整理委員として依頼する件 可決

一九、東山学院の財産を売却して之れを以て海軍墓地買収の資金とする事を關係ミッションに通達する件 可決

二、明治学院第二中学部東山学院を本年三月限り廃止する件 可決

昭和八年四月十五日官報第千八百八十五号 文部省告示第百八十八号

長崎県長崎市ニ設置セル明治学院第二中学部東山学院ヲ昭和八年三月限り廃止ノ件昭和八年三月三十一日認可セリ
昭和八年四月十五日 文部大臣 鳩山 一郎

昭和七年度東山学院生徒状況は次の通りであった。（昭和八年六月三日調査）

卒業生 五二名 四月東山学院より鎮西学院に転校せる数 五年、四年、三年へ転校 計五〇名
四年修了後退学者一名 明治学院中学部へ転校一名

教職員で明治学院に転任したものは、ホキエ院長、ミス・ダロー、前田大四郎と、のち竹中治郎の四氏であつた。

なお、東山学院より明治学院に移管された書類および備品は次の通りである。

- 一、教務庶務書類 一切
- 一、医務室用備品 八點
- 一、図書 一千冊
- 一、動植物標本掛図及実験用具 三三七點
- 一、（動物二八〇點、植物三七點、実験用具一〇〇點）
- 一、鉞物標本 一八〇點
- 一、生理標本掛図 二七點
- 一、物理実験器械 一一二點
- 一、化学実験器械 一〇〇點
- 一、日本及世界主要国地理掛図 二〇〇點
- 一、歴史掛図 一〇〇點
- 一、教練用具 一五點
- 一、体操用具 二點

田川総理最後の報告演説

田川総理は年二回の定期理事会において施政全般にわたって口頭報告演説を行なうのが慣例であった。かれは昭和十年十二月総理を辞するにいたったが、これより先同年三月六日の理事会で行なつた演説が、かれの最後の報告であり（注・十一月の理事会においても報告はしているが、それは都留部長の時に起こつた中学部第三回ストライキの後始末に関するもの、ただしその当時は総理は院長と改称した。）当時の苦しかった財政状態や、英語軽視の世相、御眞影問題、その他田川の辞職の理由となつた学校移転問題などにわたつていたので、これを次にかかげる。

「諸君 昨年来ノ経過ト目下考案中ノ事柄ニ就キ大要ノ御報告ヲ申上ゲ御指導ヲ仰ギマス

先ヅ昨年二月オ取り極リナサレタ昨年ノ予算デアリマスガソレハ御承知ノ通り財務委員会ノ報告ニ基イテ非常時予算ト称サレマシタ ソシテ予定ノ収入十四万四千一百円ノ中カラ一万七千七百円ヲ縮少スル様ニト議決セラレソノ實際ノ方法ハ私ト常任理事会トニ御一任ナサレマシタ 勿論各部長ト協議シテ手落ノ無イ様ニト注意ヲ加ヘラレタノデアリマス

私ハ唯今其御報告ヲ申上グルノデアリマスガソノ御議決ノ通りニ実行スルコトハ出来マセンデシタ ソレハ到底実行出来ナイト初メカラ手ヲ着ケナカツタ点モアリマス 総額ニ於テ一万七千七百円ヲ減ゼロト申サレマシタ点ガソレデ私ハ明治学院ノ現状カラ考ヘテ何ウシテモソコマデハ実行不可能デアルトシテ初メカラ手ヲ着ケナカツタノデス

私ガ実行シタイト思ヒ考ヘマシタコトハソノ七千七百円ヲ減ジタイト計画シマシタコトデソレニハ俸給ヲ減ズル必要ガアル學院經費ノ大部分十四万円ノ総支出中十一万六千余円ハ俸給デアルカラ俸給ヲ減ジナケレバ七千円乃至八千円ヲ減ズルコトハ出来マセン シカシ私ハ教員ノ俸給ヲ減ズルコトナシニ教員ノ数ヲ減ジテ俸給ノ総額ヲ減ジタイト考ヘマシタ 常任理事会ノ或方々ハ俸給ニ於テ七千円ヲソノ余ノ經費ニ於テ一千円ヲ減ズル計画ヲ立テラレマシタ 私ハソレモ難カシイト思ヒ俸給ニ於テ五千円ヲ其ノ他ニ於テ二千円ヲ減ズル計画ヲ立テ常任理事会ノ御同意ヲ得マシタソシテソノ実行ニカカリマシタケレドソレ

デモ尚実行スルコトガ出来マセンデシタ

俸給 総額 昨年 十一万六千三百円 今年 十一万五千五百円

教員 数 百十三名 兼任 六十三名 百十三名 兼任 五十九名

学生 数 五十名 五十四名 一六九〇名

コンナ計算デ今年ノ教員数ハ昨年ト総数デハ減ゼズ今年ノ俸給予算ハ昨年ト約八百円ノ減ニ過ギマセン 私ハコレヲ皆サ
ノ前ニ甚ダ恥カシク又心苦シク思ヒマス自分ナガラ私ノ微力ト無能ヲ恥ヂ入ル次第深ク御託申上マス

ソコデ今年ノ予算デアリマスガソレハ十四万四千六百円ノ収入デ昨年ト大凡同額ノ収入デアリマスガ支払ヒノ中ニハ昨年度
ノ不足千五百円ヲ含シテ居リマス 予算ヲ作ル方針トシテハ昨年二月非常時予算トシテ定メラレタ方針ニ本ツキ本年モ亦同ジ
ク非常時予算トシテ編成スルコトニ根本ノ方針トシテ一切ノコトヲホキエ先生ニ御依頼シマシタカラソノ説明ハスベテ同氏ニ
頼ミマス ドウゾ同氏カラ聴キ下サイ 此場合ニ私カラ御報告申上ゲ又オ礼ヲ申上ゲタイ事ハ昨年暮五百円ノボーナスヲ頂
イタ事デアリマス 之レヲ頂イタノデ今年ノヘノ繰越ノ不足ガ右之通り千五百円ニモナツタコトト思ヒマス 初メ昨年ノ九月
ゴロ私ニモ俸給ヲ払フコトニスルトノお話ガアリマシタ 十二月ニソノお話ガ又アリマシタ ソノ時私ハ唯今ハ俸給ヲ頂キマ
セン ソレハ明年ノ理事会ノ後ニイタダキタイ 昨年ノ暮ノ場合ハ若シ下サルナラボーナストシテ頂キタイト申シマシタ ソ
レ德斯ノ如クナサツタト思ヒマス 不足ノ財政ノ中カラ斯クシテ下サルコトヲ厚ク御礼申上ゲマス

予算ノ内容ヲ少シデモ豊カニスル不足ノナイ様ニスルト云フ方針デ 昨年ノ理事会ハ学生一人当リ月謝五十錢宛ヲ引上ゲル決
議ヲシテ下サイマシタ ソノ時ガ既ニオソクテ四月カラノ間ニ合ヒマセンデシタガ今年四月カラノ間ニ合セタイト思ツテ当局
者ト相談イタシマシタガ出来マセンデシタ 当局者ノ申シマスニハ(一)一般ニ上ゲサセナイコトニシテ居ル(二)特別ノ理由ガ
アレバ別デアル(三)ソノ理由ハ(イ)他ノ学校ノ月謝ニ比べ低イト云フ様ナ事デハ可ケナイ(ロ)学校ノ収入ガ不足スルトイフ様ナ
コトデモ可ケナイ(ハ)特別ナ設備ヲスル 特別ノ学科ヲ加ヘル 特別ノ練習ヲスルト云ツタ様ナコトヲ必要トスルト申シマス
ノデ到頭今年ノ間ニ合ハスルコトガ出来ズ今年ハ昨年ノママデ予算ヲ作ルコトニナリマシタ

尚年功加俸ト云フ問題ガアル コレニ就テハ常任理事会ノ御報告ガアル 宜シク願ヒマス

ソレカラ夜学科デアリマスガコレハ前年ヤレト議決サレタイト申シタ事ガアル 然シ文部省ノ許可ヲ得ズシテ巴ミマシタ
昨年モンノ希望ノ申出ガアリマシタガ神学校ノ予科ノ問題ノタメ沙汰止ミニナリマシタ 其後文部省ハ現在高等学部ニ不足

シテ居ル学生ノ数ヲ高等商業部デ補足スル方針ナラ許スト申サレマスノデソレナラ理事会モ許シテ下サルダラウト既ニ計画ニ
着手イタシテ居リマス 但予算ノ關係ガ容易デアリマセン コレハ追加予算トシテ通常予算ノ外ニ御議決ヲ願フコトニ致シマ
ス 御心配ヲ煩ハシマシタ鉄砲ヲ学院ノ全体デ代ル流用シテ不足ノナイ様ニスルト云フ昨年ノ秋カラノ計画ハンソノ通り差
支ヘナク行ハレテ居リマス 鉄砲ノ數ハ勿論尙不足デアリマスケレドコレダケアレバ差当り半分ノ生徒ハ鉄砲ヲ持つテ半分ノ
生徒ハ鉄砲ヲ持タナイト申ス見ニクイコト不公平ナコトキマリ悪イコトハ先ヅ無クナリマシタカラ御安心ヲ願ヒマス

将来ノコトヲ申上ゲマスガ私ハ学院ノ位地ヲ移転シタイト思ヒマス 今日迄ハ移転シナイ方針デ私ハ居リマシタ 其ノ方針
デドナタニモ答ヘテ参リマシタ 其理由ハ郊外ノ地価ガ高クコノ学院ノ地価ガ安クココヲ売リ払ツテ広イ位地ヲ郊外ニ買フコ
トガ出来ナイト思ツタカラデアリ 然ルニ一坪十円以下デ割安ニ買ヘル位地ヲ見出シタ事又日本神学校モ移転シマセウカラ同
ジ所在ニ移ツタラ双方ノ便利デアロウト思ヒマシテ新ニ移転ノ計画ヲ立テマシタ 但常任理事会ノ協議ニカケルコトガ出来ズ
私単独ノ意見トシテ後ニ申上ゲマス コレハ学院ノ将来ニ最も重要ナル關係アル問題デス ドウゾ宜シク御審議ヲ願ヒマス
ソノ外ニ陛下ノ御写真ノコトガアリマス 近頃文部省カラソノ御問合セガアリマシタ ソシテ二月一杯ニ返事ヲセヨトノコ
トデシタカラ前回オ答ヘシタ通り

建物ガ粗末デ奉安ヲスル設備ガナイカラオ請ケテ御遠慮申上ゲタイト答エマシタ 然シコレハサウ云フ理由デスカラ将来改
築ヲシ新築ヲスル場合ニハソノ心得デ設計イタシマスコトヲ予メ御諒解ヲ願ツテ置キマス 昔ハコレニ關シテ宗教的の礼拝カド
ウカト云フ問題ガ起ツタコトガアリマス 今ハソノ問題ハ無イト思ヒマス 文部省ノ方針トシテ四六節ニハ学生ヲシテ敬礼セ
シムルコトニナツテ居リマスコレハ基督敎学校ノ關係者カラ問合セモアツタコトデスカラ念ノ為メ申シテ置ク次第デス
ソレカラ中等学校ニ外国語ヲ全廢スル 全廢シナイマデモンノ時間ヲ少クスルトノ問題ガアリマス 私ハコレハ全国ヲ通シ

テサウナルコトダラウト思ヒマス 然シ私ドモノ学校デハ現今ノ通りデヤレルダロウト思ヒマス ヤレル様ニ願ハネバナラナイト思ツテ居リマス ソコデ日本ノ中等学校ガ外国語ヲ多ク教ヘル学校ト少ク教ヘル学校トノ二ツニ分レバ私共ハソレヲ多ク教ヘル方ノ学校トナリヨイヨ特色ヲ發揮スルコトニナルト思ヒマス コレモ将来ニ關係ノ多イ問題デスカラ御注意ヲ願ツテ置キマス

ソレカラ宗教々育ニ関スル文部省ノ方針デスガ文部省デハ師範学校デノ宗教々育ヲ何ウスレバヨイカ先ヅソレヲ研究セラルコトニナリ非公式ニ諸方面ノ人ヲ招イテ懇談ヲツツケラレル相デ私ニモ出席セヨト申シテ参リマシタ 私ハ参リマスト答ヘテ置キマシタ コレ又今日ノ教育上ノ傾向ヲ知ル一ツノシルシデアラウト思ヒマス

尚昨年拳ゲラレマシタ学院ノ憲法改正ノコト ソレモ後ホド御報告申上ゲマスガソレハ「チャブレン」ヲ置クコトニナツテ居リマス 日本語デ何トイフガイイカ分リマセンノデ宗教部長ト申スコトニシテ置キマシタ ソウ云フ専任ノ担任者ヲ置キ基督教ノ信仰勢力ヲ盛シナラシメタイト思ヒマス 但ソレニハ誰ヲ頼ミマスカマダ予定シテ居ナイコトデスカラ其ノ人ニ就テモ宜シク願ヒマス コレニテ終リトイタシマス

オルトマンズ博士の隱退

リフオームド・ミツシヨンの代表者として、学院の神学教育にまた経営に多年にわたり貢献したアルバート・オルトマンズは、昭和五年三月をもって隱退、

帰国することになり、明治学院理事會は次の感謝状を送ることを決議した。(昭和五年四月十日理事會議事録)

「田川総理ノ動議ニヨリ左ノ件満場一致可決ス

最近帰國セラルルオルトマンズ博士ニ対シ感謝狀ヲ送ル件

オルトマンズ博士ヘノ感謝狀

博士ガ日本ニ渡來セラレテカラ既ニ四十四年、我が明治学院ノ教授トナラレテカラダケデモ殆ンド三十年近クニナル 此間博

士が最も自由ナル日本語ノ力ヲ以テ博學ナル基督者ノ智識ト聖化セラレタ基督教の信仰ノ徳ヲ運ビ伝道ノタメ教育ノタメ及ヒ社会事業ノタメ日本ニ与エラレタ功績ノ顕著ナコトハ茲ニ改メテ申スマデモナク内外人ノ奇シク賞讃シテ居ル所我が理事会ノ殊ニ感謝ニ堪ヘナイ所デアル

今回御帰国ノ期迫リタルハ功成リ任期満チテノ事トハ申シ乍ラ我が理事会ノ最モ名残惜シク堪ヘ難ク感ズル所デアル
茲ニ本理事会ノ名ニ於テ謹ンデ感謝ノ意ヲ表シ神ノ恵ミ博士並ニ御家族一同ノ上ニ永久ニ裕ナランコトヲ祈ル

オルトマンズは一八五五年オランダに生まれ一八七三年北米に移住、一八八三年ホープ大学卒業後ニューヨーク州ズウィック神学校に入り同八六年卒業、その日に結婚、その直後に日本に向かった。その後、長崎の東山学院長として三か年勤務、明治二十二年より九州地方の伝道に従事していたが、明治三十五年招かれて明治学院に來た。学院では神学部教授としてヘブライ語、ギリシャ語、旧約聖書を教えたが大正十五年神学部教授を辞した。その間、明治四十一年よりアメルマンの後をうけて理事会議長におされ、大正十年までその職にあった。大正十年井深が辞任した後は総理事務取扱の職をとるなど、長く学院最高責任者であった。

「明治学院高商時報」第二号に記載された記事の一節を引用すれば、かれが真にイエスの弟子であり愛の使徒であつたことがわかる。

「本学院神学部教授の職を辞せられてからは、さきに明治四十四年社団法人好善社の理事と同社の経営する私設癩癪養所患者の救護事業に与られて以来、手を染められたこの事業をさらに、東洋印度癩癪病救済協会の日本方面主事として東奔西走、席の温まる暇もなく公私の收容所を歴訪し、又患者の居所を探查して慰安救護に努められた。博士のこの偉大な仕事はキリスト信者としての強い信仰と溢るるばかりの愛によってなされたのである。」

「イエス・キリストが申されました。「受くるより与ふるは幸なり」これが真とすれば私は不幸の者です。なぜかといふに、この数年間癩患者のために働いて、私の受くることは与へたよりも多かつた。私は実に口にいへぬほどの靈性上の利益を得たことを深く感謝します」

「かくして一言一句広き愛におのづと頭を下げしむる言葉を残されて、われらのアルベルト・オルトマンズ先生は故国へ帰られた」

また、ジャパン・タイムズは次のように大見出しで記事をのせている。

滞日四十五年の宣教師オルトマンズ博士帰国

滞日半世紀に及ぶ有名なキリスト教伝道者金曜日に出帆

癩病患者を援助

明治学院一員でミシガンに隠居のため

東京在住の米国宣教師の長老にして、我が国癩病患者の撲滅に働いている数少ない人々の一人、エ・オルトマンズ博士は六月六日夫人と共に日本郵船の汽船秩父丸で横浜から帰国する。オルトマンズ博士夫妻はミシガンで余生を暮す予定である。帰国の宣教師は日本の友人達に「サヨナラ」を言はなければならないのは大変に残念だと心境を語った。彼は最近宣教師団の規則により米国宣教師団の地位から退いた。しかし、もし夫人の健康と諸般の事情が許すならば、彼は再来年頃に日本にもどつて来て、あわれな癩病患者の友人として余生を捧げることを望んでいる。

オルトマンズ博士は米国宣教師として四十五年間日本に滞在し、癩病患者の悲惨な状態の改善とキリスト教伝道運動に限りない貢献をした。東京の明治学院の職員に参加する前はキリストの教へを説教するために日本各地は勿論、朝鮮及び台湾にまで旅行した。(中略)

昨日の会見でオルトマンズ博士は次の如く語った。

「私は数年佐賀に滞在し、一九〇四年東京に来て明治学院の教授団に加はりました。私が半世紀前に来日した頃は癲病患者の状態は全く惨めでした。しかし今日では大そう改善されました。概して云へば、この病気の患者数は年々減少して、現在癲病患者の総計は内地だけで凡そ六万人程度になりました。私が救癲の仕事を開始した時には官立病院はありませんでした。しながら、四十年前からローマカトリックの神父によつて創立された九州の復生病院はありました。復生病院は癲病患者にとつてはこの国で一番立派で歴史のある隔離病院です。現在は国全体では国立病院が五、私立病院が九あります。出来ることなら、私は気の毒な人々の友人として余生を献げるために日本に帰つて来たいと思ひます」

なお、オルトマンズは帰米後まもなく夫人を失い、その骨をたずさえてふたたび日本にきたり、昭和十四年学院構内の四号館で死去した。八十五才。いま夫人とともに学院に近い瑞聖寺の墓地に永遠の休息に入っている。

オルトマンズの救癲事業はその後エイチ・デイ・ハナフオード教授によつて継続された。

第二章 戦争時代

創立六十周年記念行事

昭和十二年十一月三日大講堂で、各学部合同の創立六十周年記念式が次の順序で行なわれた。この日特に意義深かったことは、同窓生の発起による校歌碑の除幕式が行なわれ、内外のキリスト教関係者、同窓生ら多数参列し、校歌を合唱して感激にひたつたことであった。

創立六十周年記念式順序

司式	院長事務取扱ウイリス・ジー・ホキエ		
奏樂	安部正義	演説	院長事務取扱ウイリス・ジー・ホキエ
頌榮(五六六)	一 同	合唱	生徒有志
聖書朗読	理事 鈴木春		勤続教職員表彰
祈禱	理事 富田満	演説	理事長 多田素
讚美歌(五五)	一 同	合唱	生徒有志

頌 栄（五六八）

一 同 祝 禱

名誉総理 井深 梶之助

当日表彰された勤続満十五年以上の教職員は、岡見正、都留仙次、藤本仁平、斎藤勝次郎、嶺岸忠之助、川村貫治、荒井惟俊、石橋近三、中山昌樹、鷺山第三郎、大西貞治、松田彦寿、南熊夫、エイチ・デイ・ハナフオード、由布保、安斎七之介、大久保喜松（就職順）の諸氏であった。

記念式典に引きつづき、同窓生有志によって礼拝堂の横に建てられた校歌碑の除幕式が行なわれた。

校歌碑除幕式挙行順序

贈呈文朗読

建設委員長

植木万里

除幕

作詞者

島崎藤村

経過報告

同

校歌合唱

一 同

謝

院長事務取扱

ウイリス・ジー・ホキエ

万歳三唱

一 同

なお、当日は島崎藤村は出席できず、令息鶏二氏によって除幕が行なわれた。
募金趣意書を参考のため再録しておこう。

「人の世の 若き生命の朝ぼらけ

学院の鐘は響きて 吾ひとの胸うつところ

校歌を口吟むと、心はいつしか白金の丘へ戻って行きます。そこに根深くお互の記念樹の立つ明治学院があります。若い時代を過ぎた母校です。思へば懐かしさが込み上げて来ます。

昭和十一年の春、若い同窓の一角から校歌碑建設の声が挙がりました。これは一つには吾等同窓にしてその作詞者たる藤村、島崎春樹君に対する敬愛の念から生じたものでありませうが、歌詞そのものの力が物を言ったのであります。明治学院の校歌ほど好い校歌は他にありません。莊重にして明朗、いかにも明治学院の精神を伝えていきます。

若き有志達は島崎君を動かしました。島崎君は文学使節として南米に旅立つ前の多忙をも厭はず、碑の原文を執筆されました。この挙は今までにないことに、若い同窓と先輩の同窓を結びつけました。先輩有志は後輩の熱意に感激したのであります。明治、大正、昭和の三時代が鳩首談合、回を重ねて竟に募金運動開始の運びになりました。因みに校歌碑の設計一般は和田英作が引受けます。(注・実際には和田の推選により美校の金沢助教授がこれにあたった。)

この校歌碑は冷かな追憶の標石でなく、学院精神の象徴として、朝夕学生に親しませたいのであります。必ずや教育上効果あることを信じます。中央委員として次に名を連ねたものは謂はばお勤め役です。先輩有志の背後にその数十倍の若い有志が控へてゐます。何卒御賛成下さい。事業の性質として、成るべく多くの同窓から御寄附を仰ぎたいのであります。

昭和十二年一月

明治学院校歌碑建設会

武藤健、植木万里、和田英作、戸川明三(秋骨)、小城徳太郎、石川林四郎、

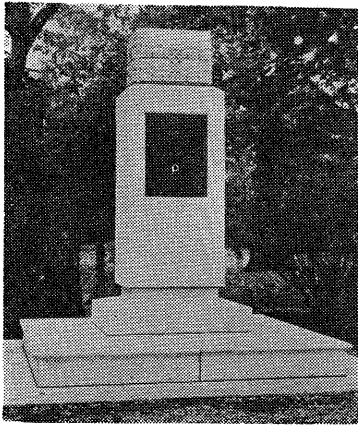
里見純吉、石井孝一、佐々木邦、鷺山第三郎

一、建設費予算額 金参千円也

一、竣工予定期日 昭和十二年五月

校歌碑

明治学院六十周年記念式日(十一月三日)以前ニ此碑ノ献碑除幕式ヲ行フ



当時の模様については、「同窓会報」第十一号にある「校歌碑建設のころ」と題する平林武雄氏の一文がよく伝えているから、それを参照されたい。

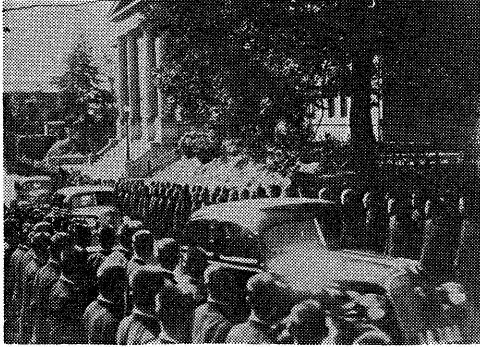
苦難のホキエ院長事務取扱

田川大吉郎は大正十一年オルトマンス総理事務取扱の後をうけ、理事長として総理事務をとり、同十三年十一月より専任総理となり、昭和十年十二月辞任したが、その間震災や世界経済恐慌のため、一年として財政にゆとりのあつた時期はなかつた。その後をうけたホキエ院長事務取扱は、会計の手腕にすぐれた人であつたが、まず学院の財政状態に苦しまなければならなかつた。次の理事会記録にみるように、当時は田川の退職金さえ払えない状態にあつた。

「(1)田川大吉郎氏へ恩給基金ヨリ支出ス可キ退職金ノ支払ヲ延期シ經常費ヨリ支出スベキ退職金一ヶ月三百円宛ヲ昭和十年十二月ヨリ支払フ事ヲ可決ス」(昭和十一年三月四日理事会議事録)従つて教職員にボーナスなど支給することができず、年末に雅叙園などに全教職員を招待して、その労をねぎらうていどであつた。

第二の難問は設備の改善と御真影および勅語の問題であつた。

御真影と勅語謄本の有無の問題は、昭和三年以来文部省よりしばしば問い合わせがあつたが、前に記したように、田川総理はその都度、設備の不完全を理由に辞退し通してきた。ホキエ院長事務取扱になつて文部省の査察があり、設備の不備と規定の違反、とくに御真影問題では院長事務取扱が文部省に招致せられ、回答を迫られる事態となつた。



御眞影奉戴

右の通り回答したが、けつきよく本建築の建物が予定通り建築されなかったのと、その後の種々の通達により、昭和十三年にいたりチャペルの東南の一角を改造して奉安所とし、これをうけることとした。当時は教育勅語のみならず、各種の詔勅類がつきつきと発せられた。日本人でもこれらの詔勅を誤りなく読むことは容易なことではなかったが、ホキエはこの難

「文部省督学官等前後三回ニ亙リ巡視ノ上兩高等学部及中学部ノ状況ヲ調査シ且ツ本校ノ財政状態ヲ検査セリ
之等督学官ノ注意事項左ノ如シ

(イ)図書館ノ不備及新刊書籍買入資金ノ不足

(ロ)高等学部ノ学則所定学科目トノ矛盾

(ハ)中学部ノ修身及公民科ハ該科目教員免状ヲ有スル教員ノ受持トナスノ希望

(ニ)中学部在籍定員九百五十名超過ノ事実

御眞影奉戴ニ関スル学院ノ方針ニ付文部省ハ去ル九月初院長事務取扱ヲ招致シ之ガ回答ヲ内命セリ

学院ハ文部省ノ下附セル教育勅語謄本ヲ有スルヤ否ヤニ付文部省ヨリ照会アリ右ニ関シ学院記録不備ナル為前総理井深梶之助氏ニ問合せノ上謄本ハ本財団法人設立當時下附セラレタル旨文部省ニ回答セリ」

「御眞影奉戴ニ関シ文部省ノ照会ニ対シ明治学院理事会ハ学院院长ヲシテ目下計画中新校舎建設ノ際、適當ナル奉安所ヲ設ケタル上謹ンデ奉戴スル旨回答セシムルコトヲ決議ス」(昭和十一年十一月四日理事会議事録)

事を誤りなく見事に果して、配属将校その他も一点の非を見出すことができなかつた。

第三の問題は改築問題であつた。これは学院創立六十周年記念事業として、学院の建物を全部本建築に建てなおそうという案であつた。これは昭和十一年三月四日の理事会で可決され、改造委員会が設けられ、建物の計画と同時に、学院の教育規模全体についての建議案が同年十一月の理事会に提案採決された。その詳細は別項「総合改築計画」に記されている通りである。

しかし、これは時代を考えない無理な計画であつた。支那事変はしだいに拡大し、物資の不足のため資材の統制が始まり、支那事變の關係で対米關係もまづくなり、ホキエの努力と、改築後援会主事伊藤毅の奮闘にもかかわらず、木造校舎中学位二むねと高等学部一むねを建てただけに終わった。

第四には学院の教育にとって根本問題がおこつた。それは学院の教育は「基督教主義による」だけでは不備であり、教育勅語をその根幹とすべきであるとの勸告をうけ、学院寄付行為および各学部の学則変更を余儀なくされた。

『現行寄附行為第二条ニ「本法人ノ目的ハ基督教主義ノ教育ヲ施ス為メ次条ニ規定スル条件ニヨリ明治学院ヲ設立維持スルニアリ」トアルヲ「本法人ノ目的ハ教育ニ関スル勅語ノ旨趣ヲ奉戴シ基督教主義ノ教育ヲ施ス為メ次条ニ規定スル条件ニヨリ明治学院ヲ設立維持スルニアリ」ト改正スル件』（昭和十三年三月九日理事会議事録）

右にならつて高等学部、高等商業部及び中学位学則第一条に定められた「基督教主義ノ教育」の前に「教育ニ関スル勅語ノ旨趣ヲ奉戴シ」と挿入する件を満場一致をもって可決した。

第五には田川総理の時代に組織されていた維持会の解散と、これも田川が作った消費組合の後始末であった。維持会の解散には、同会の援助をうけていた高等学部教授会などは反対であったが、経理に不明な点があったことと、改築後援会を組織することで維持会は解散することになった。消費組合の問題については出資者に元金の返済もできない状態になり、ついにホキエが陳謝して解散した。

ホキエは昭和八年東山学院閉校時代の最後の院長として学校閉鎖の後始末をし、明治学院にきてからは会計理事として経済恐慌による不況のどん底にあった貧乏世帯のやりくりを苦心し、その上、支那事変拡大とともに学院に迫ってきた国家主義、軍国主義のうずの中にあつて、会計、学院長、高等学部長をも兼務し、(中山教授外遊中)軍事教練の査閲までやらされ、足かけ五年にわたる院長の職を見事に果たしたが、日本の軍国主義の嵐は次第にたけり狂い、対米関係も最悪の事態に向かわんとする昭和十五年、ふたたび日本に帰る希望もなく、暗い気持ちでさびしく帰国の途についた。

総合改築計画

学院の総合改築計画は昭和のはじめ田川総理の時代に計画され、英国チュードル式三階建校舎を百三十万円で建築する案がたてられ、すでに青写真やエレベーションまででき、ラマート教授などは学生にまで見せて大いに期待をもたせたが、米國経済界の恐慌のため沙汰止みとなった。

昭和十年ホキエ博士が院長事務取扱となつて、学院創立六十周年記念に、工費六十万円、鉄筋校舎を建てることになり、資金はプレスビテリアン教会より淀橋角筈の土地売却金二十万円で、リフォームド教会より十万円、国



伊藤 毅

内募金三十万円の予算であった。昭和十三年六月、同窓会、父兄会が中心となって、改築後援会が組織され、同窓会長一色虎児を会長に、同窓会主事伊藤毅を主事として改築資金募集に奔走した。

募集期間は三年であったが伊藤は満州、朝鮮へまで募金に出かけるなど不眠不休の活動をつづけ、二か年半でほぼ、その目標額を達成して昭和十五年末退任した。その間支那事変の拡大と太平洋戦争の切迫のため資材の不足制限などのため予定の鉄筋校舎の計画を変更し、木造校舎にして急速に建てることにした。それはミツシヨンのよりの経常費援助を辞退した結果、定員増加の必要にせまられたからである。

昭和十四年矢野院長が就任し、ホキエは院長事務取扱を辞して昭和十五年帰国した。矢野院長はまず中学部の増員をはかるため旧中学部校舎北側のパレーコートをつぶして、六教室、延二一〇坪の二階建校舎一棟を昭和十六年九月竣工した。次いで旧海軍墓地沿いにあったヘボン館(最初のヘボン館でない)と称した元神学部寄宿舎で当時中学部校舎になっていた一棟を取こわして、延二五〇坪の二階建六教室の中学部校舎一棟が昭和十七年の春竣工した。ときはまさに太平洋戦争第二年目で、防火規制がやかましくなり、学院は政府の命令と補助金によって既存の校舎にもモルタルを塗り、天井と壁には防火剤を塗って火災に備えた。

戦局はいよいよ苛烈の度を加え、物資はますます不足し、建築資材の配給はきびしくなった。しかし高等両学

部の校舎増築のため第三期工事として現高校裏にあった宣教師館一号を取壊してその跡に二階建、講堂一、教室五、延二二八坪の建築にかかり、昭和十七年十一月に完成した。恐らく当時としては最後の建築であったであろう。その後は民間の建物は資材の配給はうけられなかったから。この戦時中の三期にわたる改築工事は山根可式の設計監督により山中工務店の施工によって行なわれたが、資金の面ではミツシヨンと伊藤毅に、工事の推進には理事磯部房信に負うところが大きかった。

矢野院長の就任

ホキエ博士帰国のあとをうけて第四代学院長に就任した矢野貫城について、昭和十四年八月二十日付「明治学院時報」（第八十六号）は、次の通り報道している。

〔総務部発表〕「今般明治学院理事会は、彦根高等商業学校校長正四位勲二等矢野貫城氏を明治学院長として招聘し、過る八月一日前学院長事務取扱ウキリス・デー・ホキエ氏との間に事務の引継を完了した。

新院長は事務引継の後ひとまづ彦根に帰還、八月十日彦根高等商業学校校長退官発令、同十五日御家族とともに上京、構内住宅（六号館）に入られた。

就任式は来る十一月三日、学院創立記念日に於て挙行の予定である。同氏は嘗て文部省督学官たり、且つ我が学院の理事に就任せられた事もある。

矢野院長略歴

矢野氏は高知県に生れ、当年五十四才 明治三十七年高知県立第一中学校（現城東中学校）卒業 明治四十一年山口高等商業学校卒業 同年同校助教教授に任ぜらる 大正二年同校教授に昇格す 此の間軍務に就き陸軍三等主計を以て退役す 大正四年商業学及商業地理研究のため満二ヶ年米國に留学を命ぜられ、コロンビヤ大学に於いてマスター・オブ・アーツの学位を得て

帰朝す 大正八年文部事務官兼文部省督学官に任ぜらる 大正十年実業学務局第三課長となり 大正十三年実業学務局商業教育課長となる 昭和二年彦根高等商業学校長に任ぜられ今日に及ぶ 校長在任中欧米各国に出張を命ぜられ又第二回中華民国出張を命ぜられ広く海外の事情を見聞す、尚氏は就任まで高等商業学校長会議の名幹事として同学校長間に重きをなしてゐた。

東亜科の設立

昭和十四年八月矢野貫城が学院長に就任するや、キリスト教による善隣友好の精神から高等学部に東亜科の設立を企図し、ただちにその準備にかかり、翌十五年四月には開設の運びとなつた。そして矢野院長のこの構想に共鳴して毎年寄付金を約束した団体は財団法人昭和報公会（理事長平生夙三郎）、財団法人服部報公会（理事長林春雄）、株式会社岩井商店（社長岩井雄二郎）、個人として寄付したものは主婦の友社社長石川武美、大丸社長里見純吉、明関道太郎の諸氏であつた。なお初年度の学生募集要項の一部は次の通りであつた。

東亜科設立趣意書

本学院は宗教的情操及信念を基礎トスル教養ニ依リ、使命感ヲ以テ国家ニ奉仕スルノ念旺盛ナル忠良ノ日本臣民ヲ養成スルコトヲ目的トシ、高等商業部及高等学部ヲ置キテ、実業従事者、社会事業従事者及英語ニ堪能ニシテ教育其他ノ事業ニ従事スル者ヲ社会ニ送り出シテ今日ニ至リシガ、今次事変ノ進展ニ伴ヒ、日支間ニ於ケル民族的理解促進ノ極メテ必要ナル事情ニ鑑ミ支那語ニ通ジ、支那事情ニヨキ認識ヲ持チ、支那ニ於ケル宣撫事業及各種ノ経済活動ニ参加シ、良キ日本人トシテ支那人ノ指導ニ当リ以テ東亜ノ大業ニ貢献スルコトヲ天職トスル人物ヲ養成スルコトガ、東亜ノ現状ニ即シテ本学院ノ施設スベキ重要事項ナルヲ確信シ、茲ニ東亜科新設ノ計画ヲ立ツルニ至レルモノナリ。

目的 本科ハ東洋ノ文化並ニ經濟事情ニ通シ、支那語ニ堪能ナル実務家ヲ養成スルヲ以テ目的トス
修業年限 三ヶ年
定員 百五十名（一学年五十名宛）
特典 高等学部ノ他科ニ同ジ（學則参照）

ミッシヨンの援助辞退

矢野院長は昭和十五年九月二十日付「明治学院時報」に「新体制下の明治学院」と題する巻頭論文をのせているが、その冒頭で次のように述べている。

「國家の劃期的大轉換期に當り我等學院が旧態依然たる状態にあることは許されぬ。時の動きを認識して學院の精神に即し、独自の計画を立てて、この時代を慥かなる逞ましい歩調を以て歩む為に新しい計画がなされねばならぬことは、夙から考へられていたのであるが、此度財政を獨立して独自の途に進む計画を立て、基督教主義によつて忠良なる日本國民を養成することに遺憾なからんことを期し、これが用意に取掛る事となつた」

同年十一月二十九日開催の第八十七回理事会において、學院創立以來うけてきた米国プロテスタント、リフォームド両ミッシヨンよりの財政援助を辞退し、昭和十六年度からは財政の獨立を期することという歴史的決議がなされた。

しかし、ここに注目すべきことはミッシヨンの援助を辞退した次の第八十八回理事会において、このような報告があることである。

「在日本アメリカ・リフォームド教会宣教師社団ヨリ寄附セラレタル久留米市京町在土地參百坪ノ登記事務ハ三

月一日久留米教会石田正氏ニ依頼目下手続中ナリ」。また昭和十六年五月二十日付「明治学院時報」には次の記事がある。

「過る四月二十八日、在日本プレスビテリアン宣教師社団のウォルサー、ハナフォード両氏は学院の改築資金として三井銀行の小切手金貳拾万円也を学院長に手交せられた。これは同社団の所有にかかる角管の土地を売却せられた結果で数年前からの約束を茲に実現せられたわけである」

こうして学院は、昭和十六年よりミッシヨンの援助を辞退して財政の独立を計った。そのため定員を増加し、教室を増築し、授業料その他の校納金を増徴して収入のバランスを保つことにとめた。その当時は昭和初期とはちがって各学部とも志願者も増加していたので、そうした態勢で戦時中を切り抜かれるようにみえたが、昭和十八年には学生の徴兵猶予停止となり、学徒出陣、繰上げ卒業など戦時非常教育措置により学生数は大幅に減少し出した。繰り上げ卒業者には授業料一部返還などの処置を取らねばならず、学院の財政は日に日に急迫を告げてきた。

ここにおいて中学部保護者会、高等学部、高等商業部保証人会、同窓会によびかけて、後援会を設立してもらい、後援資金を募集して財政危機を切り抜けることとした。後援資金は昭和十八年十一月末にはすでに二万七千九百四十九円が払込済となっている。教職員に戦時手当を支給したり、戦時の財政危機を脱することができたのは、ひとえにこの資金によったものである。

井深名誉総理の死去

井深樞之助名誉総理は昭和十四年三月以来、高血圧のため白金三光町三四六の自邸で静養中であつたが、同十五年六月二十四日未明脳膜下出血のため危篤におちいり、午前十一時死去した。葬儀は二十六日午後三時、礼拝堂において学院葬により盛大に執行されたが、旧会津藩主松平保男、徳富蘇峰、永井柳太郎らの朝野の名士、教え子の島崎藤村ら多数が参列した。

弔詞

故明治学院名誉総理井深樞之助先生ハ安政元年六月十日会津藩士井深宅右衛門氏ノ長男トシテ生レ藩ノ教育ヲ受ケテ文武ノ道ニ精励シ次第ニ頭角ヲ現ハサレマシタガ恰モ維新変革ノ時代ニ当リ友人先輩ガ白虎隊ニ加ハツテ壮烈ナル忠死ヲ遂ゲルニ会セラレタナド一少年時代既ニ幾多ノ艱難ニ遭遇シ以テ後年ノ大器ヲ玉成スルノ基礎ヲ造ラレタノデアリマス。後洋学ヲ志シテ江戸ニ出デブラウン博士ノ人格ニ触レテ始メテ基督教ニ接スル機会ヲ得遂ニ明治六年同博士カラ受洗シ宗教界ニ志シテブラウン塾、一致神学校等ニ於テ教養ヲ積ミ牧会、伝道、教育、青年指導等ノ事業ニ携ツテ基督者ノ為ニ大ニ力ヲ致サレマシタガ、明



晩年の井深名誉総理

治十九年ニ明治学院ガ創設セラレルニ当リ其理事兼教授トナリ次デ米國留學ヲ終ヘテ明治二十四年総理ニ就任セラレ大正十年職ヲ辞セラレルマデ総理トシテ三十年前身タル一致神学校助教トナツテカラ実ニ四十年ノ永キニ亘ツテ学院ニ尽サレ職ヲ退カレテ後モ学院ノ為ヲ思ハレルノ念益々深く真ニ学院ハ先生カラ大恩ヲ受ケテ居ルノデアリマス。先生為人謹厳廉直多クノ体験ニ依テ洗練セラレ恩寵ニ依テ磨カレタ基督教徒の紳士デアリマシテ、教界ノ大先輩ト仰ガレ後進ノ大ナル力デアリマシタ。

先生ハ明治時代ノ先覺トシテ又其ノ才氣ト教養トヲ以テ社会的地位ニ於

テ大ヲ為スコトハ容易ノコトデアリマシタガ人ノ目ニ大ナラント欲スルヨリモ神ノ啓示ニ忠実ナラントセラレタ先生ハ終始一貫シテ理義ヲ誤マラズ恵ノ内ニ在リテ生キ国ト人トニ仕ヘルコトノ外何物モナカツタノデアリマス。

今ヤ先生ハ八十七年ノ神ニ嘉セラレタ麗ハシイ御生涯ヲ終ヘラレ神ノ召ヲ受ケラレ静カニ天ノ御国ニ移サレマシタ。私共ハ在リシ日ノ先生ヲ憶ヒ哀悼禁ズル能ハザルモノガアルト共ニ先生ノ靈ノ上ニ愈々祝福豊カナランコトト先生ニ依テ始メラレ育テラレタ多クノ事業ノ上ニ神ノ導キイヤ増サンコトヲ祈リ弔詞ト致シマス。

昭和十五年六月二十六日

明治学院長 矢野 貫城

井深先生の思ひ出

島崎 藤村

故井深先生の英語に精通せられたことは、斎藤勇君の所感にもある通りで、今更小生の申上げるまでもありません。学院時代当時の普通学部四年の頃、井深先生は「英文学選集」二巻の訳の授業時間を受持たれました。アンソロジイ風に編まれた原書であつたと覚えます。その折の口述は字々句々、実に簡潔適確で、先生が日頃の造詣の深さを思ひ知りました。得るところが多かつたのもあの時でした。井深先生が語学の練達は、石本三十郎先生の軽妙な通訳術と共に、当時にあつての雙璧とも言ひたく、これは学院内のみにかぎらないことでした。(昭和十五年九月発行「明治学院時報」第九十八号より)

宣教師の帰国

昭和十五年七月政府においては「すみやかに東亜新秩序を建設するため」に日独伊枢軸の強化と南進政策の路線がきまつた。そして九月にはベルリンにおいて日独伊三国同盟が調印され、

その結果対米協調はいよいよ困難になり、ついに日米交渉を破局に導くこととなつたのみならず、アメリカ、イギリス、中国、オランダのいわゆるABC Dラインによって包囲せられることとなつた。従つて日本人の対米感情もしだいに悪化していった。

矢野院長は米人教師に対し学生から万一不測な事態が起こってはとの配慮から米人教師の教壇に立つことを遠慮してもらう措置を取った。この措置は神学部出身の教職者の間ではかなり批判があったが、理事者はこの措置を了承していた。

用のなくなった宣教師達ミス・ダロウ、ミセス・オルトマンズなどは引揚げの準備をはじめた。荷物は極度に制限されたし、所持金も許されなかつたので、一部所持品を売って装身具にかえるぐらいで、家財道具は校内宣教師館においたまま、軽井沢や野尻湖のサマー・ハウスは閉じたまま、ほとんど着のまま帰国の途についた。これよりさきラマート教授は警視庁に呼び出されたり、ルーベン教授は軽井沢でスパイ容疑の取調べをうけたこともあった。

ライシャワー、ホキエ、デマーグ、オルトマン、タボーグ、ヘルムなどの関係者は賜暇その他の事情ですでに引揚げていたが、日米関係の雲行きを憂慮しながらも最後まで踏みとどまっていたハナフォード夫妻、ジョン・スミス、ポーベンカーク、ルーベン、ヘール夫人などは最後の交換船で帰国する途中、太平洋上で日本軍による真珠湾奇襲攻撃の放送をきき、船は引き返してかれらは横浜のヨットハーバー、その他に抑留された。ワイコフ博士の娘であるヘール夫人は、このショックで、ついに故国に待つ子供たちを見ることなく東京で急死した。抑留されていた人々も、その後の交換船で強制的に帰国させられたが、かれらの心は学院にとどまっていた。

かれらがのこして行った家財道具は敵産管理の法令により大蔵省に届出で、特別な管理のもとに学院で保管することとなった。

大東亞戦争とキリスト教界

昭和十二年盧溝橋事件がおこり、同年八月には上海事件がおこり、日本は中国と事実上戦闘状態に入った。政府は「従来執り来れる不拡大方針を抛棄し戦時態制上必要な諸般の準備対策を講ず」と決定した。そして「北支事変」の呼称を「支那事変」と改め、宣戦布告のないまま中国との全面戦争に入った。

これよりさき、昭和十年には美濃部達吉の「天皇機関説」が国会で問題となり、政府の「国体明徴声明」となり、学校関係に対しては訓令、講習会などさまざまの具体的対策がとられるようになり、「教学刷新評議会」なるものが文部省に設けられ「国体觀念と日本精神を根本とする」教学方針が発表せられキリスト教教育の意味が再検討されるにいたった。

昭和十三年に入ると政府は「國家總動員法」を制定し、戦争に批判的な思想や集団を弾圧し、また、文部省は「国体の本義」を刊行して共產主義はもとより個人主義、自由主義をも排撃して思想の統制を強化していった。

当時のキリスト教界の動きについて、海老沢亮著「日本キリスト教百年史」は次のように記している。

『昭和十三年、文部大臣に陸軍大将荒木貞夫が就任していろいろ、教育、宗教行政は全く軍部の手に収められてしまった。そして翌年には宗教団体法が制定せられ、宗教を完全に政府の教化機関と化してしまった。』宗教の健全なる発達」の美名の下に宗教活動いっさいを政府の統制下に入れた。昭和十四年十一月三日、青山学院で明治節と宣教八十年の祝賀をかねてプロテスタント各教派の代表が集まり次の合同宣言がなされた。「非常時下に在る我祖国の為に熱禱を捧げ、東亞における新秩序の建設は鞏固なる信仰と隣人愛の大義とに基くべきことを確信

し、愈々協同一致、以て精神報国の使命に邁進せんとするの決意を新にせり」

このような組織と気運のもとにやがて太平洋戦争となり、教会の牧師も勤労働員にかり出されるなど、教団はあげて戦争協力 of 態勢に入つていった。

一方キリスト教主義学校の動向は次の記事によつて知ることができよう。これは昭和十五年の夏、御殿場東山荘において、基督教教育同盟会主催の夏期学校が開かれ、時局に対するキリスト教主義学校のあり方につき意見がかわされた後、六十有余の加盟学校長会議が青山学院で開かれたときの決議である。「明治学院時報」昭和十五年九月二十日発行号をみよう。

「九月六日、矢野学院院长や笹森青山学院院长等の提唱で、基督教教育同盟学校の校長会議が開かれた。議題は此の時局下に於て加盟学校が、如何にして国策に即応しつつ本来の教育の任務を全うすべきかといふことであつた。真面目なる隔意なき意見の交換の後大体左の如き三つの方針がたてられた。

一、財政的独立

各学校の実情に依つて時期の上からは格一的には行かぬにしても外国よりの財政的独立を積極的な学校の方針として可及的速かに具体的方策を樹てること

二、日本人校長

外国人を校長とせる学校在つては、速かに日本人校長を選任し、日本人としての教養に就き一層教科の刷新をはかること

三、理事長及理事過半数を日本人とすること

その学校の設立者たる財団の理事長が外国人たる学校在つては速かに適當なる日本人理事長を選び、尚理事の過半数を日本人としその経営の方針に於て前二項と關聯して遺憾の点なからしめること」。

ついで同年十月、同じく青山学院で全国キリスト教信徒大会がもよおされ「挺身以て信仰報国の実を挙げんことを期する」ことを決議した。こうしたキリスト教界の協力報国の気運はしだいに組織化されるようになり、翌十六年六月に富士見町教会において、プロテスタント三十二教派の代表者が集まり「日本基督教団」の成立を宣言し、その初代統理には当時明治学院理事長、芝教会牧師であった富田満がえらばれた。

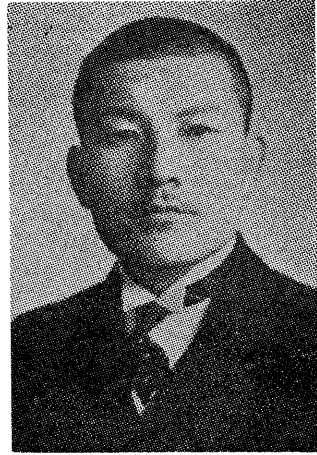
日華戦争が行きづまり、やがて太平洋戦争に突入し、米英を敵国とするようになると、果然、キリスト教は敵性宗教とみなされ、さしたる根拠もない些事を理由としてキリスト教主義学校にも干渉の手がのびた。たとえば東北学院では、礼拝堂のステインドグラスにあるキリストの像が、御眞影奉安所よりも高いといつて物言いをつけられた。また同志社大学では道場神棚事件がおこり、立教大学では礼拝堂が軍の倉庫とされるようなことがあった。

「大阪憲兵隊は教職者やキリスト教主義学校に対し、キリスト教の神と、わが国の神々に対する見解、天皇とキリスト教の神との関係など十三ヶ条の質問書を発し、迫害の糸口を見出そうとする始末であった」(海老沢亮著「日本キリスト教百年史」)

中学部長の更迭

昭和十四年九月矢野学院長就任以来、二年近く中学部長は学院長が兼任していたが、昭和十六年七月、専任部長として熊本県社会教育課長であった漆山清二を迎えた。

漆山は山形県の人、第二高等学校、東京帝大農学部を卒業した農学士で、ときに四十五才であった。群馬県立



漆山中学部長

農業学校教諭を振り出しに中等教育畑を歩き、東北学院、関東学院などキリスト教主義学校に教えたこともあり、熊本県に赴任前は石川県立中学校の校長であった。漆山は乾布摩擦の奨励など、とくに生徒の保健体育に力をそそいだ。

昭和十九年五月、漆山部長が辞任し、後任として彦根高商教授であった高橋源次が就任した。戦局はまさに最悪の事態にあり、学院の教職員も疎開して田舎へ帰るものが続出していた当時、か

これは彦根から東京へ赴任してきたのであった。国民服にゲートル、リュック・サックを背負って、元の上長たる矢野院長の招きに万難を排して応じたものである。高橋は和歌山人、同志社大学を出て宮崎県立中学校教諭から彦根高商教授となり、文部省在外研究員として英米に学び英文学専攻であった。非常事態における部長の更迭は異例のことであった。漆山はその後正則学園につとめたが、郷里山形に帰り、戦後まもなく死去した。

勤労報国隊の活動

昭和十八年より太平洋戦争も三年目を迎え、国内の労働力のはなはだしい不足をきたしてきたので、中学一年以上の学生生徒は「勤労報国隊」と称し、授業を放棄して農村や軍需工場に動員された。

次に掲げるのは最年少の中学部二年生の勤労報国隊壮行式のプログラムである。

第二学年学徒勤勞報國隊壯行式

日 時 昭和十九年十一月二十八日 午後一時

場 所 明治学院 講堂及校庭

零時四十分 出勤学徒父兄、職員、生徒、着席

零時五十五分 院長、部長、受入側代表者着席

式 次 第

講堂ノ部

一、開式ヲ宣ス

二、国民儀礼

三、国歌 二唱

四、院長訓話

五、部長挨拶及訓話

六、上級学生代表挨拶

七、出勤学徒代表宣誓

八、学徒勤勞ノ歌

九、受入側代表者挨拶及説明

牟田鑄工所品川工場

東京ラジエーター製造株式会社

株式会社宮田製作所

株式会社荏原製作所

(出勤期日順)

十、海征かば

十一、順次退場

校庭ノ部

一、学校側職員、受入側代表者位置ニツク

二、父兄位置ニツク

三、第一学年生徒位置ニツク

四、出勤学徒 行進 ↓ 下校

五、来賓休憩

六、一年生開散

学徒勤勞の歌

ああ止みがたき 若人の
怒りは燃えて 振る槌に
敵撃滅のひびきあり
ああ受けつぎし尽忠の
思ひぞたぎる鉄とりて
いざ決戦を いどみなん
学徒吾等 学徒吾等
すめらみくにと共に生きん

ああまなびやも この業も
つらぬく心 一筋に
敵撃滅を期するなり
ああ倒るるも なほ立ちて
七世に誓ふ大和魂
いざ決戦を勝ちぬかん
学徒吾等 学徒吾等
すめらみくにと共に生きん

昭和十九年の学徒勤勞出勤状態は次のとおりであった。

(昭和十九年十一月三十日現在)

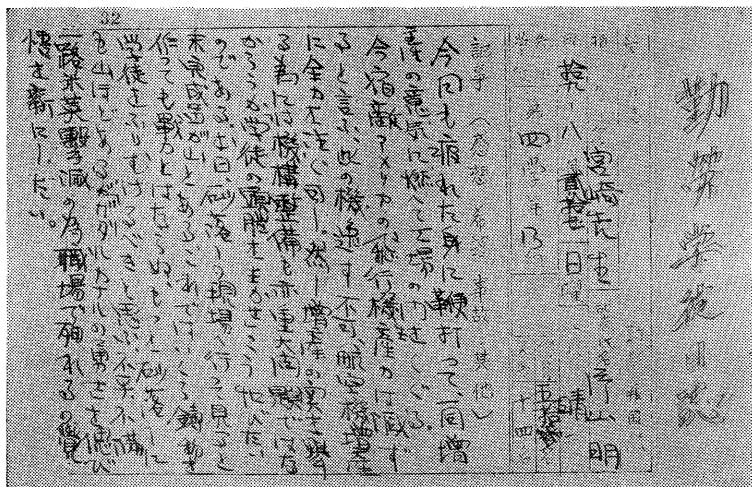
専門学校

(一) 出勤人員 六一六

経済科二年	二八八	同	一年	一七七
経営科二年	三〇	同	一年	四
東亜科二年	四四	同	一年	八
英文科一年	六五			

(二) 出勤先

(イ) 三菱重工業株式会社横浜造船所



中学勤勞學徒の日記

- (ロ)陸軍糧秣廠東京出張所
- (ハ)関東軍需監理部特別輸送隊
- (三)出勤期間
 - 通年動員ニテ十九年六月ヨリ二十年三月末迄
- (四)未出勤生徒数
 - 経済科一年 二〇 経済科二年 九〇 東亜科一年 八九
- (五)出勤不能生徒数 六八
 - 二年 五三 一年 一五
- 中学部
 - (一)出勤人員 八二〇
 - 五年 一一二 四年 二二一 三年 二四一 二年 二四六
 - (二)出勤先
 - (イ)宇都宮製作所 五年
 - (ロ)荏原製作所 五年、二年
 - (ハ)東京ラジエーター品川工場 四年、二年
 - (ニ)牟田鑄工所蒲田工場 四年
 - (ホ)同 品川工場 四年、二年
 - (ヘ)日本通運汐留支店 四年
 - (ト)不二越精機工業株式会社 三年
 - (イ)宮田製作所 三年、二年

③出動期間

五年 自十九年五月 至二十年三月 四年 自十九年七月 至二十年三月

三年 自十九年八月 至二十年三月 二年 自十九年十二月 至二十年三月

④出動不能生徒數 四九

五年 二〇、四年 八、三年 一六、二年 五

⑤未出動生徒數

一年 二七一

(昭和十九年十二月四日理事会に於ける報告)

青山、関東両学院との統合

戦局はようやく緊迫し、政府は戦時教育非常措置法を制定した。その結果、文科系学校を統合縮少し、工業専門学校を増加する方針がたてられ、青山学院、

関東学院の高等学部を明治学院に統合し、青山と関東は工業専門学校となるよう文部省から勧告をうけた。

昭和十八年十一月三十日の理事会において次の通り決定した。

「イ、政府ノ戦時教育非常措置ニ対スル対策ノ件

学院長ヨリ政府ノ戦時教育非常措置方策発表ヨリ今日ニ至ル経過報告アリ、次イデ当日午前十一時文部省ヨリノ命ニヨリ小

野青山学院長ト共ニ出頭シ専門教育局長ト会見セル顛末ニツキ左ノ如キ報告アリ

青山学院ノ高等商業部並ニ文学部ヲ明治学院ニ統合スルコト

関東学院ノ高等商業部ヲ明治学院ニ統合スルコト

右ノ二件ニツキテ青山学院長ト共ニ承諾ノ旨回答シ、詳細ニツキテハ一切取決メヲ行ハズ帰校セリ
理事会ハ右ノ報告ヲ承認シ審議ノ結果、高等学部、高等商業部ヲ廃シテ一部トナシ文部省ニ於テ科ノ設置ヲ認ムルナラバ經
濟科、東亜科、英語科等ノ如キ科ヲ設クルコトト決定ス(科ノ名称ハ仮称)

昭和十九年二月十五日の臨時理事会において、学校統合問題は次の通り決議されている。

(一)学校統合ニ関スル件

青山学院、関東学院及本学院ノ統合ニ関スル経過報告並ニ要旨(別紙一)ニツキ学院長ヨリ説明アリテ審議ノ結果之ヲ承認ス

学校統合ニ関スル要旨

昨年十二月閣議決定トナレル「教育ニ関スル戦時非常措置方策」ニ基キ明治学院・青山学院・関東学院三校ノ当事者間ニ於イテ監督官庁ノ了解ノモトニ左ノ方法ニヨリ統合ヲ行フコトニ意見ノ一致ヲ見タリ

一、青山学院高等商業学部・同文学部並ニ関東学院高等商業部ヲ明治学院ニ統合ス

二、統合後ノ学科組織ハ經濟科、経営科及東亜科トス。而シテ三校高等商業部及經濟科(青山夜間)ハ經濟科ニ、厚生科ハ經營科ニ、東亜科及英文科並ニ文学部(青山)ハ東亜科ニ統合ス

但シ現在英文科、英語科(青山)ニ在学スル学生ハ東亜科ニ統合セズ卒業迄英文科トシテ在学セシム

三、統合ノ時期ハ昭和十九年四月一日ヨリトス

但シ現在ノ第二学年及第三学年(青山)ハ九月卒業又ハ仮卒業スルヲ以テ現在在学スル学校ニ於イテ卒業セシム
四、募集定員及修業年限ハ左ノ通トス

科	定員	修業年限
經濟科	二〇〇名	三ケ年
東亜科	一〇〇名	三ケ年

經營科 一〇〇名 三ヶ年 經濟科(第一部) 二〇〇名 三ヶ年

昭和十九年六月二日の定期理事会において次の通り学事報告がされた。

一、校名変更及学則改正 三月三十日認可

高等学部、高等商業部ヲ廢シ、明治学院専門学校ト改称、經濟、經營、東亞ノ三科ヲ設ク 但シ英文科ハ經過的ニ存置ス

修業年限各科三年トナル

入学定員總數 六〇〇

經濟科 二〇〇 經營科 一〇〇 東亞科 一〇〇 經濟(第一部) 二〇〇

二、学校統合

青山学院文学部、同高等商業学部及關東学院高等商業部トノ統合ニヨル編入式ハ四月八日学院ニ於イテ舉行

転任教員 青山ヨリ四名、關東ヨリ一名 退職教員(本学院) 二名

転入生徒 第二学年及第一学年若干名(別紙参照)

昭和十九年五月十五日現在 (統合ニヨル生徒數)
 明治学院在籍者現在生徒數調 (一) 印原級及転科者 二部ヨリ一部へ、又ハ科ヲ變ヘタル者

專門学校 (一部)		一年	二年	三年	四年	五年	計	專門学校 (二部)		一年	二年	三年	四年	五年	計
計	青学	本学	青学	本学	青学	本学	計	計	青学	本学	青学	本学	青学	本学	計
四三	一五	四〇六	一五	一三〇	一	四	一、二八二	七七	七	一三二	二九	五五	四	一、六〇〇	
四三	一五	四〇六	一五	一三〇	一	四	一、二八二	七七	七	一三二	二九	五五	四	一、六〇〇	
四三	一五	四〇六	一五	一三〇	一	四	一、二八二	七七	七	一三二	二九	五五	四	一、六〇〇	
四三	一五	四〇六	一五	一三〇	一	四	一、二八二	七七	七	一三二	二九	五五	四	一、六〇〇	

学校統合のため次の五教授が転任してきた。

青山学院より石井次郎（現九大教授）三神勲（現本学院大学教授）小田信士（現宮城学院長）笹尾洋二郎（現本学院大学教授） 関東学院より高谷道男（現本学院大学講師、桜美林大学教授）

なお東北学院からも専門部を本学院に統合してほしいとの申出があったが、これは取り止めとなった。三学院が統合して専門学校となった当時の学則、学科課程は付録（一）の通りであった。

戦時下の学院

昭和十二年の支那事変の勃発、昭和十六年暮の太平洋戦争突入、それから四年間にわたる大戦を経て終戦まで十年間の戦時下の学院の動きを「明治学院時報」や理事会記録や筆者の記憶などによってたどってみよう。

昭和十三年から支那事変のため応召出征する教職員や同窓生がふえていった。各部ではこれらの人々に慰問袋や慰問文を発送することがはじまった。十月には「国民精神作興週間」が設けられ、精神講話などの行事が行なわれることになった。

生徒の徒歩通学を奨励して、近距離の乗物には通学証明を発行しないことにした。

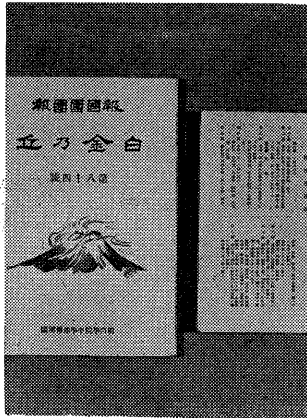
昭和十四年の夏から高等学部、高等商業部は文部省主催の「興亜青年勤労報国隊」に参加して、毎年引率者と五、六名の選抜された学生が茨城県内原訓練所で訓練をうけてから満州に渡って一か月酷暑と戦い満州の耕作や土木事業に従事した。内地にいたものは教職員、全学生が宮城前の清掃や海軍墓地の草取りなど汗の勤労奉仕をさせら

れた。

「青少年学徒に賜りたる勅語」「満州国建国記念詔書」などその他、種々さまざまの詔勅類が次から次へと政府から発せられ、その都度奉読式が行なわれた。また毎朝宮城遙拝が行なわれるようになったのも、この年からであった。

一年の最大の行事は軍事教練の査閲で、査閲官の講評は学院当局の最も心配したことであった。好評を得るため校庭においてあるいは野外においての訓練は猛烈であった。

昭和十五年には「国民精神総動員法」の発令で、その趣旨徹底を期するため実行委員会が組織された。昭和十六年には高等両学部の学生義勇軍は満州、北海道、九州へ夏期訓練と称して農業労働に従事し、中学部では非常召集の訓練がはじまった。



報国団団報

学友会は各学部とも解散して「報国団」となり、学友会の雑誌も「報国団団報」と変った。そして宗教部や文芸部は軽視せられ、国防部と鍛錬部が重視されて最も多くの予算を獲得した。同年十二月には高等学部、高等商業部の学生は「国防要員」補充のためということで繰上げ卒業式が行なわれた。そのころには政府から「時局防空必携」が発行されて空襲に備える訓練がはじまった。十二月八日未明日本海軍は真珠湾を奇襲して、いよいよ太平洋戦争に突入した。

「米英両国に対し宣戦の布告が発せられた十二月八日、本学院においては学院長の召集により緊急連合教授会が開催せられて報国隊の活動等に就き諸般の打合せを行なったが、翌九日は午前八時より中学部、十時より高等部、午後六時四十分より高商第二部と夫々宣戦の大詔奉読式を挙行した」。(「明治学院時報」昭和十六年十二月二十日付)

その後、毎月八日は「大詔奉戴日」に制定せられ「宣戦の詔勅」奉読式が行なわれるようになった。学校から補助金を出して教職員はカーキ色の国民服を着るようになった。空襲がはじまってからは院長以下鉄かぶとにゲートル姿で出勤執務するようになった。もちろん夏休みも冬休みもその他の休日もなかった。昭和十八年には徴兵猶予が停止され、学徒出陣となり、卒業は九月に繰上げられた。昭和十九年十一月現在の学院繰上げ卒業生および応召入営学徒は次の通りであった。

「三、卒業生(専門本年九月繰上げ卒業)

経済 一六五 経営 四五 東亜 四二 英文 三四 経済二部 一五二 合計 四三八

四、軍関係合格者及応召入営学徒

経済科 一一〇 経営科 二〇 英文科 二七 経済二部 五二 中学部 二八 合計 二六九

(昭和十九年十二月四日理事会記録)

学院内には特設防護団が組織され、日夜防火、避難の訓練が行なわれた。夜は教職員交代で宿直して防災にとめたが、と



表札

くに矢野院長、杉本幹事、漆山中学部長（のち高橋中学部長）が中心となって、防衛にあたった。白金三光町の一部が空襲で焼かれたとき、学院の体育館の屋根に燃え移った。漆山中学部長と杉本幹事が用務員らを指揮して小さな手押ポンプで奇蹟的に消し止めることができた。風の強い夜であったから、万一体育館が燃えれば中学部校舎はもちろん学院は全焼しただろう。あるときには、たどん大の火の子が現在の記念館や同窓会館のまわりにふりそそいだことがあったが、「火叩き」を用いて必死で消して回り、火災をまぬがれたこともあった。

学院に直接、大型焼夷爆弾が四発落されたことがあったが、一つは中学部教室の窓ガラスを破り、一つはいつもの樹の枝を折り、他の二個は校庭に落ちたが、ふしぎなことに一個も爆発しなかった。

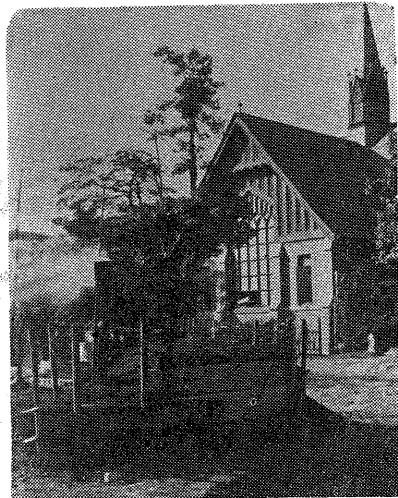
空襲がひどくなるにつれて学院で防護に最も苦心したのは重要書類の保管と御真影の護衛であった。学籍簿その他重要書類は昼夜防空壕に入れたり出したり、その管理は容易ではなかった。園部教授は寄贈されたばかりの故中山昌樹教授（そのころすでに他界）の蔵書を防空壕に運び、さらにそれを数冊ずつリュックサックに入れて御殿場に運ぶなどの苦勞をして中山文庫をまもった。学院所有の、絶対に焼いてはならない国家的文化財はヘボン博士の自筆になる「和英語林集成」の原稿である。杉本幹事と図書館長高谷教授は、この原稿を守るべく、その疎開を思い立ち、この原稿の価値を知っている人で、安全なる場所のあるところとして東北学院を選び、昭和十九年これをもって命がけで汽車に乗り仙台に行き、出村東北学院院长に託して同学院本部地下室に保管してもらった。その後、東北学院は空襲の被害をうけたが、幸いにもこの原稿は安泰であった。そして終戦後東北学院より送りとどけられふたたび学院の図書館に収められた。

一番気をつかったのは御真影の取扱いであった。礼拝堂東南端の奉安所では万一焼夷弾が落ちた場合に燈火管制下にあつては搬出できないとのことで夜は白木の箱におさめたままこれを背負つて運び歩き、その後には時に学生の護衛兵をつけるという慎重さであつた。万一この取扱いに失態があると学院長は当然辞職せねばならなかつたらう。当時は御真影が焼けたため自決した校長があつたほどである。渡辺勇助教論は当直で、この御真影を守っている間に自宅が空襲で丸焼けとなつた。夜間の燈火管制は嚴重をきわめ、とくにアメリカ系ミッションの学校として学院は他所よりも一層神経を配らねばならなかつた。

校庭の隅には防空壕が掘られ、空地という空地は芋や野菜の畑と化し、暖房がなかつたため矢野院長は専門の炭焼を招いて炭がまを造らせ、記念樹の枝などをきつて木炭を焼かせたが、木が炭に適さなかつたためよい炭ができなかつた。そのころの芋一個、炭一片は実に貴重なものであつた。

校舎は勤労動員のため空家となり、高等学部、高等商業部は旭部隊石田隊に、中学部校舎は中央通信講習所にそれぞれ転用された。

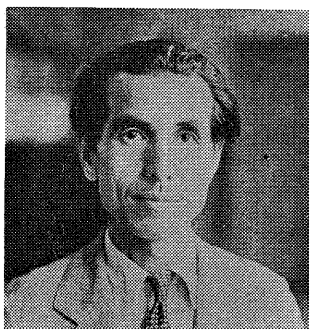
昭和二十年空襲はますますひどくなつて焼け出されるものも多くなり、学校を辞職して田舎に疎開する教職員



校庭の炭焼窯

がふえた。敗戦の色は誰の目にも明らかになっていったが、当局は徹底抗戦、本土決戦を主張するようになった。ついに八月六日広島市に世界最初の原爆が投下され、つづいて九日には長崎市にも同様の災禍がおこったが政府は「敵は新型爆弾を使用せるものの如し」としてその惨状を明らかにしなかった。八月十五日正午、天皇は戦争終結、ポツダム宣言受諾の「玉音放送」を行なわれた。その日、学院では教職員は少なかったが、中学部事務室に集まって、この放送を聞いた。なかには口惜しがって泣くものもあったが、大部分のものは無表情であった。やがて軍部の悪口をいうようになり、ゲートルを解き、国民服を脱ぎ、坊主頭をのびはじめ、空襲からのがれたホットした表情に変っていった。

かえりみて、学院は支那事変いらい今次世界大戦には学園をあげて協力態勢にあった。これはひとり学院のみならず、日本のキリスト教界およびキリスト教主義学校はほぼ同様であった。学院はさいわいにも戦災をまぬがれ、一個の建物も失わなかった。さらに当局や配属将校などから特別な干渉もなく、学院教育の中心である礼拝を守ることができたことはさいわいであった。しかし戦争のほんとうの惨禍は隠れた面にはなほだしく、多数の同窓生と出陣学徒や学院から応召出征した相沢、伊藤両助教授、黒木、安藤両教諭らは戦場において「散華」した。



菊田教授

また戦線に行かないまでも勤労働員の途中で爆死した生徒もあり、中山昌樹教授、菊田貞雄教授、岩崎武雄助教授などは戦時中病におかされ、栄養も

なく薬品もなく、あたら尊い生命を失った。菊田教授は学院より「井深樞之助伝」の執筆の依頼をうけ、その資料蒐集のために無理がたたつてついに職に殉じたのであった。菊田教授の記録した資料は十二冊の大学ノートに収められ、大学図書館に保存されて学院史の貴重な資料となっている。なお菊田教授の蔵書八百冊も遺族より寄贈されて菊田文庫となっている。

功労者の死去

石川 林四郎

理事石川林四郎は昭和十四年八月下旬、佐賀県に開催された中等学校英語教員講習会に講師として出張中発病、病をおして帰宅したが八月三十一日急死した。六十一才

石川は英文学界の一権威で、当時わが国英語教育界の大御所的存在であった。東京文理科大学主任教授のほか文部省英語教育研究所長などをかねていた。石川は明治二十八年日本中学より明治学院普通部に編入、同二十九

年卒業、高等学部に進んだが中退して一高に入り、東大英文科を卒業した。在学中より世界YMCA同盟会長、ジョン・アール・モット博士の通訳として名声を博した。

石川林四郎

東大卒業後、六高教授を経て東京高師教授となり高師昇格とともに文理科大学教授となった。大正六年から明治学院高等学部で英文学を講義したこともあるが、大正二年より同窓会選出の学院理事として二十七年間井深、田川、ホキエ各院長を補佐した。昭



和二年笹尾高等学部長に協力して英文科の創設にとくに力をつくし、東京高等師範学校から篠田、渡辺、大塚、青木、飯島、寺西教授らほとんど教授陣を総動員して学院に送り、英語師範科廃止以来失っていた中等教員免許の特典を回復した功績は大きい。今日大学英文学科の基礎を築いたともいえる。多忙な学究生活にありながら学院理事会や同窓会には欠かしたことなく、答案や論文をいっぱいにつめた鞆をもって大塚坂下町の家から当時の円タクでかけつけるようなこともあった。

多田 素

多年、学院理事会議長であった高知教会牧師多田素は昭和十六年三月中旬上京、用務を終えての帰途、二十一日神戸出帆高知に向う船中において発病、着高と同時に大野病院に入院加療したが二十三日急性腹膜炎のため死去した。七十四才であった。

多田は日米関係の緊張緩和のためキリスト教各派合同を機会に、日本のキリスト教界より、米国に派遣する遣米使節団（賀川豊彦、斉藤惣一、阿部義宗、小崎道雄、松山常次郎、河井道の諸氏）の団長として三月二十七日渡米する予定になっていたので同氏の急死は各方面に惜しまれ、また大きな打撃を与えた。明治二十四年明治学院神学部卒業、植村正久の一番町教会に副牧師となり、米国ユニオン神学校に学び、明治二十六年帰朝して高知教会に赴任し、以来五十年間高知の地を離れず、ついに高知教会を会員二千名をこえる日本第一の教会にまで仕上げた。明治三十四年、三十三才で日本基督教大会議長にえらばれ、その後も議長にえらばれること十三回におよび名議長として、かつ、植村正久なきあとには日本基督教会を一身にならっていた。

多田は学院在学中は非常な秀才で、教授の代講もしたらしく、馬場孤蝶の「明治文壇回顧」によると馬場孤蝶

や島崎藤村らは当時学生であつた多田から数学を教わつたといふことである。大正十年明治学院理事となり、同時に田川大吉郎の後をうけて理事会議長（理事長）となり昭和十三年、富田満と交代するまで十八年間その職にあり学院の経営に尽力した。彼は日本基督教大会議長のほか伝道局、日本神学校、金城女学院、中央神学校の各理事長をかねていた。かれはいくたびか中央に出る機会を与えられた。すなわち、植村正久の後任として富士見町教会牧師に、あるいは明治学院総理に、あるいは日本基督教連盟会長として招かれたが、かれはそれらの要職をこぼんで高知の伝道を生涯の使命とし、「田舎牧師」たることを名譽として、ついに高知の土となつた。なおかれは生涯独身生活を貫いたので遺族はなかつた。

島崎 藤村

明治、大正、昭和を通じてわが国文壇に不滅の巨歩を印した藤村島崎春樹は、昭和十八年八月二十二日未明、神奈川県大磯の寓居で、「中央公論」に連載中の「東方の門」を執筆中、突然脳溢血のため急死、七十二年の生涯をとじた。

当日夕刻、学院には矢野院長宛急報があつたが、折から院長病気のため、翌二十三日杉本幹事が院長代理として大磯に吊問した。翌二十四日大磯町地福寺に埋葬（遺言により土葬）されたが、二十六日改めて青山斎場において本葬、告別式が執行され、学院から漆山中学部長、杉本幹事らが参列した。

藤村は明治二十四年明治学院高等学部を戸川秋骨、馬場孤蝶らとともに卒業、明治女学校、東北学院、小諸義塾に教鞭をとつたのち、文学界に入り、雑誌「文学界」の創刊に参画した。はやくから「若菜集」「一葉舟」「落梅集」などの詩集をもつて詩壇に新境地を開き、「破戒」より小説に入り長篇「夜明け前」「東方の門」にいたる

まで約五十年にわたる創作活動をつづけ、芸術院会員、日本ペンクラブの会長にもおされていた。

明治学院では校歌の作詞者として知られているが、大正元年には同期の中島久吉らとともに商議員にえらばれ、理事会の諮問に応ずるなど経営にも関係したことがあり、また高等学部では文学の講義を担当するなど終生母校のためにつくした。「島崎氏ニ一ヶ月三回文学上ノ講話ヲ依頼シ一ヶ月五円ノ謝儀ヲナスコト」と大正六年四月十八日の常務理事会の記録に記されている。かれの学院訪問は昭和十五年六月二十六日、井深名誉総理の葬儀に列席したときが最後となった。

中山 昌樹

高等学部長中山昌樹は、戦時中きわめて簡素な衣食にたえ、ついに消化器障害をおこして療養中であつたが、昭和十九年四月二日国立の病院において死去した。

葬儀は校葬により、四月九日午後三時より学院講堂において執行された。富田理事長の司式により漆山中学部長の聖書朗読、横浜山手女学院長都留仙次の祈禱、同期の親友賀川豊彦の葬儀の辞、安部教授の独唱、学院代表矢野院長、日本東部神学校長村田四郎、生徒代表の弔辞があつた。

中山教授は明治四十三年明治学院神学部卒業、大連教会、京都吉田教会の牧師を経て、大正八年村田四郎が中学部長に転じた後をうけて学院教会牧師として招かれた。学院教会閉鎖後は高等学部教授となり、文芸科主任、英文科主任を経て昭和十年高等学部長となり、賀川豊彦と共に約一か年外遊した。神学部在学中よりクラス第一の勉強家で、在学時代よりダンテの研究に没頭し、約二十年を要して「神曲」をはじめダンテ全集を完訳したほかカルヴィンの「基督教綱要」アウグスチヌスの「神の都」などの大著の翻訳をはじめ、トマス・ア・ケンピス

の「イミタチオ・クリスチ」などの翻訳、その他「詩聖ゲーテ」、詩集「美しき魂」など多数の著述があり、讃美歌編集委員としても貢献した。

なお死後、その貴重な蔵書、洋書九四二冊、和書一九七冊、「基督教綱要」の原稿などが遺族より寄贈され、大図書館に中山文庫として保存されている。これらの書物が破損しているのは、戦時中防空壕に入れたり、園部教授が少しずつ運んで御殿場に疎開したためである。

第三章 変革時代

教職適格審査

一九四五年（昭和二十年）九月二日ミゾリー艦上において降服調印が行なわれてから連合軍による占領政策がはじまった。そして第二次世界大戦の原因となった国家主義、軍国主義のすべての勢力の除去を徹底的にすすめた。陸海軍解体、財閥解体、その他国家主義、軍国主義を助長した諸団体の解散、農地解放、思想犯罪人の釈放、そして戦争に協力した責任者の追放がはじまった。宗教界をのぞくすべての分野において調査がすすめられ、重いものは、戦犯として逮捕して裁判にかけ、軽いものは、あらゆる公職から追放した。学校の教職員も除外例ではなかったので、教職適格審査が行なわれた。

昭和二十一年には連合国最高司令部の命により次のような閣令、省令第一号が発せられた。

『昭和二十一年勅令第二六三号（昭和二十年勅令第五百四十二号「ポツダム」宣言ノ受諾ニ伴ヒ発スル命令ニ關スル件ニ基ク教職員ノ除去、就職禁止及復職等ノ件）の施行に關する件次のやうに制定する 昭和二十一年五月七日』

直接学校に関係あつた指令の一部を次にかかげる。

別表第一 教職不適格者として、審査委員の審査判定に従つて、指定を受けるべきものの範囲は、次のやうである。

- 一、講義、講演、著述、論文等言論その他の行動によつて、左の各号の一に当る者。
- 1、侵略主義あるひは好戦的国家主義を鼓吹し、又はその宣伝に積極的に協力した者及び学説を以て大亜細亜政策、東亞新秩序その他これに類似した政策や、満州事変、支那事変又は今次の戦争に、理念的基礎を与へた者。
- 2、独裁主義又はナチ的あるひはファシスト的全体主義を鼓吹した者。
- 3、人種的理由によつて、他人を迫害し、又は排斥した者。
- 4、民族的優越感を鼓吹する目的で神道思想を宣伝した者。
- 5、自由主義、反軍国主義等の思想を持つ者、又は何れかの宗教を信する者を、その思想又は宗教を理由として迫害し、又は排斥した者。
- 6、右の何れにも当たらないが、軍国主義あるひは極端な国家主義を鼓吹した者、又はその様な傾向に迎合して、教育者としての思想的節操を欠くに至つた者。
- 二、ナチ政権あるひはファシスト政権又はその機関の顧問、囑託その他これと特別の關係を持ちその政策を行ふことに協力した者。
- 三、聯合國軍の日本占領の目的と政策に反対の意見を公表し、又は右の目的と政策に反対させるために他人を指導した者。
- 四、官吏であつて、その職務を行ふにあたり宗教を迫害し、又は弾圧した者。
- 五、軍国主義的又は極端な国家主義的意図をもつて、教科用図書又は教育に関する刊行物の編纂に當つた者。
- 六、昭和三年一月一日以降において、日本軍によつて占領された聯合國の領土内で日本の庇護の下に、學術上の探検あるいは発掘事業を指揮し又はこれに参加した者。

この種の指令が次から次へと発せられて、これを一読するだけでも容易でない上に、理事から教職員、講師、用務員にいたるまで学院に関係ある全員にわたって、これを調査することは並たいていのことではなかった。もし調査漏れ申告漏れがあれば、責任者はどんなひどい目にあうかも知れない情勢にあったからである。学院では理事に三名、中学部教員に三名計六名の不適格者があつたが、その他のものは、教職適格証をうけることができた。審査の対象となつた全国四十九万人の教職員のうち十一万人すなわち二割以上が追放されたことを思えば学院のうけた追放の旋風は比較的軽微であつた。なお不適格者には別の指令によって恩給、退職金などその他一切の恩恵的なものを与えてはならなかつた。

専門学校の改組

昭和十八年十一月理事会は、従来の高等学部、高等商業部を廃して一学部とすることを決定し、翌昭和十九年より明治学院専門学校が発足した。そして高等商業部は経済科、厚生科は経営科となり、英文科は廃止がきまつた。同年四月青山学院文学部および高等商業学部、関東学院高等商業部が明治学院に合同したことは前述の通りであるが、翌二十年の戦争終結により、昭和二十一年より東亜科は文科と改称され、東亜科の中の南方分科（英語を第一外国語とするもの）を英文科と改め、大陸分科（支那語を第一外国語とするもの）を華文科と改めた。全体としての定員増加が認められなかつたため、英文科五〇名増加のため経済科五〇名を減じた。

戦時中「社会」の名称をはばかってか厚生科となり、さらに経営科と改称されていた元の社会科はふたたび社

会科となった。

夜間部の経済科第二部は商経科となり、新たに夜間部に修業年限三年の英語科(定員一〇〇名)がおかれることとなった。そして経済科は商業、簿記、東亜科南方分科は英語、華文科は支那語につき、それぞれ中等学校教員無試験検定の資格を継承した。改組当時の学生数は次の通りであった。(昭和二十一年五月二十日現在)

入学者数	英文科		華文科		経済科		社会科		商経科		英語科		合計
	一、三年	一三九	五年	五二	七二七	一二八	一〇四四	一四二	一四九	一〇二二	一一八六		
合 計	一五四	四四	二二四	一三六	五五八	三〇五	一四九	一〇二二	一一八六	二一九八	二二五二	二二五二	二二五二
願 望 者 数	二九一	九六	九五	二六四	一六〇二	四四七	一四九	二一九八	二一九八	二一九八	二一九八	二一九八	二一九八
入 学 志 願 者 数	三九〇	四八	八〇二	二三一	一四七一	八六四	三八八	二二五二	二二五二	二二五二	二二五二	二二五二	二二五二

宣教師の帰来と救助物資の到着

終戦直後の昭和二十年、四人の宣教師が総司令部の招きで飛来した。その中の一人は元フェリス女学院院长で明治学院の理事をしたこともあったL・J・シェーファーであった。シェーファー博士は学院を訪問して学院の人々と堅い握手をかわし四年間へだてられていた敵意の中垣はここにのぞかれた。

昭和二十一年にはハナフォード教授夫妻がまず学院に派遣され、つづいてサラ・オルトマンズ夫人が帰り、また総司令部に勤務していたポール・オルトマン教授が学院に転じた。大戦前にいたスマイス、ルーベン、タボーク、ミス・ダローなどの諸教師は帰らないことになった。ミッシェン・ボードではふるい宣教師のかわりにJ3と称

する若い宣教師たちを派遣した。これらの若い人々はみな独身で日本に三年滞在するといわば宣教のインタン生で、日本語学校に通いながらただちに学校の教壇に立った。プレスビテリアン・ミッションよりブランズ、バーカー、ヴェリエルモ、フォーマン、リフオームド・ミッションよりフラハティ、コーヴァー、エステル、ペニングズなどの諸氏が相次いで派遣されてきた。宣教師館には矢野院長や杉本幹事、その他戦時中の罹災者十二世帯が入っていたので、ミッションの復興援助資金一万六千ドルによって赤坂表町と白金今里町に職員寮を買って罹災者をそこに移し、かろうじて宣教師の住居をあけることができた。

終戦直後は住居もなかったが、それよりも日常の食料、その他物資の欠乏はその極に達していた。とくに栄養失調がはなはだしく、海草の雑炊や芋がゆのみ食べていたので、体はやせ衰えて歩行さえ困難な状態であった。昭和二十四年から五年にかけてプレスビテリアン、リフオームド両教会から食料品、薬品が前後五回にわたってとどけられた。コーンビーフ、ロースト・ビーフ、キャンデー、バター、エッグ、ビタミン剤など大量の栄養物や薬品が送られてきた。

学院ではこれらの貴重な物資を教職員の家族数などに応じて配分し、飢餓にひんしていた教職員家族一同が救われたのであった。また長く米国にあり、このころ宣教師として学院に赴任してきた、学院出身の松本亨教授は個人的にアメリカの諸教会より衣料品を大量に取りよせて、学院内の教職員およびその家族に配分するなどの救済事業を行ない、学院全教職員はいまさらのごとく、在米の主にある兄弟姉妹の温かい友情に感激したことであった。

矢野院長の辞任

昭和二十二年八月、矢野貫城は次の理由で学院長の職を辞した。

「啓上 私儀昭和十四年八月召命を信じ明治学院院长に就任以来満八ヶ年多大の御庇護に依り今日迄感謝を以て相勤め来り候処今日内外之情勢は到底非才不徳の私の是以上任に留るべき時にあらざるを痛感致候間何卒学院院长としての任を御解き被下候様 惘願申上候」

理事会はこれを受理し、後任決定まで富田理事長が院長事務取扱となり齊藤茂夫教授を専門学校長事務取扱に任命した。しかし夏季休暇中の院長の突然の辞任は、新学期がはじまってから、いろいろの疑問を生じ、専門学校の学生間に動揺をおこしたが、それもまもなくおさまり、矢野院長は、基督教教育同盟会総主事となって学院を去った。

矢野院長の就任は昭和十四年八月で、支那事変の最中であり、太平洋戦争の足音の迫る時期で、すべてが戦時態勢の時であった。国粹主義、軍国主義の波が猛り狂い、英語軽視、キリスト教敵視の時代で、キリスト教主義学校の動向はたえず監視せられているような困難な立場にあった。

矢野は長年文部省や官立学校に勤務した関係で位階勲等も高く、政府や軍部との摩擦もなく学院を弾圧からまもった。矢野の院長在職は八年間であったが、そのうちの六年間が戦争、二年間が戦後の混乱という日本にとっても学院にとっても最もきびしい試練の時期であった。財政的にも、すでに太平洋戦争前にミッシヨンの援助を辞退して戦時中は独立財政で行けるよう方策を立てたが、繰上げ卒業、学徒出陣などで学生が減少したため後援

会を設立して寄付募集をするなど経営の面においてもその苦心は並々ならぬものがあつた。とくに戦時教育非常措置法により、青山学院、関東学院が工業専門学校に切りかえを余儀なくされたとき、明治学院だけが文科系にとどまり両学院の学生を統合することができたのは、文部省における矢野の力に負うところが多い。

矢野院長辞任の後には富田理事長が院長の事務をとつたが、戦後のインフレのため全学生生徒の授業料値上げは一年に二、三回行なつた。その都度、総司令部の命により、学生の諒解を求めねばならず、学生大会が開かれて学校の財政状態を説明しなければならなかつた。教職員は組合を結成して待遇改善を要求し、一方では大学設立準備がすすめられるなど多事多端で、専任院長の就任がいそがれた。

創立七十周年記念行事

第二次世界大戦がおわつてまもなく一九四七年（昭和二十二年）に、明治学院は創立七十周年記念の年を迎えた。国民生活はまだ疲弊窮乏の底にあり、政治も経済も人心も不安定な時期であつたが、満州事変以来、押しよせてきた国家主義、軍国主義の波のため、アメリカ系ミツション・スクールとしての明治学院は、政府や軍部や社会からもとかく色眼鏡をもつて見られ、そして建学の精神とは不調和な暗い影をともなつて十余年をすごしてきた。戦争は敗北に終わったが、黒雲は晴れて、今や正々堂々と学院の伝統を誇り、その精神を高揚してはげからぬ時期が到来したのである。こうした時期において、創立七十周年は、それまでになかつたほど大規模に十一日間わたつて多彩な行事がくりひろげられた。

創立七十周年記念事業推進のための中央委員会は同年六月末、矢野院長を委員長として組織されたが、その

後、矢野の院長辞任という大きな問題もおこったが、富田理事長が院長事務取扱となり、この記念事業の委員長となつてさいはいを振り、全行事をとどこおりなく遂行することができた。委員会の組織は次の通りであつた。

中央委員会 委員長富田満、副委員長高橋源次、斉藤茂夫

総務部 杉本、平林、関根

事業部 渡辺、杉本、高谷、山本

行事部 第一部(本部) 杉本、山本、高谷、園部。 第二部(専門学校) 加藤、園部、平林。 第三部(専門

第二部) 竹中、諸橋。 第四部(中学部) 宮崎、延原、石堀。 第五部(英語学校) 齋藤、新美

経理部 若林、丸川、由布

委員会はさらに下部組織に分かれ、全学院をあげて四か月にわたつて熱心、周到な準備をすすめた。こうして創立七十周年記念式典は十一月一日午後一時から、学院チャペルにおいて厳肅、盛大に挙行された。

明治学院創立七十周年記念式次第

司会者 幹事 杉本民三郎 六、讚美 歌 三七〇 一 同

一、奉 楽 教 授 小泉 治 七、勤続教職員表彰 辞 内閣総理大臣 片山 哲氏

二、讚 美 歌 五五 一 同 八、祝 辞 衆議院議長 松岡 駒吉氏

三、聖 書 朗 誦 専門学校長事務取扱 斉藤 茂夫 衆議院議長 松岡 駒吉氏

四、祈 禱 中 学 部 長 高橋 源次 文 部 大 臣 森戸 辰男氏

五、式 辞 理事長兼院長事務取扱 富田 満 東京都 知 事 安井誠一郎氏

北米外国ミッシン代表	ポール・メーヤー博士	一、講	演	理	事	賀川豊彦
日本基督教団総会議長	小崎道雄氏	二、校	歌	一	同	
日本基督教教育同盟会理事長	石原謙博士	三、折	禱	理	事	村田四郎
明治学院同窓会長	川崎巳之太郎氏	三、頌	五六八	一	同	
九、白金聖歌		一	同	四、祝	禱	教授
						エイチ・デ・ハナフォード

賀川豊彦氏講演(要旨)

(注・内閣総理大臣、文部大臣、東京都知事は代読であつた)

私は明治学院が創立せられてより七十周年の歴史を経過し、今日ここに此の祝典を挙行し得るに至つた事について本学院出身者として祝意を表すると共に、私はかかる機会を通じて諸君の奮起を促したく、自然科学に於ける發明について与えられた二十分の小時間に亘つて自分の感想を述べたいと思う。

さて私が本学院の学生時代の恩師ランデス先生は歴史学の講義において当時の朝鮮政策問題に触れ、熱烈雄弁なる日本語を以つて、『日本が朝鮮を併合することは大なる過失であり、必ず将来において禍根を残す結果となるだろう』と予言した。

今ここにそれらを省みるときに全くその予言が適中して居つたことであり、全く驚異に値する所である。明治学院は歴史が古いと同時に又初代よりして大なる予言者の居つた処である。ランデス先生は全くこの人であつた。

私が今特に諸君にお願いしたいのは、かかる伝統としての予言者の輩出することを望むものである。私は唯物弁証法を哲学とは思わない。そしてマルクス、レーニンを反逆者といつても過言ではないであらう。むしろ本学院として強調したいのは心の發見そのものであると思う。なんとすれば國が敗れた後に再建に二つの方法がある。それは流血革命の方法と精神革命の方法とである。

我が國においては精神革命よりむしろ流血革命を好むのである。精神革命の分野に就て云えば精神力の發見と歴史の發見とであらう。それには傾向心理学の應用が大切であり、人間進歩の發展は靈力に依つて、運命づけられているものを如何に破壊

して行くかを研究するのが即ち此れである。

世界歴史の中で一番信用されているのは旧約新約の聖書であつて傾向心理学を研究する為に我々はこれを読むのである。我が国が現在の状態で進んで行つたならば少しも進歩性は存在しない。米國が強力エネルギーを発見して世界科学の最高を以つて任じているが、然し社会科学の發明されていないのは甚だ遺憾であり、本学院の中より重要な社会科学を発見してもらいたいのである。其の点よりして我が國の建設は暴力革命でなくして精神革命でなければならぬのである。

真に日本を救わんと欲するにはエネルギーを乱費しない新しい社会科学を発見しなければならない。要は諸君が今これを發明しなければ第三次の世界大戦をもまぬかれぬのである。協同性は階級闘争をなくし、戦争を無くして社会を平和にし得る事を教えている。

第三には贖罪愛の發見である。我々は人類意識をもつと同時に宇宙意識を持たなければならない。そして創造性、保存性及び修繕性のこれ等を宇宙にまで広めて人の欠点を補つて行かねばならぬ。この点に関してキリストは學問的説明はしていなかつたが併し社会科学を實行して居つたのである。諸君が十字架意識を認識しなければ世界の再建はおろか、日本の再建も望み得ないであろう。私は最後に戦争を超越する所の社会科学の創造される事を強く唱えるものである。同時にそれが新日本建設の主動力である。(明治学院新聞「第九号昭和二十二年十一月二十日発行より」)

なお、専門学校第二部及び英語学校の記念式は同日午後六時より礼拝堂で行なわれ、労働大臣米窪滿亮氏の講演があつた。

ヘボン博士記念会

明治学院の初代総理ジェームス・カーティス・ヘボン博士の記念会は、明治学院創立七十周年記念事業の一つとして文部省、ローマ字ひろめ会、恩賜財団同胞援護会の後援によ

り昭和二十二年十一月三日(月)日比谷公会堂においてもよおされた。さしもの大公会堂も満員の盛況で、とき

の内閣総理大臣片山哲氏夫妻も出席して別項のごとき祝辞を述べた。当日はあたかも新憲法発布記念日、文化の日でもあったため、わが国文化の恩人、平和の使徒としてのヘボン博士をしのぶべく、同窓生その他キリスト教関係者はもとより一般の参会者も多数あり、鷲山第三郎氏の講演に涙を流した人も多かつた。

プログラムは三部にわかれて、第一部は総理大臣、文部大臣ほか関係団体のメッセージ、第二部は講演と劇、第三部は山田耕柞氏の指揮による音楽会をもって二時半終了した。

片山内閣総理大臣演説(要旨)

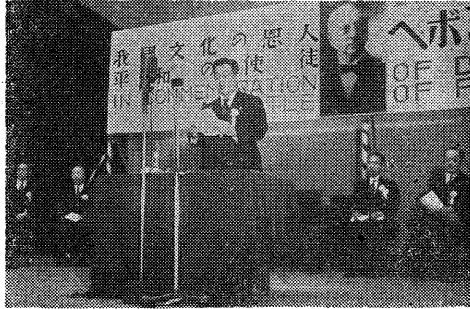
本日、ヘボン博士を追憶するの記念日に当り、日本国民の大恩人たる先生に対してその功績を讃える機会を与えられた事は、私の誠に光榮とする所である。

人間の心を打つ最も大きな感激は、犠牲の精神であると思う。多くの人の為に自分の身を犠牲にして献身的努力を払われた人の前に我々が出る時は、期せずして深い感激に打たれるものである。

ヘボン博士の全生涯は実にこの尊き犠牲の精神に満たされているものであつて、誠に多くの大きな事業のただ一つだけを取つてみても凡人の容易にやり遂げ得るものではないものと思う。それにも拘らず、何等の対価をも求めずして世の多くの人々の為に奉仕的に尽されたのであつて、我々はただ感謝と尊敬を表する以外、表現のしかたがない程である。

利益がなければ仕事をやらぬとか、自分の為にならなければ働かぬとか、左様な思想がとうとうとして流れている世の中にあつて、何一つ求める処なくして社会の為に奉仕的な、しかも意義深い文化的事業に専念せられた事は、私の最も感激おくあたわざる処である。これをしも「愛」というのであらう。これをしもキリスト教の信仰に徹した崇高なる人格者、信仰の厚き人といふことができるであらう。

誠に愛と犠牲で一貫している博士の全生涯はこれをそのまま以つて我々の大きな教訓とすることが出来ると信ずる。殊に博士の渡日せられた時は我が国の文化未だ開けず、排他的思想の横溢せる安政六年であり、今より八十八年前という前世紀に近



ヘボン博士記念会

第九号より)

この会は大成功をおさめたが、その蔭には杉本幹事、園部不二夫教授、平林武雄教授らの並々ならぬ努力があったことは記憶さるべきであらう。

い時代であり、吉田松陰、頼山陽、橋本左内等が処刑せられ、井伊掃部頭が浪士の兇刃に斃れると云う物情騒然たる時代であることを顧れば、我々は博士の信仰の力と偉大な人格とにただ敬服せざるを得ない次第である。

しかも、自己の安きを考えずして富裕なる医師の生業を捨てて遠く異境に渡り他国人にキリスト教伝道を志し、日本滞在三十三年己を忘れて、気の毒な人々の為に救済、伝道、教育に従事せられ、聖書邦訳、和英辞書、施療病院、ヘボン塾、ヘボン式ローマ綴方等の為に私財を全部投ぜられた殉教的にして、無慾恬淡たる先生の高風に就ては、凡ての仕事が人間わざとは思われない程である。全く神々しき聖なる事業であつたと推賞いたしたのである。今や文化国家建設のために、我々はあらゆる努力を払わなければならぬ時である。博士の残された事業、教えられたる教訓は我等によき指針を与えてくれた。日本文化の開発者たるこの偉大なる人格者の愛と犠牲に満てる大精神を我々はとつてもつて、今日の祖国再建の精神といたしたいと思ふ次第である。(「明治学院新聞」

村田院長の就任

矢野院長の辞職ののち、富田理事長が院長事務をみてきたが、専任院長選考は着々はかどり、当時、理事の一人であつた村田四郎が昭和二十三年四月に院長に就任した。

就任式は四月二十三日午後二時より学院礼拝堂において鈴木春理事司会の下に行なわれた。斉藤茂夫教授の聖書朗読、高橋源次高等学校校長兼中学校長の祈禱、富田満理事長の紹介、村田新院長の就任の辞があり、つづいて日本基督教団総会議長小崎道雄、基督教教育同盟会理事長石原謙、北米ミッシヨン代表ポール・メーヤー、明治学院同窓会長川崎巳之太郎諸氏の祝辞があり、最後に三吉務理事さしかえのため、かわって富田理事長が祝禱を捧げた。村田四郎は山口県出身、明治四十四年明治学院神学部卒業、米國オーバン神学校卒業、大阪神学院教授をつとめたのち、明治学院教会牧師となり、既述のごとく大正八年明治学院中学部長となったが、同盟休校の責を負うて翌年辞任。大邱、熊本で牧会に従事していたが大正十四年ふたたび学院に帰って神学部教授となり、神学部分離後は日本神学校教授、校長を歴任し、日本基督教団成立とともに同団教学局長であった。

英語学校の開設

「米英撃滅」の戦時下においては英語は敵性語として軽視され、学院のセベレンス館も湧泉寮（湧泉は井深名譽総理の雅号）と改称し、姉妹校である横浜フェリス女学院は山手女

学院、大阪のウイルミナ女学院も大阪女学院と学校名まで改めるほどであった。

ところが終戦となりアメリカ軍が進駐するようになって、英語熱が盛んになり、英語のサインがいたるところに立つようになると、社会人も英語を復習しようとするもの、新たに英会話を習いたいものが激増し、各所に英語塾などが輩出した。学院では、この社会的要求に応じ、実際英語に重点をおき、かつキリスト教主義により聖書を教え、国際精神を涵養する目的をもって修業年限三か年募集定員百名の英語学校の設置を申請中であつた

が、昭和二十一年十一月八日付認可となり、男女共学の夜間「明治学院英語学校」が開設された。教室には中学部の校舎を利用して外人教師、専門学校、中学部の英語教師を総動員するほか、よそからも講師を招いて、一時は五百名をこえる生徒が集まり、学院財政をも助けると考えられたが、その後次第に生徒数が減じ、昭和二十六年三月には閉鎖された。校長は当時の中学部長のち大学英文学科主任教授となった高橋源次が兼任し、斎藤国治（現大学教授）が主任となつて教務万端を指導した。現在岩井産業の部長茂木宏氏などは当時の外来講師で、今も英語学校当時をなつかしんでいる一人である。

昭和二十三年の在学生数は次の通りであった。

初級 三三二 中級 一五三 上級 四七 会話 五三 合計 五七五

新制度と大学の発足

明治学院が大学を設立しようと計画したことは過去において二回あった。第一回は大同合同してキリスト教大学を設立しようとするものであった。第二回は昭和のはじめ創立五十年を期して田川総理が法文系の大学を設立しようとしたが、不幸にして成功しなかった。平和回復とともに明治学院が大学として新時代に貢献すべき機が熟しつつあった。

昭和二十一年アメリカの教育使節団が来朝し、日本側委員と日本の教育制度の改革につき会合をかさねた結果、新しい学制が施行されることとなった。すなわち従来の義務教育小学六年を中学三年までとし、その上に高等

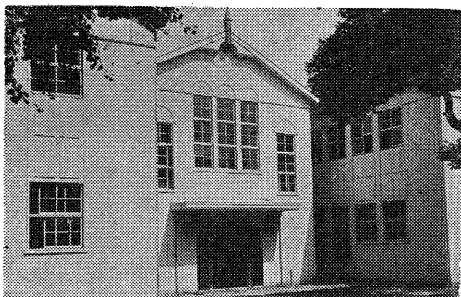
学校三年、大学四年のいわゆる六、三、三、四制度で公立は男女共学となった。また教科内容においても従来の教育勅語中心主義を廃して民主的な内容にかえた。その結果従来の五年制中学校は高等学校、中学校にわかれ、旧制高等学校および専門学校はそれぞれ新制大学を目指してすすむ傾向となった。

明治学院ではこの新制度に応ずるため昭和二十二年専門学校の組織を改めて、従来の英文、経済、社会の各学科を中心とした大学設立の準備がはじめられた。二十三年一月には、理事および教授からなる「大学設立委員会」が設けられ、教授若林竜夫を事務総長に選任して大学設立の具体的計画をすすめることとなった。

大学として必須の条件は、教授陣の強化充実、図書館の整備と科学館の建設および教室の増設であった。これには莫大な資金を必要としたので後援会を設立してこの目的達成のため募金をはじめることとなった。昭和二十二年教職員、父兄、同窓生からなる大学設立後援会が組織され、同窓の浜田正を会長として一千万円の募金運動に乗り出し、若林事務総長自ら後援会事務局長として募金の事務にもあたった。

大学の規模は一学部として英文学科、社会科学、経済学科の三学科とし、教授陣には文学博士落合太郎、賀川豊彦、経済学博士服部文四郎ら著名な学者を迎え、高橋中学部長も教授陣に加わり、その他有力な諸教授が集まった。研究の中心である図書館には当時校舎であった現記念館をあて必要な図書を購入し、米国よりの寄贈の図書も加えて審査に間に合わせるようにした。

問題は科学設備であった。新制大学では文科系であっても最初の二か年は一般教育課程があり、自然科学、人文科学、社会科学の三系列の講義を準備する必要から、新しい科学館の建設がどうしても必要となってきた。そ



サイエンス・ホール

こで往時の高等学部（現記念館）に隣りあっていたテニス・コート二面をつぶし科学館を建築して、物理学教室、実験室、機械室および準備室、化学教室と薬品室および準備室、視聴覚教育のため映写設備をもった階段教室、生物学教室と研究室、そのほか大教室二、普通教室二を備えたサイエンス・ホールを新築した。

工事は株式会社暁組によって昭和二十四年九月着工、モルタル二階建て翌二十五年九月完成した。当時はすべてがまだ戦争の疲弊より回復せず、建築資材も不足かつ貧弱であったから、今日から見れば立ばな建築とはいえないが、戦後はじめて建築された建物で、戦中、戦後の暗い十年間を、食う物着る物もなくすごしてきた学院にとっては力にあまる大事業とみえた。総坪数四〇〇坪、工費八六四万五千円を要したが、後援会の募金と米國ミッシヨンの復興資金よりの援助とあわせて一、四四〇万円となった。

この建物はその後、高校の理化教室として使用されていたが、記念館移転のため取りこわされて、今は姿を消した。しかしこの建物は大学設立の要件を満たしたのみならず、その建築の植音は復興への一步を告げる響きとして人々に明るい希望を与えた。

大学の発足にともない男女共学となり、募集定員は第一学部、第二学部（夜間）とも三二〇名となり、年限も専門学校より一年延長となったため教室の不足をきたした。そこで戦前第三次計画として予定して着工できなかった現在高校裏

の校舎に一むねを増築して、当座の間に合わせた。

これが戦後第二番目の建物で、この建築費もミツシヨンの復興資金と後援会の資金に負うものであった。

大学設置認可申請書

此の度学校教育法第四条によつて明治学院大学を設置致したいと思ひますから御認可下さるよう別紙書類を添えて申請いたします

昭和二十三年七月三十一日

設置者 財団法人明治学院理事長 富田満

文部大臣 森戸辰男殿

書類目次

- 一、明治学院大学設置要項
- 二、学則
- 三、校地(図面添付)
- 四、校舎等建物(図面添付)
- 五、図書標本機械器具等施設
- 六、学部及び学科別学科目又は講座
- 七、履修方法及び学位授与
- 八、学部及び学科別学生収容定員
- 九、教員組織
- 一〇、設置者に関する調査
- 一一、資産
- 一二、維持経営の方法
- 一三、現在経営している学校の現況
- 一四、将来の計画

明治学院大学設置要項

一、目的及び使命

本学は基督教による人格教育を基礎として広く教養を培うとともに深く専門の学芸を教授研究し知的及び応用的

能力を発揮させることを目的とし、学問の自由を愛し人格の尊厳を重んじ自主的精神を養ひ以つて世界文化の創造と人類福祉の増進に寄与せんとするものである。

二、名称 明治学院大学

三、位置 東京都港区芝白金今里町四二番地

四、校地 総坪数三、〇六五坪^一 他に二、四〇〇坪^二 拡張の予定

五、校舍等建物 総坪数二、〇六〇坪^一 他に校舍四、四坪^二 新築

の予定

六、図書、標本、機械器具等施設概要

内 図 書 三、九三冊

外 図 書 一〇、三七冊

計 二四、一五冊

標 本 九四九点

機 械 器 具 一、五一点

七、学部及学科の組織並に附属施設

学部及学科の組織

文経学部第一部(昼間) (英文学科、社会学科、経済学

科)

文経学部第二部(夜間) (英文学科、社会学科、経済学

科)

附属施設 図書館、高等学校、中学校、農場

八、学部及学科別学科目又は講座概要

英文学科

一般教養科目

人文科学関係

一〇科目

社会科学関係

五科目

自然科学関係

三科目

特殊講義

一科目

専門科目

二五科目

教職課程

体育

社会学科

一般教養科目

人文科学関係

一〇科目

社会科学関係

五科目

自然科学関係

三科目

特殊講義

一科目

専門科目

三一科目

教職課程

体育

経済学科

一般教養科目

人文科学関係

一〇科目

社会科学関係 五科目

自然科学関係 三科目

特殊講義 一科目

専門科目 三三科目

教職課程

体育

九、履修方法及び単位授与

第一学年度及第二学年度は主として一般教養科目及び専門科目の一部を履修せしめ第三学年及第四学年度は主として専門科目を履習せしめる。

所定の単位数を獲得し且つ論文試験に合格した者に文学士(英文学科及社会学科)又は経済学士(経済学科)の称号を授与する。

一〇、職員組織概要

学長	一	教授	二四	助教授	二三
主事	二	助手	二三	講師	五〇
書記	一六	司書	八	雇員	一四

その後、文部省大学設置委員の实地調査があつて翌昭和二十四年二月二十一日付で認可され、ただちに英文学科八〇名、社会学科八〇名、経済学科一六〇名の男女学生の募集がはじめられ、四月一日最初の入学式を挙行し

備員 四 学校医 一 合計 一六六

一、学部及び学科別学生定員

文経部第一部

毎年入学者定員 三二〇名

総学生定員 一、二八〇名

学科別定員 { 英文学科 三二〇名

社会学科 三二〇名

経済学科 六四〇名

文経学部第二部

第一部と同じ

総計 二、五六〇名

二、設置者 財団法人 明治学院

一三、維持経営の方法概要

基本財産の果実、授業料、寄附金その他の収入によって

維持経営する。

一四、大学開設の時期 昭和二十四年四月一日

ここに大正以来の希望であった明治学院大学が実現した。最初の学長は村田院長が兼務した。

大学発足当時の学則、学科課程、教授陣などは付録(三)を参照せられたい。

専門学校は、昭和二十六年三月に最後の卒業生を送り出して廃止となったが、新設大学へ移行するものもあった。明治二十七年二年制の高等学部として出発し、その後、数度の変転ののち明治学院高等専門学部はここに五十九年の歴史の幕をとじた。

中学部の分離

六、三、三、四の新制度により旧中学部は中学校と高等学校とにわかれることになった。学院の新制中学校は昭和二十二年から発足したが、新制度により義務教育となった中学校の設備を当時、政府自身が充足することができなかつたので、生徒を焼けのこつた私立学校へ委託するほかない実情であつた。しかし学院は東京都の問合せに対して「宗教教育堅持の建前より」政府の委託をうけないことにした。

(昭和二十二年三月一日臨時理事会)翌二十三年には「大学設立委員会」によって新制高等学校が設置され、ここに旧中学部は中学校と高等学校とに分離された。旧中学部長の高橋源次が中学、高校の校長を兼任した。昭和二十三年の志願者、合格者は次の通りである。

	志願者	合格者
中 学 校 一 年	六一五	二五〇
高 等 学 校 一 年	三三四	二六一

二年	三〇五	二六七
三年	一一九	一〇八

翌昭和二十四年大学設立とともに高橋校長は大学英文学系主任教授に転じ、村田院長が、中学、高校の校長を兼任したが、その年の十二月、当時聖書教師であった大川正が高等学校校長兼中学校長事務取扱となり、翌二十五年四月正式に校長に就任した。大川校長は大正八年明治学院神学部卒業、台北神学校に勤務、在職中米国プリンストン神学校に留学、帰朝後は終戦まで引きつづき台北神学校教授の職にあった。なお新制度の中学校発足にあたり男女共学の問題は議せられたが、「女子の入学は来年度は認めざること」（昭和二十二年三月一日臨時理事会議事録）となったまま、その後は議題とならず中学、高校とも従来通り男子学校としてとどまることとなった。

昭和二十七年から専任高等学校長をおくこととなり、当時、中学、高校の宗教主任であった目下一が高等学校長に就任し、大川は中学校長専任としてとどまった。

日下は大正十五年明治学院神学部卒で明治学院講師や舎監をつとめ、その後各地の牧会に従事し、当時荻窪教会牧師をかねていたが教会を辞して専任校長となった。昭和三十三年大学が新校舎に移転するとともに高等学校は旧専門学校校舎に移り、中学、高等学校は校舎も完全に分離した。

なお当初分離の際、教師の所属は待遇に関係ないことを条件として教師の自由撰挙にまかせた。

明治学院中学校学則

第一章 総 則

第一条 本校は福音的基督教の信仰に依る人格の陶冶を行い中学校普通教育を施すことを建学の目的とする。

第二章 修業年限、学年、学期、休業日

第二条 本校の修業年限は三年とする。

第三条 学年は毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る。

第四条 学年を次の三学期に分ける。

第一学期 四月一日から八月三十一日まで

第二学期 九月一日から十二月三十一日まで

第三学期 翌年一月一日から三月三十一日まで

第五条 休業日は次の通りとする。

一、国の定めた祝日、学院創立記念日 二、日曜日 三、夏季休業 四、冬期休業 五、学年末休業

第三章 教科課程及び授業日数

第六条 本校の教科は法令に依る規定に随う。

第七条 各学年に於ける各教科の授業日数は別に定める。

第四章 課程の修了及卒業の認定

第八条 各学年の課程の修了又は全課程の卒業を認定するには毎学年末に於て其の学年の学業成績、操行、勤惰を考查して之を定める。

第九条 成績は五點法を以て表はす。

第十条 在学三年以上で所定の教科を取得した者には教員会の議を経て卒業証書を授与する。

第五章 職員組織

第十一条 中学校設置基準により校長、教諭、専任講師、講師、書記、嘱託、用務員を置く。

第六章 入学、転退学

第十二条 第一学年に入学し得る者は小学校卒業者又同等以上の学力ありと認められた者とする。

第十三条 二学年以上に転入学を希望する者は相当学年に在学し当該の教科課程に従って規定の資格を取得した者に限る。

第十四条 第十二条、第十三条の入学志願者は所定の入学願書、在学々校の卒業或は修了証明書、及在学中の成績証明書に入学査料を添えて呈出すること。

第十五条 入学志願者には学年相当の学力査査を行い、入学を決定する。

第十六条 入学を許可された者は保証人を定め、在学証書と共に本校所定の手続をとらなければならない。

右手続が不備の場合には入学を取り消す事がある。

第十七条 保証人及生徒が転居又は改名した時或は保証人を変更する時は届出なければならない。

第十八条 退学又は転学しようとする時は其の事由を具して保証人連署を以て許可を受けなければならない。

第十九条 欠席が疾病又は止むを得ない事由で長期に及ぶ場合は保証人連署の上許可を受けなければならない。

但し疾病の場合には医師の診断書の添付を要する。

第二十条 第十九条に於て復学を条件とする場合は一年以内とし其の間授業料は徴収しない。

第七章 入学金、授業料

第二十一条 入学金及授業料其の他は別に規定を設ける。

第二十二条 学期開始後転退学する者の授業料は退学許可の日が属する月迄を徴収する。

第二十三条 品行方正、學術優秀者には特待生として月謝の減免又は免除を行う。

第二十四条 本学院と教派を同じくする教職の扶養子弟又は教職員の子の授業料は保証人連署による届出により半額とする。

第八章 賞 罰

第二十五条 校長は教育上必要と認められた時、生徒を賞し又は懲戒を為す事がある。懲戒は譴責、停学、又は退学とする。

第二十六条 左の各号の一に該当する者には退学を命ずる。

一、本則に違反し、又共同生活を阻害すると認めたる者

二、正当の理由がなく出席が常でない者

三、授業料の納付を怠つた者

第二十七条 懲戒の最後の決定は職員会の議を経て行ふ。

以上

明治学院高等学校学則

第一章 総 則

第一条 本校は基督教主義により高等普通教育を施すことを目的とする。

第二条 本校は全日制高等学校であつてその修業年限は三箇年である。

第二章 教科課程

第三条 教科課程は次の通りである。

第三章 学 年、学 期

第四条 学年は四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る。

学年を分つて三学期とし第一学期は四月一日から八月三十一日まで、第二学期は九月一日から十二月三十一日まで、

第三学期は一月一日から三月三十一日までとする。

第四章 入 学

第五条 第一学年に入學せんとする者は中学校卒業者又はこれと同等以上の学力を有する者でなければならぬ。

第五章 卒 業

第六条 三箇年在學し八十五単位以上を修得した者には卒業証書を授与する。

第六章 授業料その他の費用

明治学院高等学校教科課程

第七條

一、入学検定料は金百円とする。
 二、入学金は金三百円とする。
 三、授業料は年額二千四百円とし三期に分つてこれを納める。

学 年		第 一 年	第 二 年	第 三 年	通 総 時 数		
		第 学 年	第 学 年	第 学 年			
必 修 教 科	聖 書	35(1)	35(1)	35(1)	105(3)		
		国 語	105(3)	105(3)	105(3)	315(9)	
		社 会	175(5)			175(5)	
		体 育	70(2)	70(2)	70(2)	210(6)	
	合 計	385(11)	210(6)	210(6)	805(23)		
	選 択 教 科	漢 文	70(2)	70(2)	70(2)	210(6)	
		社 会	東 洋 史			70(2)	70(2)
			西 洋 史		105(3)	70(2)	175(5)
			政 治 經 済		70(2)	70(2)	140(4)
		数 学	解 析 学(一)	175(5)			175(5)
解 析 学(二)				105(3)	105(3)	210(6)	
幾 何 学				70(2)	70(2)	104(4)	
理 科		物 理		105(3)	70(2)	175(5)	
		化 学		70(2)	105(3)	175(5)	
		生 物	105(3)			105(3)	
	地 学	70(2)			70(2)		
図 画	35(1)			35(1)			
英 語	210(6)	245(7)	210(6)	665(19)			
実 業 科	農 業	70(2)	70(2)	70(2)	210(6)		
	工 業	70(2)	70(2)	70(2)	210(6)		
	商 業	70(2)	70(2)	70(2)	210(6)		
学 習 総 時 数		1260(36)	1260(36)	1260(36)	3780(108)		

<備考> 括弧内の数字は單位數

日本商科大学の併合

日本商科大学とは戦前新宿区淀橋にあつて、善隣教育財団の経営による専門学校であり、支那大陸や滿蒙方面に進出するものを養成することを特色として知られていた。

淀橋で戦災にあつて校舎を失ひ、戦後川崎市長坂にあつた旧東部第六二部隊の兵舎を政府から借入れてここに移り、日本商科大学として発足したが、間もなく経営難におちいつた。

そして昭和二十四年、学院に合併の申出があつたので、村田院長等が土地建物などを検分し、学院の拡張委員会にはかつたが、遠距離で利用できないとの理由で、話はいったん立消えとなつた。しかし先方では学校閉鎖につき個人として杉本幹事に相談にのつてもらいたいとのことで、杉本は先方の学長や理事諸氏と数回にわたつて協議した結果、次の条件で交渉をすすめることとした。

- 一、明治学院は福音主義によるキリスト教主義の学校以外の学校とは合併することはできない
- 二、日本商科大学の負債は明治学院に関係なきこと
- 三、教職員の解雇については明治学院は関係しないこと、必要な教職員があれば学院において新規採用とする
- 四、敷地、建物は大蔵省に返還し、明治学院において必要あれば改めて大蔵省より借用する
- 五、在學生は学院において收容の余地があり、文部省と大学の承認があれば引取る

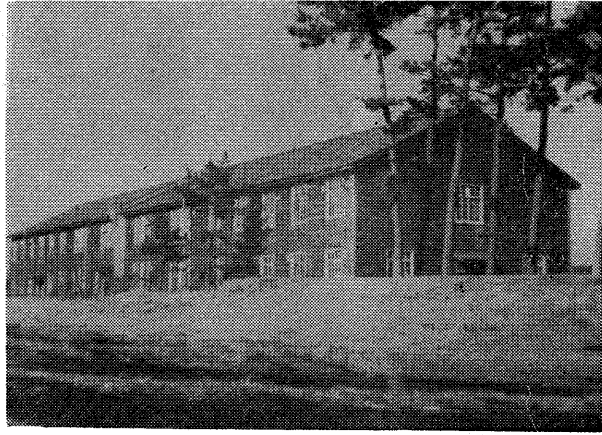
新学期はすではしまつていた。

先方では百数十名の在學生の措置に窮し、文部省を介して、菊地学長より全學生の引取方の申出があつた。学院では若干收容の余地があつたし、大学教授会も、理事会も承認したので全學生を転入学の形で受入れることと

し、日本商科大学の経済学部貿易学科の学生は学院大学の経済学科へ、善隣専門学校の英語科は明治学院専門学校の英文科へ、露語科は社会科へ転入させて第一語学はロシア語を履習させることにした。経済科は経済科へそれぞれ入学させた。昭和二十五年六月のことであった。

標題には「併合」としたが、事実、同校は閉鎖し学生だけを引取ったのであるから同校の教職員、土地、建物などについては別個に処置された。同大学から学院に転じたものはかねてより学院の講師であった支那語の猪熊文炳助教授と土地建物管理人の小泉留吉の両名で、助教授村田礼二はロシア語を第一外国語とする学生の在学中をかぎり講師となった。その後約一年を経てから、この学校に在職した谷山整三教授、名取俊三助教授、司書千葉萌一郎が学院に転任した。谷山教授は現在商学科主任教授となり、名取助教授はその後辞任したが、千葉は現在大学図書館の主任司書となっている。

日本商科大学の寮にはなお学生がのこっていた。セベレンス館を失って寮舎のなかった学院では学生募集のためにもぜひ大学の寮舎を必要とした。そこで日本商科大学が土地、建物を返還すると同時に、この借用を大蔵省に申請した。政府は借用でなく払下げの申請を要求した。しかし当時払下げをうける資金もなく、拡張委員会は遠距離を理由に反対であった経緯もあったので、この要求には応じなれなかった。しかし当時そこを買収しようとする私鉄会社などの競争相手も現われ、遷延を許さない事態となったので、やむなく将来払下申請をするのと一札を入れて借入の契約を結んだ。それは学生の転入より二か月遅れて昭和二十五年八月のことであった。土地一七、〇五八坪、建物は木造二階建の校舎二棟と他に付属の建物を合わせて延一、八七七坪余、貸付料年二万六



千円であった。日本商科大学に対しては、投資した設備費の一部補償として、五十万円を支払ったが、この金額は同大学から転入した学生の授業料でまかなわれた。

敷地は平坦でなく中に大きな窪地があり、窪地をはさんで両側の丘に旧兵舎の建物を中心に付属建物が並んでいた。北側の校舎となっていた方を大学学生寮とし、南側の寮舎であった方を中学校の職業家庭科分教場として使用することにした。この土地は水の便がきわめて悪く、窪地の下にある小さな谷清水をモーターで吸上げる設備をし、浴場、食堂、室の間仕切、舎監住宅等を急造して大学の開設に間に合わせた。その後、鉄製ベッド百台を入れるなどの設備をして学生九六名が収容された。

日本商科大学 溝ノ口寮

一方南側の旧寮舎を中心に、中学校の職業科教室を設け、馬絹分校と称した。窪地を耕作場とし、チューリップなどの花卉栽培も行なわれた。山羊、家兎、鶏などを飼育し、いろいろな研究や実験も行なわれ、管理者、教師の宿舎も付属館に設けた。生徒は毎週教師の引率でここに行き、半日を都塵をのがれて自然にしたしむことを楽しんだ。

その後政府のすすめで昭和三十年、この地の替地として都下北多摩郡東村山町宇回田（現在東村山市富士見町

一丁目)に二万八千余坪の土地が与えられたので、ここは閉鎖し、男子学生の一部は戸塚の北明寮(現在は品川区荏原一丁目)に移り、中学校職業家庭科は白金の本校に帰ることになった。学生寮にいた学生や中学生は、目蒲線で大井線溝ノ口で乗下車し、バス又は徒歩によって往復したが、これらの学生には、思い出多い「溝ノ口時代」となっている。

昭和二十四年十二月、私立学校法が公布され、学院は従来の財団法人から学校法財団法人から学校法人へ

人へと組織が変更されることになった。

学院が財団法人となったのは明治三十八年三月で、その後、選出理事員数などの変更はあったが、法人の「目的」についての重大な変化は三十余年間なかった。ところが昭和十三年ホキエ院長事務取扱のときに第二条「目的」の項において「基督主義の教育を施す為め」の上に「教育ニ関スル勅語ノ旨趣ヲ奉戴シ」の一句が挿入させられ、学則にも、それぞれこの一句が加えられた。これはその年の秋の御真影奉戴とともに学院の教育に影響を与えるものであった。昭和十九年三月認可された寄付行為には、「目的」を第一条として「教育ニ関スル勅語ノ旨趣ヲ奉戴シ」のほかに、「皇国民タル資質ヲ錬成スル」と偏狭なものになり、理事選出の母体をなくし理事が理事をえらぶというきわめてファッショ的な寄付行為となり、わずかに「基督教」の三字が学院の命脈を保っていた。

昭和二十五年十二月八日の第七七回の定期理事会で、法人改組とこれにともなう寄付行為の改正が決定し、翌二十六年一月二十四日組織変更認可を申請し、三月五日付認可され、実に七年ぶりに民主的な寄付行為が生まれた。この学校法人となった寄付行為の第一章および当初の役員は次の通りであった。

学校法人明治学院寄附行為

第一章 総則

第一条 この法人は、教育基本法及び学校教育法に従い、福音主義の基督教に基いて、教育事業を經營することを目的とする。

その教義の基準は、明治二十三年十月旧日本基督教大会において制定された信仰告白に準拠する。

第二条 この法人は、前条の目的を達するために左の学校を設置する。

一、明治学院大学

二、明治学院高等学校

三、明治学院中学校

第三条 この法人は学校法人明治学院と称する。

第四条 この法人の理事、監事、評議員並びに本学院の学院長、学長及び校長は、福音主義の教会に属し、この寄附行為第一条の信仰告白を有する基督信者であつて、第一条の目的を貫徹するのに適當なものでなければならぬ。

第五条 この法人の事務所は、東京都港区芝白金今里町四十二番地に置く。

理事長	富田満	理事	三吉務
理事	ジェー・シー・デマート	理事	村田四郎
理事	エイチ・ディー・ハナフオード	理事	坂庭吉雄
理事	飯島誠太	理事	里見純吉
理事	伊藤立夫	理事	鈴木春
理事	賀川豊彦	理事	山本忠興

田川大吉郎の永眠

元学院長田川大吉郎は終戦後、中国亡命から帰国して、社会党、共産党など革新団体からおされて東京都長官（知事）の候補となったが、安井誠一郎に敗れた。そのときの無理がたたって健康を害し、牛込国立病院に入院加療中であつたが、昭和二十三年十月九日死去した。七十九才。告別式は十月十三日信濃町教会において行なわれ、松岡衆議院議長、片山首相、尾崎行雄の弔辞があつた。

田川は長崎県人、早稲田専門学校を出、都新聞主筆などを経て衆議院議員に選出された。大正二年明治神宮建設の議が国会に上程されたとき、ただ一人賛成を表しなかつた硬骨の士であつた。寺内内閣のとき、元老を批判した文を植村正久の「日本評論」にのせて不敬罪で起訴され、懲役刑に処せられた。

尾崎法相の下に勅任参事官となり尾崎が東京市長になるや助役に就任し、「近代東京市の基礎を築いた」（東京市政調査会田辺副会長談）のであつた。

大正十年明治学院理事長に就任、十一年オルトマンズ総理事務取扱ののち総理の職務をとつていたが、十四年正式に総理に就任、昭和十年まで財政の最も苦しい時期に総理（のち院長と改む）として十一年間学院のためにつくしたことは先に述べた。支那事変に際して近衛内閣の対華政策を批判して官憲や軍部から監視の人物とせられていた。その後、事変拡大とともに官憲の圧迫がひどくなり、ついに中国に亡命生活を送つた。昭和二十年蔭介石に会つて和平交渉をすべく重慶に行く途中で日本の降伏を聞いたということである。

第四章 再建時代

白金海軍墓地の買収

今日の大学のあるところは、十四年前までは、白金海軍墓地と称せられる場所であった。中央に小高い山があり昼なお暗いうっそうとした森は、禁を犯した学生たちに好適の散策の場所であり、夜はふくろうが鳴き、ときには刑事犯人の逃げ込む場所でもあった。往時を知るものは、今日モダンな高層ビルの窓に電燈のこうこうと輝く夜景を見ては、ほとんどおのれの眼を疑うほどの変りようである。今われわれの足が立っている場所が、どんなどころであったかを知ること、無意味ではないであろう。

古い記録によれば、白金海軍墓地は明治六年一月に設定せられたもので、旧幕時代には松平丹波守の下屋敷があった。松平丹波守とは領高六万石、信州松本藩主戸田氏のこと、明治維新以後戸田姓を名乗った。設定当時は六〇七〇坪であったが、その後道路その他に分割して約二四〇〇坪となっていた。墓地内には、祭場、休憩所があり、葬儀師その他の係官が配属されていた。祭場などは大正十二年の大震災で破損して取りこわし、その後

は番舎のみを存置してあつた。この墓地には、明治六年から大正十二年にいたる五十余年間に海軍将校五一名、同候補生、下士官一〇三名、水兵四三八名、雇傭人三名、合計五九五名の海軍関係者の外に、昭和四年埋葬せられたイタリア海軍士官を加えて五九六体の遺体が葬られ、墓誌などの碑も多くあつた。

墓地の管理は旧海軍省の所管であつたが、終戦後海軍の解体とともに国有財産として大蔵省に移管され、大蔵省は昭和二十二年東京都庁へ無償無期限で管理を委託した。また五百八十余の無縁者を代表して、復員庁第二復員局海軍残務整理部がこれに関与し、祭祀は靖国神社に委託され、清掃、番人などの経費も同神社の負担となつていた。

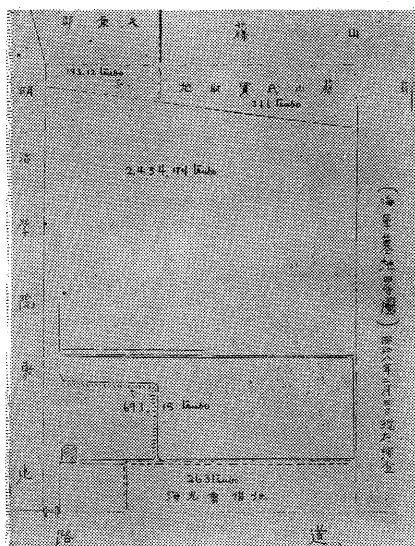
明治学院が築地から、当時荏原郡白金村玉縄台といわれていた現在の地に移つたのは明治十九年で海軍墓地の設定におくれること十三年である。明治三十六年以来、学院では同じ台地にあるこの海軍墓地の分譲を希望していたが、生徒数の少なかつた当時としてはまだまだ必須な要望ではなかつた。

大正三年に土地払下願が海軍大臣宛に提出されているが、これは、「隣地海軍省墓地払下ノ説アリ故ニ弁護士普賢寺徹吉氏ニ依頼シテ之ヲ購求シ得ルヤ否ヤヲ試ミル事ト決ス」(大正三年一月十九日常務委員会)によるものであつてその資金はその前年井深総理が渡米した際、さきに神学部寄宿舎建設のため多額の寄付をしてくれたセベレンスの子息に会い、子息より父の遺言として明治学院のため七千五百ドルを金貨で寄付するとの申出をうけた。ただしその用途は敷地拡張のためという条件であつたので、井深総理はこの資金をもつてこの申請となつたものと思われる。しかし海軍省は大正六年にいたつて分譲には応じられないとして申請を却下したので、つい

に年来の望みは絶たれた。

それから十五年経って昭和五年に、時の田川総理は海軍墓地内の墓所のない道路沿いの土地の払下を大蔵省宛に申請した。これは海軍省より用地の一部を大蔵省に引きついでとの通知に接したからである。

昭和八年、長崎市にあったリフォームド・ミッション経営の東山学院が閉校せられ、その財産処分による資金が明治学院に寄付された。田川総理はその資金をもってただちに海軍墓地内の墓のない久原邸（八芳園）境に沿う細長い一九三坪と道路側に沿う六九五坪、合計八八八坪の買収に成功した。成功というのは、この三年間、この問題に数人のブローカーが介入し、財部海軍大將らをかつき出して妨害し、あるいは多額の金員を強要するな



墓地位付近略図

どことがあり、加えるに、所有権と使用权の問題で、海軍省と大蔵省の権限が明らかでなく、このため田川は三年間にわたってたいへんな苦勞をしたからである。しかし、前者は使用できない場所であり、後者は五、六メートルも落差のある高低二か所にわかれていた。従ってここは農事作業場、弓場、射的場、バレーボールコートなどに用いられた。そこは現在大学学生会館グリーン・ホールの建っている場所である。

そのときの大蔵省との売買契約および土地価格は次の

通りであった。

「昭和八年三月三十一日東京稅務監督局と左の売買契約をなせり

芝区白金今里町三九番ノ四 雜種地 式反參畝參歩壱五勺

芝区白金今里町三九番ノ六 六畝拾參歩四合

此金額合計五万五千八百參拾七円貳拾錢也」このうち、四万円は東山學院財産処分による資金であつた。

敗戦によつて帝國海軍は消滅したが、その巨大な残骸の処理をするために復員庁が設けられ、未曾有の復員業務と殘務整理が行なわれることになつた。國民は空襲の恐怖から脱したが、数年間の榮養失調と深刻な食糧難のため飢餓線上にあつた。パージの旋風は、官民を問わず人々の心胆を寒からしめ、役人や軍人たちは全く落着きを失つていた。従つて大蔵省も復員庁も、海軍墓地のことなど全然考へる暇はなかつたのか、再三の交渉にも何の反応も示さなかつた。その中、昭和二十二年大蔵省は「海軍墓地は東京都へ無償貸付けたから払下には応ぜられない」と回答してきたので、その後は東京都建設局公園緑地部靈園課に交渉をはじめたが、もともと墓地を護り墓地を建設することを任務とする、この役所の責任者が墓地廢止に同意するはずはなかつた。

遺族団はもちろん反対であり、遺族および旧海軍を代表する第二復員局にしても、これらの団体より非難を受けるような計画に賛成するはずはない。さらに靖國神社にしても、氏子たる遺族のうらみを買つてまで墓地廢止に同意するはずがない。このように關係諸団体は墓地存続がなんらの負担にならないこと、廢止によつて大蔵省の外は何人も利益をうけないのみか、遺族や旧海軍關係者より非難をうけるなどの理由から積極的に賛意を表す

るものはなかった。その間、墓地内の空地を児童遊園地とする案が、地元議員から都議会に提出され、すでに予算も計上されたの報が伝わり、学院ではますます焦燥を感じはじめた。

そこでふたたび交渉を大蔵省にもどし内交渉をすすめた結果、関係者の間に完全な同意があれば払下げてほしいとの意向を確かめた。関係者とは東京都、復員庁、靖国神社および遺族団であつて学院は関係者ではない。従つて学院はこの問題を発議することはできない立場であつた。関係者は前述のごとくこの問題にかかわることを好まなかつた。いわんや憎まれ役を買つて発議するものはなかつた。しかし、発議に最も適当で有力な立場は、現在の使用者たる東京都であるとの判断により、学院神学部出身で元東京都経済局長であつた大迫元繁氏に相談し、同氏を通じて東京都霊園課長三木氏にこの問題の斡旋方を依頼したが三木氏が病氣のため進展しなかつた。昭和二十五年八月、三木氏が初めて関係者を招集して問題を発議し、その意見を徹した。

ときを同じくして学院は大蔵省に対し再度払下げの申請書と陳情書を提出した。三木氏はふたたび発病し交渉は停滞した。翌昭和二十六年二月、三木氏は病をおして関係者を靖国神社に集め、海軍墓地廃止の具体案を示して関係者の諒解を得た。それは(一)墓地内の一隅に百二十坪の記念霊域を設け、無縁者を合葬する。(二)有縁者はそれぞれの希望に応じて改葬する。(三)右に要する経費は明治学院において負担する、などの条件であつた。三木氏はこの日の無理がたたつたのか、それからちょうど二か月後の四月六日に死去された。その年の七月に入つて、前年八月に提出した申請に対する大蔵省の回答があつた。それは「関係者間の完全な諒解を条件として払下げ」ということであつた。

その後、三木氏の後任霊園課長となった井上氏を中心に関係者間で協議に協議を重ね、経過と関係者間の諒解成立証拠書類をそえて、再度大蔵省宛払下を申請した。測量などの実地検証、価格査定などを経て同年三月二十四日、すなわち占領から日本が独立する約一か月前に、国との間に売買契約が成立した。

売買契約の第一条は次の通りである。

第一条 売払物件の所在区分、数量及び代金は次の通りである

所在 東京都港区芝白金今里町三九

区分 土地 貳千壹百九拾九坪壹合九勺

及建物 拾七坪七合五勺（解体撤去）

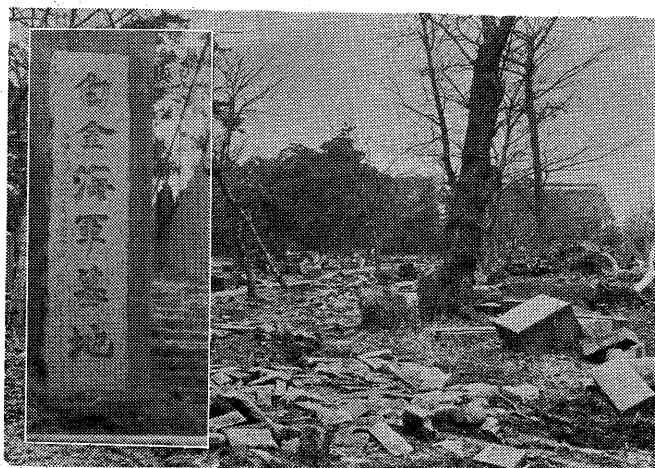
数量 立木 壹百五拾貳本（一部撤去）

工作物壹式（一部撤去）

代金 壹百九拾壹万壹百円也

アメリカと関係深い明治学院に墓地を売ることは、遺族や軍人としては、こころよいことではなかったであろう。またキリスト教に英霊の取扱いをさせることには不安もあつたであろう。改葬と整地工事、霊城建設は東京都霊園課の指揮監督の下に、いっさいの補償と経費は学院の負担において行なわれることとなった。

廃墓地の公告は規定により有力新聞（朝日、毎日）全国版にそれぞれ三回にわたって掲載し、イタリア人の墓に関しては、外務省、イタリア大使館を通じてイタリア本国に照会するなどの手配をした。その結果、最初八名



海軍墓地の改葬工事

であつた遺族関係は縁故者を含めて四十余名となつた。これら有縁者には、それぞれの希望により替墓地を選定し、あるいは自家墓地に移葬することとした。一方霊域の設定、納骨堂の建設、墓石、記念碑類の処理、都衛生

局の管掌にある遺体の処理および番人の解雇、番舎の移転、霊域建設後の維持、管理、祭祀等の問題などのため協議に協議を重ねて一年半を費した。工事は木田建業株式会社に請負わしめ、昭和二十八年十月一日着工し、翌年三月末日に完了した。

墓は海軍軍人であるため、水葬にされて遺体はないとの推測は全然はずれて、二、三基の他は全部遺体があつた。深さはいずれも二メートルからそれ以上で、将校の墓にいたつては約三メートルの地下に分厚い二重の棺に収められ、内部の棺はまだ腐敗していなかつたが遺体は風化されて、キルクの小片のようになり、ボタンや軍服の布片を残すのみであつた。約五百体の水兵の遺体はすわつた姿勢でつぼに入れられ、石板のふたで封ぜられていたが内部には人体から出たものか、外部より入つたものかきれいな水がたまり、そのためバクテリア菌の発生を防いだものか、遺体は人の形そのままに組立てられていた。中には肉片をつけたものさ

えあって、現場は妖気に包まれていた。

遺体の小片はかねて用意した故人の氏名、年令、階級、死亡年月日を焼きつけた特製の小つぼに収め、墓地内にしつらえた仮小屋にみ霊として安置し、遺体は別むねの仮小屋に収容した。墓石は、遺族関係をのぞきことごとくこれを粉砕したが、将校の墓は戦前の大將、元帥の墓にも比すべき大きさで、運搬にも粉砕にも容易ならぬ手間を要した。

その間に一二〇坪の記念霊域が建設せられ納骨堂が完成し、記念碑類の移転が終わり、五百九十五柱の骨つぼは堂内に納められ、五百余体の遺骨は堂内の地下に埋葬された。その間、有縁者の改葬も運ばれ、整地工事も進み、昭和二十九年三月末日をもって工事を完了したが、この工事の責任者であった木田組の池田氏は工事終了後間もなく他界された。前の三木氏につづく二人目の犠牲であった。

工費は改葬、整地、納骨堂建設、霊域設定、その他の付帯設備いっさいを含めて三、二五八、〇〇〇円であった。この費用は坪当り一、〇八六円で前の土地払下代価坪当り八六八円を加えても二坪二千円足らずであった。

工事は終わったが霊域にある納骨堂その他の地上物件の帰属について問題がおこった。協議の末、関係団体では「国のものである」として大蔵省に受取方を申請したが、大蔵省としては「遺骸は国有財産と認められない」としてこれをこぼんだ。土壇場になって問題は振出しにもどり、払下許可取消しにまでおよぶかの形勢となった。

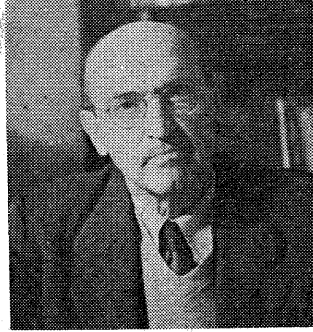
折から学院ではすでに新図書館の起工式が行なわれていた。もはや後退を許されぬ事態となったので、元蔵相北村徳太郎理事の紹介状ももらい関係者ととも大蔵省に対ししつように請願をつづけた結果、特例をもってよ

りやく申請は受理され、満八年にわたる交渉はここに結実した。

そもそも墓地払下げの交渉は昭和二十一年からはじめられたが、当初は理事会の議によつたものでもなく、院長の命によつたものでもなかった。またなら資金のアテがあつたわけでもなく、交渉が成功する見通しもなかった。昭和二十五年の夏、松本亨教授が休暇で米國に帰られるのを機会に、函面や説明書を託して両ミツションボードに対し、二千弗の援助を依頼してもらつた。同氏の尽力により、その年の十一月、リフオールド・ボードより千弗の援助があつた。翌二十六年にはプレスビテリアン・ボードより同じく千弗の援助が得られた。その後シェーファー博士が顧問として来任せられ、大学新建築の構想をもつてこの隣接地の買収にも力を入れ、またハナフォード博士夫妻の協力により、昭和二十七年から八年にかけて、両ミツションボードから各一万弗ずつの援助金が寄せられ、かろうじて買収と整地工事に間に合わせる事ができた。

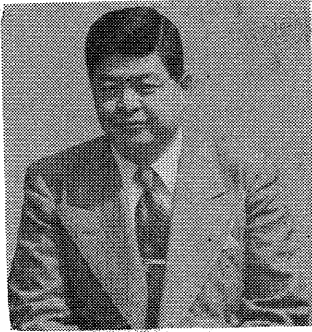
戦後の建築計画

昭和二十七年十一月、村田院長の提案による「理想教育」を推進するためL・J・シェーファー博士が院長顧問として来任した。博士は学院の建物の老朽した有様を見てヴォーリス氏を招き学院の総合的再建築案を作成させた。たまたまプレスビテリアンのスミス博士も来朝し、村田院長と三人で理想教育案と併せて建築計画が協議され、今度は明治学院の番であるという了解ができ、二躍計画は具体化した。しかしボードの都合でシェーファー博士が帰国することになり、村田院長が実行委員長となり、松本亨総主事が常務主事となつて計画をすすめた。（「明治学院八十年史」の松本亨氏記）



シェーファー博士

昭和二十九年三月、五か年計画の第一期プランが決定し、買入れたばかりの旧海軍墓地の西側に、鉄筋コンクリート二階建、延四百六十余坪の大学図書館を建てることになり、志村太七氏の設計で大成建設株式会社に施工させることになった。



松本総主事

資金は全計画に対しプレスビテリアン・ミッションより一億八百万円、リフォームド・ミッションより七千二百万円、合計一億八千万円、国内で父兄学生、同窓生、教職員、校友から九千万円の募金をすることとなり、関根正治が募金委員会主事となって活躍した。

昭和二十九年十一月には二階建延四六七坪の近代的図書館が完成した。第二期工事として昭和三十二年には五階建延一、七四〇坪の大学本館一号館が完成し、大学は旧専門学校校舎から移転し、そのあとへは高等学校が入った。第三期工事としては大学学生ホールとして四階建、延五四七坪が完成しグリーン・ホールと名づけられた。第四期工事として旧中学校校舎を取りこわし、四階建延一、二九二坪の中学校校舎が昭和三十四年五月に竣工した。一連の建築プログラムは最初の通り志村設計事務所設計、大成建設株式会社の施工によるものであった。

募金活動は北村徳太郎理事を委員長として、同窓会、父兄会がそれぞれ別個に募金委員会を組織して募金につ

とめ、海外の援助資金募集には主として松本常務主事があたった。とにかく、さきの海軍墓地の買収とこの五年の建築計画によって白金の丘は面目を一新し、大学としての設備が一応ととのい、新しい時代への一歩が踏み出されたことは学院史にとって一時期を画することであった。

村田院長の辞任

村田院長は就任以来、戦後の復興と建設のため献身的努力をつづけていたが、昭和三十一年の秋、狭心症の発作をおこし、以来休職して静養につとめていた。しかし、回復ははかばかしからず、ついに昭和三十二年三月辞任した。

村田院長在任中には大学設立、高校、中学の分離、理想教育計画、白金海軍墓地の買収、総合建築五か年計画など戦後学院復興と建設拡張などの大事業を遂行し、今日の大学発展の基礎を築いた。在任中、ミッシェンの援助による少数理想教育計画をたてたが、顧問シェーファー博士の帰国などにより、中学校における実施結果は思わしからず、ついに不首尾に終った。

村田院長は昭和二十四年大学設立に当り、初代の学長を兼務した。昭和二十九年エバンストンにおける世界宣教会議に日本代表として出席し、その際、二十三年に贈られていたアルマ大学からの神学博士の学位を授与されて帰朝した。辞任後は大学名誉教授に推挙され、横浜指路教会牧師として教会復興につくし、本年四月名誉牧師となった。なお関東学院大学神学教授、明治学院大学基督教学講師をかねている。

都留院長の就任

昭和三十二年三月、村田四郎辞任のあとをうけ当時理事の一人であった神学博士都留仙次が第六代学院長に就任した。都留は大分県の出身、明治学院では村田の先輩にあたり明治四十年の神学部卒業、その後米国オーバン神学校、英国エジンバラ大学ニューカレッジに留学、明治四十四年朝と同時に神学部助教、大正二年教授となり、高等学部長、神学部長事務取扱、中学部長と歴任したが、その間、昭和三年エルサレム世界宣教会議に日本代表の一員として出席した。昭和十五年横浜フェリス女学院長に就任、在任中渡米、ホープ大学より神学博士の学位を授与された。昭和二十六年フェリス女学院長を辞任し、日本聖書協会の聖書口語改訳委員長としてみずからは旧約聖書を担当し、昭和三十年聖書の現代語訳を完成した。その間も明治学院理事、同窓会長などをつとめ、長年にわたる学院との縁はつづいていた。院長就任式は同年五月十七日礼拝堂において行なわれたが、古巣に帰った都留院長の感慨は無量なるものがあつたにちがいない。

創立八十周年記念行事

一九五七年（昭和三十二年）は学院創立八十周年に相当するので、学院ではその前年次の諸氏で委員会を構成し、諸行事の立案、計画、実行にあつた。

委員長 都留仙次

実行委員 松本亨、杉本民三郎、斉藤茂夫、若林竜夫、竹中治郎、平林武雄、日下一、大川正、北村仁、徳永清、宮崎栄、矢作弥寿久

明治学院八十年史編集委員 渡辺勇助（和文執筆者）、G・J・ヴァン・ワイク（英文執筆者）、松本亨、平林武

雄、齋藤国治、杉本民三郎、以上六氏のほかに顧問として鷲山第三郎、和田豊彦の両氏が委嘱された。

執筆は和英とも満一か年を費して脱稿し、和文三千部を富士高速印刷会社へ、英文二千五百部は、いのちのことは社でそれぞれ印刷され、十一月一日の記念式当日刊行された。

明治学院創立八十周年記念式次第

昭和三十三年十一月一日(金) 午前十時 於 明治学院礼拝堂

司会 理事 長 富田 満

園部 順夫

一、奏 楽
一、讚 美 歌 六六

一、聖 書 朗 読 コリント人への第一の手紙三章十節―十七節 中 学 校 長 大 川 正 同

一、祈 禱 大 学 長 事 務 取 扱 齋 藤 茂 夫

一、式 辞 学 院 長 都 留 仙 次

一、勤 統 教 職 員 表 彰 高 等 学 校 長 日 下 一

一、祈 禱 文 部 大 臣 松 永 東 氏 (代 読)

一、校 歌 日 本 私 立 大 学 連 盟 会 長 大 浜 信 泉 氏 (代 読)

一、祝 辞 湯 浅 八 郎 氏

日本基督教学校教育同盟理事長 湯浅八郎氏

リフォームド・ミッション代表 J・C・デマーズ氏

プレスビテリアン・ミツシヨン代表 P・V・オルトマン氏

明治学院同窓会長 井上武右衛門氏

一、同

前学院長 村田四郎氏

一、頌 栄 五四一

一、祝 禱

当日永年勤続で表彰を受けた教職員は左の通りであった。

三十年以上勤続者 大西貞治、松田彦寿、由布保、斉藤茂夫、渡辺勇助、宮崎栄

二十五年以上勤続者 英義雄、若林竜夫、加藤七郎

二十年以上勤続者 望月富美男、諸橋勝正、平林武雄、杉本民三郎

十五年以上勤続者 竹中治郎、羽田智夫、渡辺徳太、園部不二夫、大山正春、矢作弥寿久

十年以上勤続者 西垣正己、関根正治、延原弘一郎、高谷道男、三神勲、笹尾洋二郎、小泉治、高橋源次、名津井悟、白川い

く、小林なみ、秋元徹、安藤徳夫、原田昂、木村真太郎、工藤英一、中村仁一、岡野潔、大堀俊次、渋谷一之助、須藤信雄、

山田トモ、吉原幸二、細田弥彦、小池正二、小田栄一、高橋泰郎、吉本とみ子

功労者の永眠

里見純吉

明治四十五年以來、学院理事であった株式会社大丸取締役会長里見純吉

は昭和二十七年八月三日堺市浜寺の自邸において死去した。七十三才。里見は明治三十年明治

学院普通部卒業後、高等学部に入すが中退して慶応義塾予科二年に編入、明治三十六年慶大理財科卒業、同校の助手兼舎監となり、のち三越の前身三越呉服店に入ったが、従業員の待遇改善案がいれられず退社した。折からジュネーブにおける国際労働會議に日本商店従業員代表として出席、帰国して大丸に迎えられ、つぎつぎと



里見純吉

新しい経営方針を打ち出して、日本の百貨店をリードし今日の近代的デパートメント・ストアの先駆となった。大丸社長を辞して取締役会長となったが、かれは教育に興味をもち、多くのキリスト教主義学校の理事であったばかりでなく、みずから看護婦養成の大阪女子学園を創設して学長、高校長をかねていた。

かれは大正六年ライシャワー博士が高等学部長のとき、商業科設立に参画したほか、学院のためたえず財的援助を惜しまず、また京阪神

学院同窓生の中心的存在として同窓会のためにもつくした。

とにかく明治四十五年以来、昭和二十三年まで三十八年間連続理事の職にあったことは恐らく理事動続のレコードであろう。なお里見夫人しづ子は明治学院の前身築地大学第一回の卒業で、のち学院の教職にあった英語の天才石本三十郎の娘で、明治学院初代幹事服部綾雄の姪にあたり、元学院教授石本音彦の姉にあたる。里見家と学院の縁故は浅からぬものがあった。

賀川豊彦

世界的宗教家、社会運動家として知られた賀川豊彦は昭和三十五年四月二十三日松沢の私

邸で死去した。七十二才。キリスト教界の巨星がおちた感じであった。葬儀は同二十六日松沢教会において密葬が行なわれ、翌二十七日青山学院講堂において告別式があったが、政界、宗教界、労働運動界、言論界、その他外国人など、各方面からの参列者がさしもの大講堂に入れきれず場外にあふれ、当日式場受付で受けとった香典

だけでも百万円をこえ、故人の活動範囲の広さを思わせた。終生伝道と社会運動に挺身したかれが勲一等に叙せられたのは、時代の変化を思わせることであつた。葬儀の辞は明治学院時代の学友、明治学院長都留仙次によつて行なわれた。

賀川は明治学院理事として長く学院の経営に参画したほか、大学が設立されてからは教授として毎年夏期に協同組合論の集中講義をした。ただし、俸給は全部学生の懸賞論文の賞金とした。

賀川は学生時代明治学院の図書館で読んだ書物からもつとも影響をうけたことを記念して、その蔵書約二万卷を学院図書館に寄贈し、現在、賀川文庫となつている。(その内訳は和書四千八百四冊、洋書四千八百三十一冊、その他和洋雑誌一千三百九十八冊である。)そのほかに在米賀川後援会よりの寄付金三百六十万円に賀川家から百万円を加えて賀川記念講座の基金とした。この基金の利子をもつて毎年記念講座が明治学院大学で開かれ、内外の知名の学者を招いて講座がつづけられている。これは大学生のみならず一般人にも公開される学院唯一のエクステンション・レクチャアとなつている。

富田満

昭和三十六年二月十五日聖日の朝、富田理事長は芝教会において礼拝直前、説教の原稿をもつたまま狭心症のため急死した。七十七才であつた。葬儀は一月十八日午後一時から芝教会において芝教会、日本基督教団、明治学院、東京神学大学、金城女学院による合同葬として行なわれた。都留明治学院長の聖書朗読、村田前明治学院長の履歴朗読、稲垣芝教会牧師の葬儀の辞があり、明治学院を代表して高橋学長の弔詞のほか、関係諸団体代表、マッカーサー駐日米國大使の弔詞(代読)があり、引きつづき告別式に移つたが、参列者七

百余名で故人の教育界、宗教界における足跡の広さを思わせた。

富田満は明治十六年愛知県に生まれ、明治三十七年明治学院神学部に入學、在學中に日露戦役に従軍し満州に出征した。明治四十年、賀川豊彦らとともに南部プレスビテリアン教会の經營する神戸中央神学校に転じ四十二年卒業、同四十四年徳島教会牧師に就任した。大正七年米國プリンストン神学校に留學、同九年帰朝し、芝教会牧師となり、以來四十一年間、同教会を牧した。

その間、昭和九年日本基督教連盟総會議長、同十年旧日本基督教會大會議長、同十六年各教派合同の日本基督教團が設立されたとき、初代の統理にえらばれるなど、日本基督教界の最高責任者として活動した。

明治学院との關係は、昭和十年理事にえらばれ、同十三年多田素のあとをうけて理事會議長に就任、以來二十三年間その職にあつた。その間、昭和二十二年矢野院長辭任後、院長事務取扱として翌二十三年まで戦後の激変時代に院長の職務をとつた。その他、東京神學大學理事長、名古屋金城女學院理事長をかね、宣教のほか広くキリスト教教育界にも貢獻した。

都留仙次

昭和三十七年學院長の職を退いた都留仙次博士は、その後、學院大學講師として出講する

ほか、日本聖書協會理事、家庭聖書協會常務理事、原宿教會名誉牧師などをかねて伝道にはげんでいたが、昭和三十九年一月二十日の朝、脳出血のため原宿の私邸で急死した。その日は八十才の誕生日であつた。葬儀は二月一日故人と關係の深かつた明治學院、フェリス女學院、女子學院、日本聖書協會、家庭聖書協會の合同葬で明治學院チャペルにおいて行なわれた。

都留仙次は学院に学び学院に教え、あるときは理事、同窓会長となり終生学院と離れることがなかった。かれは「頑固者」「律法的」あるいは「後ろ向きの予言者」などと悪評されたこともあるが、かれほど正確に学院伝統の精神を把握し、純粹に学院を愛したものはまれである。古きよき時代の学院を代表する生存者の一人であった。かれは学院の教育目的について「学院は国家が要請する人間を造る所ではない。社会が歓迎する人物を養成する所ではない」といったが、この言葉をさらに一歩進めるなら「親の氣に入る子弟を教育する所でない」ということにもなる。この否定的表現は世俗の教育観の意表をついた、驚くべき、また味わうべき言葉であろう。

第五章 躍進時代

理事長に北村徳太郎

昭和三十六年一月、富田理事長が急死したため一月二十六日臨時理事会が開かれ、後任理事長として理事北村徳太郎が選挙された。

北村理事長は明治十九年長崎県に生まれ、関西大学に学んだのち実業界に入り、戦前、長崎親和銀行頭取となつた。昭和二十一年長崎県から衆議院議員に当選（以来当選六回）、昭和二十二年には大蔵政務次官、同十二月運輸大臣就任、翌二十三年大蔵大臣就任、二十四年欧米各国視察、二十八年には世界連邦世界会議に日本代表団長として出席、スカンジナビア諸国、その他欧州各国およびエジプト、タイなどを視察している。三十年国会議員団長としてソ連、中国を視察、三十一年国際連合日本加盟に際しては、日本政府顧問として出席、三十二年アジア、アフリカ諸国民会議日本代表団団長としてエジプトを訪問、三十三年、民間通商使節団団長としてソ連訪問、三十四年には日本商品見本市調査団顧問としてソ連訪問、三十五年日本産業見本市開催のため東欧およびソ連訪問など、国際的活動ははなばなしものがあつた。国内的には親和銀行取締役会長、教文館取締役会長、国

際汽船社長、日ソ東欧貿易会長など実業界に關係しているほか、日本Y.M.C.A同盟理事長、諸キリスト教主義学校、諸社会事業団の理事、あるいは理事長をもかねているが、多忙ななかにも教会礼拝をかかさぬ熱心なキリスト教徒として知られている。

学院長に武藤富男就任

都留仙次院長は昭和三十七年三月末をもって老齡のため学院長の職を辞した。その後、理事長北村徳太郎が院長を兼任していたが、五月二十三日の理事会において武藤富男を第七代明治学院長に迎えることに決定した。就任式は六月十六日、午後二時からチャペルにおいて来賓、教職員、学生代表等七百余名が出席して厳肅に挙行され、式後、大学図書館で祝賀パーティが開かれた。就任式においては異例の宣誓が行なわれたが、院長宣誓のことばは次の通りであった。

宣誓のことば

理事長 本学院理事会はあなたを選んで本学院の院長に任じました。

あなたの本学院を代表し、理事会の決議を執行してその責に任ずることを誓いますか。

院長 はい、誓います。

理事長 あなたは本学院創立の精神を体し、キリスト教教育を忠実に行ない、世を益する人々を本学院より送り出し神の栄光をあらわすため努力することを誓いますか。

院長 はい、誓います。

武藤院長略歴

武藤院長は明治三十七年二月静岡県駿東郡富士岡村に生まれ大正十年第一高等学校入学、同十五年高等試験司法科合格。昭和二年、東京帝国大学法学部法律学科卒業。司法官試補、横浜地方裁判所勤務、四年東京地方裁判所判事、九年満州国政府司

法部刑事科長、十年滿州国政府法制局參事官、十三年滿州国遣欧使節團員としてドイツ、イタリア、スペイン訪問、十四年滿州国政府弘報処長、十八年日本政府情報局第一部長、二十年退官。日米会話学院創立、院長就任。二十一年「キリスト新聞」専務理事兼主筆。二十三年日本基督教団補教師試験合格、大森教会教師試験。二十五年全日本ラクーア音楽伝道を企画実施。二十七年渡瀬主一郎氏とともに新約聖書口語訳完成。二十九年〜三十四年ラクーア特別伝道を企画実施。三十一年教文館専務。三十四年教文館取締役社長。

東村山高等学校の開設

昭和三十七年六月、武藤院長は就任早々、都下北多摩郡東村山町（現在は市）にある二万八千余坪の学院総合グラウンドを視察した際、緑したたる自然環境と戦後のいわゆるベビーブームの波が高校に押しよせることを思い、このグラウンドの一角を利用して高等学校を新設する構想をもった。こうして、同年七月三十一日に臨時理事会で東村山に新高校開設の議がきまった。その要項は次の通りであった。

(一) 昭和三十八年四月から東村山グラウンドの敷地の一部に新たに高等学校を設置する。

(二) 規模は一学年二学級八〇名、三学年を通じて二四〇名とする。

(三) 校舎の建築は二か年計画とし、第一期分を昭和三十七年度中に竣工させる。

(四) 寄宿舎、職員住宅、礼拝堂を建てる。

(五) 学校開設の準備には高野総主事、針谷高校長がこれに当たる。

右の決議に基づき手続きをすすめ、翌三十八年一月二十八日付で都知事の認可をえた。

申請書によると設立当時の校地は専用二、二八五平方米、大学との共用校地二一、四八六平方米、校舎は鉄筋コンクリート造り四階建二、五〇四平方米および体育館、その他大学との共用木造校舎一、七四五平方米であった。新築予定の校舎はその後予定を一部変更し、設計施工とも竹中工務店に命じて、翌三十八年、鉄筋コンクリート三階建延一、六一〇平方米の新校舎が竣工した。工費は七一、七七七、七八〇円である。

開校は四月一日よりであったが、開校式は十一月十六日校舎落成式とともに行なわれた。校長は武藤院長が兼任し、教頭に矢作教諭が就任した。

私立明治学院東村山高等学校学則

第一章 総 則

第一条 本校は教育基本法及び学校教育法の精神に則り中学校を卒業した男子に、高等普通教育を施し、キリスト教による人格教育を以て心身ともに健康な民主的社會人を育成することを目的とする。

第二条 本校は明治学院東村山高等学校という。

第三条 本校の位置を東京都北多摩郡東村山町字回田二四五四番地におく。

第二章 課程の組織および収容定員

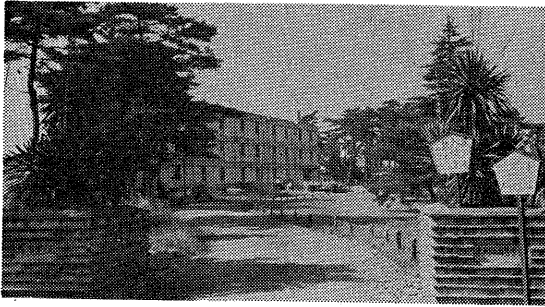
第四条 本校の課程および収容人員は、次のとおりとする。

全日制の課程（別表）

普通科 二四〇名

2. 各学級の収容定員は、一学級四〇名以下とする。

第三章 修業年限、学年、学期および休業日等



東村山高等学校

第五條 本校の修業年限は、次のとおりとする。
 全日制の課程 三年
 (以下略)

別表 明治学院東村山高等学校教育課程

教科	科目	標準 単位数	1年	2年	3年	計
国語	現代国語	7	3	2	2	15
	古典乙Ⅰ	5	2	3		
	古典乙Ⅱ	3			3	
社会	倫理・社会	2		2		15
	政治・経済	2			2	
	日本史	3			3	
	世界史B	4		4		
数学	地理B	4	4			15
	数学Ⅰ	5	5			
	数学ⅡB	5		5		
理科	数学Ⅲ	5			5	15
	物理学B	5		2	3	
	化学B	4		2	2	
	生物学	4	4			
保健体育	地理学	2	2			11
	体育健	9	3	3	3	
芸術	保健	2	1	1		4~6
	音楽Ⅰ	2	} 2	} 2	(2)	
	美術Ⅰ	2				
	書道Ⅰ	2				
	音楽Ⅱ	4				
	美術Ⅱ	4				
外国語	書道Ⅱ	4				18
	英語B	15	6	6	6	
宗教	聖書		1	1	1	3
小計			33	33	30~32	96~98
特別教育活動(ホームルーム)			1	1	1	3
合計			34	34	31~33	99~101

本校の特色は、少数教育、英語教育の徹底、寄宿舎制度、学院中学校より学院の白金高校へ進学の選にもれた生徒を全員収容することである。

東村山高等学校校歌

武藤富男作詞

広野嗣雄作曲

一、水碧く大樹茂りて

上よりの恵みはゆたか

村山の東ひんがしに立つ

われらが学びや

正しきと愛を求めて

心清き人とならん

三、

人工じんこうの星空をめぐりて
大宇宙だいうちゅうに電波ゆきこう

村山の東ひんがしに立つ

われらが学びや

いざ万民のことばならいて

世界にすむ人とならん

二、空高く地はひろびろと

この庭に大気はすめり

村山の東ひんがしに立つ

われらが学びや

身の丈も智慧も優りて

意強いさかき人とならん

四、

いにしえのふみひもとけば
とこしえのいははめばゆ

村山の東ひんがしに立つ

われらが学びや

天来てんらいの光をうけて

みのり多きときとなさん

大学その後の発展

大学が発足したのは昭和二十四年四月で、文経学部と称する単一学部のものにすぎなかったが、三年後の昭和二十七年には文学部と経済学部の二学部となり、文学部は英文学科と社会科学科、経済学部は経済学科と商学科にわかれた。夜間の第二学部も同様にわかれ、入学定員は次の通りとなった。

文学部（一六〇）英文学科 八〇 社会科学 八〇 文学部第二部（一六〇）英文学科 八〇 社会科学 八〇
経済学部（一六〇）経済学科 八〇 商学科 八〇 経済学部第二部（一六〇）経済学科 八〇 商学科 八〇
文学部長事務取扱を村田学長がかね、経済学部部長事務取扱に服部文四郎が就任した。昭和二十九年には本建築による大学図書館が落成、大学としての本格的設備に着手した。

この年、文学部長に文学博士高橋源次、経済学部部長に経済学博士服部文四郎が就任して、二学部としての教授陣容がととのった。

昭和三十一年村田学長が辞任、服部学部長死去後、経済学部長であった斉藤茂夫が学長事務取扱となった。翌年大学本館が落成して大学は旧専門学校校舎から移転し、大学としての偉容を備えた。昭和三十三年学部長であった高橋源次が第二代学長にえらばれ、教授若林竜夫が文学部長となり、経済学部長に教授渡辺実がえらばれた。

斉藤茂夫

昭和三十六年、各部各学科の定員を次のように増加した。

文学部 (二〇〇) 英文学科 一〇〇 社会学科 一〇〇

経済学部 (二〇〇) 経済学科 一二〇 商学科 一二〇

昭和三十七年高橋が学長に再選され、経済学部長に教授阿部勇がえらばれた。昭和三十九年、高橋学長定年退職。同年文学部長若林竜夫が第三代学長に就任し、教授平林武雄が文学部長に、教授経済学博士平出宣道が経済学部長にそれぞれ選任された。若林学長は兵庫県の生まれ、昭和二年東京大学文学部哲学科を卒業。同年明治学院中学部講師に就任、教諭、高等学部講師、十一年高等学部教授、十六年社会事業科主任、十九年専門学校教授、二十四年大学教授となった。大学設立には事務総長として活躍したことは前述の通りである。ついで文学部から社会学科を独立させ一学部とする準備がすめられ、翌四十年社会学部が独立し、三学部となった。

社会学部 (一六〇) 社会学科 八〇 社会福祉学科 八〇

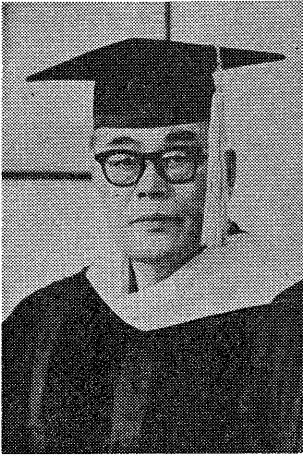
社会学部第二部 社会学科 (八〇)

初代の社会学部長には教授天達忠雄がえらばれた。

同時に文学部にフランス文学科を設置することが認可され、英文学科の定員を一三〇名に増加し、フランス文学科七〇名をはじめ募集した。

翌四十一年には法学部が新設され、次の通り募集した。

法学部 法律学科 二〇〇 同第二部法律学科 八〇



高橋源次

初代法学部長は若林学長が兼務したが、四十二年教授法学博士片山金章が学部長に選ばれた。なお経済学部は四十一年教授金井信一郎が平出に代って学部長に就任し今日におよんでいる。

大学院は昭和三十年三月末認可されて四月から文学研究科英文学専攻修士課程（入学定員十二名）が開設されたのが最初で、以来年を追って各科の修士課程が次のように設置された。

文学研究科社会福祉学専攻修士課程（入学定員十名） 経済学研究科経済学専攻修士課程（入学定員十五名）（昭和三十五年三月二十一日認可、同年四月開設） 文学研究科英文学専攻博士課程（入学定員二名）（昭和三十七年三月二十日認可、同年四月開設）

1967年4月1日学生数一覽

年次 学科	（第一部）						（第二部）						
	63 以上	64	65	66	67	合計	62 以上	63	64	65	66	67	合計
英文学科	26 (10)	286 (239)	376 (304)	355 (269)	334 (245)	1377 (1067)	14 (1)	34 (5)	81 (32)	125 (36)	157 (53)	196 (96)	607 (223)
フランス 文学科			167 (122)	170 (138)	195 (140)	532 (400)	/	/	/	/	/	/	/
経済学科	54 ()	310 (8)	308 (5)	336 (18)	314 (7)	1322 (38)	22 ()	54 ()	176 (2)	180 (2)	175 (1)	202 (7)	809 (12)
商学科	89 ()	296 (12)	307 (12)	324 (22)	312 (16)	1328 (62)	23 ()	42 ()	151 (4)	157 (3)	174 (4)	209 (9)	756 (20)
社会学科	25 (3)	196 (135)	244 (142)	248 (141)	215 (119)	928 (540)	9 ()	21 (4)	102 (4)	176 (58)	163 (6)	225 (116)	696 (285)
社会福祉 学	5 (4)	149 (134)	197 (164)	214 (190)	212 (176)	777 (668)	/	/	/	/	/	/	/
法律学科				580 (68)	523 (46)	1103 (114)					172 (10)	203 (8)	375 (18)
合計	199 (17)	1237 (528)	1599 (749)	2227 (846)	2105 (749)	7367 (2889)	68 (1)	151 (9)	510 (79)	638 (99)	841 (134)	1035 (236)	3243 (558)

() 女子学生数

社会学研究科社会学専攻修士課程（入学定員一〇名）——社会福祉学専攻修士課程（入学定員一〇名）（文学研究科より分離）（昭和四十二年三月二十九日認可、同年四月開設）

以上のような経過で修士課程、博士課程が設置され、総合大学としての形態をととのえるようになった。大学進学率の急激な増加とともに学院大学への応募者も激増し、最近数年間は定員の十倍をこえる競争率となっている。在学生も、昼夜合わせて一万名をこえる数を擁する大学となった。とくに目だつのは、かつての黒一色のつめえり金ボタンが消え、女子学生の明るい姿がふえただけでなく、英文、仏文、社会、社会福祉には女子学生の方が多数を占めるにいたったことである。一方、経済学部と法学部は男子学生が大部分を占めているので全体としては男女学生率は二対一ぐらいである。今年度の各学科別学生数は前ページの通りである。

中学校の変遷と高校の膨張

大川中学校校長時代、村田院長の提唱で行なつた少数理想教育、いわゆるパイロット・プランは思わしくなく中学の志願者はしだいに減少しはじめた。これは中学校が新制度により義務教育となったことにも大きな原因がある。昭和三十二年村田院長が辞職し都留院長となり、中学校の理想教育はしばらく見送り、翌三十三年から募集定員を一二〇名から二〇〇名へともどおりにした。そして大川校長らは懸命に退勢回復にとめたが、三十四年大川は定年退職し、教務主任であった佐藤泰生が校長となった。佐藤校長は東京大学経済学部の出身であるが、本校在任中に米国留学、教育学M・Aの学位をとって帰朝した。佐藤らは近隣の小学校とも緊密に連絡して生徒募集にとめたが、あまりききめは見え

ず、毎年志願者は募集定員すれすれで第二次募集をしなければならぬ年もあり、生徒の質も心配された。これ
は一つには公立中学校の設備および教育内容が充実してきたことと、学院中学を出ても、必ずしも学院高校、さ
らに大学へ自由に進学できない事情もその一因とも考えられる。また学費の面においても公立とは比較にならな
いほど高いので上級学部へ確実な進学が約束されぬとすれば、いきおい費用の安い公立中学を選ぶことになる。
このような事情で佐藤校長らの懸命の努力にもかかわらず中学の不振は思うように回復しなかった。

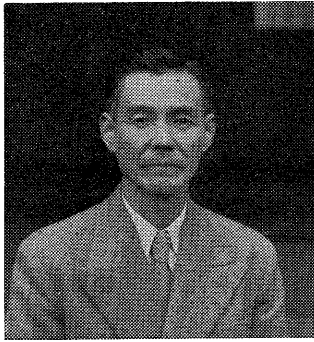
昭和四十年には白金の中学校は校舎を大学にゆずって閉校し、東村山高校と合わせて六年制ハイスクールとし
て開校することにきめ、白金の方は四十年から生徒募集を停止した。武藤院長は東村山高校校長兼務をやめて、佐
藤校長が東村山高校長となり、武藤院長は白金の中学校長を兼務して閉校の善後処理をすることになった。(矢作
教頭は学院本部の総務部長に移った) 記述は前後したが、昭和二十八年から制服が背広に登山帽というモダンな

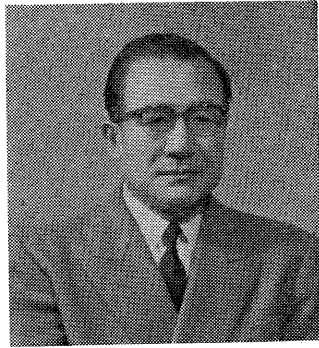
ものにかわった。冬は紺夏は霜降りに赤いネクタイをつけたスマートで可愛
いい姿は、大学女子学生の姿とともに構内を明るくするものであった。

明治時代の普通部、大正時代の中学部としてもっとも多数の生徒を擁し、
学院最大の部として、部長は院長につぐ地位ともみえた白金の中学は来年三
月、最後の卒業生を送り出して廃止されることとなった。

大川 正

かえりみれば明治二十年普通部として発足し、港区、品川区、大田区、目黒
区などの地域の家庭や教会から親しまれてきた白金の明治学院中学部は





日下 一

一部は高等学校としてのこつてはいるが、ここに創立以来八十年の歴史を閉じることとなったのである。

一方高等学校は昭和三十三年、大学が新校舎へ移転したあとの旧専門学校校舎に移り、中学校と完全に分離した。そして、校長にそれまで中学、高校の宗教主任で聖書を担任していた日下一が就任したことは先に述べた。

日下校長は村田の少数理想教育には乗気でなく、かえって膨脹政策をとつた。学院中学校卒業生のほかに外部から半数をとる方針で、生徒募集に力を入れた。学院中学から進学する数をも含めた募集定員を外部に発表したため応募者はかえって増加した。また当時の社会も中学の義務教育以上に子弟を教育しようとの状態にあり、志望者はいちじるしく増加した。大学へ連絡のある高校ということも志望者のふえた原因であろう。高等学校、中学校の生徒数は次の通りとなった。(昭和四十二年四月現在)

高等学校 (白金)

三年 三五七名
二年 三三六名
一年 三五八名
計 一、〇五一 名

中学校 (白金)

三年 一六七名

高等学校 (東村山)

三年 一四九名
二年 一三六名
一年 一六〇名
計 四四五 名

中学校 (東村山)

二年 五四名
一年 六二名
計 一二六 名

昭和三十五年日下は定年で退職して東北学院へ行き、針谷松太郎が校長となった。針谷は明治学院神学部予科から昭和九年日本神学校を卒業、各地で牧会に従事していたが、昭和二十八年明治学院高等学校教諭となり、聖書を担当していた。おりから戦後の「ベビーブーム」の波と、好況による高校進学者の激増で、東京都から補助金をうけて校舎の増築をしなければならぬほど志願者が殺到した。その間には大学の建築がすすみ、従来とくに多くなかった学院高校から学院大学への志願者が次第に増加して行き、中学、高校、大学への一貫教育のコースが確立してきた。その後、昭和三十九年には、宣教師館を取りこわし、あるいは移築して、そのあとに鉄筋五階建の新校舎一むねが落成し、近代的設備をもつようになり、高校教職員生徒に明るい気分を与えた。昭和四十二年針谷校長は定年退職して伝道界に復帰し、教諭原田昂が校長事務取扱となった。

武藤院長の拡張政策

昭和三十七年都留院長が辞任するころは、学院財政が危機にあることを財務理事はしばしば警告していた。財政立直しのために学債を募集することになり、教職員、学生生徒からも応募を勧奨した。しかし、昭和三十七年六月、武藤院長は就任早々、「学院の財政状態を検討したところ、学院の潜在財力は豊富である、資本償却能力もある、将来の見通しは明るい」と明言して積極政策を打ち出した。全学生生徒の数を一万名にする方針で、これらの学生生徒を收容する設備の拡充を推進した。昭和三十八年このかた建設された建物、買収した土地は枚挙にいとまないほどである。一年に二度位ずつ落成式が行なわれるスピード建設ぶりであった。なかでも昭和四十一年に完成した地上十一階地下二階の本部と大学研究室とを

いれるへボン・ホールは東京タワーと相対して学院の存在を東京都民に示す一大偉観となった。

平和回復、所得増加などにもなつて子弟を中学の義務教育だけで終らせたくない家庭が多くなり、高校、大学への進学者は年ごとに増加してきたことも、この計画が時宜に適したこととなり、これだけの設備をもつても狭少をつける盛況となつたが、一面ではマスプロ化の非難もある。しかし、立教、青山などのキリスト教主義学校に立ちおかれていた観があつた、わが明治学院は、数年前に比して面目を一変して近代的学園としての施設を備えることとなつた。ただ一つのこつた設備は体育館であるが、これも中学校舎裏にすでに着工されており、近く工費一億二千三百二十万円の近代的体育館が完成する。

武藤院長の教育および宗教方策

拡張政策、設備投資に急であつた学院は一面、学生生徒数の急激な増加にもなつて教育内容、宗教教育の徹底にかけらうらみがあつた。また、学院には大、高、中の三校があるが教育の一貫性にかけてはところがあつた。新院長の構想により東村山に新たに高等学校を開設して、学院中学から白金高校へ進学しない生徒を全員収容し、英会話などは十二、三名の小クラスにわけて外人教師により、あるいは夏期合宿などによって訓練するなど新しい方法を取り、院長も教壇に立つて英語教育の意欲的な改革を計つた。

さきに院長は就任式において、教育方針を次の三点、

- 一、道徳人を養成すること
- 一、実力人を養成すること

一、世界人を養成すること

におくことを表明し、建学の精神を堅持しつつ、しかも新らしく進展して行く現代および将来の世界に適應し、それを指導して行く人物の養成を目ざしている。こうした考えはひとり理事長や院長の方針であるばかりでなく、大学には「宗教活動委員会」が組織され、キリスト教学の教授たちを中心に、学院の宗教活動がすすめられており、キリスト教学生会も数年前から学生間に信仰復興運動を起こし、各種の計画をたてて学院を学院らしい宗教的ふん囲気の満ちあふれた学園にしようとしている。白金高校はもよりの教会と連絡をとり、生徒の教会出席に力を入れている。一方、院長はまず学院に勤務する教職員の精神的覚醒のため毎週聖書講話を担当するほか、教職員の修養会を再開して聖書に基づく人生観の徹底をはかっている。道路拡張のため移動した旧神学部図書館であった現記念館を学院史料展示の場とするとともに宗教センターともし、また日本プロテスタント記念館としよりの計画もある。

これらの宗教活動の資金としては、ミッションよりの援助金年額四百万円〜五百万円を用いることにし、この米国教会の信者たちの献金は経常費として用いず、すべて宗教活動に用いることにした。

学院の中心的建物はなんといってもチャペルであるが、このチャペルはセベレンス父子の好意によって建てられたものであるが、その後、田川院長時代に両袖を拡張した。風姿は重厚莊重で申し分ないが、暖房装置の貧弱なことが唯一の欠点であった。武藤院長着任の昭和三十七年夏、改修に着手し、その冬からスチーム暖房の温かいチャペルとなり、冬期の礼拝出席者もふえた。昭和四十一年にはかねてから念願であったパイプ二千本におよ

ぶ大オルガンを備えて学院の中心的建物である礼拝堂を飛躍的に改善することができたが、これらの費用にはすべてミッシヨンよりの援助金をあてた。

年金制度の復活

人事の交代と永年勤続者老後の生活の安定のため、昭和二十二年矢野院長のとき廃止された恩給（年金）制度が復活したのもこのころである。年金規定の第一章は次の通り。

学校法人 明治学院年金規定（昭和三十九年一月廿日理事会決定）

第一章 総 則

（目的）

第一条 学校法人明治学院は年金制を設け、専任教職員及傭員（以下専任者という）並びにその遺族に対して年金を支給する。

（年金の種類）

第二条 年金は分かつて退職年金、退職一時金、遺族年金、遺族一時金とする。

一、退職年金

専任者として十七年以上勤務し退職した者が六十才に達した時は、その死亡に至るまで退職年金を支給する。

六十才を超えて在職する者が六十才に達する時まで勤務期間十七年以上となった場合は、退職の時からその死亡に至るまで退職年金を支給する。

二、退職一時金

専任者として三年以上十七年未満の期間勤務した者が退職した時は、退職一時金を支給する。

三、遺族年金

退職年金受給者が死亡した時及び専任者で退職年金受給資格をもっている者が死亡した時は、その遺族に遺族年金を支給する。

四、遺族一時金

専任者として三年以上勤務している者が勤続期間十七年に満つる前に死亡した時は、その遺族に遺族一時金を支給する。(後略)

その後のセベレンス館

明治の末期セベレンスの寄付によって学院構内の窪地に建てられていた神学部寄宿舎セベレンス館は、その後、大正八年白金三光町三四五番地へ移転するまでの十一

年間、日本の教化に貢献した多くの人物をはぐくんだ。中山昌樹、加藤一夫、村田四郎、吉田源治郎、桑田秀延、音楽家の木岡英三郎、鳥居忠五郎などもこの建物に起居したのであった。

当時の状況について中山昌樹は次のように書いている。

「日本神学校教授村田四郎君とは寄宿舎(セベレンス館)で同室であったが、たまたま同君が持っていたロングフェロ英訳神曲を借りて読んだのが、そもそも自分をしてダンテ研究に病みつかしめた原因であったのである。毎日の課業のことに就ては語る余白はないが、時々催された講演会から受けた印象に永く残っているものがある。その頃はまだ島崎藤村氏も時折来られて講演をし、座談をされた山路愛山、上田敏などという人の姿が今でも脳裏に刻まれている。それから宗教方面のことを云へば、なかなか積極的で、高張提灯をつくり、これを押し立てて毎週土曜日の晩などに麻布十番まで出掛けて路傍説教をかなり長く続けてやった。要するにその頃の学院は、この産出したものの価値如何は別問題として、確かに燃のある熔解炉であった。学生自身でもって作りあげるといった熔解炉であった。」(明治学院高商時報「第三号」)

しかし、この敷地はあまり健康地でなかったため舎監瀬川四郎教授は肺結核にかかり、在舎生の健康診断の結果もよくなかったため、大正七年この敷地四百坪を隣接の久原房之助氏に譲渡して、白金三光町に移転したことはすでに述べた。学院内の窪地にあったときは凹字形であったが、これをL字形に改築し、別に五千四百円を投じて階上食堂、階下賄部屋の一むねを建て、大正八年四月神学部の本科、予科の学生を収容した。移築後の面積は本館階下九十三坪、階上七十九坪、別館階上階下各二十八坪となった。

大正十三年、神学部が淀橋角筈の東京女子大跡の校舎に移ってからは、セベレンス館は高等学部専用の寄宿舎となり、文科と商科の両部の地方出身の学生約四十名がここで生活をともにした。

構内の一角には大正十年、築地基金によって建てられた木造二階建の井深名譽総理の邸宅があり、井深は隠退後の余生を朝夕学生を見まもりつつ、昭和十五年六月この邸で死去した。戦時中は中山高等学部長の住宅となり中山はここで病をえて、大戦の末期、昭和十九年四月二日国立の病院で死去した。そのころは寄宿舎もセベレンスという英語名称をはばかって、井深の雅号「湧泉」をとって「湧泉寮」と改められていた。

これよりさき矢野院長は恩給制度が将来、過重の財政的負担となることを恐れて、これを打ち切りとする意図をもって、その資金調達のためとセベレンス館がすでに古くなって修繕費がかかるためこれを処分することになり、牟田鑄工所に土地建物および付属住宅とも十九万三千元で譲渡した。

戦後になって昭和二十四年にミッションからの住宅援助金をもって買ひもどしの交渉したが、工員四十世帯の立ちのきが不可能であったため断念し、港区赤坂表町に職員寮を買うことになった。しかし、その後、先方よ

りの申し出により、まずセベレンス館構内にあった由緒ある住宅と敷地七十一坪を、昭和二十六年の春七十万円で買いもどし、ついで昭和二十八年、旧セベレンス館とその敷地八百四十五坪を六百七十万円で買いもどすことができた。実に閉鎖後九年をへてセベレンス館はふたたび学院のものとなった。工員四十世帯のアパートとなっていたためかなり荒れていたが、修理して大学女子学生の寮を開設した。

その後、昭和三十七年（一九六二年）学院は、この静かな住宅地域にある千坪近い敷地を、わずか三、四十名の学生と二、三の職員のために使用することの不経済と寮舎の老朽に目をつけ、これを売って郊外に女子寮を建設することを計画した。



昭和三十八年七月、これを次の通りに処分して大田区雪ケ谷に替地し女子寮を建設した。

所在 芝白金三光町三四五番地 面積 九一六・三六坪

売却価格 一億五千万円 買主 第一生命住宅会社

所在 大田区雪ケ谷一、〇〇六番地 面積二五七・九七坪

買受価格 二千七百三十四万四千八百二十円

売主 日本テレビ技術専門学校

女子寮 **セベレンス館**
寮舎はプレハブの仮建築であったため昭和三十九年十一月、目黒区碑文谷に土地を求めて本建築をし、プレハブは東村山高校へ移転

した。

所在 目黒区碑文谷四丁目二二ノ三号 土地 三〇六・七坪 価格 三千八百五十万円 建物

鉄筋コンクリート地下一階付四階建 面積 合計一、三七九、四六平方米 工費 金七千五十万円

昭和四十年二月に着工して同年十月に完成し、約八十名の女子学生を収容できる施設となった。最初の寄付者セベレンス氏を記念して、いままもセベレンス館と称している。

建設拡張計画の躍進

学院の総合建築計画は戦前、田川院長時代にも計画されたが米国経済界の不況のため夢に終り、昭和十三年支那事変さなかに計画された建築計画も、時局の急迫のため予定を変更して木造校舎三むねを建てただけで終った。昭和二十九年、村田院長の時代に海軍墓地の買収とともに総合本建築計画がたてられ、学院の建築計画がすすめられたが、とくに武藤院長が着任してから一万名の学生生徒収容を目標に、短時日にめざましい建築計画がすすめられ土地の拡張が計られた。(次ページ表参照) 従来、総合建築計画の際は同窓生、父兄、教職員などから募金するのが例であったが、今回は記念館の移築に同窓生の寄付を求めたほか、いっさい寄付募集をしていない。もともとこれらの資金の中には先祖の遺産とも称すべき、三光町のセベレンス館の土地売却代金一億五千万円、五反田線道路拡張のための土地譲渡代金および建物移転補償金二億五千七百万円がふくまれている。なお武藤院長になってからの、この一連の建築計画はすべて株式会社竹中工務店の設計、施工によるもので、ポン・ホールをはじめとする近代的な設計は明治中期の記念館、大

最近における校舎など建築状況

名 称	構 造	延 面 積	価 格	竣 工 年 月	院 長
大学図書館	鉄筋コンクリート 二階	1542.74m ² (466.65坪)	38,152,949	昭 30. 1	村田
大学本館	" 五階	5753.39" (1740.29坪)	226,799,830	" 32. 1	"
大学 グリーンホール	" 四階	1809.90" (547.46坪)	76,048,939	" 32. 5	"
中学校々舎	" 四階	4271.28" (1291.98坪)	112,569,414	" 34. 5	都留
大学二号館	" 三階	2136.14" (646.14坪)	112,097,610	" 38. 4	武藤
大学講堂 100番教室	" 平屋建	420.72" (127.26坪)		"	"
高校新校舎	" 五階	4144.36" (1253.59坪)	165,450,000	" 39. 8	"
東村山高校々舎	" 三階	1610.28" (487.08坪)	71,777,780	" 38.10	"
" 寄 宿 舎	木造モルタル二階	901.18" (272.59坪)	22,758,220	" 38. 4	"
" 講 堂	鉄筋コンクリート 二階	1134.02" (343.02坪)	51,867,527	" 40. 8	"
中学校講堂	" 四階	3266.07" (979.82坪)	58,340,000	" 40. 3	"
東村山中学 管理棟	" 二階	1244.16" (376.36坪)	74,490,000	" 41. 4	"
" 校 舎	"	1218.44" (359.59坪)	49,000,000	" 42. 3	"
大学女子寮 (セベレンス館)	" 三階	1481.46" (418.00坪)	70,500,000	" 40.10	"
学院食堂	" 一階	302.48" (91.66坪)	18,500,000	" 40.11	"
中学校山の家	木造二階建	369.61" (112.00坪)	8,193,540	" 40. 7	"

ライシャワ館 (移転改築)	木造二階建	456.85m ² (138.19坪)	14,161,025	昭40.4	武藤
大学教室棟 (6号館)	地下一階地上一階 鉄筋コンクリート 造	4086.29" (1238.26")	623,480,000	" 41.8	"
	本部, 大学研究 室棟	鉄筋コンクリート 地下二階, 地上十 階			
へボンホール					
東村山高校北寮	木造平家建	208.26" (63.11")	6,074,000	" 38.11	"
記念館復元	煉瓦造		35,000,000	" 41.3	"
チャペル改造			3,571,110	" 40.8	"
" パイプオルガン			11,837,944	" 41.2	"

(本部管財課42.4.20調査)

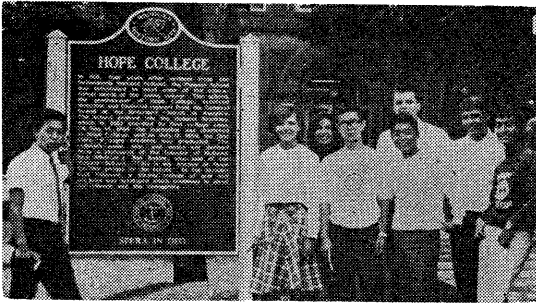
最近における土地の拡張状況

所在地	地積	取得価格	取得年月日	院長
東村山市富士見町	71,516,331m ² (28,221.32坪)	169,629,060円	昭31.12.1	都留
大田区雪ヶ谷町1006	852,848" (257.97")	27,381,620"	" 38.7.5	武藤
港区芝白金二本榎本町27	4,841,569" (1,454.48")	283,418,792"	" 39.12.2	"
港区芝白金台町1	2,349,607" (710.71")	142,849,760"	" 40.4.16	"
港区芝白金今里町35	33,825,669" (1,023.16")	216,588,402"	" 40.8.10	"
港区芝白金今里町94	241,404" (73.02")	11,962,000"	" 38.7.23 " 39.8.6	"
目黒区碑文谷4	1,013,950" (306.70")	39,417,330"	" 39.11.28	"
東村山市秋津町3	63,500,457" (19,207.64")	250,240,805"	" 39.12.3	"
長野県北佐久郡立科町	13,224,322" (4,000.00")	借地39年より20 年間蓼科財産組 合より	" 39.9.12	"

(本部管財課42.4.20調査)

正初期のチャペルなどの古い典雅な建物と調和して、長い伝統を保持しつつ新しい時代へ向かう学院の姿勢を象徴するかのようである。

日米教授学生交流計画



ホープカレッジと留学生

学院の姉妹校関係にある米国のプレスビテリアン、リフォームド両ミッション系の大学と教授学生の交流計画を行ない、学術文化交流をはかるとともに両国間の親善を増す計画が三十九年から具体的になった。学校から費用を補助し、航空会社との契約による団体割引で学生の負担を軽くして、まず学生の交流を計ることとなった。

一九六四年（昭和三十九年）夏、若林学長は渡米してミッション・ボードやプレスビテリアン、リフォームド両教会系の大学と交流計画につき相談した。その結果、ミシガン州ホランドにあるリフォームド系のホープ・カレッジと提携が成立した。これには同大学出身で本学院大学のG・J・ヴァン・ワイク教授の熱心な努力があった。ただちに昭和四十年より実施されることになり、まず第一段階として学院の学生を夏期二か月間アメリカに派遣して、両大学の交流を計ることとなった。

一九六五年（昭和四十年）度の第一回には学生二十三名、学院高校教員二名、

本部職員一名、赤川裕助教授を引率者として合計二十六名、一九六六年（昭和四十一年）度は学生二十五名、ヴァン・ワイク教授を引率者として学院高校、中学校教員から各一名、大学職員一名合計二十九名が派遣された。本年（一九六七年）には第三回の留学生二十五名を派遣することになっている。新倉俊一助教授を引率者とし大職員一名が同行することになっている。この短期留学生の資格および経費は大学要覧によれば次のように規定されている。『留学生選考試験は、本学教授学生交流計画委員会によって、毎年二月に実施されるが、本学大学院、第一部、第二部の在学生であれば、だれでも受験することができる。留學試験合格者には、試験成績により、留學費用（一九六六年、一九六七年度は三十八万円）の全額または半額に相当する本学の特別奨学金が支給される。また合格者は全員、文学部英文学科の新設講座「アメリカ研究」(四単位、G・J・ヴァン・ワイク教授担当)を必修としなければならない。』

来年度（一九六八年）にはホープ・カレッジの学生を日本に招き、日本研究の夏期学期を実施することになっている。これによって本格的交流がなされるわけである。教授の方はまだ一方的で交流にまでいたっていないが、相互に講壇を交換する日も近いであろう。またホープ・カレッジのみならず、プレスビテリアンおよびリフォームド関係の大学教校との交流も行なわれるようになるであろう。

大パイプオルガンの設置

一九六六年（昭和四十一年）二月十九日、学院チャペルに画期的快挙がみられた。それは創立以来はじめてパイプオルガンが設置され、記念すべき奉獻式が

行なわれたことである。

古い卒業生の記憶しているように、大正三年には、A・K・ライシャワーの斡旋で米国メーソン・アンド・ハムリン会社の二段鍵盤ペダル付（61—61—30鍵）ハルモニウムが備えつけられた。傭員が汗だくで大型のふいごに空気を送りこみ、それをハナフォード、木岡英三郎、由布保、黒沢英二、安部正義の諸氏がひいていた。サンダム館が焼けたとき、このオルガンは当時学生だった鷺山弟三郎ら数人の決死的奮闘で階上から引きずりおろして猛火から救ったといういわれのある銘器である。昭和三十二年、富田理事長はこれを東中野の基督教音楽学校に貸与したが、今度、十一年目に返却されることになった。

その後はヤマハのちいさなオルガンか、エレクトーンを使用していたが、日本の教会音楽の将来を考え、昭和二十八年ごろから斉藤茂夫、ヴァン・ワイク、園部不二夫らの主唱により電気オルガンか、ほんもののパイプオルガンを入れたいという気運が生じてきた。これらの諸氏はうまずたゆまず熱心に運動し、三十一年委員会結成、幾変遷ののち、ついに十三年後、ヴァルカー（Walker）・パイプオルガン設置にまでこぎつけたのである。この間、何社かの電気オルガンの研究を行なったり、その払下げ方を交渉してみたり、電気とパイプの比較研究を行なったり、その購入費をどうするかについて、どれほど苦労したか知れなかった。

予算も最初の一万ドルから二万八千ドルまで、武藤院長の英断で拡大化され、理事会の承認をえた。ヴァン・ワイク委員を通じてリフオームド、プレスビテリアン両ミッションの好意をうけることになった。

昭和三十八年、世界の最著名のオルガン会社十数社に照会状を発送、結局、学院チャペルに適当なオルガンは

米国製では四、五万ドル、欧州製では二万八千ドルするというのがわかった。同年十二月、西独のヴァルカー社の社長が来校し武藤院長と会見、正式に同社に依頼することに決した。

オルガンは昭和三十九年四月製作に着手、翌年九月に発送、十一月十五日学院に到着した。翌四十一年二月辻宏氏らによって組立が完了した。この間ヴァン・ワイク、園部順夫らは西独のヴァルカー社を三度訪問、種々の打合わせを行なった。学院においても二回にわたりステージの大改造を行ない、受入れ態勢をととのえた。同社との間には数十回の往復文書がかわされた。

組立費以外の全額費用二五、五六二ドルは、米国プレスビテリアン、リフォームド両ミッションの好意によつたことは感謝にたえない。

オルガン委員会委員は——都留仙次、高野蕉筵、豊原英三、鍛冶田泉、野島進、ヴァン・ワイク(書記)、斉藤茂夫(委員長)、秋元徹、園部不二夫(書記)、高井貞橋、大井上滋、国枝誠也、佐藤汎の十三氏、のち武藤富男、津田一路、矢作弥寿久、広野嗣雄の四氏が加わった。

奉献式は武藤院長の奉献の辞にはじまりA・E・マッシュューズ、ヴァン・ワイク、藤田昌直三氏の祝辞、北村理事長の挨拶、新任のオルガニスト園部順夫による「前奏曲とフーガ ハ短調」(パツハ曲)、「明治学院校歌の主題による前奏曲とフーガ」(池宮英才曲)、「B—A—C—Hにおける幻想曲とフーガ」(リスト曲)の演奏、池宮英才指揮による大学グリーククラブの合唱「神よ栄光なんじにあれ」(パツハ曲)「我らに平安を与え給え」(同)「小羊こそふさわしけれ、アーメン」(ヘンデル曲)が、満堂の聴衆に感銘を与えた。翌日の奉献演奏会も同様なプロ

グラムであり、片山哲元首相も列席、感涙にむせんでいた。このオルガンが備えつけられてから、大学の毎日の礼拝出席者は年間を通じて二、三倍に増加した。週日の礼拝、静思の時間の演奏、春秋の宗教音楽会、卒業式、入学式の演奏以外に一九六六年(昭和四十一年)九月四日には「シュヴァイツァー博士追悼記念音楽会」を開催、同十二月二十五日夜「クリスマス・キャンドル・サービス」はフジテレビ系でテレビ放送された。安部正義氏の四十年の大作オラトリオ「ヨブ」の本邦初演も行なわれた。

さらに本年の大学卒業生は電子装置による「チャイム」黒田トーンを寄贈、オルガンと同時演奏も可能となった。

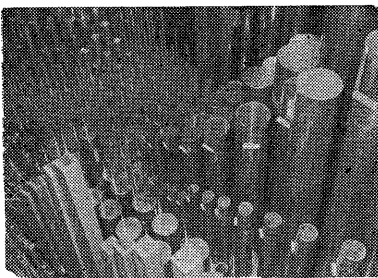
明治学院チャペル・パイプオルガン

- 西独ルドヴィヒスブルグ市、ヴァルカー・オルガン会社作品番号四七五七
- 第一手鍵盤六一鍵 第二手鍵盤六一鍵 ペダル三二鍵
- 実動音栓二五 補助音栓六 総数三一
- スウェル・ボックス付(第二手鍵盤用)
- パイプ四〇列 二一三一本
- スライダー・チェスト、トラッカー鍵盤、電気空気式ストップ

同窓会の移りかわり

私立学校において同窓会になら役割りは物心ともに大きい。学院同窓会は、明治三十六年学院当局によって組

織された。井深総理を会長、熊野幹事を副会長とし、宮地教師が事務を担当して発



大パイプオルガンのパイプ

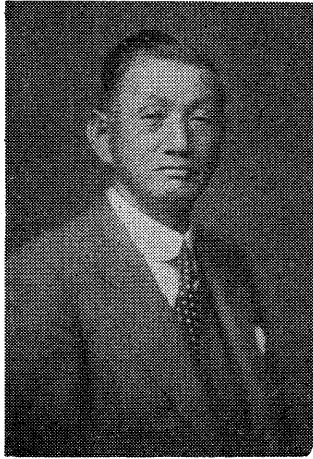
足した。これは学友会と卒業生が一体となったもので、会員は在学生と卒業生とであった。運動部長、文芸部長などがあり、その下に野球課長、雑誌課長などのある面白い組織で学校の先生が責任者であった。

宮地謙吉によって明治三十六年十二月より同窓会報「白金学報」が発行されたが、記事内容は学院の記事、卒業生や在学生の論文、消息、運動部の動静などで写真ものだった。卒業生に送られ、学院と同窓生をつなぐ唯一のきづなであったので、同窓生が「白金学報」を愛読したことは非常なものだった。

そのうち大正七年、学友会と同窓会は別個の団体となり、同窓生は卒業者だけの会を組織した。しかし会長は依然、井深総理で副会長は熊野雄七であったから学校とは表裏一体であった。

大正末期に井深が隠退してから、一色虎児が幹事長の名称で中心となり、のち会長となり十九年間その職にあつて同窓会の発展のため進んで多大の尽力をした。当時、同窓会から発行していた「明治学院時報」の資金はす

べて一色のポケットから出していた。



一色虎児

昭和三年高等商業部が開設されてから、石橋部長は商科の出身者だけで別に高等商業部同窓会を組織し、みずから会長となり、在学中から終身会費を積立てさせて会費前納制をとり、「高商時報」に同窓会面を割当て、これを配布して財政面にも連絡面にもきわめて組織的な発展を計り、神学部、高等学部、中学部の卒業生をもって組織していた従来の学院同窓会は高商部同窓会におさ

れるようになった。学院同窓会は会費徴収がふるわず、万事、高商部同窓会よりも不活発で沈滞し、若い会員をもつて組織する高商部同窓会とことごとくに対抗するようになった。そして昭和のはじめからは同窓会選出財団法人理事三名のうち、一名は高商部同窓会が占めることとなり、高商同窓会は学院の経営にも参画するようになった。このような分派的行動は学院の発展にも有害であるとして理事会でも問題となり、これが合同を計ることとなったが、高商部同窓会が容易に同意せず、約三年間はこの問題で同窓会にいいざこざがたえなかった。ついに合同をあきらめて各部に同窓会をつくり、その連合体を組織しようということにさえたが、中学、高商の両方に関係があり、石橋部長の信任厚く会員間にも声望の高い伊藤毅の無私の奔走と、一色会長の寛容と忍耐により昭和十二年ようやく合同にこぎつけた。その間、伊藤は高商部同窓会の持参金と同額の二万余円の基金獲得など、合同の条件をつくるのに苦労した。これには前記二氏の功績とともに校歌碑建設運動が両同窓会を結びつける見えない融和の役割を果たしたことも、一因であった。戦時中は集会の人数を制限されたため總會が開かれず、役員会のみで会を運営していた。

一色は太平洋戦争中病気のため辞任し、後任には代議士川崎巳之太郎が就任し二期つとめ、ついで都留仙次がえらばれ二期会長の職にあった。ついで実業家堀洋三が一期、堀の死去後、現在の井上武右衛門が会長となり今日まで六期におよんでいる。昭和五年には神学部が終り、昭和八年には東山学院同窓会が加わった。現在の会員数は別掲の通りで、東京都内に五、地方に五二、韓国、台湾にそれぞれ一、合計五九の支部をもつ全国的な組織となった。

明治学院同窓会出身校部別表

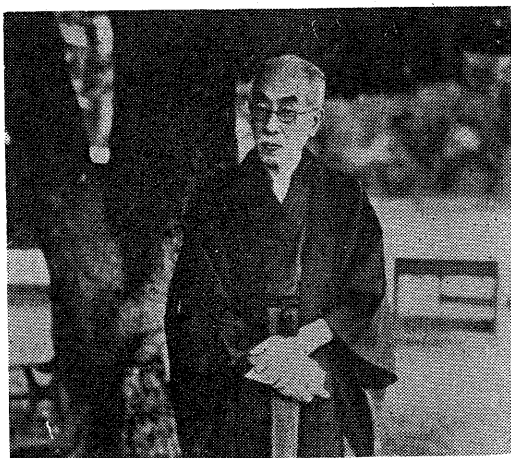
校 部 名	人 数	校 部 名	人 数
神 学 部	七〇	大 学 (經)	三〇〇三
高 等 学 部	五六六	" (商)	二二二七
高 等 商 業 部	二〇六一	" (社)	一五一一
" 第 二 部	二八九	" (福)	一一二六
專 門 学 校	二五二〇	大 学 二 部 (英)	七〇五
" 第 二 部	九三三	" (經)	八九八
中 学 部	四三六二	" (商)	六二九
中 学 校	四四一三	" (社)	四九一
高 等 学 校	五三四〇	東 山 学 院	一〇二七
東 村 山 高 校	二九三		
大 学 (英)	二八〇四	合 計	三四一七〇

校歌について

学院の代表的校歌として、学生や同窓生に愛唱されている「人の世の若き生命いっせいのちの」ではじまる校歌について、作者島崎藤村は、その著「春を待ちつつ」の中の「古い学窓のこと」(初出は「白金の丘」第五十四号。大正十四年一月発行)と題する文中で次のように書いている。

「久しいこと古い学窓も訪ねない。

白金の丘に根ぶかく



記念樹の下に立つ島崎藤村

記念樹のたてるをみよや

緑葉は香ひあふれて

青年の思ひを伝ふ

あの校歌を頼まれて作ったのは、今から十二、三年の前にあたる。あの歌が作曲家の方へ廻って、新たに譜が出来た時、たしか井深先生からの手紙で、みんないっしょに学校の講堂に集まって歌ってみるから私にも聞きに来いとのことであった。何かの用事の都合でそれも果せなかった。あれ以来、学生諸君によって歌はれるところを私はまだ一度も聞いてみる機会がなかった。フランスの旅にあるころ、パリの客舎の方で思いがけない人にめぐりあった。同じ明治学院を出た人だ。もっとも、私などとはずっと時代もちがひ、年齢もちがって居たが、同じ学窓の記憶につながれて居ることは似て居た。遠い異郷の空にあつては自分の国の言葉を出して思ふさま語り合ふというだけでもなつかしい。その人は私の顔を見ると白金の方のことでも思ひ出したというふうで、校歌の一節を口ずさんだ。その時、実は私はあの校歌を頼まれて作るには作つたが、あれに合はした曲をまだしみじみ聞いたことがないと話した。それなら自分が歌って聞かせるとその人が言ってくれた。あの時に聞いた校歌も古い学窓の方へ私の心を誘つた。」

この校歌がはじめて歌われたのは、明治四十年ごろである。当時、神学部カミガクの学生であつた村田四郎博士は次のように語つた。

『校歌の発表会はサンダム館の講堂で行なわれた。この講堂では毎週金曜日の夕、文学会が催され、学生の演説や名士の講演が行なわれていた。上田敏、島崎藤村、巖谷小波などの講演があつたのをおぼえている。あるとき、われわれが集まって、この新作の校歌を歌っているところへ賀川豊彦がやって来て、そばにあつた石の上に立ち上り、「この校歌には神のことが一言もない」といつて非難した。なかなか鋭いことをいうな、と思つたが、後にある人が、このことを植村（正久）先生に話したら、先生は「聖書にだつて神のことが一言もない書がある」といわれたそうだ。藤村がフランスにいたときに、この校歌を歌

つてきかせた「学院を出た人」というのは郷司榎爾君だ。このことは郷司君から直接聞いたから間違いはない』と。

この校歌の無宗教性については、評論家の堀秀彦氏も次のように書いている。

「私の大好きな校歌をよみ直し、うたい直しているうちに私は妙なことに気がついた。この校歌のどこにもキリスト教がひびいていないということだ。」(同窓会報第十六号)

しかし、この宗教的に無色な校歌は大いに歌われ、しかもその指導者が宣教師や神学生であったことは、どうしたことであろう。西村博氏は、その回想録のなかに次のように記している。

『われわれ学生は大いに張り切って校歌のけいこを開始しました。練習にはマクネア先生と、先輩郷司榎爾君のご指導で毎日放課後行ったものです。両先生のご指導は懇切丁寧をきわめたるはもちろんのことでした。例えば歌詞の中に「おのがじし道を開かむ」というところがありますが、マクネア先生はローマ字で「開かMム」ですから唇を窄めるのは当然なのですが、それでは歌が沈んでしまうという理由で郷司先輩は「開かアーン」と唄わねばならんと此点をさかんに強調された熱の入れ方には、今でも校歌を唄う度に必ず当時のことを思い出します。』

また、当時普通部に在学していた幼年党の松井力氏は、たまたま入学当時にこの校歌ができたので、毎日毎日のこの歌の練習をさせられたが、指導者はワイコフ先生であったといっている。

この校歌の発表については、平林武雄教授は次のように記している。

「人の世の若き生命のあさぼらけ」という校歌を島崎藤村が作ったのは、明治四十年のことであった。その年の三月二日、東京神田の基督教青年会館で、井深総理およびワイコフ、イムプリー、バラ三教授の勤続二十五年度の祝賀の会が催された。そして会のおわりに、この校歌がはじめて歌われた。藤村がこの会に出席したということは誰もいえないから、恐らく彼はその時、

隅田川畔、浅草新片町の家で、東京朝日新聞に連載するために『春』という青春の記録を書き綴っていたにちがいない。」(明治学院大学英文学会誌第七号)

いずれにしても作者藤村が、この校歌の発表会に出ていなかったことは確かだ。

この校歌の作曲者である前田久八という人物については、卒業生でないためか知られるところがほとんどなかった。たまたま終戦後、台湾から引揚げ、のち総主事となった高野徹(蕉延)氏の中学時代の恩師であったので、はじめて作曲者の経歴と人物が明らかにされた。明治学院同窓会報第十一号にのった高野氏の一文によって作曲者の面影をしのぶことができる。

「前田久八先生は、明治七年十月二十日、神田松富町に生れ、明治二十三年湯島高等小学校を卒業後、同年九月上野の東京音楽学校専修科に入学、二十八年同校卒業、若さと才能の故をもって、当時の楽壇に大活躍をされた。その後、明治三十四年授業補助となり、大正十一年九月に退職されている。



前田久八

助教時代は博文館から「洋楽手引」というA五判二百八十六頁にわたる洋楽鑑賞上必要な事項を平易通俗に認めた著書を出しておられる。(注・学院大学図書館蔵)

武蔵野音楽大学教授田辺尚雄先生の話によれば、明治三十六年十二月YMC Aで開かれた音楽会、同三十八年、明治音楽会主催の音楽会、同四十年、楽友倶楽部主催の音楽会など、その当時開かれた数多くの音楽会に前田先生のピアニストとしての名が見られないことはなかったということである。

前田先生は音楽を一部特殊の人のものでなく、誰にでも親しめるものとし

て、その普及に努力された。筆者が先生のご指導を受けたのは、京北中学校在学中の二年間で、唱歌を教えていただいた。中肉中背で、およそ西洋音楽とは縁遠い和服姿でオルガンに向つて端座していた先生を、はつきり思い泛べることができる。顔は面長で浅黒く、いつも口髭をきれいに刻んでいた。非常に礼儀正しく几帳面でどんな小さい無作法も見逃さずに叱つたものであるが、また、一面辛抱強く腕白共をよく躰け、心から可愛がった。しかし、唱歌の時間は楽しかった。(中略) 私が前田先生を懐しむのは、先生が母校の校歌の作曲者であることに深い縁を感じるからでもあるが、仮りに、私が明治学院に入らなかつたとしても、前田先生は立派な先生として、強く印象に残つたことであろう。昭和十八年十一月三十日に名古屋で亡くなつてゐる。六十九才であつた。」

以上の高野氏の文によつて作曲者の経歴や面影が明らかにされたが、ただ、この卒業生でもない音楽家にどうして校歌の作曲を依頼したかの事情が明らかでない。しかし、さいわいにもこの曲がまれに見るすぐれたものであることは、専門家もひとしく認めるところであり、学生生徒もこれを愛唱して、深く印象に残るものであることは、次の二人の同窓生の言葉によつても明らかである。

郷司浩平氏は明治学院在学時代の回想記の中で、次のようにこの校歌を絶讃している。

『想い出はたくさんあるが、それは省いて、ここで私が書きたいのは、学院の校歌である。「人の世の若き生命のあさばらけ」藤村の作詩だから、いいにきまつているが、私は、この校歌は藤村の詩の中でも、小詰の詩に匹敵する大傑作だと思ふ。のみならず、全国の校歌の中でも、もつとも優れたものだと思う。昔の中学校の校歌などは、どれもこれも判で押したような説教的なもので、若者の琴線にふれるようなものはなく、旧制高校の寮歌なども、人口には噲しやされてはいたが、内容は空疎で、徒らにエリート意識をひけらかせたものが多い。詩としてはおおむね駄作だ。そこへ行くと、わが藤村の詩は、ぐつと芸術性が高い。少年の私は、この校歌を口ずさむごとに、いわゆる立身出世主義をこえた高い精神を鼓舞されたものだ。』嘗あらば

新しい学生窓のこと

島崎藤村

又しいこと新しい学生窓も訪ねない。

白金の丘を根ぶかく

記念樹のまてるをみまよ

緑葉もさみみあられ

青年の思ひを待た

あの校歌を頼まれて作りよのす、今から十二
三年の前よりある。あの歌が作曲者の方へ迎
つて、^①新しき詩が出来た時、たしか井深先生
がその手紙で、みんな一筆もわたしの詩主は集
まつて歌つて見るかうねも新ささ末いと
ことであつた。何かの用事のかうとえれも果
せあがつと。あれ以来、学生諸君によつて歌
をれるところをねてると一度も聴いて見る校
歌かぶ^②かつた。

島崎藤村の原稿

霄をきわめむ 壤あらば堤にも活きむ^①

アルゼンチン大使としてブエノスアイレスに在任中であつた津田正夫氏は、筆者あてに次のような手紙を寄せたことがあつた。

『校歌のフィルムレコードができた由、留守宅からせひとりよせましよう。あれはいい校歌です。かつて私がジュネーブに在勤中、各国の人々との会食の席上、各自出身校の校歌を歌うことになつたので、私は一高の「ああ玉杯に」の代りに「人の世の」を歌いましたところ、こんないい歌はめずらしいと大喝采を博しました』

ところが、はからずもこの校歌の著作権に関する問題が、作者没後二十年にあたる昭和三十八年になつておこつてきた。それは、日本音楽著作権協会から島崎夫人に對して明治学院校歌の著作権の所屬についての調査がされたことからであつた。そこで、学院では、関係者に問合わせたり種々調査したが、著作権所有の証拠となるものはなかつた。しかし、いまさらこのような問題で島崎家

と詮議立てすることはさげたいと考えたが、その後五月十一日付で、この件について夫人より次のような来信に接した。

「さて校歌の件ですが、その後考えてみますと、今日主人が健在いたして、この事を聞きましたなら、きっと権利は学院にさし上げたものと思われます。今は亡き人ですが、それだけ、主人の意志に添いたいと思ひます。学院の方でも、この旨ご承諾下さいませ」

これでこの校歌の著作権問題は解決したわけであるが、しかし、学院としてはこの校歌が過去六十年にわたつて、学院に学んだものの志操を高め、意気を高揚したことを思い、また、「桜の実の熟する時」をはじめ藤村の数々の著作と文名によつて学院の名声が広く世に伝えられたことなどを考慮して、藤村没後二十年にあたる昭和三十一年八月二十二日の命日の前八月十九日に齊藤茂夫、平林武雄両教授と杉本主事が学院を代表して大磯に藤村の墓参をしたのち、静子夫人を訪ねて故人の霊前に学院長の感謝状と金一封をそなえ、あらためて感謝の意を表した。

結 び

明治、大正、昭和の三つの時代を通じ、日本プロテスタント宣教百年の歴史的発展にそってあゆみつづけた、わが明治学院はいまや中学、高校、大学を通じて一万三千名の学生、生徒をようし、同窓会員三万四千名をかぞえるほどの大きい学園となった。

もつとも、従来の歴史は明治十年築地の一致神学校の設立をもってはじまるとし、またそう計算して九十年であるが、さらにこれをさかのぼれば、横浜開港当時のむかしに帰って、その草創の時代に思いをひそめなければならぬ。「明治学院沿革略」や鷺山第三郎氏の「明治学院五十年史」や渡辺勇助氏の「明治学院八十年史」にしても、また本学院理事会が定めた学院創立の年など、いずれも明治十年の築地一致神学校からはじまったことになっている。それは北米長老ミッション、ダッチ・リフォームド・ミッション、スコットランド一致長老ミッションの三つの宣教団体の一致協力を背景としたものであった。

しかし、大きい川のみなもとは、山間のささやかな谷川の流れに発するものである。築地の学校は一つには、神奈川、横浜で労苦のすえにできあがったヘボン塾とブラウン塾に発するものであった。ヘボン塾

が英学のはじめであり、ブラウン塾がわが国の神学教育のはじめであった。これら二つの塾を根幹として築地の一致神学校、築地大学校のちの一致英和学校へと発展し、それがさらに一つとなって白金の明治学院となった。のちにフルベッキが長崎で宣教の礎石をきざした東山学院も加わって、学院の発展に寄与したものである。

初代の三宣教師はいずれも聖書をもとにして、日本の宣教を志した人々であった。しかし、それとともに英学を通じて西欧の文化を幕末、明治初期の日本に紹介し、近代日本の発展に貢献したのであった。これらを考えあわせると、創立者たちの志したところは堅実なプロテスタントの信仰の樹立と英学による西欧文化の移入とであった。

フルベッキは明治政府を啓発し、東京大学設立に貢献した。ブラウンは教会と神学教育に貢献し、ヘボン、医療社会事業と英学教育と教会建設に貢献した。わが明治学院大学の現状をみると、一般キリスト教教育を目ざしていたヘボン塾に、その主流をおかねばなるまい。フルベッキの志したものは東京大学となり、ブラウンの志したものは教団立の東京神学大学となり、ヘボン夫妻の志したものは、やはりキリスト教主義の大学教育であった。オランダ、ドイツ的な大学でもなく、また伝道者を養成する神学教育でもない。一般の学生を中心とするキリスト教大学を理想としたものであったとみてよい。

初代総理ヘボン博士から、本学院のキリスト教教育の全責任を託された井深総理は、さすがに会津武士

の出身だけあって、文部省訓令第十二号の発令によって、一時キリスト教をすてるか、それを死守するか
の難局にたたされたとき、熊野幹事や宣教師などともに決然としてこれに対処し、文部当局の猛省をう
ながすと同時に、本学院のキリスト教教育を死守する決意を固めた。このことは、明治学院史に永久に記
録されるべきことであり、われわれもこれを忘れてはならない。

本学院の歴史のなかに流れる精神的伝統は二つある。

その一つは、カルヴェイン神学によってたつプロテスタンティズムとその教会観であった。もう一つは英
文学を中心とするロマンチズムと自由な精神であった。島崎藤村の学んだ明治中期、賀川豊彦や中山昌
樹が学んだ明治末期から大正デモクラシーの時代をみると、一方には福音のために献身した伝道者の気は
くが、神学生の一人一人にみられると同時に、他方では英語、英文学に沈潜して文学者の群に加わった文
学青年や絵画、音楽に独自の道を歩んだ芸術家の輩出をみたのであった。

こうしたカルヴェインズムとロマンチズムは、他の学校でみることのできない本学院の特色であり、伝
統でもあった。

ヘボン館、ハリス館、サンダム館のあいづく火災、焼失にもかかわらず、赤煉瓦の記念館や大正初期に
建ったチャペル、古い洋式の宣教師館などは、なんとなく保守的なキリスト教学校としてのふん囲気を、
今日までのこしている。しかし、神学部は東京神学社と合併して日本神学校となり、今日の東京神学大学

として発展的解消をしたのである。

高等商業部が栄えた時代もあり、戦時中、専門学校の整理、統合の動きで、一時、青山学院、関東学院が本学院と合流して明治学院専門学校となったこともあつたが、戦後早々に両学院は大学を設立し、急速度の発展をみるにいたつた。

本学院も文経学部として大学の設立をみ、中学、高校の発展より、むしろ大学の組織拡充に主力をおき、精神的な面よりも校舎の建築、教授陣容の充実、学生数や図書増加、学寮の増設など、やや外的な発展に力をそそいだ。

戦前の田川、矢野両学院長時代から戦後の村田、都留両学院長の教育方針は富田前理事長のもとにあつて、学院の伝統を固守しようとしたが、そのあとをついだ北村理事長と武藤院長は眼を将来にむけ、学院のキリスト教主義の教育を強調しつつ、大学の社会的発展を急速にすすめた。過去数年間において学院の校庭は一部の高校校舎とインプリー館（同窓会館）と記念館をのぞいて全く新装され、旧ヘボン館跡に二階建の新ヘボン館が建設された。

講堂には、パイオルガンが備えつけられ、荘重なメロディは窓外にまでひびきわたっている。学生の献じたヘボンの胸像やチャイムの音も、学生の心になんとなく創立者の人格と精神が、奥ゆかしく感ぜられるのである。理事長北村徳太郎氏はヘボン館奉獻式の日、

「十二階のヘボン館は資金さえあれば建てられるが、ヘボン博士の精神はなかなか簡単に樹立せられるものではない。われわれ学院の関係者、教職者、学生はこの点に留意し、神を信じ心を清め襟を正しうして創立者の精神を学び、キリスト者としての使命と責任に生きねばならぬ」

という意味のことを語り、参列者に強く訴えた。財界人である理事長から、こうした反省と奨励の言葉をうけて、われわれは大いに意を強くした。

九十年式典にあたり九十年の歴史を書きつづけたわれわれ執筆者、編集委員たちも同様な反省と決意を新たにすることであり、学院の将来に大きな期待をかけるものである。

付録および年表

明治学院高等学部要覽

(昭和三年度)

英文科ノ特典社会科ノ新設

英文科ハ目下中等学校英語科教員無試験檢定申請中ナリ
 社会科ハ現今我国社会事業一般ノ状勢ガ此事業ニ従事セント
 スル有為着実ナル人材ヲ要求スルコト切ナルヲ以テ之ニ応ゼ
 ントシテ新設セルモノナリ

学則要領

一 目的ト分科

高等学部ハ基督教主義ニ基キ、高等普通ノ教育ヲ受ケントス
 ル者、英語科中等教員タラントスル者及社会事業ニ従事セン
 トスル者ニ必要ナル教育ヲ授クルヲ以テ目的トス
 高等学部ニ英文科及社会科ノ二科ヲ置ク

二 修業年限

英文科 四ケ年
 社会科 三ケ年

三 学科課程

英文科ノ学科課程及毎週授業時間數左ノ如シ

学 科 目	毎 週 時 間 數			
	一 年	二 年	三 年	四 年
修 身 道 德	一	一	一	一
聖 民 道 書	一	一	一	一
聖 語 学、声 音 学	六	六	六	六
英 文 法、修 辞 学	二	二	二	二
英 自 由 文 作 文	一	一	一	一
英 會 話 文 学	一	一	一	一
英 文 学	二	二	二	二
漢 文 学	二	二	二	二
西 洋 文 学	二	二	二	二
歐 洲 文 学	二	二	二	二
東 洋 文 学	二	二	二	二
国 文 学	二	二	二	二
哲 学 概 論	二	二	二	二

職業紹介制度	工場管理	融和事業	隣保事業	矯風事業	司法保護	救護事業	救療事業	労働組合	合 計
二	二	二	二	二	二	二	二	二	三〇
：	：	：	：	：	：	：	：	：	三〇
：	：	：	：	：	：	：	：	：	三〇

四 学年、学期、休業日

学年ハ四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル
 学年ヲ分チテ二学期トス、第一学期ハ四月一日ヨリ十月三十
 一日ニ至ル

第二学期ハ十一月一日ヨリ翌年三月三十一日ニ至ル
 休業日

- 大祭祀日、日曜日、本学院創立記念日(十一月三日)
- 春季休業 自 三月二十五日 至四月七日
- 夏季休業 自 七月二十日 至九月九日
- 冬季休業 自十二月二十五日 至一月七日

五 入 学

入学ハ学年ノ始メ一ヶ月以内トス
 第一学年ニ入学セシムベキ者ハ左記各号ノ一二該当シ且ツ入

学試験ニ合格シタルモノナルコトヲ要ス

- 一、中学校卒業者
- 二、専門学校入学者検定試験ニ合格シタル者
- 三、一般専門学校ニ関シ無試験検定ノ指定ヲ受ケタル者

(甲種実業学校、師範学校等)

但欠員アル場合ニ限り前条ノ資格ヲ有セザルモ左ノ学科ニツ
 キ入学試験ヲ行ヒ之ニ合格シタル者ハ特別生トシテ入学ヲ許
 可スルコトアルベシ

英語 数学 国語 漢文 歴史

入学志願者ハ左記ノ書類ニ検定料及写真(最近三ヶ月以内撮
 影脱帽半身手札形)ヲ添ヘ指定期日前ニ差出スベシ

- 一、入学願書(所定書式)
- 二、卒業証明書(又ハ見込書)
- 三、成績証明書

入学ヲ許可セラレタル者ハ所定ノ在学証書ヲ差出スベシ、若
 シ尙週間以内ニ差出サザルトキハ入学ヲ取消ス

六 保証人

保証人ハ丁年以上ノ男子ニシテ東京府下ニ於テ一家計ヲ立テ
 生徒在学中ニ係ル一切ノ事件ニ付キ其責ニ任ズベキ者タルヲ
 要ス

本学院ニテ不適當ト認メタルトキハ何時タリトモ之ヲ改定セ
 シム

保証人転居改印若クハ死亡シタルトキハ其旨直チニ届出ツベ
 シ、長期ノ旅行若クハ死亡シタルトキハ更ニ保証人ヲ定ムベ

シ

七 休学、退学及懲戒

疾病其他止ムヲ得ザル事由ニヨリ引続キ三ヶ月以上修学ヲ停止セントスル者ハ保証人ヨリ其事由ヲ詳記シタル願書ヲ差出シ許可ヲ得テ休学スルコトヲ得、但疾病ニヨリ休学セントスルトキハ願書ニ医師ノ診断書ヲ添付スルコトヲ要ス
 休学ハ兵役ニ服スル場合ノ外一年以上ニ亘ルコトヲ得ズ、但特別ノ事情アル者ハ願出ニヨリ更ニ一学年以内ノ休学ヲ許可スルコトアルベシ

疾病其他止ムヲ得ザル事由ニ依リ退学セント欲スル者ハ保証人ヨリ其事由ヲ詳記シタル願書ヲ差出シ許可ヲ受クベシ
 左ノ各号ノ一ニ該当スル者ハ退学ヲ命ズ

- 一、 性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者
 - 二、 学力劣等ニシテ成業ノ見込ナシト認メタル者
 - 三、 許可ナクシテ引続キ一ケ年以上欠席シタル者
 - 四、 正当ノ理由ナクシテ引続キ三十日以上欠席シタル者
 - 五、 正当ノ理由ナクシテ屢々遅刻欠席シ出席常ナラザル者
 - 六、 授業料其他校納金ノ滞納ニ週間以上三亘ル者
- 本学院ノ規則並ニ諸揭示ニ背キ其他生徒タルノ本分ニ違フモノハ其軽重ニ從ヒ訓戒、停学、退学ヲ命ズ

八 試験

試験ヲ分チテ第一期試験、第二期試験トス、但受持教授ノ見込ニ依リ臨時試験ヲ行フコトアルベシ
 学期試験ハ各学期間履修シタル処ニヨリ各学期末ニ於テ行フ

試験ノ評点ハ左ノ如シ

一、 採点法 一百点ヲ以テ満点トス

二、 各学科学期評点ハ其学期間ノ平常点及学期試験点ノ和ヲ二除シテ得タルモノトス

三、 各学科学年評点ハ第一期及第二期評点ノ和ヲ二除シテ得タルモノトス

四、 学年総学科通約点ハ各学科学年評点ノ和ヲ学科目数ニテ除シテ得タルモノトス

各学科五十点以上ニシテ通約点六十点以上ノ者ヲ及第トス、行状点ハ甲乙丙丁ノ四等トシ学力ノ如何ニ係ラズ丁点ヲ得タル者ハ落第トス

疾病其他止ムヲ得ザル事故ニ由リ試験ニ欠席シタル者ハ教授會ノ決議ヲ經テ追試験ヲ行フコトアルベシ、但追試験ノ採点ハ凡テ得点ノ八掛トス

九 進級及卒業

各学科学年評点規定ノ点数ヲ得タル者ハ進級セシメ其他ハ落第トシテ原級ニ留ム

全課程ヲ修了シタル者ニハ所定ノ卒業證書ヲ授与ス

学期及ビ学年末ニハ成績表ヲ作製シ生徒ノ父兄又ハ保証人ニ送附ス

十 授業料及其他ノ費用

一、 入学検定料ハ金五円トス

二、 入学金ハ金五円トシ入学許可ヲ得タル当日納ムベシ

三、 授業料ハ一学年金八拾五円トシ每学期ノ始メ指定日ニ

第一学期分金四拾五円、第二学期分金四拾円ヲ前納ス
ベシ

四、冬季暖房費トシテ金參円ヲ十一月初旬ニ納ムベシ
五、一旦納メタル金円ハ凡テ返附セズ

指定日ニ納金シ得ザル者ハ保証人ヨリ猶予ノ日限ヲ附シテ願
出スベシ猶予ノ手續ヲナサズシテ指定日ニ納附セザル者ハ出
席停止ヲ命ズ、二回督促ヲ受ケタル後一週間内ニ納金セザル
者ハ退學者ト看做シテ除名ス

十一 特待生

教授会ニ於テ人物学力共ニ優秀ナリト認メタル者ヲ次学年度
特待生トナスコトアルベシ
特待生ハ授業料ヲ免除ス

付録(一)ノ二

明治学院高等商業部要覽

(昭和三年度)

本学部ハ昭和三年四月ヨリ高等学部商業科ヲ

改称シテ独立セシモノナリ

一 目的

本学部ハ本学院ノ主義及専門学校令ニ拠リ実業ニ就カント欲
スルモノニ商業上必要ナル高等ノ教育ヲ施スヲ以テ其ノ目的
トス

特待生ニシテ其体面ヲ汚ス所為アリト認メタルトキハ直チニ
取消スコトアルベシ

十二 寄宿舎

寄宿舎ハ東京市芝区白金三光町三四五番地ニ設置シ之ニ関ス
ル細則ハ別ニ定ム

十三 定員

英文科 百六十名
社会科 百二十名

十四 特典

在学生ハ徴兵猶予ノ特典ヲ有ス
附 本則ハ昭和三年四月一日ヨリ実施ス

二 修業年限

修業年限ハ三ヶ年トス

三 学科課程

学科課程及毎週授業時間数左ノ如シ

倫理及聖書	学 科 目		毎 週 時 間 数			
	一	二	一	二	三	年

商珠商原会簿経統財税保交取外貨銀經商商民法英書商
 業工価計濟計政及通引国幣行濟業民法學語書業
 数經計政倉倉論論論論論論論論論論論論論論論論
 学算論算学記策学学庫險論論替論論論論論論論論論
 (英文通信) 法文

二一 : : : 四 : : : : : : : : : : : : : : : 三二 : : : 二〇一

二 : : : : : 二 : : : : : 一三二 : : : 一二 : : : : : 三 : 八 : : :

: : 一一二 : 三一 二 : : : : 一一 : : : : : 四 : : : 六 : : :

近世文明史	論及心理	會計監査	國際私法	國際公法	自然科學	社會學	經濟學	學科目	一	二	三	年	每 週 時 間 數	合 計	體 操	哲 學 概 論	第 二 外 國 語 概 論	商 業 實 踐	商 業 地 理	商 業 史
二	二	:	:	:	:	:	:		二	二	:	:	三	三	二	二	:	:	:	二
:	:	:	:	:	:	二	二		:	:	:	:	三	三	二	:	:	二	二	二
:	:	二	二	:	:	二	:		:	:	:	:	三	三	二	:	一	三	二	二

前表ノ外第一学年、第二学年、第三学年ニ於テ毎学年次ノ科
 目中二科目ヲ選択セシメ毎週二時間ヲ課ス

註、第一外国語ハ仏語又ハ獨語

四 学年、学期及休業日

学年ハ四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル
学年ヲ分チテ二学期トス、第一学期ハ四月一日ヨリ十月三十
一日ニ至ル
第二学期ハ十一月一日ヨリ翌年三月三十一日ニ至ル
休業日

大祭祝日、日曜日、本学院創立記念日(十一月三日)

春季休業 自 三月二十五日 至四月七日

夏季休業 自 七月二十日 至九月九日

冬季休業 自十二月二十五日 至一月七日

五 入学

第一学年ニ入学セシムベキ者ハ左記各号ノ一ニ該当シ且ツ入
学試験ニ合格シタルモノナルコトヲ要ス

一、中学校卒業

二、専門学校入学者検定規定ニ依ル試験検定合格者

三、専門学校入学者検定規定ニ依リ一般専門学校入学ニ関
シ無試験検定ノ指定ヲ受ケタル者(甲種商業学校又ハ

師範学校等)

入学者志願者ハ左記ノ書類ニ検定料及写真(最近三ヶ月以内

撮影脱帽半身手札形)ヲ添ヘ指定期日迄ニ差出スベシ

一、入学願書(所定書式)

二、卒業証明書(又ハ見込書)

三、成績表

四、戸籍抄本

入学ヲ許可セラレタル者ハ所定ノ在学証書ヲ差出スベシ、若
シ迄週内ニ差出サザルトキハ入学ヲ取消ス

六 保証人

保証人ハ丁年以上ノ男子ニシテ東京府下ニ於テ一家計ヲ立テ
生徒在学中ニ係ル一切ノ事件ニ付キ其責ニ任ズベキ者タルヲ
要ス

本学院ニテ不適當ト認メタルトキハ何時タリトモ之ヲ改定セ
シム

保証人転居改印若クハ死亡シタルトキハ其旨直チニ届出ヅベ
シ、長期ノ旅行若クハ死亡シタルトキハ更ニ保証人ヲ定ムベ
シ

七 休学、退学及懲戒

疾病其他止ムヲ得ザル事由ニヨリ引続キ三ヶ月以上修学ヲ停
止セントスル者ハ保証人ヨリ其事由ヲ詳記シタル願書ヲ差出
シ許可ヲ得テ休学スルコトヲ得、但疾病ニヨリ休学セントス
ルトキハ願書ニ医師ノ診断書ヲ添付スルコトヲ要ス

休学ハ兵役ニ服スル場合ノ外一年以上ニ亘ルコトヲ得ズ、但
特別ノ事情アル者ハ願出ニヨリ更ニ一学年以内ノ休学ヲ許可
スルコトアルベシ

疾病其他止ムヲ得ザル事由ニ依リ退学セント欲スル者ハ保証
人ヨリ其事由ヲ詳記シタル願書ヲ差出シ許可ヲ受クベシ
左ノ各号ノ一ニ該当スル者ハ退学ヲ命ズ

一、性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者

二、学力劣等ニシテ成業ノ見込ナシト認メタル者

- 三、許可ナクシテ引続キ一ケ年以上欠席シタル者
 - 四、正当ノ理由ナクシテ引続キ三十日以上欠席シタル者
 - 五、正当ノ理由ナクシテ屢々遅刻欠席シ出席常ナラザル者
 - 六、授業料其他校納金ノ滞納二週間以上ニ亘ル者
- 本学院ノ規則並ニ諸揭示ニ背キ其他生徒タルノ本分ニ違フモノハ其軽重ニ從ヒ訓戒、停学、退学ヲ命ズ

八 試 験

- 試験ヲ分チテ第一学期試験、第二学期試験トス、但受持教授ノ見込ニ依リ臨時試験ヲ行フコトアルベシ
- 学期試験ハ各学期間履修シタル処ニヨリ各学期末ニ於テ行フ試験ノ評点ハ左ノ如シ
- 一、採点法 百点ヲ以テ満点トス
 - 二、各科学学期評点ハ其学期間ノ平常点及学期試験点ノ和ヲ二除シテ得タルモノトス
 - 三、各科学学年評点ハ第一学期及第二学期評点ノ和ヲ二除シテ得タルモノトス
 - 四、学年総学科通約点ハ各科学学年評点ノ和ヲ学科目数ニテ除シテ得タルモノトス
- 各学科五十点以上ニシテ通約点六十点以上ノ者ヲ及第トス、行状ハ甲乙丙丁ノ四等トシ学力ノ如何ニ係ラズ丁点ヲ得タル者ハ落第トス
- 疾病其他止ムヲ得ザル事故ニ由リ試験ニ欠席シタル者ハ教授會ノ決議ヲ經テ追試験ヲ行フコトアルベシ、但追試験ノ採点ハ凡テ得点ノ八掛トス

九 進級及卒業

各科学学年評点規定ノ点数ヲ得タル者ハ進級セシメ其他ハ落第トシテ原級ニ留ム

全課程ヲ修了シタル者ニハ所定ノ卒業証書ヲ授与ス

学期及ビ学年末ニハ成績表ヲ作製シ生徒ノ父兄又ハ保証人ニ送附ス

十 授業料及其他ノ費用

- 一、入学検定料ハ金五円トス
 - 二、入学金ハ金五円トシ入学許可ヲ得タル当日納ムベシ
 - 三、授業料ハ一学年金八拾五円トシ每学期ノ始メ指定日ニ第一学期分金四拾五円、第二学期分金四拾円ヲ前納スベシ
 - 四、冬季暖房費トシテ金參円ヲ十一月初旬ニ納ムベシ
 - 五、一旦納メタル金員ハ凡テ返附セズ
- 指定日ニ納金シ得ザル者ハ保証人ヨリ猶予ノ日限ヲ附シテ願出スベシ猶予ノ手續ヲナサズシテ指定日ニ納附セザル者ハ出席停止ヲ命ズ二回督促ヲ受ケタル後一週間内ニ納金セザル者ハ退学者ト看做シテ除名ス
- ### 十一 特待生
- 教授會ニ於テ人物学力共ニ優秀ナリト認メタル者ヲ次学年度特待生トナスコトアルベシ
- 特待生ハ授業料ヲ免除ス
- 特待生ニシテ其体面ヲ汚ス所為アリト認メタルトキハ直チニ取消スコトアルベシ

十二 寄宿舎

寄宿舎ハ東京市芝区白金三光町三四五番地ニ設置シ之ニ開スル細則ハ別ニ定ム

十三 定員

四百二十名ヲ以テ定員トス

十四 特典

一、在学生ハ徴兵猶予ノ特典ヲ有ス

付録(二)

学則要覽

(昭和十九年度)

東京都芝区白金今里町

明治学院専門学校

電話高嶺(40)三六六六―三六六八

二、卒業生ハ商業、簿記ノ二科目ニ付中等学校教員無試験檢定ヲ受クルコトヲ得

三、卒業生ハ高等試験令ニ依リ高等学校大学予科ト同等以上ト指定セラレ予備試験免除ノ特典ヲ有ス

四、卒業生ハ計理士法ニ依リ無試験ニテ計理士タルコトヲ得

附 本則ハ昭和三年四月一日ヨリ実施ス

本学院ハ従来高等学部及ヒ高等商業部ノ二学部ヲ置キ、高等学部ノ内ニ英文科、厚生科、東亜科ノ三科ヲ置キタルトコロ、今回コノ組織ヲ改メ、青山学院文学部、同高等商業学部及ヒ

開東学院高等商業部ヲ統合シ、校名ヲ明治学院専門学校ト称シ、新ニ経済科、経営科、東亜科ノ三科ヲ設ケタルモノナリ。修業年限ハ各科共ニ三箇年トス。

経済科 皇國經濟ノ理論ト實際、特ニ工業經濟ニ關スル諸学科ニ重点ヲ置キ、大東亞ノ經濟指導者ニ相応ハシキ高邁ナル識見ト敬虔ナル信念ニ富メル人材ノ鍊成ヲ目的トス。

経営科 現下生産増強ニ緊要ナルハ工場經營並ビニ生産技術ニ通ジ、且勤勞管理ニ熟達セル生産戰ノ指導者ナリ。本科ハ

斯ル時代ノ要請タル工業經營、勤勞管理ノ指導の戦士ノ育成ヲ期ス。

東亜科 支那語、英語、馬來語ニ堪能ニシテ共榮圈各地ノ事情ニ精通シ、大東亞ノ政治經濟文化ニ關スル業務ニ熟達シタル青年ヲ養成ス。特ニ本年度ヨリ大陸及南方ノ二分科ヲ設ケ、前者ハ支那語ヲ、後者ハ英語ヲ第一外國語トシテ必修セシメ、別ニ第二外國語トシテ馬來語又ハ英語ヲ選択履修セシム。経済科第二部(夜間授業) 主トシテ昼間産業人トシテ勤務ニ挺身シツツアリ、然モ研學ノ志ヲ有スル者ノタメニ設ク。学科課程ハ昼間部ニ準ズ。

一 入 学

第一学年ニ入学セシムベキ者ハ左記各号ノ一二該当シ且入学試験ニ合格シタルモノナルコトヲ要ス

- 一、中学校卒業者又ハ第四学年修了者
- 二、専門学校入学者検定規定ニ依ル試験検定合格者
- 三、専門学校入学者検定規定ニ依リ一般専門学校入学ニ関シ無試験検定ノ指定ヲ受ケタル学校卒業者及第四学年修了者等(甲種実業学校又ハ師範学校等)

二 校納金

- 一、入学検定料ハ金拾円トス
- 二、入学金ハ金拾円トシ入学許可ヲ得タル当日納ムベシ
- 三、授業料ハ一学年金百六拾円トシ第一期金八拾円、第二期金八拾円ヲ毎学期ノ始メ指定日ニ前納スベシ
- 四、経済科第一部ハ一学年金百六拾円トシ第一期金六拾円、第二期金六拾円ヲ毎学期ノ始メ指定日ニ前納スベシ
- 四、一旦納メタル金員ハ凡テ返付セズ

三 特典

- 一、経済科(但第二部ヲ除ク)卒業生ハ実業(商業、簿記)科ニ付、東亜科卒業生ニシテ英語ヲ第一外国語トシ所定ノ学科ヲ履修シタル者ハ外国語(英語)科ニ付中等学校教員無試験検定ヲ受クルコトヲ得
- 二、卒業生ハ高等試験予備試験免除ノ特典ヲ有ス
- 三、卒業生ハ試験又ハ無試験ニテ東京商科大学、神戸商業大学、大阪商科大学(以上三学経済科)、東北帝国大学

法文学部(各科)、九州帝国大学法文学部(経済科及東亜科〔英語専攻者〕)、台北帝国大学文政学部(各科)ニ入学スルコトヲ得

四、経済科卒業生ハ計理士法ニ依リ無試験ニテ計理士タルコトヲ得

経済科 学科課程及毎週授業時間数(認可申請中)

学 科 目	毎週時間数			学 科 目	毎週時間数		
	一年	二年	三年		一年	二年	三年
道 義	二	二	一	經營總論			
国 語	二	二	一	工場經營論			
理 数	四	二		簿記及會計	三	二	二
教 練	二	二		原価計算	二	二	二
体 練	二	二		營業概論	二	二	二
商業經濟論	三	二		實務實習	二	二	二
經濟史	二	二		法 律	三	三	二
經濟地理	二	二		外 語	四	四	四
經濟學	二	二		英語(第二外国語)	二	二	二
經濟統制論	二	二		演習	二	二	二
東亞經濟論	三	二		特殊学科目	一	二	二
財政	一	一		定時修練	六	六	六
統 計	一	一		合計	四〇	四〇	四〇

經營科 学科課程及每週授業時間數(認可申請中)

簿記 會計	作業 管理	資材 管理	勤勞 管理	工業 政策	工業 經營論	工業 概論	外國 語(英語又ハ英語)	及日本 文化史	日本 文化論	體 論	教 練	道 義	学 科 目		
													一年	二年	三年
二	二	二	二	三	二	二	六	二	二	二	二	二	每週時間數		
二	二	三	二	二	二	二	四	二	二	二	二	一	一年		
二	二	二	六	二	二	二	四	二	二	二	二	一	二年		
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	一	三年		
合 計	定時 修練	設備 圖學	物 理學	數 學及 學	哲 學	產 業 心理 學	東 亞 資源 論	經 濟	法 律	產 業 技 術	統 計	及 監 查	原 價 計 算	学 科 目	
四〇	六	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	一	一年	
四〇	六	二	四	二	二	二	二	二	二	二	二	二	一	二年	
四〇	六	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	五	三年	

東亜科 学科課程及每週授業時間數(認可申請中)

心理 學	共 同 事 情	大 東 亞 地 政 史	世 界 史	大 東 亞 史	大 東 亞 史 (英語又ハ馬來語)	支 那 語 又ハ 英語	第 一 外 國 語	體 論	教 練	國 語 漢 文	及 日本 文化 史	日本 文化 論	道 義	学 科 目		
														一年	二年	三年
二	二	二	二	二	四	二	二	二	二	二	二	二	二	每週時間數		
二	二	二	三	四	四	二	二	二	二	二	二	一	一年			
二	二	三	四	二	二	二	二	二	二	二	二	一	二年			
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	一	三年			
合 計	定時 修練	又ハ 經濟 實務	教 育 史 及 教授 法	文 化 政 策	植 民 政 策	工 業 概 論	農 業 概 論	經 濟 統 制 論	經 濟 通 論	憲 法 法 學 通 論	教 育 學	哲 學 又ハ 倫 理	学 科 目			
四〇	六	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	一年			
四〇	六	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二年			
四〇	六	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	三年			

備考、但シ中等學校英語科教員無試験檢定ヲ受ケントスル者ハ第一外國語、第二外國語共ニ英語ヲ選択シ、且教育学、教育史及教授法ヲ履修スベシ。(認可申請中)

付録(三)

学則要覽

(昭和二十四年度)

明治学院大学

東京都港区芝白金今里町

電話大崎(49) 三二八七一九

一 目的

本大学は基督教による人格教育を基礎として広く教養を培うと共に深く専門の学芸を教授研究し知的及び応用的能力を發揮させることを目的とする

二 学科及び修業年限

(一) 本大学に次の学部及び学科を置く

文経学部(第一学部・昼) 英文学科 社会学科

経済学科

文経学部(第二学部・夜) 英文学科 社会学科

経済学科

(二) 修業年限は四年以上とする

三 入 学

(一) 本大学第一学年に入学を志願し得る者は都道府県進学適性検査(一月三十一日施行)を終了し身体強健・品行方正で次の各号の一に該当する者でなければならぬ

い 新制高等学校卒業者

一、通常の課程による十二年の学校教育を修了した者
二、通常の課程以外の課程によりこれに相当する学校

教育を修了した者

一、外国に於て学校教育における十二年の課程を修了した者

一、文部大臣の指定した者

一、その他本大学において高等学校を卒業した者と同以上の学力があると認めたる者

(二) 本大学に入学を許可されるものは所定の入学検定に合格したものに限る

四 校 納 金

(一) 入学を志願するものは入学検定料金六百元を前納しなければならぬ

(二) 入学又は転学を許されたものは七日以内に入学金二千円及び授業料第一期分を納付しなければならない

(三) 授業料は各学部とも一学年金九千円とし次の三期に分けて納付しなければならない

第一期 金三千円 第二期 金三千円
第三期 金三千円

(四) 既に納付した校納金は事情の如何に拘わらずこれを返却しない

五 卒業及び称号

(一) 本大学に四年以上在学し所定学科目を履修しその科目の試験及び論文試験に合格し所定の単位数を取得した者には卒業証書を授与する

(二) 英文学科及び社会科学科卒業者は文学士、経済学科卒業者は経済学士と称することが出来る

(三) 教職課程の履修者は高等学校教員となることが出来る

六 学科目

文 經 学 部 (第一学部、第二学部)

一般教養科目 (各学科共通)

人文科学関係——基督教学、宗教史、哲学、倫理学、論理学、心理学、教育学、文学、第一外国語、第二外国語

社会科学関係——法学、経済学、社会学、統計学、歴史学

自然科学関係——数学、物理学、生物学
特殊講義——音楽

専門科目

○英文学科

英文学部門——英文学概論、英文学史、英詩、英国散文、英文学批評、米国文学、作家作品研究、英文学演習

英語学部門——英文法、英語史、言語学、音声学、英語演説、翻訳論、時事英語、英作文演習

特殊部門——独逸文学、フランス文学、ラテン語

ギリシヤ語、英米国史、欧洲文学、国文学、哲学、美術史

卒業論文

○社会学科

基礎部門——社会思想、社会政策、社会法、労働科学、社会心理学、経済原論、経済政策、経済史、経済学史、財政学

専門部門——社会保険、社会事業、生活問題、ケイ・ス・ワーク、児童心理学、児童福祉、労働問題、賃銀論、労働組合論、労務管理、外国書講読

調査部門——社会調査、社会統計、実習

特殊部門——農村問題、犯罪学、家族論、新聞学、人口問題、経営学総論、協同組合論

卒業論文

○経済学科

経済学部門——経済原論、経済学史、景気論、経済地理、国際経済、アメリカ経済、中国経済、経済史、日本経済史、中国史、経済政策、社会政策、労働問題、財政学、統計学各論

商学部門——商学総論、商学各論、商業中国語、経営学総論、経営学各論、経営実務、協同組合論、会计学総論、会计学各論、簿記学、原価計算、金融論

法学部門——民法、商法、社会法

特殊研究部門——外国書講読、演習

卒業論文

○教職課程——教育学、教育史、教育心理学、学校管理、学校衛生、学習指導要項、教育学実習

○体育——講義、実技

学長

バチエラー・オヴ・デイヴィニテイー 村田 四郎

教授・講師 文学博士 落合 太郎

ドクトル・オヴ・デイヴィニテイー 賀川 豊彦

ドクトル・オヴ・フィロソフィー 服部 文四郎

ドクトル・オヴ・デイヴィニテイー H・D・ハナフオード

バチエラー・オヴ・アーツ R・E・ハナフオード

バチエラー・オヴ・アーツ 齋藤 茂夫

経済学科主任 法学士 嶺岸 忠之助

バチエラー・オヴ・フィロソフィー 高谷 道雄

バチエラー・オヴ・セオロジィ 英 義

社会学科主任 文学士 若林 龍夫

バチエラー・オヴ・サイエンス 竹中 治郎

バチエラー・オヴ・アーツ マスター・オヴ・アーツ 三神 勲

バチエラー・オヴ・アーツ マスター・オヴ・アーツ 尾藤 七郎

文学士 加藤 七郎

文学士 尾藤 七郎

文学士 尾藤 七郎

文学士 尾藤 七郎

文学士 尾藤 七郎

文学士 尾藤 七郎

文学士 尾藤 七郎

文学士 尾藤 七郎

英文学科主任

文学士 高橋 源次

理学博士 浜 健

理学士 村上 忠敬

医学博士 J・タボ

文学士 湯浅 謹

文学士 小 山 栄三

文学士 早 崎 八洲

文学士 小 塚 新一郎

文学士 平 林 武雄

文学士 大 園 不二夫

文学士 須 藤 信正

商学士 清 水 晶雄

商学士 木 越 彦

商学士 青 木 豊

文学士 秋 元 徹

文学士 渡 辺 徳太

文学士 羽 田 智夫

文学士 天 達 忠雄

文学士 岡 村 務

文学士 村 上 和男

文学士 小 川 好男

文学士 安 藤 国雄

文学士 安 藤 国雄

文学士 安 藤 国雄

文学士 安 藤 国雄

文学士 安 藤 国雄

商	商	經	医
学	学	济	学
		学	博
士	士	士	士
中	合	工	天
島	崎	藤	野
			ち
省	堅	英	よ
			う
吾	二	一	史
			郎

農	商	法	法	商	經
学	学	学	学	学	学
士	士	士	士	士	士
佐	阿	和	渡	磯	金
々	部	田	辺	部	井
木					信
淳	志	昌	守	浩	一
寿	郎	衛	道	一	郎

付録(四)

学校法人明治学院役員

(昭和四十二年六月一日現在)

理事

北村徳太郎(長)

武藤富男

若林龍夫

平林武雄

原田 昂

針谷松太郎

佐藤泰生

津田正則

豊原英三

G・J・ヴァンワイク

R・B・ノートン

鈴木 春

野島 進

島村亀鶴

桑田秀延

田上穰治

監事

小菅義雄

鍛冶田 泉

評議員

秋元 徹

磯部浩一

加藤七郎

福田垂穂

小池正二

布村公一

白石道雄

黒田

正明 徳永 清

池田義三郎

長谷川 仁

戒田欽二

鳥居忠五郎

柿島一三

大久保富士

岩崎次郎

金子義隆

望月克仁

I・J・ヘッセリンク

T・E・フラハ

テイ R・G・コーバー

D・C・ワース

M・R・カリク

宮内 彰

稲垣徳子

松尾造酒蔵

津田正則

中島房男

沢 東吾

豊原英三

名越覚次郎

吉岡 一

岡見如雷

年表

邦 曆	西 曆	一 般 事 項	明 治 学 院 関 係 事 項
文化 四年	一八七六	<p>▽樺太およびエトロフ島にロシア船来航、箱館奉行、津軽、南部藩兵に宗谷を防衛させる</p> <p>▽アメリカ船、長崎に来航、海防急を告げる</p>	<p>▽九月ロバート・モリソン中国マカオに到着。中国語の研究、英華辞典「五車韻府」、聖書の中国語訳「新天聖書」、マラッカの「英華学堂」設立等モリソンの東洋宣教事業の起点となる</p>
文化 七年	一八七九	<p>▽白河、会津二藩、幕命により相模、安房海岸に砲台を築く</p>	<p>▽アンドバー神学校にアメリカ伝道協会(アメリカン・ボード)創立▽六月一六日S・R・ブラウン、コネチカット州イースト・ウィンザーに生る</p>
文化 九年	一八八二	<p>▽豊前国中津藩に百姓一揆おこる▽高田屋嘉兵衛、クナシリ島沖合いにてロシア船に捕えらる</p>	<p>▽東洋伝道のため五人のアメリカ宣教師出発</p>
文化 三年	一八八五	<p>▽杉田玄白「蘭学事始」できる。仙石政和「類聚国史」刊</p>	<p>▽三月一三日J・C・ヘボン、ペンシルバニア州ミルトンに生る</p>
天保 八年	一八三七	<p>▽大阪町奉行所与力大塩平八郎、大阪で反乱をおこす。鎮圧され、三月自殺▽アメリカ船モリソン号浦賀に入港、浦賀奉行これを砲撃</p>	<p>▽カール・ギュツラフ絵片仮名の「約翰福音伝」「約翰上中下書」日本語版を完成▽七月下旬ギュツラフ、S・W・ウィリアムス、漂流日本人七名をつれ江戸湾に來り、砲撃を受けて上陸できず立ち去る</p>
天保 九年	一八八六	<p>▽オランダ商館よりモリソン号渡來の事情を報告せしめ幕府、対策を討議▽高野長英「夢物語」、渡辺崋山「慎機論」できる</p>	

嘉永 六年	一八五五	▽ペリー艦隊、浦賀に来航▽ロシア使節極東艦隊司令官プチャーチン、軍艦四隻をひきい長崎に来航	▽七月八日(旧六月三日) 払曉ペリー艦隊浦賀に投錨、七月十日安息日、軍楽隊による讚美歌を奏し礼拝を行なう(ゴープル、仙太郎乗船)
安政 元年	一八五四	▽日米和親条約を締結調印▽吉田松陰、下田で米艦に乗り、密航を企て捕えらる	
安政 五年	一八五八	▽日米通商条約(神奈川条約) 締結調印、下田、箱館二港を開く	▽七月二十九日(旧六月一九日) 払曉ボーハタン艦上でアメリカ総領事ハリスと幕府全権井上信濃守との間に日米通商条約十四条を締結。第八条には宗教に関する規定がある
安政 六年	一八五九	▽幕府、吉田松陰、橋本左内、頼三樹三郎らを処刑(安政の大獄)▽英駐日総領事オールコック来日	▽四月二十四日ヘボン、ニューヨーク出帆、一〇月一八日神奈川に上陸、成仏寺に居を定む▽十一月一日S・R・ブラウン、シモンズ、神奈川に到着▽十一月七日フルベッキ、長崎に上陸
万延 元年	一八六〇	▽軍艦奉行木村喜毅、勝安芳ら咸臨丸でアメリカに渡る▽榎田門外の変	▽ゴープル来日、成仏寺境内に住う
文久 元年	一八六一	▽庶民の大船建造、外国船購入を許可し、国内輸送使用を許す▽和宮江戸に向う▽外国奉行人水野忠徳ら小笠原開拓に出発	▽十一月一日ダッチ・リフォームド派の宣教師ジエームス・バラ成仏寺本堂に居住す
文久 二年	一八六二	▽老中安藤信正、水戸浪士らに襲われ負傷(坂下門外の変)▽高杉晋作ら品川御殿山の英国公使館を襲撃▽横浜英学所、居留地運上所で開設	▽二月二十九日ヘボン、横浜居留地三九番に施療所と住宅を建てる

邦 曆	西 曆	一 般 事 項	文 久 三 年	明 治 学 院 関 係 事 項
慶 応 二 年	一 八 六 五	<p>▽幕府、第二回長州征伐を開始▽イギリス公使パークス着任▽英、米、仏、蘭の四国公使兵庫開港を要求</p> <p>▽矢野元隆、ヘボン立会の上でジエームス・バラより受洗</p>	<p>▽薩長二藩連合なる▽長州征伐中止</p>	<p>▽村田若狹、フルベッキより受洗</p>
慶 応 三 年	一 八 六 六	<p>▽幕府、外国総奉行を置く▽朝廷、王政復古を宣言▽小御所会議▽浦上切支丹の投獄者を釈放</p> <p>▽ヘボン、和英、英和辞書「和英語林集成」刊▽ブラウンの自宅焼失、マタイ伝、マルコ伝の原稿焼失まぬがる▽ブラウン帰米す</p>	<p>▽鳥羽伏見の戦▽五ヶ条御誓文の公布▽神仏分離令▽福沢諭吉、英学塾を芝に移し慶応義塾と称す▽江戸を東京とす▽浦上切支丹配流</p>	<p>▽ヘボン、バラ、タムソン共訳の「新約聖書」脱稿▽ヘボン夫妻ヘルマン号にて蒙古、樺太、北海道を航行す</p>
同 二 年	一 八 六 七	<p>▽府県に小学校設置を命ず▽新聞紙刊行を公許▽東京寛都▽版籍奉還▽昌平校を大学校とし、開成学校、医学校を付属とする</p> <p>▽八月S・R・ブラウン夫妻ミス・キダーをとめない再び来日、新潟英語学校の教師となる▽フルベッキ長崎を去り上京、明治政府の顧問となり、大学南校の教頭となる</p>	<p>▽大教宣布の詔勅である▽平民に氏の称を許す▽横浜毎日（最初の日刊紙）刊▽新律綱領布告▽ミス・キダー、フェリス女学校創立</p>	<p>▽S・R・ブラウン横浜の修文館の英語教師となる▽井深梶之助、洋学修業のため上京、千村五郎、沼間守一につき学ぶ</p>
同 三 年	一 八 六 八			

明治 四年	一八七二	▽寺社領没収▽異宗徒取締規則制定▽廢藩置 県▽文部省設置▽岩倉具視らを欧米に派遣▽ ゴープル「摩太福音書」刊▽共立女学校創立	▽井深梶之助、横浜修文館の学僕となる
同 五年	一八七三	▽福沢諭吉「学問のすすめ」刊▽東京日々新 聞刊▽学制を制定▽新橋、横浜間に鉄道開通 ▽全国徴兵の詔	▽ジョン・バラ、高島学校教員として来日、バイブルクラスを開始 ▽服部綾雄、ヘボン塾入学▽三月一日、日本基督公会創立▽井深、 ブラウンより受洗▽ワイユフ来日▽ヘボン邸で第二回宣教師會議
同 六年	一八七四	▽徴兵令を布告▽全国キリスト教禁制の高札 を撤廃▽森有札、西周、福沢ら明六社結成▽ 征韓論破れ、西郷隆盛ら参議を辞職	▽横浜山手二二一番ブラウン邸にブラウン塾を開く▽植村正久、ジ ームス・バラより受洗▽カラゾルス築地に日本長老会を設立、築 地大学なる英学塾をおこす▽熊野雄七、ブラウン塾に入る
同 七年	一八七五	▽東京に警視庁を設置▽明六雜誌刊▽西郷從 道ら台湾征討▽読売新聞刊▽最初の讚美歌集 刊▽立教学院創立▽青山学院創立	▽ブラウン邸にて新約聖書翻訳委員會発足、ブラウン委員長となり 塾をジームス・アメルマンに委任す▽ヘボン塾生十数名、横浜長 老公会（後の指路教会）をおこす
同 八年	一八七六	▽加藤弘之「国体新論」刊▽東京市内にガス 燈つく▽千島、樺太交換条約調印▽出版条例 改正▽新島襄、同志社英学校を設立	▽ジョン・バラ、ヘボン塾の主任となる▽石本三十郎、ヘボン塾に 入塾す▽フルベッキ、太政官御雇法律顧問となる
同 九年	一八七七	▽海老名弾正ら熊本花岡山で信教を盟約▽帯 刀禁止令の公布▽クラーク博士来日、札幌農 学校開校▽新栄女学校（女子学院）創立	▽インブリー来日▽六月二日三ミッシヨンの合同案決定
同 一〇年	一八七八	▽西南戦争▽開成、医学の二校を合し、東京 大学を開設▽佐野常民ら博愛社をおこす▽田 口卯吉「日本開化小史」刊▽札幌バンド結成	▽九月三ミッシヨンにて東京一致神学校を東京築地明石町七番の小 会堂で開設▽一〇月三日協力ミッシヨン宣教師と日本基督公会の代 議員が中会を開き日本基督一致教会創立▽十一月同校々舎落成

邦 曆	西 曆	一 般 事 項	明 治 学 院 関 係 事 項
明治二年	一八七〇	▽電信中央局の開業祝賀会に初めてアーク燈つく▽郡区町村編成法、府県会規則、地方税規則を制定▽基督教信徒大親睦会開催	▽六月東京一致神学校第一回卒業式を行なう。井深梶之助、植村正久、瀬川浅岡同校卒業▽旧約聖書翻訳委員会東京に設立
同 三年	一八七二	▽東京府、区会及び町村会規則を制定▽学制を廃止し、教育令制定▽「大阪朝日新聞」刊▽梅香崎女学校（梅光女学院）創立	▽フルベツキ、一致神学校の講師及び理事となる▽S・R・ブラウン婦米▽十一月三日横浜聖書翻訳委員会新約全書を終了▽N・ブラウン翻訳「新約聖書」出版
同 四年	一八七三	▽府県立学校、幼稚園、図書館設置規則制定▽小学校教則綱領を定める▽文部省編「小学唱歌集」刊	▽四月井深梶之助東京一致神学校助教となる▽一〇月三日ワイコフ横浜山手四八番地で先志学校開く▽ヘボン夫妻スイスに旅行▽日本基督一致教会第一回大会開催
同 五年	一八七四	▽伊藤博文、憲法調査のためヨーロッパに出発▽上野に博物館（博物館）新館完成▽日本銀行開業▽東京専門学校（早稲田）開校	▽一月、東京一致神学校に教授会成立、インブリー議長▽神学校予科を設置▽スタウト長崎に神学校創立▽ヘボン博士旧約聖書翻訳委員長となり、フルベツキ同事業に参加▽六月二九日築地大学第一回卒業式
同 六年	一八七五	▽矢野文雄「経国美談」刊▽東京電燈（会社）設立▽鹿鳴館開館式▽徴兵令改正▽全国的りバイバル運動おこる	▽フルベツキ大阪宣教師会議で「日本プロテスタント宣教の歴史」講演、議長ヘボン▽九月先志学校、築地大学校と合併、東京一致英和学校と改称▽第三回基督信徒大親睦会東京で開催
同 七年	一八七六	▽東京商業学校（一橋大学）創立▽正倉院を宮内省に移管▽加波山事件▽秩父事件▽ウィルミナ女学校（大阪女学院）創立	▽築地大学校第一回卒業式▽八月東京一致英和学校、予備科を神田淡路町二の四に移し英和予備校を開設、服部綾雄校長となる。多田素、水声幾次郎同校入学▽植村正久「真理一班」刊

明治八年	一八五	▽尾崎紅葉ら硯友社結成▽坪内逍遙「小説神髓」刊▽太政官制度廢止、内閣制度設置▽明治女学校創立、「女学雜誌」刊▽北陸女学校創立	▽中川愛咲、馬場銜作、一致英和學校卒業▽一月宮地謙吉神田予備校入学▽「ポン」、「和英語林集成」三版完成。版權を翌年丸善に譲り二千ドルを得、これを明治学院に寄付▽標準式ローマ字会結成
同 一九年	一八六	▽帝国大学令公布、東京大学を帝国大学と改称▽師範学校令、小学校令、中学校令公布▽教科用図書検定条令を定める▽東北学院創立	▽四月二十九日東京一致神学校、東京一致英和學校及び東京英和予備校合併し明治学院創立案なる▽六月二日「明治学院」の名称制定▽同月二日一致神学校、一致英和學校合同卒業式▽白金に土地購入
同 二〇年	一八七	▽東京電燈会社市内配電開始▽学位令公布▽二葉亭四迷「浮雲」刊▽日本聖公会成立▽北星女学校創立▽旧約聖書翻訳完了	▽一月私立明治学院設置願を東京府に提出▽同月二日同件認可▽二月サンダム館建築起工九月竣工▽六月「ポン」館建築起工▽二月ミラー講堂建築に築地29番邸寄付▽長崎にステイール記念学校創立
同 三年	一八八	▽市制及び町村制を公布▽枢密院設置▽「東京朝日新聞」刊▽「法規分類大全」刊行開始	▽二月フルベッキ理事員會議長となる▽三月服部綾雄、幹事辞任、杉森此馬幹事就任▽四月ハリス父子三千ドルを寄付▽二月新旧約聖書翻訳完成祝賀会を築地新栄教会に開く
同 三年	一八九	▽徴兵令を改正▽大日本帝国憲法發布▽東海道本線全通▽森有礼、暗殺さる▽第一回夏季学校、京都同志社で開く▽金城女学校創立	▽ハリス館建築開始。一月アメルマン理事會議長となる▽九月築地の神学部をハリス館に移す▽一〇月二日「ポン」博士総理に、井深副総理となる▽二月九日予科を麴町有楽町に移し明治英学校とす
同 三年	一九〇	▽府県制及郡制を公布▽教育勅語發布▽東京―横浜間の電話開通▽日本基督一教教会を、日本基督教会と改称	▽三月二日神学部校舍兼図書館竣工棟敷式を行なう▽井深、米國ユニオン神学校に学ぶ▽七月五日より明治学院にて第二回基督教夏季学校開催▽二月一九日アメルマン神学部々長に選挙さる
同 四年	一九一	▽内村鑑三の不敬事件おこる▽度量衡法公布▽大津事件▽小学校祝日大祭日儀式規程定める▽濃尾地方大地震	▽三月明治英学校を白金に移し予科とす▽一〇月「ポン」総理辞任▽一月六日井深棍之助第二代総理任職式挙行▽二月一七日明治学院憲法と職制を制定▽長崎ステイール記念学校を東山学院と改称

邦 曆	西 曆	一 般 事 項	明 治 学 院 関 係 事 項
明治二五年	一八九二	▽衆議院議員臨時総選挙実施▽北里柴三郎、伝染病研究所設立▽一〇月井上哲次郎、キリスト教の非国家的なるを論難	▽二月理事員会は学院の基本金調達の決議文を米国伝道局に送達▽指路教会献堂式を行なう▽ヘボン博士帰国▽ヘボン、山本共著聖書辞典刊
同 二六年	一八九三	▽北村透谷、島崎藤村ら雑誌「文学界」を創刊▽集会及政社法（改正）、出版法、版權法を公布▽井上哲次郎「教育と宗教の衝突」刊	▽二月杉森、幹事辞任。後任に熊野雄七。熊野は、日本史、支那史の教授を兼ねる▽六月神学部制度改正▽八月石本三十郎米国に留学
同 二七年	一八九四	▽高等学校令公布（高等中学校を高等学校と改称）▽六月二〇日東京に強震、市内損害大▽清国に宣戦布告▽東京YMCA会館建設	▽一月普通部本科、予科の制度を改め高等学部二か年、普通学部五か年とする▽六月二〇日の大地震で神学部二階破損す
同 二八年	一八九五	▽帝国大学に史料編纂係を置く▽日清講和条約調印▽独露仏の三国干渉▽救世軍日本支部発足	▽一月二日石本三十郎、北米プリンストンで死去
同 二九年	一八九六	▽三陸地方に大津波▽日清通商航海条約調印▽黒田清輝ら白馬会発足▽樋口一葉死す	
同 三〇年	一八九七	▽ハワイで日本人移民上陸拒否さる▽帝国図書館開館▽京都帝国大学を新設▽足尾銅山鉱毒事件▽キリスト教社会主義おこる	▽六月—九月井深梶之助日本基督教学生青年同盟代表として渡米
同 三三年	一九〇〇	▽岡倉天心ら日本美術院創立▽民法全編施行▽尾崎文相の共和演説事件	▽六月一六日中学校令により普通学部を尋常中学（部）とす▽七月徴兵猶予の特典を受く▽フルベッキ赤坂葵町の自宅にて死去

明治三年	一八九	▽中学校令、実業学校令、高等女学校令公布 ▽八月二日私立学校令公布▽八月三日文部省 官公立学校における宗教教育と儀式禁止	▽八月三日文部省訓令第一二号公布▽八月四日緊急理事員会を開き 対策を講じ尋常中学校の資格返納の手続をとる。キリスト教諸学校 と協力し文部当局の反省をうながす。三月中島信行大磯にて死去
同 三年	一九〇	▽未成年者喫煙禁止法公布▽治安警察法公布 ▽津田梅子、女子英学塾を創立▽各地に金融 恐慌おこる	▽七月一七日尋常中学部を改め普通学部とす。学生の徴兵猶予回復 ▽七月普通学部は専門学校入学者検定規定指定に関する規則により 中学校と同等以上と指定さる
同 四年	一九一	▽愛国婦人会創立▽日本女子大学校設立▽北 清事変講和最終議定書調印▽中江兆民没▽二 十世紀大挙伝道▽宗教学校の徴兵猶予認め	▽七月三日南長老教会を迎え明治学院理事会に加う▽同ミッシヨンの フルトン、神学部教授に選ばれる▽神学部に別科を設く▽植村、海 老名の基督論論争おこる
同 五年	一九〇二	▽日英同盟協約ロンドンで調印▽教科書疑獄 事件の検挙開始▽聖路加病院創始	▽四月長崎東山学院神学部を明治学院神学部と合併▽四月高等学部 徴兵猶予の特典を受く▽同月高等学部の修業年限を三年と改む▽ロ ーゼ・ミラー寄付資金を以て講堂建設を決定
同 六年	一九〇三	▽小学校令改正、国定教科書制度の確立▽専 門学校令公布▽万朝報、主戦論に転じ幸徳秋 水、内村鑑三ら退社▽日本YMCA同盟創立	▽二月、礼拝堂建築開始▽五月一八日普通学部卒業生は各官立高等 学校及び専門学校受験資格を得▽一〇月片岡健吉死去▽一月高等 学部神学部は専門学校令の認定を得▽一二月植村正久辞任▽一二月 二二日、日本基督教会の信仰簡条を明治学院の教義の標準とす
同 七年	一九〇四	▽二月一〇日対露宣戦布告▽黄海海戦▽小泉 八雲死す	▽九月松永文雄、秦庄吉、アルバート・オルトマンズ神学部教授と なる▽植村正久、東京神学社創立
同 元年	一九〇五	▽日露講和条約調印(ポーツマス条約)▽夏 目漱石「吾輩は猫である」刊▽日本YWCA 創立	▽三月九日明治学院財団法人の認可(従来公益法人)▽三月二三日へ ボン博士敷三等旭日章賜る▽三月二四日新講堂地震で破損▽四月井 深、本多バリ万国キリスト教青年会創立五十年記念大会に出席

邦 曆	西曆	一 般 事 項	明 治 学 院 関 係 事 項
明治 三九年	一九〇六	<p>▽文芸協会結成▽島崎藤村「破戒」刊▽鉄道国有法公布▽南滿州鉄道会社設立の勅令公布</p> <p>▽国際無線電信条約調印</p>	<p>▽井深総理掃塗米国にて学院拡張資金二万五千ドルを得て二月一五日帰朝▽島崎藤村作詩による校歌制定作曲前田久八▽インブリーをして築地一七番旧神学校(ニッポン・インブリー所有)土地建物譲渡の交渉開始</p>
同 四〇年	一九〇七	<p>▽株式市場暴落▽小学校令改正(義務教育六年制)▽救世軍ブリス大将来日▽万国基督教青年大会東京で開催▽日本メソジスト教会成立</p>	<p>▽三月二日井深、インブリー、ジョン・バラ、ワイコフ四教授在職二五年祝賀会開催▽セバレンス、神学部寄宿舎新築に一万三千円寄付▽六月南長老派の離脱▽フルトン教授去り賀川豊彦に神戸神学校へ転校</p>
同 四年	一九〇八	<p>▽戦後経済恐慌おこる▽日米仲裁裁判条約調印▽戊申詔書を下す▽波多野精一「基督教の起源」刊</p>	<p>▽服部綾雄、理事となり、石原謙、神学部講師となる▽山本秀煥、神学部教授となる▽三月三〇日セバレンス館奉獻式舉行</p>
同 四年	一九〇九	<p>▽種痘法公布▽新聞紙条例公布▽伊藤博文ハルピン駅頭で暗殺さる▽田山花袋「田舎教師」刊▽プロテスタント宣教五十年記念式舉行</p>	<p>▽三月講堂強震で破損▽築地一七番の土地家屋譲受、登記完了▽七月ジェームス・バラ、故夫人の記念として金一千元を奨学基金として寄贈▽賀川豊彦、神戸新川で貧民窟伝道開始</p>
同 四年	一九一〇	<p>雑誌「白樺」刊▽大逆事件の検挙開始幸徳秋水ら逮捕▽韓国併合</p>	<p>▽五月井深、エジンバラ万国宣教会に出席、九月帰朝▽六月熊野宮地を学院拡張基金募集のため関西に派遣▽米国にて二万四千五百ドル、内地にて一万三百余円の寄付を受く</p>
同 四年	一九一〇	<p>▽早稲田、慶応などの私立大学の認可▽関税自主権の確立、条約改正の完成▽西田幾太郎「善の研究」刊</p>	<p>▽普通学部校舎建築▽一月二七日ワイコフ死去瑞聖寺に埋葬▽四月普通学部優秀卒業生は高等学校無試験入学の特典を得▽九月二一日ヘボン館焼失、ハリス館類焼、同日ヘボン博士死去▽二八日ヘボン追悼会</p>
同 五年	一九一一	<p>▽美濃部達吉「憲法講話」刊、天皇機関説論争ひろがる▽七月三〇日明治天皇崩御、大正天皇即位▽神仏基三教派会同</p>	<p>▽理事室教員室に電燈設置▽八月新ヘボン館を建築▽十一月幹事制廃止部長を置く。井深神学部長、熊野普通学部長高等学部長兼任▽事務員を常務理事と改む▽商議員を設け中島久万吉、島崎藤村に委嘱</p>
大正 元年	一九一二		

大正二年	一九三	<p>▽珍田駐米大使、カリフォルニア州排日土地法に対し抗議提出▽加州在留邦人慰問使節派遣▽中華民国を承認▽ジョン・R・モット来日</p>	<p>▽普通学部を三科に大別各科に主任をおく▽三月ライク、高等学部長就任▽四月高等学部東京学院と合併▽五月服部、井深ら渡米排日土地法撤回に尽力、井深さらに渡欧▽ジェームス夫人一万ドル寄付</p>
同三年	一九四	<p>▽第一次世界大戦おこる、日本対独宣戦布告▽島田三郎議会でシーメンス事件追及▽下関梅光女学院創立▽藤村「桜の実の熟する時」刊</p>	<p>▽四月服部雄維桑港にて死去▽井深、植村らによって全国協同伝道(三か年)開始▽学院創立記念日を一月三日と定む▽一月二四日午前出火サンダム館焼失</p>
同四年	一九五	<p>▽对华二一ヶ条要求に関し最後通牒を發す▽内相、文相、青年団の指導、統制について共同訓令</p>	<p>▽二月礼拝堂及びサンダム館建築につき両ミツシヨンに援助依頼▽二月一三日普通学部を中学部と改称の認可を得▽神学部予科一年延長三年とし、学年学期を変更</p>
同五年	一九六	<p>▽吉野作造「憲政の本義を説いて其有終の美を濟すの途を論ず」刊▽河上肇「貧乏物語」刊▽米國聖書協會創立百年記念大会開催</p>	<p>▽三月二七日新礼拝堂献堂式▽五月高等学部校舎(新サンダム館)落成▽一二月高等学部に文芸、英語師範、商業の三科設置決議▽一二月ランデイス教授動統二五年祝賀会舉行</p>
同六年	一九七	<p>▽ロシア仮政府を承認▽大暴風雨、東京に津浪死者行方不明一一四四名▽全国協同伝道終る▽新約聖書改訳なる委員長川添万寿得</p>	<p>▽二月ライシヤワー高等学部長就任▽三月学院憲法を改正▽高等学部に商業科設置の件決定▽六月築地一七番邸を四万円で売却▽一月学院創立四〇年記念式舉行</p>
同七年	一九八	<p>▽シベリア出兵宣言▽大学令、高等学校令公布▽武者小路「新しき村」建設▽東京女子大 学創立▽沖野岩三郎「宿命」発表</p>	<p>▽三月村田四郎、学院教会牧師就任決定▽四月学院教会設立▽五月熊野雄七在職二五年祝賀会開催▽高等学部を予科一年本科三年と改める▽セベレンス館敷地を売却、旧火薬庫後方土地八四〇坪購入</p>
同八年	一九九	<p>▽パリ講和會議開催▽小学校令、中学校令改正▽東京俸給生活者同盟会結成▽関東学院創立</p>	<p>▽三月熊野、中学部長辞任、村田四郎これに就任▽四月中山昌樹学院教会牧師就任▽セベレンス館を白金三光町に移転▽一月ライシヤワー高等学部長辞任、水声幾次郎高等学部長就任▽インブリー教授隱退帰国</p>

邦 曆	西曆	一 般 事 項	明 治 学 院 関 係 事 項
大正 九年	一九二〇	▽尼港事件▽賀川豊彦「死線を越えて」刊▽普通選挙同盟会結成▽日本社会主義同盟結成▽世界日曜学校大会東京で開催▽柏井園死去	▽二月中学部同盟休校▽四月村田中学部長辞任▽神学部予科生を高等学部委託生とす▽五月両宣教師社団提携基礎規約文案可決▽高等学部の修業年限を三か年とす▽一月ジョン・バラ鎌倉に死去
同 一〇年	一九二一	▽ワシントン会議で日英米仏四国協約調印、日英同盟廃棄▽神戸三菱、川崎両造船所争議 賀川豊彦ら検束さる	▽学院南側土地一九二坪余を東京市に譲渡▽三月井深梶之助総理事任。オルトマンズ総理事務取扱▽水声高等学部長中学部長に転出。都留仙次高等学部長就任▽五月熊野雄七死去
同 二年	一九二三	▽株式一斉に崩落、不況慢性化▽森鷗外没▽学生連合会結成▽シベリア撤兵▽アインシュタイン来日	▽一月オルトマンズ総理事務取扱辞任、田川大吉郎理事長として学院管理に当る▽高等学部英語師範科廃止。文芸科、高等商業科の二科となる
同 二年	一九二三	▽関東大震災、死者九万一八〇二人行方不明 四万二二五七人▽国民精神作興に関する詔書 発布▽日本基督教連盟創立▽大杉栄ら殺さる	▽二月学院教会解散▽九月一日関東大震災により神学部、高等学部校舎の被害大▽一〇月はじめて第二学期授業開始
同 三年	一九二四	▽第二次護憲運動を開始▽高等学校長会議で各高校の社会科学研究団体を解散させると決議▽全国学生軍教反対同盟結成	▽二月学院東側沿道土地六八五坪東京市へ移譲▽三月井深、神学部長辞任▽四月都留高等学部長、神学部長事務取扱兼務▽神学部を角害に移転▽一〇月中学部第二回同盟休校▽三学期制を二学期制とす
同 四年	一九二五	▽治安維持法議会通過▽衆議院議員(普通)選挙法公布▽中山昌樹ダンテ全集十巻刊行▽矢島樗子死去	▽二月田川大吉郎総理就任認可。都留高等学部長辞任。田川総理これを兼任▽三月高等学部校舎落成井深館と命名▽四月、八月に商業科卒業生は特典認可さる▽九月中学部軍事教練実施▽植村正久死去
同 五年 昭和 元年	一九二六	▽大正天皇崩御、今上天皇即位▽京都学連事件▽府県制、市町村制、北海道会法改正公布▽社団法人日本放送協会設立	▽三月オルトマンズ神学部教授辞任▽四月文芸科英語師範科を合併して修業年限を四か年の英文学科と改む▽六月水声中学部長辞任▽高等学部軍事教練一年延期

昭和二年	一九一七	<p>▽一月三日を明治節と定む▽丹後大地震▽兵役法公布▽第一次山東出兵▽高倉徳太郎「福音的基督教」刊▽岩波文庫刊行開始</p>	<p>▽三月英国ロッチデール式消費組合設立▽都留仙次神学部部長事務取扱辞任▽衛藤幹太郎中学位長就任▽四月笹尾象太郎高等学部部長就任▽五月神学部管理を委員制村田四郎委員長▽創立五十年記念挙式</p>
同 三年	一九一八	<p>▽共産党員、全国的な大検挙▽東大新人会ついで各大学の社研に解散命令▽内務省に特別高等警察課設置▽憲兵隊に思想係設置</p>	<p>▽四月高等学部商業科を高等学部より分離し高等商業部とす▽神学部長に川添万寿得就任▽高等学部社会科学を創設、修業年限三年▽高等両学部部に軍事教練実施▽八月インブリー米国にて死去</p>
同 四年	一九一九	<p>▽文部省、学生部設置▽東京市社会局、知識階級失業登録▽宗教団体法実施▽宣教七〇年記念大会▽神の国運動開始▽藤村「夜明け前」刊</p>	<p>▽英文科に英語中等教員検定試験実施▽予算不足額多額におよび学院財政悪化</p>
同 五年	一九二〇	<p>▽ロンドン軍縮会議開会▽共産党シンパ事件 中野重治、三木清ら検挙▽米価暴落▽都下一五新聞社、政府の言論圧迫に共同宣言発表</p>	<p>▽四月神学部の分離、日本神学校設立校長に川添万寿得、教頭高倉徳太郎▽四月オルトマンズ隠退帰国▽四月高等学部英文科卒業生は英語中等教員無試験検定の資格を得▽社会科学学生セツルメント開設</p>
同 六年	一九二一	<p>▽中村大尉事件▽九月一八日満州事変▽北海道・東北で大飢饉</p>	<p>▽高等学部及高等商業部に研究科を置く▽東山学院の合併決定▽経済不況の結果、生徒数四月の総数よりかなり減少</p>
同 七年	一九二二	<p>▽第一次上海事変おこる▽満州国建国▽五・一五事件おこる▽警視庁、特別高等警察部設置▽歴史学研究会創立▽神の国運動おわる</p>	<p>▽衛藤幹太郎、中学位長辞任。都留仙次、中学位長就任▽明治学院維持会設立、会長に田川総理</p>
同 八年	一九二三	<p>▽国際連盟を脱退▽米穀統制法の実施▽京大滝川事件▽吉野作造死す▽第一回関東地方防空大演習</p>	<p>▽三月海軍墓地一部を買収▽八月東山学院を閉校、院長ホキエ博士ら明治学院に転ず▽高等商業部満十五周年記念式を行なり</p>

邦 曆	西曆	一 般 事 項	明 治 学 院 関 係 事 項
昭和 九年	一九四〇	▽満州国に帝制実施▽文部省に思想局設置▽芥川賞、直木賞設定▽高倉徳太郎死去▽田村直臣死去	▽三月セツルメント閉鎖▽社会科を社会事業科と改称▽笹尾余太郎高等学部長副総理に昇格し辞任▽田川総理高等学部長を兼任▽多摩川運動場を東京府より借入
同 一〇年	一九四一	▽美濃部達吉著「憲法提要」など発禁▽国体明徴に関する声明発表▽関東地方大豪雨	▽四月高等商業部に第二部(夜間)を設置▽四月中学部第三回同盟休校おこる▽七月総理の名称を学院長と改む▽一月中山昌樹高等学部長就任▽田川院長辞任ウイリス・G・ホキエ院長事務取扱に就任
同 二年	一九四三	▽ロンドン軍縮会議脱退、無制限建艦競争始る▽二・二六事件▽国会議事堂竣工	▽文部省督学官ら三回にわたり巡視▽九月御真影問題につき院長事務取扱、文部省に招致さる▽オルトマンズ来日五十年記念会開催さる▽第二回社会科学生セツルメント開設
同 三年	一九四四	▽文部省「国体の本義」出版▽防空法公布▽日華事変始まる▽文部省に教学局設置▽日独伊三国防共協定の成立▽矢内原忠雄東大辞職	▽一月明治学院維持会解散▽四月同窓会の合同▽六月セツルメント閉鎖▽一月創立六十年記念式挙行▽一月校歌碑建設
同 三年	一九四六	▽大内兵衛ら教授グループ檢舉▽兵役法改正学徒の在営期間短縮の特典廃止▽武漢三鎮占領▽関東に猛台風▽国家総動員法の公布	▽幹事制復活加藤七郎幹事就任▽明治学院時報発行▽三月消費組合解散▽三月多田素理事長辞任、富田満理事長就任▽改築後援会結成会長に一色虎児▽一〇月御真影奉戴▽高商部創立二〇年記念式挙行
同 四年	一九四七	▽文部省、大学軍事教練必須通達▽青年学校の義務制▽青少年学徒に勅語▽ノモンハン事件▽宣教八十年記念▽第二次世界大戦始まる	▽七月中山昌樹カルヴァイン「基督教綱要」翻訳完成▽八月矢野貫城第四代学院院长就任、高等学部長、高等商業部長、中学部長を兼任▽七月戸川秋骨死去▽八月石川林四郎死去▽一月オルトマンズ死去
同 五年	一九四八	▽国民体力法公布▽大政翼賛会発足▽紀元二六〇〇年記念式挙行▽皇紀二六〇〇年奉祝キリスト信徒大会▽日独伊三国軍事同盟成立	▽四月高等学部に東亜科設立▽学院憲法改正、学制職制を制定▽ミッシェンの援助辞退▽皇紀二千六百年記念式典挙行。記念行事として海軍墓地の一部に大弓場と狭窄射撃場を設置

昭和六年	一九二一	<p>▽東京大阪で米の配給通帳制実施▽日本キリスト教団成立▽文部省「臣民の道」を各学校に配布▽米英に宣戦布告、太平洋戦争始まる</p>	<p>▽一月笹尾兼太郎死去▽二月各学部学友会解散、報国団結成▽三月多田素死去▽六月日本基督教団成立、富田満初代総理就任▽七月漆山清二中学部長就任▽中学部校舍新築▽旧第二(ヘボン)館取壊し</p>
同 一七年	一九二二	<p>▽日独伊新軍事協定調印▽中、高、大学等の学年短縮案を決定▽衣料切符制実施</p>	<p>▽三月高等学部社会事業科を厚生科と改む▽七月特設防護団組織する▽一〇月加藤幹事辞任、杉本民三郎幹事就任▽一二月高等両学部繰上卒業▽中学部一棟新築▽高等両学部校舍一棟増築</p>
同 一八年	一九二三	<p>▽ガダルカナル島撤退開始▽谷崎潤一郎「細雪」中央公論連載禁止▽学徒戦時動員体制確立要綱決定▽東京都制実施</p>	<p>▽明治学院勤労報国隊出動▽九月繰上卒業▽一二月学徒出陣▽島崎藤村大磯にて死去▽山本秀焯死去▽日本基督教神学専門学校創立</p>
同 一九年	一九二四	<p>▽防空法による疎開命令発布▽中学生の勤労動員大綱決定▽フイリピン沖海戦▽B29東京初空襲▽大日本戦時宗教報国会結成</p>	<p>▽戦時教育非常措置法により青山学院文学部、高等商業学部、関東学院高等商業部を統合、明治学院専門学校となる。同校長に矢野院長就任▽四月中山昌樹死去▽三光町セベレンス館を売却</p>
同 二〇年	一九二五	<p>▽学校授業一年間停止を決定▽主食配給一割減実施(二合一勺)▽ポ宣言受諾回答▽終戦詔勅放送▽総司令部、軍国主義教員追放指令</p>	<p>▽五月漆山中学部長辞任▽六月高橋源次中学部長就任▽校舍転用を解約(中学部校舍一部を中央無線電信講習所に、専門学学校舎一部を陸軍に転用中のもの)</p>
同 二年	一九二六	<p>▽天皇人間宣言▽軍国主義者の公職追放、超国家主義団体の解散指令▽中央公論、改造、世界、展望等刊▽日本国憲法公布</p>	<p>▽教職適格審査実施▽専門学校改組、東亜科を文科と改称、南方分科を英文科、大陸分科を華文科、経営科を社会科、経済科第二部を商経科と改め夜間部に英語科を新設▽宣教師帰来▽中山記念文庫開設</p>
同 三年	一九二七	<p>▽片山内閣成立文相に森戸辰男▽教育基本法学校教育法公布▽新学制実施▽日本国憲法施行▽中学校義務教育実施▽キャスリン台風</p>	<p>▽四月中学部改組、新制中学校設立▽六月英語学校を開設▽八月矢野院長辞任、富田理事長、院長事務取扱、斉藤茂夫専門学学校長事務取扱となる▽一一月創立七十年記念式挙行。ヘボン博士記念会開催</p>

邦 曆	西 曆	一 般 事 項	明 治 学 院 関 係 事 項
昭和三年	一九二八	<p>▽財閥同族支配力排除法公布▽内閣当用漢字を告示▽新制高校新制大学一二校発足▽日本NCC成立▽大韓民国建国▽教育委員法公布</p>	<p>▽大学設立委員会設置若林竜夫事務総長となる▽大学設立後援会結成、会長に浜田正▽四月村田四郎第五代学院院长就任▽四月新制高等学校設立▽一〇月九日田川大吉郎死去</p>
同 二四年	一九二九	<p>▽大都市転入制限解除▽年令を満で教える法律公布▽中華人民共和国建国▽国立学校設置法公布▽湯川秀樹博士ノーベル賞受賞</p>	<p>▽四月新制大学文経学部設置、村田院長、大学長兼任▽八月大学科学館竣工▽大川正中学校校長兼高等学校長事務取扱となる▽一〇月へボン博士顕彰会設立。へボン邸跡に記念碑建設さる</p>
同 二五年	一九三〇	<p>▽朝鮮戦争勃発▽放送法施行▽魚、衣料の統制廃止▽警察予備隊令公布</p>	<p>▽大川正中学校校長兼高等学校長就任▽六月日本商科大学学生を統合▽八月日本商科大学土地建物を政府より借入▽客員教授ブランデン帰英につき辞任、フレイザーを名誉教授に依頼す</p>
同 二六年	一九三一	<p>▽サンフランシスコ対日講和会議▽対日平和条約、日米安全保障条約調印</p>	<p>▽三月英語学校閉鎖▽三月五日財団法人より学校法人に組織変更認可、幹事を総主事と改む▽中学校理想教育のため生徒募集定員二〇〇名を二二〇名に減す▽旧日本商科大学校舎を大学寮舎に改造</p>
同 二七年	一九三二	<p>▽日米行政協定調印▽対日平和条約、日米安全保障条約発効▽宮城前広場メーデー事件▽武藤、渡瀬共訳「口語訳新約聖書」刊</p>	<p>▽三月白金海軍墓地買収契約成立▽四月日下一高等学校校長就任。大文学学部経済学部の二学部となる。第二学部も同様▽八月里見純吉死去▽一月シェーファー学院長顧問として来院</p>
同 二八年	一九三三	<p>▽NHKテレビ本放送開始▽日米通商航海条約調印▽国際物理学会、京都で開催▽東京神学大学設立▽国際基督教大学創立</p>	<p>▽六月杉本総主事辞任、松本亨総主事となる▽三月建築委員会組織さる▽中学校制服制帽改まる▽四月就業規則施行さる▽一〇月白金海軍墓地整地改装工事開始▽シェーファー辞任帰国</p>
同 二九年	一九三四	<p>▽五〇銭以下の小銭を廃止▽日米MSA(相互衛援助)協定調印▽教育二法案成立▽口語訳聖書(新約)完成、委員長都留仙次</p>	<p>▽建築五か年計画開始村田四郎、委員長▽建築資金募集実行委員会発足、会長に北村徳太郎▽高橋源次、文学部長に、服部文四郎経済学部長に就任▽村田院長エヴァンストン世界教会協議会に出席▽一月大学図書館落成</p>

昭和三年	一九五五	▽初の重要無形文化財指定▽第八回国勢調査(八九二七万五五二九人)▽原子力基本法、原子力委員会設置法公布▽口語訳聖書(旧約)完	▽四月大学院設置(文学研究科、英文学専攻修士課程)▽都下東村山町にグラウンド購入
同三年	一九五五	▽国際連合に加盟▽教科書法案公布▽首都圏整備法公布▽文部省、教科書検定強化のため教科書調査官を任命	▽三月村田四郎大学長辞任、経済学部長斉藤茂夫、学長事務取扱となる▽五月大学児童相談所開設▽沖野岩三郎軽井沢にて死去
同三年	一九五五	▽米駐留地上軍撤退開始▽文部省、勤評実施を通過▽国際ペン大会東京で開催▽ソ連人工衛星打上成功	▽一月大学校舎本館落成▽三月村田院長辞任▽四月都留仙次第六代学院長就任▽五月大学学生ホール落成▽一月創立八十年記念式挙行
同三年	一九五八	▽小、中学校長に対する管職手当法成立▽文部省、道徳教育義務化のため施行規則改正▽一万円札発行▽米国人工衛星打上成功	▽四月高橋源次第二代学長に就任、若林龍夫、文学部長就任。渡辺実、経済学部長就任▽四月中学校理想教育修正、募集定員を増加す
同三年	一九五九	▽新国民健康保険法、メートル法実施▽皇太子結婚式▽日本プロテスタント宣教百年記念式挙行	▽一月和田英作三保にて死去▽三月中学校長大川正停年退職、佐藤泰生中学校長就任▽五月中学校校舎落成
同三年	一九六〇	▽新日米安保条約、行政協定調印▽日ソ貿易長期協定調印▽カラーテレビ放送開始	▽三月高等学校長日下一停年退職、針谷松太郎高等学校長就任▽四月社会福祉学科修士課程、経済学科修士課程開設▽四月賀川豊彦死去▽松本総主事辞任、高野徹総主事就任
同三年	一九六一	▽ライシャワー駐日米国大使着任▽文部省、小、中、高校学力テスト実施▽衆院核実験禁止決議	▽一月理事長富田満死去▽一月北村徳太郎理事長に就任

邦 曆	西曆	一 般 事 項	明 治 学 院 関 係 事 項
昭和 三年	一九二二	▽第一回日米教育文化会議、東京で開催▽エカフエ総会、東京で開会▽東京都常住人口一千万を突破▽配給米平均一二%値上げ	▽四月大学院英文学専攻博士課程開設、阿部勇経済学部長就任▽六月武藤富男第七代学院院长就任▽高橋学長日本側委員として第一回日米教育文化会議に出席
同 三年	一九二二	▽日ソ貿易協定調印▽アメリカ、通信衛星船による日米間のテレビ中継に成功	▽四月東村山高校開設。武藤院長高校長兼任▽四月大宇校舎二、三号館落成、大学講堂百番教室落成。東村山高校寄宿舎落成▽七月大田区雪ケ谷町に女子学生寮完成▽一〇月東村山高校校舎落成▽賀川文庫開設
同 元年	一九一四	▽米国駐日大使ライシヤワー、日本少年に刺され負傷▽新潟地震被害甚大▽第一八回オリピック東京大会開会	▽一月都留仙次死去▽四月若林龍夫第三代学長就任、平林武雄文学部長平出宣道経済学部長に就任▽六月国道一号线のため校地五八四坪余東京都に譲渡▽八月白金高校校舎一部落成▽九月佐々木邦死去
同 四年	一九一五	▽日韓基本条約と関係協定調印▽閣議国債発行の方針決定▽朝永振一郎ノーベル物理学賞受賞	▽三月中学校講堂落成▽佐藤泰生東村山高校長転出、武藤院長中学校長兼任▽四月ライシヤワー館を東村山に移転▽社会学部独立部長に天達忠雄就任▽フランス文学科開設▽日米教授学生交流計画実施
同 四年	一九一六	▽全日空等ジェット旅客機の事故相次ぎおこる▽ライシヤワー駐日米国大使辞任▽中国「紅衛兵旋風」おこる▽郵便料金値上(封書一五円ハガキ七円等)	▽二月パイプオルガン設置▽四月法学部新設、金井信一郎経済学部長就任、高野総主事停年退職▽四月中学校を東村山に移転、同校舎落成▽大学六号館落成▽八月ヘボンホール落成▽記念館移転修復
同 四年	一九一七	▽建国記念日二月一日実施▽東京都知事に美濃部亮吉当選▽エカフエ総会東京で開催	▽三月大学院社会学科修士課程社会福祉課程認可▽片山金章法学部長就任▽高校総長針谷松太郎停年退職▽原田昂高校長事務取扱となる▽WCC文書基金ローザンヌ会議に武藤院長出席

あとがき

今から五年前の創立八十五周年の時、明治学院八十五年小史を編集することが記念事業の一つであったが、着手されないままに終った。そのような事は催物などちがって、年月を要する仕事であるから、時日切迫してからでは間に合わない。やがて九十年が来るから九十年史の準備のため、史料の収集をはじめた方がよいことになり、その準備のための委員会が組織された。委員として斉藤茂夫、高谷道男、平林武雄、徳永清、白石道雄(のちに安藤徳夫)、宮崎栄、杉本三郎の諸氏があげられた。その後、渡辺勇助、園部不二夫、前田薫の四氏が加わった。委員会は横浜や築地など学院揺籃の地を視察したり、古い卒業生を招いて話をきいたりした。昭和四十年になって正式に武藤院長を委員長とする編集委員会が組織され、それまでの委員会は解散し、新たに桑田秀延、若林龍夫、佐藤泰生、笹尾洋二郎(のちに皆川三郎)、工藤英一、矢作弥寿久、ヴァン・ライクの諸氏を加え、斉藤、平林、高谷、園部、針谷松太郎(のちに原田昂)、杉本の諸氏は、引きつづき新しい委員会に加わった。

そして、執筆は明治時代を高谷道男、大正、昭和時代を杉本三郎の両氏に委嘱することに決定し、執筆者を助ける実務委員として斉藤茂夫、平林武雄、園部不二夫、工藤英一、矢作弥寿久の諸氏がえらばれた。

以来一年数か月かかって写真や文書の資料を集めた。米国ミッシヨン・ボードをはじめ、東京神学大学図書館、明治学院大図書館にある資料、その他各方面から提供された写真図版などをマイクロフィルムに収め、あるいはゼロックスに写すなどの作業がづづいた。その間には卒業生たちから回想録の寄稿を願ひ、あるいは高令の方々の談話をテープにおさめるなど資料は相当集まった。回想録五十余編のなかにはぜひ本史に入れたかったものも多数あるが、紙数の制約で入れられなかったのはかえすがえすも残念である。これらの回想録だけでも明治学院外史として貴重な一巻となるであろう。

四十年前に書かれた「明治学院五十年史」は本文だけで五二三頁あつた。それをこの九十年史は全巻四〇〇頁におさめ、しかも、そのうち約五〇頁分を写真とするという企画であるから非常な困難を感じた。寄稿された方々にはまことに申し訳ないが右の事情をご賢察下さつて諒とされたい。前記諸団体機関のほか、学院本部、大学、高校、中学、その他多数の同窓生、縁故者から貴重な資料を寄せられたことにはただただ感謝のほかない。また委員の諸氏、とくに実務委員の諸氏と飯島啓二助教授のご協力には、心から厚くお礼を申し上げる。

資料の整理には四十一年十二月から秋山繁雄氏が助手として協力され、短時日の間に資料の組織だつた整理ができたことも感謝のほかない。これら学院の宝ともいふべきおびただしい好資料をもとにして、他日、百年史の執筆者は十分満足な歴史が書けると思われる。この九十年史はただその一歩となれば幸である。

最後に申しそえたいことは学生活動、生徒活動のことであるが、これも資料をもちながら紙数の制限のため思い切つて割愛しなければならなかつた。執筆者は、学生生徒諸君による自治活動、体育競技の業績。かくれた社会的奉仕の美筆などを詳述して立体的学院史を築きえなかつたことを謝し、読者のご諒察をねがいたいと思う。PTA、保証人会、あるいは教職員の組合についてもまた同様である。

文中とどころ、部分的に引用した卒業生や旧教職員の回想録については、その全員の全文をのせることができなかつたことは残念であつた。これらの回想録は今後の学院史の資料として貴重なものであるが、今回はせめて寄稿者の芳名と文題をのせることによつて、ご寛容をこう次第である。

(注・順序は氏名の五十音順とした。無題のもので当方で題をつけたものもある。)

◎中学四、五年の頃……………芦立 精一◎我が思出……………安部 正義◎明治学院とエレクトロニクス及び放送……………安藤 博
 ◎明治学院時代……………石出 和◎学院の思出……………伊藤 毅◎赤レンガの同窓会館……………伊藤 富士雄◎戸川秋骨先生の宗
 教観……………井上 武右衛門◎九十周年記念に想う……………石橋 近三◎大震災の年まで……………宇多 五郎◎私の学んだころ…
 内田 寛治◎余慶……………落合 太郎◎無題……………大貫 喜也◎明治学院と私……………大島 広◎明治学院時代の回顧……………川
 村 貫治◎学院の思い出……………金子 平一◎数々の想出……………熊野 かおる◎学院生活の思い出……………小泉 嘉章◎人の世
 の若き生命の……………郷司 浩平◎明治学院の今昔……………小辻 誠祐(節三)◎緑の芝生の消えた頃……………小林 辰四郎◎軍
 事教練のことなど……………斉藤 茂夫◎明治学院と私……………佐藤 昌平◎回想録……………篠田 錦策◎白金の丘の回想……………鷺
 見 美雄◎七十年前の思い出……………鈴木 春◎白金の丘の往昔を追懐して……………山本 弥一郎◎断想……………副島 民雄◎明
 治学院九十年史に寄せて……………田畑 太郎◎思い出すまま……………高尾 益太郎◎ジグザグ人生……………玉置 真吉◎東山学院
 と明治学院……………竹中 治郎◎ヒマラヤ会便り……………津田 正夫◎明治学院百八十年……………徳永 清◎学窓の想い出……………
 名越 覚次郎◎在学時代想出の記……………故西村 博◎白金談義……………野々村 戒三◎三つの幸わせ……………野島 進◎思出…
 平林 和雄◎明治学院と私……………平林 武雄◎新制大学社会学科第一回生の頃……………福田 垂徳◎世界でもめずらしい個性
 ある学校……………藤原 義江◎思出の明治学院……………星野 栄一◎心の宿……………松田 彦寿◎学院の思い出二つ三つ……………松
 尾 造酒蔵◎わが魂の故郷明治学院……………松村 吉助◎入学のとき、卒業のとき……………三吉 明◎その頃のこと……………宮内
 彰◎その頃の思い出……………三好 豊太郎◎明治学院思い出の記……………村上 治◎回顧録……………村井 五郎◎高商時代の想い
 出……………茂木 宏◎無題……………湯浅 義正◎あの頃の明治学院……………吉田 源治郎◎思い出の人々……………吉井 義次◎私の
 入学当時から「死線を越えて」が出た頃……………渡辺 勇助

回想をテープに録音させていただいた方々は次の通りで、末筆ながら芳名だけを記して謝意を表することとする。

石原謙、生方敏郎、斉藤茂夫、故都留仙次、藤原藤男、矢野貫城、渡辺善太

一九六七年十一月一日

高谷 道男

杉本民三郎

明治学院九十年史

昭和四十二年十月二十五日 印刷

昭和四十二年十一月三日 発行

発行者 武藤 富男

発行所 学校法人 明治学院

東京都港区芝白金今里町四二番地
電話東京(四四三)八三三一

印刷所 共同印刷株式会社

東京都文京区小石川四丁目一四番
電話東京(八一三)一一一一

えあって、現場は妖気に包まれていた。

遺体の小片はかねて用意した故人の氏名、年令、階級、死亡年月日を焼きつけた特製の小つぼに収め、墓地内にしつらえた仮小屋にみ霊として安置し、遺体は別むねの仮小屋に収容した。墓石は、遺族関係をのぞきことごとくこれを粉砕したが、将校の墓は戦前の大將、元帥の墓にも比すべき大きさで、運搬にも粉砕にも容易ならぬ手間を要した。

その間に一二〇坪の記念霊域が建設せられ納骨堂が完成し、記念碑類の移転が終わり、五百九十五柱の骨つぼは堂内に納められ、五百余体の遺骨は堂内の地下に埋葬された。その間、有縁者の改葬も運ばれ、整地工事も進み、昭和二十九年三月末日をもって工事を完了したが、この工事の責任者であった木田組の池田氏は工事終了後間もなく他界された。前の三木氏につづく二人目の犠牲であった。工費は改葬、整地、納骨堂建設、霊域設定、その他の付帯設備いっさいを含めて三、二五八、〇〇〇円であった。この費用は坪当り一、〇八六円で前の土地払下代価坪当り八六八円を加えても二坪二千円足らずであった。

工事は終わったが霊域にある納骨堂その他の地上物件の帰属について問題がおこった。協議の末、関係団体では「国のものである」として大蔵省に受取方を申請したが、大蔵省としては「遺骸は国有財産と認められない」としてこれをこぼんだ。土壇場になって問題は振出しにもどり、払下許可取消しにまでおよぶかの形勢となった。

折から学院ではすでに新図書館の起工式が行なわれていた。もはや後退を許されぬ事態となつたので、元蔵相北村徳太郎理事の紹介状ももらい関係者ととも大蔵省に対しじつように請願をつづけた結果、特例をもってよ